

奇譚クラブ

1960年 4月号

セミ・ドキュ
メンタリー
小説

蠢く蒼い群れ
ハイド侯爵夫人

辻村 隆
近藤 一



4月号

奇譚クラブ

昭和三十三年三月二十日印刷
昭和三十三年四月一日発行
(第十四巻 四月号 通巻第百三十六号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

昭和三十三年四月号

4

奇譚クラブ

昭和三十三年三月二十日印刷
昭和三十三年四月一日発行
(第十四巻 四月号 通巻第百三十六号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

マニヤ諸氏に贈る豪華な妖美の泉!!

SADO 4 美しき惨虐物語

臨時増刊 限定版



- 「美しき惨虐物語」画集並に「四馬孝傑作緊縛画」
- ▽ 狂乱の女
 - ▽ 執念の賛
 - ▽ 手厳しき返礼
 - ▽ 美貌の誘惑
 - ▽ 楽しい期待
 - ▽ 飲むんだ飲むんだ
 - ▽ この足が憎い
 - ▽ ハリツケのにえ
 - ▽ 誘拐団の好餌
 - ▽ 曠野の惨劇
 - ▽ 金髪と虹
 - ▽ 長虫の執念
 - ▽ 汚いお仕置
 - ▽ 馬上の磔
 - ▽ 蛇倉地獄
 - ▽ ジャジャ馬馴し
 - ▽ 慧星の苦衷
 - ▽ 恋
 - ▽ 愛犬の訓練
 - ▽ 初めての経験
 - ▽ 深夜の杉木立
 - ▽ 女学生の嫉妬
 - ▽ 私刑の森

手にとりて思わずドキリとする、この素晴らしいS的圧迫感。絵といい写真といい本文といい、全くとこを開いてもムツとする妖気は、きつと皆さんを魅了しつくさずにはおかないでしょう。すでに四号を加えたS特集号を机上に、しばしの桃源境を心ゆくまで味って下さい。これは一つの階段です。次への足場として、どうか一冊をお見え願えます。

写真部が自信を持って贈りする紅の架橋。グラビアの花園に咲き競う艶麗百二十輪の妖花!

- 湧き上るムード特選集
- ▽ ファインセの困惑 館典子
 - ▽ 花模様の跪き 絹川文代
 - ▽ 敷居上の苦斗 田代悠子
 - ▽ 壁飾(かべかざり) 絹川文代
 - ▽ 溪流に哭くおんな 絹川文代
 - ▽ 床飾(とこかざり) 館典子
 - ▽ 蜘蛛(くらくも) 大塚啓子
 - ▽ 浮世絵草紙 絹川文代
 - ▽ 水垢離強制 大塚啓子
 - ▽ 冷酷なるくさり 絹川文代
 - ▽ 強靱なるロープ 館典子
 - ▽ 葉風におびえて 愛川悦子
 - ▽ 曲線と麗姿 絹川文代
 - ▽ 蠱惑のポーズ 絹川文代
 - ▽ 囚女の舞 絹川文代
 - ▽ わななく黒髪 大塚啓子

全篇、未発表のサド的読物集。全頁に横溢する美女の苦吟と叫喚。読者を妖しき雰囲気の世界に遊ばしめる異色特集!

- 「美しき惨虐物語」
- ▽ 新剛家の出来事 三和 順子
 - ▽ 狂乱の女 正木 真竜
 - ▽ 慧星の苦衷 大竹与市朗
 - ▽ 手厳しき返礼 石積富士夫
 - ▽ 誘拐団の好餌 藤川 力行
 - ▽ 探し求めた私のモデル 石見沢四郎
 - ▽ 恋繩(れんじょう) 住谷猪一郎
 - ▽ 金髪と虹 浅美司可夫
 - ▽ 美女密偵の最期 霧川 淋
 - ▽ 執念の賛 秋月澄二郎
 - ▽ 曠野の惨劇 月間タケオ

略号 (S 特 4)
定価 三百五十円
——お申込は——
大阪市 阿倍野郵便局
私書函十四号
天 星 社 へ

☆ 懸賞愛読者原稿募集 ☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文獻、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで(四百字詰)
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千円以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻御希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある個所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいったものはあるものです。物いわざるは腹ふくめるのたとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈する準備がございます。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通、応答、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

★ 本誌御購読の榮 ★

- 一月分(1冊) 送共 二百円
- 三月分(3冊) 送共 六百円
- 半年分(6冊) 送共 千二百円
- 一年分(12冊) 送共 二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておりますので、購読御希望の方は直接発行所宛お申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型緊縛写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方へは発売の都度厳重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行済の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

奇譚クラブ 定価 二百円

四月号

昭和三十五年三月二十日印刷
昭和三十五年四月一日発行
編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社
電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座大阪第五〇〇四二番

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の小額のものを御利用下さい。宛先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のものとは品切となりましたので御諒願います。

限定版特別号 第一弾

「緊縛フォトアラベスク」

略号(あらべすく) 特価五百円(送共)

△収載内容△二十六項目 写真七十七葉

- 1 鏡……愛川悦子
- 2 銘花二輪……花坂道子
- 3 鉄 鎖……大塚啓子
- 4 諦 観……大塚啓子
- 5 庭園にて……絹川文代
- 6 謎の微笑……田中芳代
- 7 田代悠子表情集(一)
- 8 誇る脚線美田代悠子
- 9 この足どうかしら? ……田代悠子
- 10 裏と表と……愛川悦子
- 11 落陽の丘……愛川悦子
- 12 ポリウムの花園 ……大塚啓子
- 13 緊縛感の綾大塚啓子
- (限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。)
- 限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。
- 14 奔放な肢体大塚啓子
- 15 鏡台と腰巻花坂道子
- 16 腰巻と鏡台花坂道子
- 17 奇妙な休憩絹川文代
- 18 田代悠子表情集(二)
- 19 脱がされた高手小手 ……愛川悦子
- 20 亀甲縛り……愛川悦子
- 21 吊責折檻……村井知可子
- 22 立木縛り……村井知可子
- 23 豊 醇……愛川悦子
- 24 乱れ髪三景大塚啓子
- 25 椅子と絨緞愛川悦子
- 26 姐上の美鯉絹川文代

臨時増刊号

略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百五十円(送共)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

- ☆密 質 倉 庫
- ☆悪魔のような女
- 「春美の受難記」
- シリーズ 四点
- ☆新品第一号
- ☆嫉 妬 の 鬼
- ☆奴 隸 の 船
- ☆妙 な 吊 責
- ☆雨中の引廻し
- ☆奈落のリハーサル
- ☆鼻責めテスト
- ☆黒目鏡の女
- ☆地下室の苦行
- ☆苦 悶
- ☆吊 し 責 め
- ☆乳 房 責 め
- ☆人間フープ
- ☆檻
- ☆アクロの訓練
- ☆捕われた商品
- ☆犬 の 訓 練
- ☆女 体 鞭 馬
- ☆夜 な が し

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

- 絹布と絹肌(田中)
- 飾り人形(大塚)
- 台上的賛(絹川)
- 若妻の秘美(花坂)
- 白い若鮎(田中)
- 麗 囚(絹川)
- 三面 鏡(愛川)
- 仇姿黄八丈(絹川)
- 縄さばき(浜本)
- 挑発の笑(絹川)
- 被 襲(花坂)
- 深 海 魚(田中)
- 哀れな賓客(絹川)
- 豊 胸(愛川)

【興趣尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フォトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画△猪大人の御乱行、強制女体浣腸器△

「悦虐小説と緊縛写真」特集号

定価 三百円(送共) 略号「悦特」

この素晴らしい小説集とグラビヤ写真、緊縛絵画で皆様のお心を温めて下さい。売切れては大変未見の方は、すぐお申込を!

△悦虐小説傑作集△S的作品のエッセンス

- 雌 獣 の 手 記
- 妻 は 縛 ら ず
- 夕 の 朝 顔
- 続 ・ 囚 主
- 私 の 主 題 狼
- 色 奴 隷 の 手 記
- 女 奴 隷 の 手 記
- 受 難
- 怪 奇 曼 陀 羅 教
- 呪 縛
- 悦 虐 の 旅 役 者
- 長 期 刑
- 私 の 思 い 出
- 片 耳 伝 奇
- 縛 ら れ た 妻 以 前
- 燐 地 獄 絵 行 脚
- 鐵 格 子 の 中 に

△グラビヤ緊縛写真△百十四葉の傑作

- 妖 精 (ニンフ)
- 三 ツ 葉 葵 の 横 顔
- 誘 拐
- 羅 致
- ブ 洩 れ
- 木 路
- 夢 陽
- 競 花
- 首 シ ユ ミ
- 放 心
- 間 謀 成
- 三 処 責 め
- 黒 タ イ
- 観 念

△四馬孝画責画集△口絵△

- 白 魚 の 悶 え
- 苦 悶 の 前 奏
- 鉄 鎖 の き し み
- 籠 の 白 鳥
- 宙 に 踊 る
- ア ク ロ バ ッ ト
- 濡 れ る 朱 唇
- 土 蔵 の 花



奇譚クラブ 復刊五十八号 四 月 号 目次

四馬孝傑作画集「滝壺」	四馬 孝・画
特写フォト「膨隆(ぼうりゅう)」	愛川悦子嬢
責め画「ホイーリング」	北原 純子・画
アイデア「新入りバスガールの調教」	越野春夫・案・画
読者提供写真のページ	(女体緊縛の部)
提供者、村瀬、浅香三吉、長田実、菅沼生、宝塚二三夫、E・Mの各氏	
緊縛画「落花紛紛」	滝 れい子・画

巻頭埋草「私の編集ノート」より	編集 子	18
蠢く蒼い群れ(中)	近藤 一	22
創作 無残 絵	帆足 泰輔	38
創作 單車と禪	榎村 奏	44
毒舌独説法「スナツプ水揚げ論」	牧 高志	54
映画通信「最近の女優縛りシーン」	大河原珠樹	58
創作 謎の緊縛フォト(最終回)	久留木 栄	60
乗馬ズボン「女神の塚」	藤山 秀緒	66

新聞切抜「私の旧聞帖」	須藤 律夫	74
マゾヒズム百景	馬場 好男	77
懸賞愛読者原稿入選作品		
「間違えられた女」	滝沢 四郎	80
愛好家の記録	とま・かつひこ	98
創作「落葉」	栗瀬 長	100
麻生保氏の生活と意見(十四)	麻生 保	109
猿轡放談(その三)	浮家 鷹三	112
創作 変身(かわりみ) 第一回	南 時夫	116
モデルの独り言「紅色の自画像」	絹川 文代	120
小説「ハイド侯爵夫人」	辻村 隆	122
ファンタジア・マゾヒスティカ	山本 節夫	130
切腹の医学的考察	壬生 三郎	137
私のイメージとアイデア「われ編集なりせば」	田中二七夫	140
現代マゾヒズム芸術時評(最終回)	原 忠正	142
最近考えたこと	近藤 一	144
告白「私の女装」	村田 良夫	150
浣腸ファンタジー	久里須照夫	156
ある女優の乗馬日記より	倉仁 成人	158
読者通信		165

臨時増刊 サト特集号第三集

略号「S特第三」 定価三百五十円
四馬孝画集（力作二十四点）

- 121110987654321
蛇倉幽閉 防裂の恐怖 股裂きの実験 水責め倉 哀れな強 俵久戦 持体の逆吊 深夜の逆吊 美打の逆吊 拷問 台操
- 242322221019181716151413
烙印のX字架 箱詰美責め 苦悶の舌吊り 鼻責め草地獄 猿轡と煙草 愛人の中危 山小屋の異聞 浣腸室の動物 白痴実験 美畜訓練師

狂咲く稀花特選（フオト百四十八葉）

- 佳花の戯れ（尾三木） 脱し得ぬ拘束 狂花の冷感（田原） 押込みの艶肢 厚遇の座席（大塚） レインコート 共通の戦き（大塚） ひとばしら 華の鼻（大塚） 泥まみれの青春 流るる美線（大塚） 白蝶の不安 友愛の表現（大塚） 美貌の憤悶 哀美の抽（大塚） スポットライト 応接間の稀態（大塚）

傑作サト読物集

- 塔婆十郎・作 滝れい子・画
サト小説 『地獄の無法地帯』
▽拷問倉庫
▽肉体の太鼓
▽吊り責め地獄
▽地獄谷の悲鳴
▽覆面子白頭巾・作 参考写真多数
『緊縛フオトと緊縛フオト夜話』
▽全盛期前期の緊縛フオト口絵
▽緊縛モデルの素顔
▽全盛期の緊縛フオト口絵
▽緊縛フオトと緊縛モデル

「悦虐小説と緊縛写真」特集・第三集

臨時増刊 悦特 No. 3

定価 三百円

「嵐を慕う蝶」特集号

- 華麗絵巻、四馬孝傑作画集
出歯の男 足の爪先
古池の怪 足枷責め
裸馬の儀 鉄檻の餌物
雨中の晒 キング・サイズ

新作フオト「嵐を慕う蝶」（百十四葉）

- まといつく長蛇絹川 限られた自由 田代
柱掛人形 絹川 麗（れい）えん 艶 館
岩に咲く珍花 絹川 囚（しゅ）うき 肌 愛川
隔世の障子 絹川 ニンフ就縛 絹川
含（かん）しゅ 羞 花坂 架（かせ）き 責 大塚
お仕置前奏曲 大塚 乱れる訪問者 花坂

昔日の問題作「悦虐小説特選集」

- 告白 慟哭の記 古川 裕子
謎の女と私 岡田 咲子
闇雲博士の回想 辻村 隆
責められた女 近東規矩也
罪ある女 桜井京一郎
縄に憑かれて 時山加代子
裕子とお仕置 古川 裕子
蜘蛛と蝶々 飛田 良二
縄をめぐる随想 久留木 栄
復 岡田 咲子
猿ぐつわと私 古川 裕子
悪の部屋 二俣志津子
私刑に泣く未亡人 小坂多美枝
私を愛して下さった皆様へ 古川 裕子

臨時増刊 悦特 No. 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号・第二集

四馬孝緊縛画集

- 柱背負い 捕われ人
深夜の水浴 椅子縛り
喰込む縄 水道責め
あんよは上手 笞打ちの果

「悦虐姿態特選集」

- 逢瀬のポーズ 絹川 美囚第十四号 花坂
はかなき悶え 田中 悦び一刻 浜本・三木
羞姿晒陽 愛川 乱れさく哀花 絹川
綾なす白縄 絹川 荒縄と美貌 絹川
柔肌の喘ぎ 平野 悦虐狂奏曲 大塚
未知の驚き 岩井 艶肌の拘束 絹川
造形美術 花坂
ロープ・ブラジャー 愛川
（以上百十六葉収載）

往年の好読物集

- 妓の影 泉 辰之助
凌辱の幻想と期待 古川 裕子
僕らの記録 黒井 珍平
くすぐられるよろこび 山本 百合
キヤメラ愛好会 岡田 咲子
被虐の愛情 若林 啓子
責 竹谷 十三
アブノーマル・ファンタジー 岡田 咲子
変の字問答 浮家 鷹三
マダム紅鶴 野村恵美子
哀艶責め場絵 岩 広志
蜘蛛と蝶々 飛田 良二
由紀子のお仕置 大川由紀子
聖画の誘惑 近見 啓

滝^{たき}

壺^{つぼ}

真白い帯と激なうてしい轟音と共に流れ落ちる滝の中に、殉教者のように神々しい女の姿があった。なんという無惨な美しさであろうか。喰い込んだ荒縄は、ひしひしと五体を締めつけ飛沫は五光のように、そのまわりをかこんでゆく。



特写フォト

膨隆

(ほんのり)



(本誌写真部撮影)

禁転載



△モデル 愛川悦子▽



北原純子・画

ホイーリング

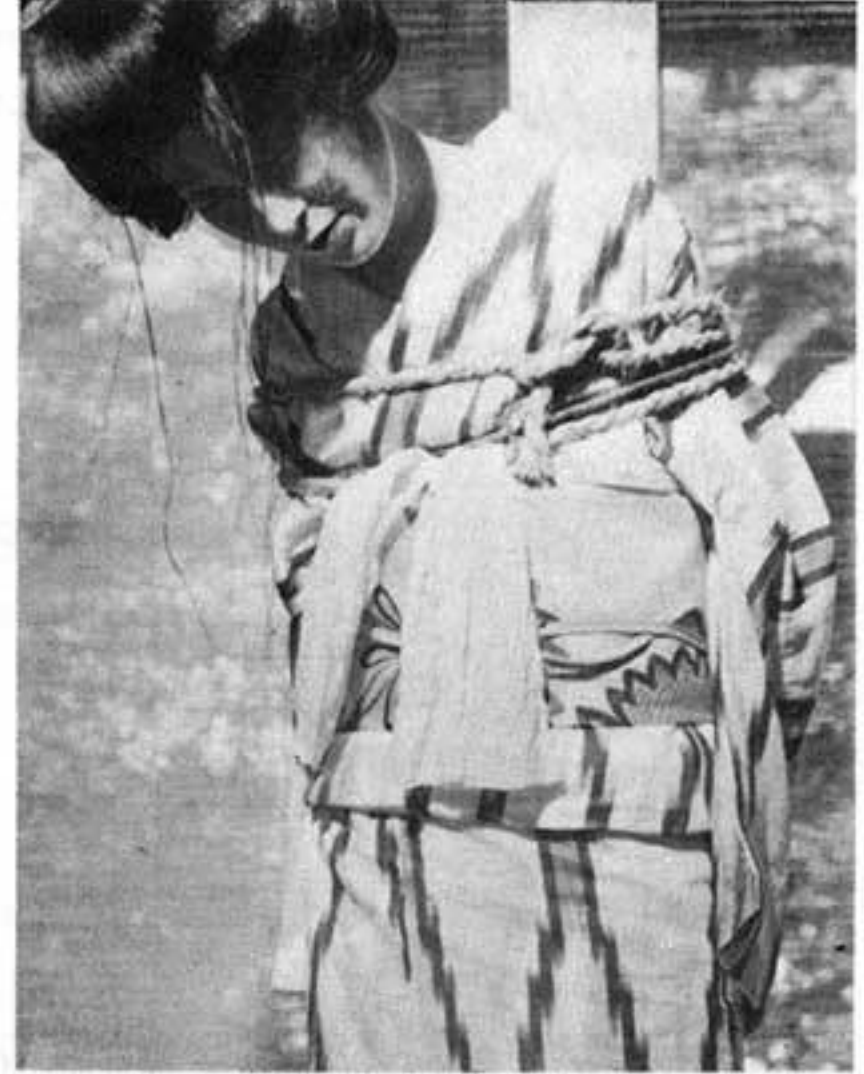
フープ遊びは面白い、もっと回れ回れ、鞭の弾みでフープはくるくる回る。しかし、この大きな鉄の玉は大分重そうですね。絵の上ですが、ちょっと、お嬢さんのお腹が心配になります。

新入りバスガールの調教

左右上下に揺れ動く調教台の上で、おまけに腰のカバンはずっしりと重く、ふり落されるのを防ぐのがやっとなのであるのに、「皆様曲りますから御注意下さい」彼女は笑顔で説明しなければならないのだった。



越野春夫・案並画



↑
村 瀬 氏 提 供
↓



読者提供写真のページ

(女体緊縛の部)



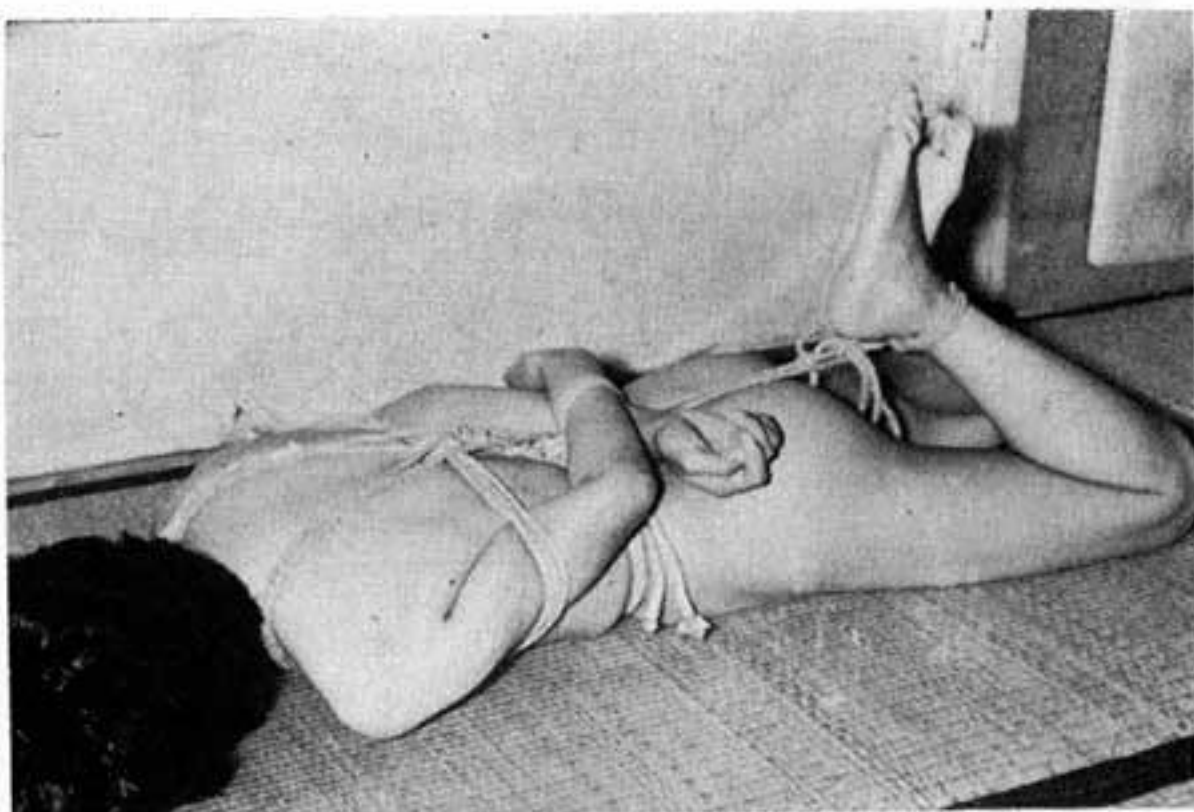
浅香三吉氏提供



浅香三吉氏提供



長田実氏提供



長田実氏提供



宝塚二三夫氏提供

菅沼生氏提供



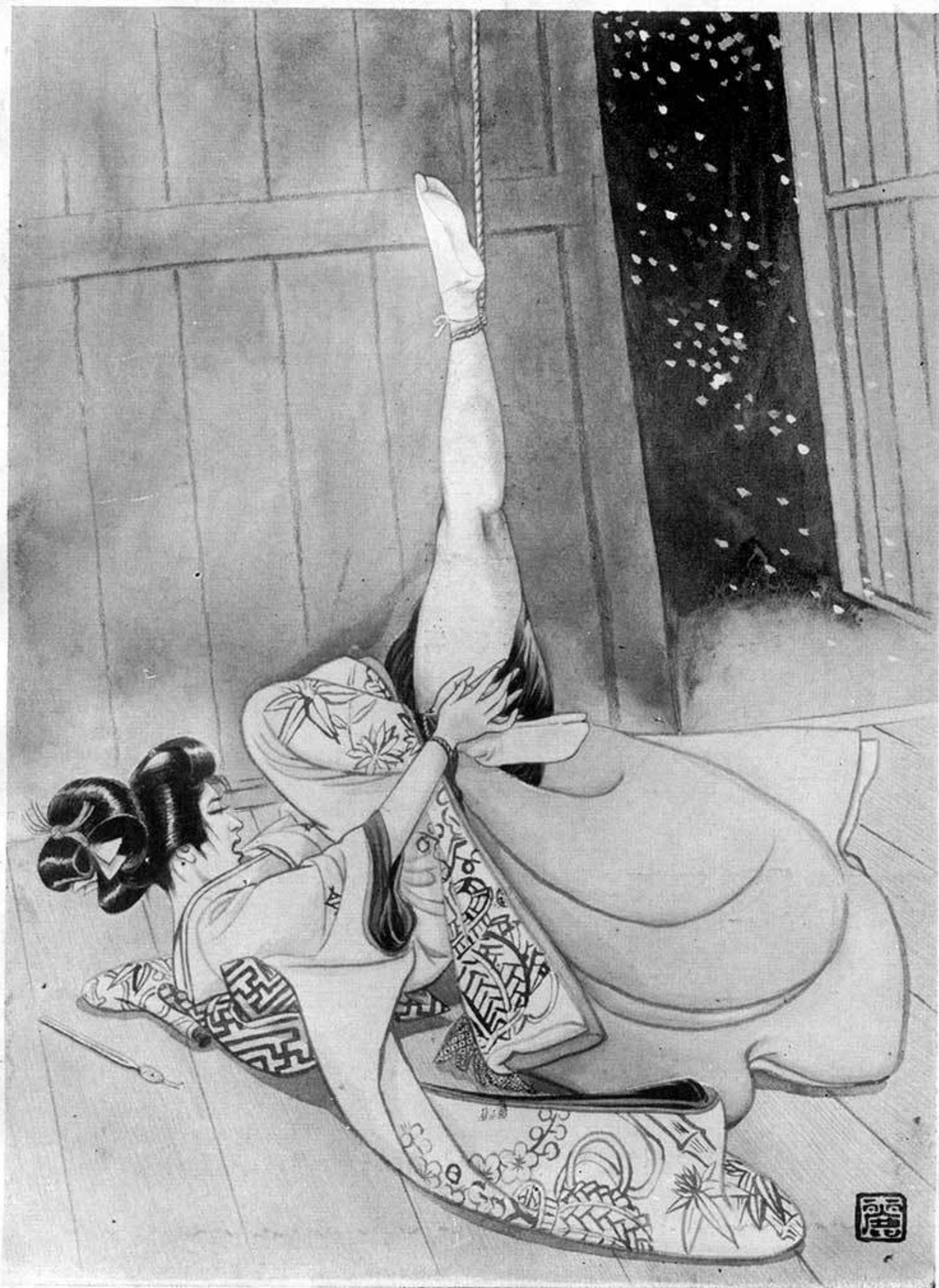
F・M氏提供



落花紛紛

落花のような春雪がひらひらと戸外に舞い落ちている。こんな恰好で、もうどのくらい放つておかれたらうか。吊られた足も曲げられた足も、今では痺れたように感覚はなかった。

滝 れい子・画





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1960年 4月 号

(第十四卷 第六号 通刊第百三十八号)

巻頭埋草



『私の編集ノート』より

—編集裏面あれこれ—

編集子

本誌も創刊以来どうにかこうにか、十年余の年月を経ました。その間、なんだかんだといろいろな紆余曲折がありました。とにか、十年の星霜に耐えて、「奇譚クラブ」という一つの題字を守り続けてきたわけです。

勿論、題名を改めようかという気持は、何度も起りましたが、その都度踏みきることが出来ず、改題は致しませんでした。今から願ってみると、その方がよかったのではないかと思います。目ぐるましい程、題名を変えていた雑誌が今までによくありましたが、そういったのに限って、余り長続きしなかったようです。

以前にカストリ雑誌という言葉が流行したことがあります。三号で潰れる（カストリは三合で酔いつぶれる）ということから、出た言葉だそうです。いずれにしても廃刊になってしまっただけで、元も子もありません。雑誌の取引の条件で三号清算という言葉があります。これは、一号二号三号と雑誌を委託販売した際、三号目を届けて初めて一号の雑誌の清算をして貰うという方法ですが、何にしても、創刊して三号目あたりが雑誌にとっては一つの危機かもしれません。

本誌はまことに微々たるささやかな雑誌ではありますが、とにかくにも百三十数号の

発行を続けてきました。このあたりで編集の裏面といったものでも書いてみてはと書いて（今まで多くの読者の方から、そういうすすめを受けていました。が、いろいろの支障で果しませんでした）本月号から少しばかりの誌面をさいて貰うことになりました。

材料の方は、何んだかんだと沢山ありますので、その折々に思いついたままを雑談的に書いてゆきます。当初から埋草用として書いてゆくつもりですので、断片的で長短定まりなきものになるだろうと思いますが、系統的にまとまりをつける意図はありませんので、初めからお断りしておきます。

白人の売春婦でいかれる

本誌の創刊したのが、昭和二十三年の秋、すべての必要物資が厳重な統制下におかれていた頃で、勿論、ザラ紙も統制されていて配給は殆どないにも等しい微々たる状態ですから、ちゃんと製本された雑誌なんか見ることは出来ませんでした。仙花紙で刷った一部五円のエロ新聞の全盛時代で一時は数十種も出ていて、電車の中などでも盛んに読まれたものです。なにしろ食糧にも餓えていましたが活字にも餓えていた頃とて、とにかく紙になにか印刷してありさえすれば羽が生えて飛ぶように売れたと表現される位の時代でした。

本誌も創刊号は、たしかB5判三十二頁位で定価は十八円だったと思います。勿論仙花二号と呼ばれる色のついた片面ざらざらの紙で、まあパンフレットと呼ぶにふさわしい代物でした。

その頃は出版物には進駐軍の検閲があつてこれが又、中々厄介でした。創刊第一号は事前検閲、第二号以降は事後検閲ということになっていましたが、事後検閲でも悪い個所があると、書留速達配達証明の呼出状で検閲局へ呼出されて、さんざん油をしばらくられたものです。

です。

ムッソリーニの逆吊りの処刑を批判した雑誌は、創刊号のその記事のために、とうとう陽の目を見なかったそうですし、白人の女性のヌードをグラビアにした雑誌は、そのことでひどいお叱りを蒙ったとのことでした。

白人といえば、その頃の本誌の特集で「港々に女あり」といったテーマで白人売春婦の記事を載せたことがありましたが、この記事が逆鱗に触れて早速呼出しを受けました。出頭してみると、白人の女性のことを殊更悪意を以て書いたというので大変なお冠りです。その上、文中に世界各国の都市のことが出てきましたが、これも又、行ったこともない都市のことを想像で書いたというので、油をしばらくられました。なにしろ、雑誌の発行を停められる位ならまだしも、悪くすると、重労働で沖縄へやるぞと威かされると、御無理御尤で平謝りに謝って、以後は絶対こういう記事を掲載しないと誓わされてやっと許して貰ったものです。

十年一昔といいますが、その当時は今から考えて、本当にされないようなことが沢山ありました。まことに今昔の感にたえないものがあります。

用紙の方も中々厄介でした。ザラ紙は統制

なので統制外の仙花紙を使うのですが、これが又㊦と呼ばれる公定価格でしばられているのです。しかし勿論、闇値でないと絶対に手に入らないので、メーカー、取次店、購入者という一連の㊦の仕切書を準備しておいて運搬中の検問に備えたものです。闇物資の横行時代でしたから、経済保安係の検問はまことに厳重で、時には荷物を車から下して調べるといった程で、下手をして闇物資と見なされたらそれこそ一大事です。

主食の米をはじめ、あらゆる物資が殆ど闇で賄われていたわけですが、㊦のものを価格超過して取引していることがはつきりすれば罰金物です。私の友人に数回しか雑誌を発行しないのに運悪く仙花紙の闇で検挙され、第一審で罰金二千円の判決を受けた人があります。控訴しておけば、半年程して用紙の統制が解除され、免訴になったのですが、この友人は第一審で服罪して罰金を支払ったために馬鹿を見たという話もあります。

原忠正氏の事件について

沼正三氏、中康弘通氏はじめ、多くの方々から通信を頂いて、原氏の事件を知りました

が、本誌としましては、原氏が本誌の寄稿家であったということ以外、何ら関係がありませんので、最初「恐喝事件」ときいて、何んのことだか一向にわかりませんでした。

その後、週刊誌や赤新聞なんかで続々とこの事件を取り上げましたので、それらの記事によって大体のことを知ることが出来ました。が、勿論、恐喝事件の内容そのものを知らないのですから、これらの記事通りの事実があったものか、否かの判断は出来ません。従って、それらに掲載されている記事だけによって検討してみよう。

先ずあたりまえのことですが「週刊朝日」「サンデー毎日」等の大新聞の週刊誌では、こういった事件を取材範囲には入れていません。このところ軟派記事で大幅に誌面を埋めている。「週刊サンケイ」の1月25日号で（悪運つきた「売春恐かつ団」）という見出しに（とんだアフターサービス付き商法）というサブタイトルをつけて約一頁半に亘って原氏の事件を扱っています。

この記事を読んでみたところ、日本社（東京）社会部青木久二と執筆者の氏名を挙げて責任の所在を明らかにしているとおり、小見出しの（M・S趣味の会）（研究家、森下

小太郎）（会員は重役、商店主）（周到な用意）を見ても、別段誇張した書きぶりとも見受けられず、真相に近いものを報道しているのじやないかと見受けられます。

然し、同じ週刊誌仲間でも、桃色週刊誌というものは、元来、暴露とエロを一枚看板にして読者を釣っているものですから、こういった事件は、彼らにとっては、又とない棚ボタ式のネタです。さしあたり猫に鯉節というところで、真先にその餌食にされてしまったのは、当然すぎる程の当然の結果です。

では「週刊実話」の2月1日号を見てみましょう。この週刊誌は、新聞広告でも、ドギツイ見出しの三段又キの広告を煽情的に出しています。例えばその見出しも（美人がムチで男の客を叩くという変態クラブM・Sあけぼの会）（荒ナワで縛り逆さ吊りの実演）といった調子です。

読んでみれば、「週刊サンケイ」の記事に尾鰭をつけて、出来るだけ興味本位に、許される限り煽情的に書いてあるにすぎませんが社会面の記事で、エロとか暴露、或は犯罪などで、これは興味本位に伸して書けるといったものを鵜の目鷹の目で探している彼等のことです。から、一旦見つけた絶好のネタを、こ

ういった料理の仕方をするのも、いつも使っている常套手段といえましょう。若い女の殺人事件なんかがあったときは、情痴と犯罪とを結びつけて面白半分、でかかど書き立てるのは、桃色週刊誌でよくやる手口です。

さすがに森脇文庫の「週刊スリラー」では一寸見方を変えて書いています。その1月29日号を開けてみましょう。これも興味本位に殊更煽情的に書いていることには違いありませんが、……と、これだけをみれば、なんの変哲もない売春クラブの検挙にしかすぎない。しかし、このニュースの裏面には、もっと奇怪な真相が秘められていることを各紙が見落しているのだ。……といているように、豊富な写真を掲載して、新たな角度からこの事件に焦点を合しているかのように見られます。

即ち、売春クラブ——恐喝事件という見方と被虐クラブ——恐喝事件という見方の違いです。それで「週刊スリラー」での見出しは（倒錯クラブの特別会員）となっています。サブタイトルも（貴女の『飼犬』になります。……セックスの断相）という具合に、如何にもマゾヒスト好みの言葉を挙げています。……美しく逞ましい女性が、ピカピカ光る乗馬靴の足を踏まえると、激しいなりと

共に残忍なムチが振り下ろされる。そして飼犬のように両手をついた全裸の男性は、身悶えしてのたうちながら、陶酔の悲鳴をあげるのである……。という文章を見ても、この材料の提供者は、この会の会員の一人ではないかという気がする位です。

面白いことに、(変態クラブの演出プラン集)の項で、——曙会の発起人は、一般人に会員を募ることを決定し、各軟派紙上へ観光新聞、シンニチ、内外タイムスV等に二カ月にわたって広告をだした。——とありますがこれが本当とすれば、観光新聞、シンニチ、内外タイムス等という軟派紙がその広告面を通じて、この秘密クラブ(彼等のいう)の会員募集に大きな力をかしていることになるわけです。そして、その週刊シンニチの昭和35年1月29日号には、一体どんな記事を掲げているか見てみましょう。

(変態グループの実態)という八段に亘ったトップ記事です。内容は似たりよったりですが、想像で書いた個所も多分に伺うことが出来ます。しかし、シンニチに広告を出して会員を募ったということだけは、さすがに書いていませんね。うちの新聞は、これだけの効果があるという一番よい実物宣伝になるので

すが。

いずれにしましても、こういった会合があったならば、と多くのマゾヒストの方々が空想しておられたことと思います。原忠正氏がそういう人達の要望に応えたというわけでしょうが、運用の方法にいささか行き過ぎがあったのは遺憾ながら事実のようです。原氏からは、この件については何らの連絡もありませんし「奇人館」というパンフレットについても、発行するという事は聞いていましたが、発刊されたことも知らず、従って実物も見えておりません。

読者の一部の方からは、奇譚クラブがこういったグループに利用されたのだから注意しなければいけない、とか、或は執筆者の中にかかる人物を加えていることは怪しからん、とか、読者通信に関しても悪用されぬよう一考せよ、とかいう御叱正を頂き、恐縮しております。前にも申し上げた通り、本誌はこの種グループとは何の関係もありませんし、殊更原氏を弁護しようというのでもありません。以前、本誌の寄稿家であった佐次浩介氏、門田奈子氏並に甲斐仁参氏が問題を起したときも、本誌としましては非常な迷惑を蒙りましたが、佐次氏と甲斐氏が本誌の読者通信を

通じて知り合ったということから、その点の責任を感じ、その後、読者通信上の住所氏名の発表を中止したような次第です。

一対一の水いらずのプレイでしたら別ですが、複数の会合ということになりますと、どうしても金銭上の問題や公然性の問題が起りがちです。それにしても、会員の秘密を知って、それをタネに恐喝したということが事実だったとしたら、許し難いことだと思えます。それは、こういう会合がいいか悪いかということ以前の問題で論ずる余地がありません。

今回は原氏の事件について、くさらない中にとまって誌面の許す限り、思いつくまま書いてみましたが、まだまだ書きたいことも多いので、それは又、別の機会に譲ることにしましょう。

創刊当時の思い出話から、一足跳びに、最も新しい材料に移ってしまいました。その時々話題を含めて、臨機応変にペンをとってゆきましょう。本稿は今後毎月続けてゆきたいと考えますから、御気づきの点がありましたら、どしどし御便りを下さい。誌上若しくは信書にて出来るだけの御返事をいたしたいと思えます。

蠢く蒼い群れ

近藤

(中)

この一篇のストーリーが、
真実の記録として映るか、
或いはまた、単なる一個の
フィクションに過ぎないも
のとして読み取られるか、
それはお読みになる方の御
自由である。しかし、この
ストーリーの中のシチュエ
ーションに、私が異常な関
心を寄せ、強い情熱を以て
取組んだことだけは、事実
として附言して置きたい。

思い詰めていた謙から、キを入れられて、令子は却ってサッパリしたような気がした。だが凄かった。ミッチンの応急手当が効いたものか、殴られた左の眼は失明を免れたものの、蒼黒く隈が出て脹れ上り、当然、人の前へ出られなかった。バンドの鞭で引っぱたかれた痕のミミズ脹れや裂傷は、治りかけると痒くなって困った。コブだのアザだの髪の毛を曳き摺られた地脹れだのは、一週間も経ってまだ触れると名残りの疼きを起こしていた。鼻だって、もう一つ別の鼻までくっついたような巾、たい、感じに膨れていたし、それらにも増して、惚れた男からブン殴られ、頭から水をブツ掛けられ、ボロ屑のように、ほっぱり出された想いが心を痛くした。

——畜生ッ！謙の奴、覚えてやがれ！——

表へ出られる程度に顔の痕が薄れると、ミッチンの奨めで眼帯をつけた令子がまたトリスバー「M」へ現われた。純白の眼帯は清潔な色気があったし、隻眼をキラ／＼させる令子には、筑波会の会長らしい凄味さえ見えていた。

当の令子の口惜しさもさることながら、彼女の怒りは周囲に伝播して嵩まった。激情性のチャコは日頃いいようにあしらわれて来たことに対しての、どうにもならない怒りをぶちまけていた。陰性な利子は普段でも蒼白い頬を冷く歪めて謙を呪った。筑波会の会員達は令子の被害を見て、骨の髄までしゃぶりつくすという男の恐怖を感じたように思った。

令子の家族も心中穏かでない。彼女が幾ら手に余る不良少女でも

嫁入前の娘ではあり、更にまた、家族に対しては案外な思いやりも持っているだけに、黙ってはいられなかった。前に世話になった少年係を想い出した。

「そりゃ、家の娘も悪いンです。そんな人の仲間になんか入ってたんですから。でも、これじゃ酷すぎますヨ。何たって女の子ですからネ。まア今度の事じや、家の娘が馬鹿なんだから仕様がありませんがネ、今後、よその娘さんがこんな目に遭わないように、警察の方からようくお灸を据えといて下さいヨ」

告発という訳でもなし、云わばヤクザの仲間喧嘩のようなものだから、警察では少年係が謙を呼出して、とっちめただけだった。傷害罪にも暴行罪にもならなかったが、しかし、令子への影響は少なくなかった。警察という権威には必要以上に卑屈な態度で接している謙が、ホト／＼つまらなく見えてしまった。令子は謙にくっついていた自分がいやになり、謙と別れることで気がせいせいしていた。

十日近くなった夜のことであった。七時を少し廻った頃では、盛り場は宵の口で、「M」の片隅にはミッチンと利子が服飾や化粧の話題に花を咲かせていた。

少年が一人飛込んで来た。

「アラ、残念でした。フーコはいないヨ、ヒロシ」

「大変だぜ、トッコ。ミッチン」

「何が？どうしたのヨ、慌てて」

「フーコの奴、パクられちゃったんだ！」

「えっ！」

「ほんとう？ヒロちゃん」

二人の娘は同時に身を起した。

「俺、知ってるんだ。フーコを密告しやがった奴が誰だか、ちゃんと分ってるんだ」

ヒロシは泣きそうな顔をしていた。彼には令子が謙にヤキを入れられたのは大きなショックだった。ヒロシにとって天使のような存在である令子が、ケチな愚連隊の謙には、捨てて悔いの無いゴミだったとは、思っても癪な話なのだ。ヒロシが頭に來たのも当たり前と云えよう。

弘は一途に謙を憎悪した。令子に知られないようにして彼女の影につき纏うのも、令子を狙っていやがらせにやって来る謙の現場を抑え、一挙に叩きのめす目算だったのだ。

令子と一緒に貯金狂の喜美江が、増額のためのカモを探していた。商店のウィンドウを覗きがてらの散歩と思われた二人連れの若い男に喜美江が声をかけた。そのまま二人と一緒に行ったきりだった。令子は間もなく三十五、六の好色そうな男を誘った。

「ネ、お兄さん、私、今夜淋しいの。デイトして。今夜っきりでいいから、ねエー。」

彼女の自由契約が成立しかけた時、いつの間に来たのか先刻の二人の若い男が現われ、令子と相手の男を署へ連れ去ったのである。

それきりだった。令子も喜美江もその晩は遂に帰らなかった。警察からの連絡を受け、慌てふためいた家の者は、翌朝早く、捜査係へ出頭して、令子達が売春取締法違反の現行犯として検挙されたことを知らされた。書類は捜査係から少年係に廻り、身柄と一緒に水色のバスで地検の少年係へ送られた。

ミッチンはチャコとトッコの道案内で、お昼少し前に地検からの

眼帯をつけた令子



れぼったい眼の辺りも薄汚れている。

「フーコは？」

三人の姿を認めて気が緩んだように、喜美江は立停ったまま顔をクシャ／＼にした。

先刻と違う色のバスがやって来て、やがて裏門から走り出て来た。偶然だろうか、令子は右側の一番前にいて、窓から外を見ていた。道端の樹の傍に四人の女の影を見た。そして次の瞬間、ハツとして窓ガラスに顔を寄せた。ミッチン、トッコ、チャコ、それに喜美江の八つの瞳が喰入るようにバスの中に注がれているのを、痛い！と感じた。喜美江が小さく手を振った。令子は、もう見えなかった。

ネリカンへは誰も面会に行かなかった。ミッチンが、行かない方がよいと云ったからである。伝言は令子の両親を通じて行われた。九日経って令子の審判があった。鑑別所のバスで裁判所へ連れ出された令子は、カールの崩れた髪が妙に長く背にかかり、入浴も思うようにならなかったのか、プウンと汗の匂いが漂っていた。厚い壁と鉄格子の中の生活を想わせるように、短い間の大きな変化で、令子は陽当りの悪いムクんだ顔になっていた。

「フーコ」

ミッチンが、そっと声をかけた。たった一人で様子を見に来て、廊下の曲り角で、黒い制服の男の人に肩を抑えるようにして連れられて来る令子の姿を見つけたのだ。

「ああ、ミッ。元気？」

職員を気づかったのか、力無い語調だったが、案じた程取乱して

バスのコースに現われた。十二時半を少し廻った頃、上半分を水色に塗り、下半分は濃紺に塗り分けたバスが曲って来た。瞳を凝らして見ると、小さな窓から俯向いて脹れぼったい喜美江の横顔が覗いていたが、外の三人には気づかないうちにバスは家庭裁判所の中へ走り込んでしまった。

空腹に堪え兼ねての昼食も交代に済ませ、待った。ジリジリしながら、心細く待った。四時近くなつて、何人かの少年達に混って喜美江がボンヤリ出て来た。大分泣いたらしく、冴えない顔色で、脹

はいなかった。

「待ってるヨ」

追抜きながら一言だけ浴びせかけると、小さくコックリして、ニツと笑って見せた。割に落着いてるナ、とミッチンは稍々安堵した。

真面目に学業に励むこと、悪い人達と付合わないこと等を懇々と云いきかされて、令子は今度だけというので許された。親に引取られて家へ帰ることになった。令子の両親が揃って出頭して、娘の行状には責任を以て監督することを誓ったのも、裁判官の心証を良くしたに違いない。保護者の出頭さえ完全には無い世界で、両親が娘の無軌道ぶりに頭を痛めている姿には胸に迫るものがあつた。

四人は昼食のために公園内のグリルに入った。折から居合わせた客の視線から庇うように、ミッチンは令子を自分の陰に坐らせた。

「これからどうする？ 私は責めないわ。唯、考えが浅かった、とだけいっとくわネ。今度のようなことはあなたが考える程自由じゃなかったし、自分を大切にすることじゃなかったわネ」

令子は神妙に項垂れている。令子の両親は娘が心服している年若い意見者を纏るように見ていた。初めトッコやチャコが口にするミッチンの名を嫌悪し、どうせ不良少女仲間か或いは思慮の未熟な娘達を唆かして甘い汁を吸おうとする強か者だろうとしか思わなかったのに、令子に示してくれる献身的な働きでオヤ？と訝しく思ったのである。親として疑問を抱いたものの、令子が黙して語らぬ以上事を荒立てるべきでないと思い、そのままにしてはいるが、手に負えない娘が誰かから親身の世話を受けていることを感じないではないなかつた。それがすべてミッチンによるものと識って、奇妙な感謝

が湧いて来た。娘が一方ならぬ思を受けたことは確かである。だが娘が体に変調を来たして以来、何か無道ぶりに一本芯が通って来たようで、それもミッチンの影響では有難迷惑のようだった。

「フーコ、結局はあなたの気持一つヨ。今という時は二度と無いんだものネ。あなたが一番良いと思うように過ごせばいいのヨ。誰だって何も云えやしない」

その晩と次の晩は家に籠っていた令子も、三日目には我慢しきれなくなっていた。フリリと家を出て、Mへやって来た。

「フーコ。お帰り」

「みんな、待ってたんだヨ」

ミッチンはいなかったけれど、利子も京子も顔を揃えていた。独特の雰囲気は充滿していて、令子を囲んで忽ち賑やかなお喋りが始まった。

「とんだエライ目に逢っちゃったネ」

「運が悪かったんだヨ、フーコ」

「全くツイてないんだから頭へ来ちゃったヨ」

「ネリカンで、どんなときさ。やなとこかい？」

「ヤキ入れられるんだって？」

令子は久しぶりに喋れるだけ喋った。疲労をさえ感じていた。話には、かなりの尾鰭がついて、流石にちよつと気が引ける位だったが、ミッチンがいてくれたら本当の話ができたのに、いないからいけないんだ、と勝手に云いわけをつけて、自分がどんなに苛酷な扱いを受けたかというのを喋りまくった。警察も裁判所も只恐ろしい処で、ネリカンは地獄そのものになってしまった。やはり彼女達の特有の雰囲気は酔った挙句の嬌態かも知れない。

「アタイはサ、今でもよく分らないんだけど、どうしてあすこへ刑事が来たんだろ？」

喜美江がマセタ口調で訝った。

「ツイてないんだヨ」

「そうかな、そりゃアタイもドジだったけど、サッなんか来やしない処なんだヨ」

諦めきったような令子には貫禄のようなものが滲んでいた。

「誰かが密告したんじゃないだろうか？」

「そんなことないわヨ。マグレだよ、きっと」

「そう云えば、ヒロシがこの前云ってたヨ。フーコをサした奴、知ってるって」

「えっ！ヒロシが？」

利子の言葉に令子は一瞬頬を硬張らせた。ミッチンが居ないのが不幸だった。敢て詮索する迄もなく、皆の意識には謙の名前が密告者として大きくクロースアップされていた。

——畜生！でかいツラしやがって、ヤクザの風上にも置けない餓鬼のクセに——。

令子の心には、ムードに酔った勢いばかりでない熱い憎悪が、謙という名をはっきり烙きつけてしまった。

一週間程、経った。令子がネリカンから帰って来たお祝いに筑波会の仲間が、Mへ集まって祝杯を挙げ、陽気にふるまっていた。ヒロシ達もやって来た。ミッチンの配慮で中学生は早目に帰したから、九時半頃になって店に残っていたのは、ミッチン、令子、利子、京子、それに喜美江と高校一年生が二人。それに混ってヒロシ達三人のハイティーンだけで、それだけかなり思い切った話はずん

でいた。

「いよオ、相変らずチンピラさん達ア、いい景気じゃねえかよオ」
ドアを軋ごと押しあけて現われたのは、忘れるべくもない謙であり、その背後には無気味で無遠慮な視線を投げかける勝がいた。ポキッ、ポキッ。口許を歪めながら、勝は指の関節を鳴らして無言の威嚇をするのである。謙は令子を顎で指して云った。

「そっちの姐ちゃん、暫らく顔が見えねえと思ったら、いい処へ御旅行中だったんだってなア。いい御身分じゃねえか」

白々した空気が流れ、冷い恐怖と殺気のようなものがピリ／＼と感じられた。令子の頬がヒク／＼顫えた。

「ケチな真似しやがって、恥ずかしく無いのかヨ。お蔭でアタシはいい思いをさせて貰ったヨ」

「ケチな真似？何を云やがンでえ」

「サッ、ヘサしやがって、とぼけるんじゃないよッ！」

令子の怒りが爆発した。疳高い叫びに店内がピリツと緊張した。だが謙は、勝と顔を見合っただけで、軽くあしらう様子を見せた。

「知らねえヨ、そんなこたア——」

「フン、食わせて貰って、着せて貰って、寝ただけ寝かして貰って、それで泊り賃がタダだってなア、今時羨やましい話だヨ」

からみ方から察すると、謙はかなり酔っているようだ。

ミッチンが立上ってスーッと勝の横をすり抜けるのを、謙を睨みつけていた皆の視線が追った。

「どうした？何も云えねえのかヨ。おい」

令子の顔は屈辱と憤怒に蒼白だった。

「何ッ！」



「サツのイヌの癖に！」

「でけえつらすンな！」

トッコやヒロシ達も舌が縄れる程の緊張を感じていた。

「何だど？誰がサツの犬だ。そんなこと吐かしやがったなア、手前達か！」

謙とチンピラ達の睨み合いには火花が散るようだった。ミッチンが扉の処に立って、謙と勝の背後から、皆に外へ出ろと顎で合図した。

「表へ出な！今日は、はっきり話をつけてやる。畜生！アタシをネリカンなんぞへぶち込みやがって！」

謙と勝は、ニヤリと笑った。

「やる気かヨ。面白え。おい、フーコ！お前、こないだの味を忘れちゃいめえ？今度、俺に楯つきやがったら唯じゃ済まねえって云った筈だぜ」

ゾロ／＼裏手の暗がりへ出た。令子と謙が向き合って立った。

ヒロシ達は一固まりになって勝と睨み合う。数は多いが喧嘩馴れのしたヤクザ者には気遅れするチンピラ達だった。

「フーコ、お前と一匹ドッコイじゃ、いくら俺だって気がひけらア。そっちの姐ちゃん達も、俺にぶつとばされる元気がありゃア、かかって来たっていいンだぜ」

だが、一人々々では到底かなわない少女も数では遙かに優勢だった。ヒロシ達が束になって勝を相手にしておいてくれたら、謙に向う少女達は六人もいる。そこはやはり真面目な少年少女とは違い、彼らには彼らなりの喧嘩の仕方がある。ヒロシ達は勝を取囲むように間隔を取り、姿勢を低め、ジリ／＼迫る。少女達は謙のまわりを取囲んだ。グルリを囲まれても謙は相手を小娘と見てか、さして緊

張もせず突っ立っていた。ミッチンは唯一人だけ少し離れて立っていた。余り争闘には加わりたくないようにも見えなし、興奮の余り前後の分別もつかない少年少女達の短を補う指揮者のようにも見えた。

物凄い静寂の直後、どちらからともなく、低く鋭い叫びと共に少女の躰が謙に突当った。ガツン！鈍い音がして、小さい影がのけ反る。噛みつかれることを怖れた謙が、少女をしがみつかせないように、顔面を殴りつける方法に出たのだ。第二の影が殴りとばされた時、第三の影がとび付いた。その機をのがさず足許へ飛込むもの、腰にしがみつくもの、髪を引きむしり顔をひっかく者もいた。

ううっ！糞っ！

謙の呻きに勝の気が一瞬そがれた。途端、少年達が一時に襲いかかった。

パシッ！ガツッ！パシッ！ガツッ！

殴る！蹴る！殴る！

撃ち合う鈍い音と、押し殺した罵声と、荒々しい吐息が闇の中に蠢いた。少年の体当りに勝の体がよろけ、尻をついた。起上ろうとする処を組つかれ、勝は半身を起したままで殴り合った。

パシッ！ガツッ！うオッ！

すっとんだ少年の影から、洩れ灯を受けてキラッと光るものがあった。市販されている刃渡り五・四釐の制限一杯の飛出しナイフがチンピラ達愛用の護身物なのだ。流石に喧嘩馴れのした勝は相手の動きを残らず見る。

「フン、しゃらくせえ。餓鬼が、舐めた真似エしやがって」

背広の上着は逸早く脱ぎ捨てて、ノリネクタイの黒っぽいシャツ

の下には素肌に巻き締めた晒しの間に愛用のアイクチをぶち込んでいる勝である。刃の光を認めると自然に指先はシャツのボタンをはずして行く。

その瞬間だった。背後から伸びた腕が、シャツの襟をつかみグイッと曳いた。ビリッと音た立てたシャツは脱がすように引かれ、勝の腕が一瞬、動きを止められる。

ガツッ！ううっ！

少年のパンチがまともに顔面に叩き込まれ、勝は呻いた。シャツを掴んで羽交締にしていた右手が伸びて勝の身につけた白木の柄に届いた。勝の手がその手首を掴む。

あうっ！く、くうっ！

飛出しナイフを持った影が、アイクチを奪い合う勝の横から体ごとぶつかった。反射的に放した手首が鋭利な刃をサッと拔出した。

うわアッ！うわっ！

故意か偶然か、刃は男の喉を斬り裂いていたのである。

ぐふっ、ぐふっ！ゴホ、ゴホ、ゴホッ！

咳込みながら勝は暗い中で無闇に両腕を振廻した。夢中で、必死で逃げようとする足掻きだった。心臓が破れて跳出しそうに緊張してきた少年には、勝の敗北の藻掻きが却って死物狂いの反撃に見えた。双肌脱ぎにされた勝に向って、少年達は全力を尽くして闘いを挑み続けて行く。

謙は三人をあしらっていた。かかって来る一人を右手で殴りつけて左手には一人の髪の毛を鷲掴みにして振廻していた。足許にひき倒した少女を、背と云わず頭と云わずギリ／＼と踏み躪っていた。右からとびかかる少女が少しでも休むと、謙は左手の少女を髪の毛

を引寄せ力任せのパンチ、アッパーを喰わせ、既に一人はその辺に這い廻って呻いている。眼を叩かれ、鼻血が顔半分をベト／＼させているのだ。そして、今捉えられている少女ももうグロッキーになっている。

野郎！バシッ！ギャアッ！

少女の躰が飛んだ。

コキッ！うっ、くうっ！

妙な音だった。少女をぶっとばして伸びきった謙の背後から、機会を狙いすましていた手頃な丸太が、後頭部に振下ろされたのだ。踏まれた少女がはね起きようと藻掻いた。一撃が肩へ。そしてまた一撃！足許の少女が跳ね起きざま謙の足をすくう。利子は、やはり護身用に刃渡り制限一杯の飛出しナイフを持っている。ぶっとばされた二人目の少女は手の甲で眼の辺りをこすりながら、荒々しい呼吸で立上った。手にはナイフが光っている。垂れ下った髪を一振り揺すり上げて、謙に近寄った。謙の土足に蹂躪されて唸っていた少女も跳ね起きると隠し持った飛出しナイフを抜いて謙の左側から迫った。謙の隙を見てとびかかろうとしていた少女の一人も、思いついたように光る物を手に握り締めた。

右側から丸太が飛び、謙が辛うじてよけたため、肩に強く当たった。その途端、左手のナイフが前後から謙にぶつかって行った。

ううオッ！いっ、痛っ！

一人が左の脇を刺し、一人が左手の甲を切裂いたのだ。相手の男が負傷したと見ると、少女達は一斉に襲いかかった。殴る、蹴る、引っ掻く、抓る。そして飛出しナイフが滅茶々に突き立てられた。

地面に突っ込むように呻き廻る勝と違い、謙が上体を起しているのは少女達がしがみついて支えているのだ。

ぐうわアッ！ウーム！

謙の全身がビクンと硬直し、少女達を振りとばして、崩れるように倒れて、這った。

「みんな！もういいヨ、この位にして許して上げなヨ」

這って唸る勝と謙を腹立たしげに足蹴にしている少年少女は、ミツチンの声で漸く攻撃をやめた。

「怪我した人の手当をしなきゃいけないワ。サ、みんなもう中へ入りましょうヨ」

ミツチンは率先して、苦痛に蹲まって泣いている少女に肩を貸した。少年も少女も多かれ少かれ傷ついていて、やたらに唾を吐き散らしながら痛む身を引摺って「M」へ帰った。

「どうしたんです？」

愛想なのか、マスターが事も無げに訊く。

「御覧の通りヨ。マスター、何かお薬無い？赤チンか何か。それに脱脂綿があったら欲しいんだけど」

ミツチンの甲斐々々しい働きに、マスターが覗き込んで云った。

「大分酷くやられましたネ。何しろ勝ちゃん達ア強いですからネ」ミツチンだけがニヤリと口許をほころばせた。

「折角のフーコのお祝いが、これじゃ台無しだワ。景気直しにグツとあけて、今夜は帰ることにしようネ」

トリスのストレートが喉を焼くように辛いのも若者達の興奮を煽り立てただけだった。

翌朝早く謙と勝は死体となって人目についた。第一の発見者は流

しのバタ屋だった。商売熱心なのか、早朝から裏通りや露次や勝手口を漁り歩き、都合によって掻っ払い位は当り前と心得ていた。朝の陽の光の中で二人の男の死顔の凄まじさを見てもさして驚きはしなかった。愚連隊は、えてしてこんな死に様を曝すものだと言っている。背広の上衣が二枚落ちて(?)いた。飛出しナイフを一本拾った。一寸血がついていたので拭おうとしたが紙は商売物だからやめ、血汐が飛び散っている上衣で擦って、血の着いていない上衣を失敬した。死人が握り締めているアイクチも金になりそうだった。したが、かかり合いになってはと、漸く腰を上げた。懐を探ろうとしなかったのは、死人が薄着ではあったが、賢明だった。

バタ屋が露次を出た途端、新聞配達とぶつかりそうになって、悲鳴を上げた。不審げな相手の注意を外そうという芝居が巧まずに出た。不器用に露次の奥を指して云った。

「ひ、人が、殺、されてる。死んでる！」

警官が来た時には、そのバタ屋の姿は全く無かった。朝の遅いMの界限も時ならぬ騒ぎに叩き起された。係り合いを恐れたマスターが、わざ／＼昨夜のイザコザを警官の耳に入れた。誰が見ても他殺であった。だがマスターにしてみれば、謙と勝が殺られるなどとは考えられなかった。ハイトーの行状が驚異でもあり



ちよっぴり痛快でもあった。

検死が念入りに行われ、闘争が最近になされたことは確認された。死骸の身許はすぐに判明し、謙が握って死んでいるアイクチは勝の所有物で、そのサヤは勝の腹に巻いた晒しの間に残っていることも分った。

二人の死体は解剖に付された。死亡時刻は概ね前夜の九時から十一時の間と推定され、死因は鋭利な刃物を用いた刺創、裂創に因る出血多量。致命傷は勝の喉笛を切裂いたものと謙の心臓部の一突きだった。而もその兇器は死んだ謙の右手に握られていたアイクチに鑑定の所見が下されたのである。

マスターの発言に基いて警察は、まず令子に出頭を求め事情を聴取することにした。傷痕も生々しく、赤紫にアザの出た顔の令子は興奮が醒めきらない面持だったが、割合、素直に取調べに応じた。

謙との関係については詳しく尋ねられた。ヤキを入れられた時の口惜しさが甦って、涙に言葉が詰まってしまった。

「アタシネ、それまでほんとに惚れてたんだ。そいだけに頼ってたアタシがドスでも持ってたなら謙のドテッ腹にぶっ通して、えぐってたかも知れない。あいつをぶっ殺してアタシも死にたくなっちゃったんだ。ゆんべだって、あいつの顔見た途端に頭へ来ちゃった。あ

いつがアタシの悪口云って、みんなの前で馬鹿にしゃがったンだもン、アタシはあいつをぶっ殺す心算だったンだ。ミツチンがとめなかったら、謙の奴、今頃息なんかしちやいないヨ」

令子は謙の死を識らないのである。

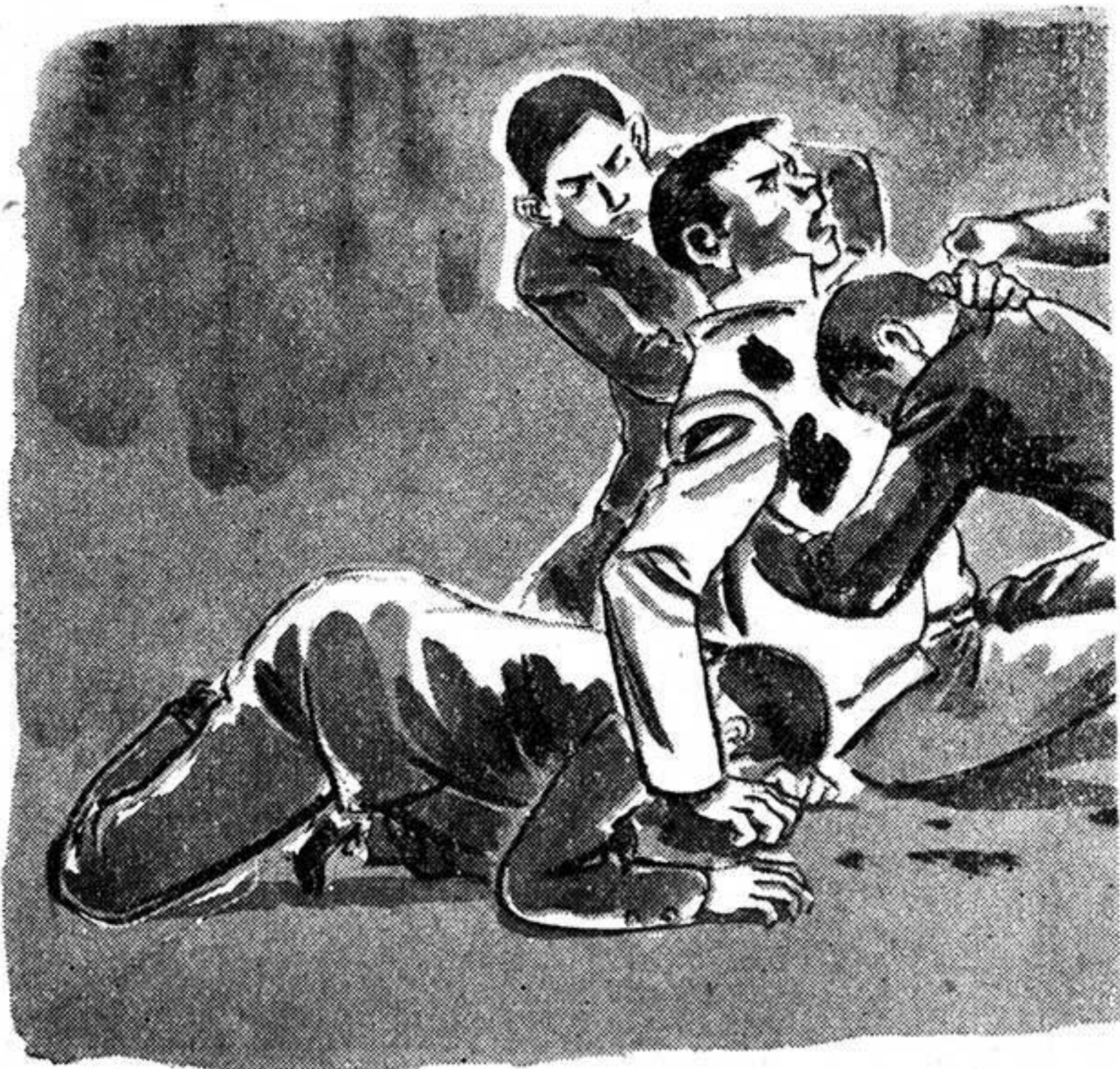
警察は次に利子と呼出した。

「ナイフは持ってるだろうナ、護身用の」

物云いたげに係官の顔を見た利子は、仕方が無いという顔付で、トッパー・コートの右ポケットからしゃれた細工の刃渡五・四厘ある飛出しナイフを出して机に載せた。元来が陰性な利子だから余り口を開かないが、まして場所が警察署の調室であり、聴かれることの半分も答えなかった。そんな手

間取れる取調の間に、利子のナイフは鑑識で調べられた。明らかなルミノール反応があり、肉眼でさえ血痕が認められたが、調査の結果それは謙のとも勝のとも異なるO型の血液だと分った。

「アタシはネ、謙のストレート喰らっちゃって、すっとなじっちゃったンだ。鼻血がダラ／＼出ちゃったし、そのあと蹴つとばされて、見



てヨ、こんなナンだヨ」

利子は細いスラックスを強く引上げて、蒼い皮下出血のある向う脛を見せた。

「謙の奴アタシの髪の毛をひんむしりやがって、だからアタシも奴の横っ腹へぶち込んでやったンだ」

衝突の中心と見られる令子と利子の調べから、警察では謙と勝がチンピラを怒らせて却って死を招いたらしいと見当をつけたものの二人のとり乱した陳述からは事件の全貌を把握できなかった。やむを得ず「M」のマスターを呼ぶ。未成年者である令子達にアルコールを売ったことが一因なのだと嚇かされて、マスターはペコ／＼した。

「ですから、こうやって御協力申し上げてるじゃございアせんか。

そりゃ私共も迷惑してたンでございアすヨ。店をあけると早々にやって来る。ペチャクチャ、ガヤ／＼でござんしょ。いい加減、営業妨害でございアすヨ。ゆうべのことなんか、ほんと、私は何も存じませんヨ。見ちゃおりアせんからネ。第一私はあのチンピラ達が謙ちゃんや勝ちゃんにノサれたんだとばかり思ってたんですから。ゆ

うべのことでしたらミッチンって娘にお訊きになるのが一番でございアすヨ。本名なんか私は存じませんが、チンピラ達の中じゃ一番落着いて、しっかりした娘ですからネ。ゆうべも停め役だったし、あの騒ぎの後、とにかく連中をなだめて引取らせたんですから。お訊きになるんですしたらミッチンがよござんすヨ」

だが、ミッチンの行方は不明だった。

乱闘から中三日置いた夕刻、ミッチンがふらりとMに現われた。

「アッ、ミッチンさん、貴女のこと、警察で探してますヨ」

「私を？ア、どうして？」

「貴女ネ、謙ちゃんと勝ちゃんがあの晩の喧嘩がもとで死んじまつたんですヨ」

ミッチンはすぐに警察へ駆けつけた。

「君は？」

「ミッチンです」

「高橋路子だね。年は？」

本籍、現住所や職業から位階や勲章の無いこと、今まで警察で逮捕調を受けたことの有無を確かめられる。参考人として供述調書に載せるにも、被疑者として弁解録取書までとられるのも、これだけのことは最少限度必要なのだ。従って警察ではこれらの確認には正確を期すのだが、しかしミッチンの場合にはどうしようもない。本籍不詳、住所不定、無職、検挙歴無く、通称ミッチンで本名という高橋路子の名も真実かどうか分らないと本人が云うのだ。親も兄弟もなく、天涯の孤児で、敗戦当時ルンペンの小母さんに乞食用の子として抱えられていたのが三つか四つの可愛い盛りというから、生年月日も昭和十六年の十二月八日と自称して十八才と答えることに

しているのだ。戦乱の落し子として両親の顔も記憶に無い若い世代が漸く伸び盛りになっていく時である。戸籍が無いのではない。何処かあるに違いないのだが、分らないし、探す手がかりも無いのだ。今日までどうやって生きて来たかと訊かれて、ミッチンは暗い表情になった。

「親無しっ子が他人に食べさせて貰ったんですヨ。そんな質問は酷過ぎやしません？私は生きるために何でもやりました。必要に迫られて多少の悪い事なら仕方なしにやったことだってあります。法律で禁止されていないことなら、他人が何と云おうと平気でした」

ミッチンは自分の生活の過去一切を語ろうとせず、涙を浮かべて黙り込んでしまう。結局、住所不定、無職、ミッチンこと高橋路子本籍地不明、年令十八年ということに落着いた。

「話をつけるなら外でするようにと、みんなを誘ったのは私です。だって、あんまりあくど過ぎるいやがらせだし、どうせ話をして分る人達じゃないし、それに始めから喧嘩を売りに来たことが分っていましたから、殴り合いなんかなかったら、お店だってほかのお客だって困ると思ったからです。表へ出ろ！なんて云われたンじゃありません。私の方から表へ出て話をつけようと云ったんです。勿論殴り合いになりそうだとは思いましたし、なっても大ぜいだから大丈夫だと思っていました」

ミッチーは闘争を自分の方から仕かけた喧嘩だと云ったのである。唯、それは相手方のいやがらせの挑発の結果だと陳述した。

「暗かったし、何人も組付いて揉み合っていましたから、誰が何処を刺したのか分かりません。もしかしたら私だって夢中で刺しちゃったのかも知れません。私はナイフなんて持ってませんけど、誰かのを

借りればできないことないと思うんです」

勝に関しては、こう云った。

「私には刺したなんて覚えはありません。他の娘がやったのを見た記憶も無いんです。でも一緒に来た人が同じように死んでいたというのなら、私達の誰かが夢中でやっちゃったのかも知れません」

闘争の動機についてミッチンは説明というより弁護に力を入れた。

「令子は可哀想です。刑事さんからみると悪い娘かも知れませんが思いやりは深いし、随分、素直な処があるんですヨ。今度のことだって令子が真剣に恋をした結果なんです。欺されていたことが判ってもまだ本気になれない程、本当に心から思いつめたんですヨ。それなのに、ちっとも報いらなかった。余りにも可哀想です。酷い眼に遇わされながら、謙さんを殺したいんじゃないんです。謙さんが好きだから、本当に命がけで愛していた相手だから、あのまま別れて諦めることななかでできなかったんだと思います。この気持、刑事さんに分るかどうか判りませんが、私は女ですから、令子のそんな思いつめた気持がよく分るんです」

そして、こう付け足した。

「少くとも令子は、謙さんとしか喧嘩しちやいけません。令子みたいに命がけで喧嘩したらそれが精一杯だと思います。もう一人の人は誰が相手になったのか分りません。私達が夢中でやっちゃったのかも知れないし、誰かが私達と全然関係なしにやったのかも知れないんですもの。謙さんだって誰かほかの人がやったのかも知れないと思う位です。私達が随分おたれたり蹴られたり、酷いことをされてから援け合って帰る時は確かに二人共、動いていたように思うんで

す。私達が帰ったあとで謙さん達に恨みのある人が来たかも知れないでしょ？もしかしたら私達を憎んでいる人が私達に罪を着せるためにやったことかも知れないと思います。そうでなかったら私達が居なくなってから二人で喧嘩したかも知れないじゃありません？」

それは警察でも一応、考えた点だった。だが現われて来る証拠は令子達に不利なものばかりだし、有利な証拠は全く無いのだ。

警察では綿密な取調の結果、勝の死についてはヒロシ達の行為と認定して証拠を揃え、傷害致死罪として送検した。一方、謙の死については共犯関係の究明や兇器等証拠物件の蒐集に時間を要するの

で令子、利子、それに新たに逮捕状を執行した路子の身柄については勾留状の発行を求め、真相の把握に躍起となった。ミッチンがブタ箱入りをしたのは住居不定が祟ったらしい。普通、少女達の勾留には成人の収監者からの悪影響を防ぐため、練馬の鑑別所を利用するのが良いとされるが、三人の場合、事件がまだ警察の捜査の段階にあるのだから、その便宜からも警察署の薄暗い留置場の小さな一部屋を特に与えられてブチ込まれた。

口裏を合わせるのを恐れたのか監視は割に厳しかったが、三人とも余り喋る気はしなかった。毛布をかぶって壁に倚って蹲っていた。何しろ狭い。きつと独房のように使われていた部屋なのだろう。鉄格子はあるけれどそれは牢格子ではないし、映画で見る留置場の檻のような造りではない。やはり扉もあり、割れにくいガラスも入っている。どんなに叩いても壊れない重い扉に錠が施された中でなら、毛布にくるまって、膝をつき合わせた発育盛りの若者が三個も詰まると暖かくて臭い程になる。

「やんなっちゃうなア、汗臭くって。お風呂へ入れて呉れないかな

ア

「ジロ／＼覗かれるかも知れないヨ」

「平っちゃらヨ。そんなことしたら眼が潰れるサ。」

娘達三人だけは特別に署の宿直用の風呂へ入れて貰えた。交渉の際ミッチンは、もし自分達の万一の事故を恐れるなら浴室内で見張

ってくれても良いと云ったの

だが、脱衣場で警官が一人迷

惑相に待っていただけで、久

しぶりで娘達は匂うように浄

められた。

「ミッチンって凄いんだネ」

「アラ、何が？」

「凄く綺麗なんだもン。ミッ

チンみたいなのを本当のグラ

マーって云うんだと思うナ」

「やだな。よしなヨ、そんな

お世辞云うの。」

鑑別所では週に二回の入浴

が許される。女子の収容は女

子寮でなされるし、少年の中

でも女子についての身柄拘束

には特に好都合と云える。だ

から家庭裁判所からばかりで

なく、検察官の拘留というこ

とで鑑別所へ入れられる少年



も多いのだ。警察署の留置場で成人の被疑者達から悪い影響を受けずに済ますためにも、鑑別所を利用した方が良いのかも知れない。だがミッチンはこう云った。

「此処、ちょっと狭いけど、ネリカンより良いと思わない？此処にいれば特別扱いしてくれるし、多少の我慢ならきいてくれるもの。」

人殺しがついてるし、フーコなんか前のこともあるんだもの、どうせ一度は練鑑へ行かなきゃいけない私達だから、此処の居心地を娛しむことが大事だと思うんだ。結構、親切にして呉れるんだもん、私達、此処の迷惑になること喋るのよそうヨ。此処でお風呂に入れて貰ったことも云わない方がいいと思うナ。」

令子も利子も、そんな気になっていた。

「これでチャコが来たら賑やかになるんだけどナ。みんな揃っちゃうんだもん、筑波会の大幹部達がサ」

その京子に関しても警察は捜査の手を緩めてはいなかった。自分から「カリプソのチャコ」と名乗って髪を長く垂らし、些かタイムングの悪い流行を夢中で追いかけるお調子者の京子が、利子の護身に気を唆られて、柄の彫りのイカす刃渡り五・四厘の飛出しナイフを事件の半月程前に買ったことまで警察では聞込んだ。任意出頭の形で取調を受けた京子は、確かにナイフを買ったこと、あの晩、何処かへ落して紛失してしまったこと、乱闘の際、謙に張り飛ばされ、カッとなって刺してやろうと思ったこと、謙が他の娘と揉み合っている隙を狙って体当りで突っ掛かって行った憶えがあること、それ以上の細かいことは頭へ来て、いたため全然、覚えが無いこと等を陳述させられた。警察では直ちに逮捕状を請求し、京子に対する傷害致死容疑の逮捕状は間もなく発せられたから、その執行として、チャコの人なつこいピチ／＼した姿態はミッチン達のいる小部屋の中へブチ込まれてしまった。

想う以上に我儘が叶えられて、少女達は警察を恨む気など毛頭起らなかった。筑波会の主力の四人が揃った処で、捜査も纏めの段階に入った。喜美江や他の少女も取調を受けたが、やはり警察が怖ろ

しいのか、少女達は自分が何もしないのに謙から乱暴されたと申し立てたし、他方では中心の四人が謙と殴り合いをしたのは自分達四人だけで喜美江達は一緒にいたためにとばかりで怪我をしたのだと取れる陳述を繰返したから、謙殺しの一件はミッチン達四人の仕業と云うことに落着いた。唯、喜美江だけは前の事件がある上に酒や煙草と縁の切れないことが現場にいたことから立証されて、今度の事件をひっくりかえした生活態度の悪さから、虞犯ということで書類が作られ、直接、家庭裁判所へ送られたのである。

四人の娘達は犯行を一度も否認しなかった。証拠品として兇器と思われる勝のアイクチと後から発見され押収された丸太ン棒が送られ、更に参考のために利子の護身用のナイフも送られた。謙に対する殺意については、幾らか自暴自棄の令子を除いては誰も当初から否定していた。謙が死んだことは、物のはずみと云うことがあるとは云いながら、誰も未だ半信半疑でいるのだ。唯、謙をブン殴ってやろうとか、のしちやおうという心算ではあったのだから、刑法上所謂、暴行の意思は明らかに認められるので傷害罪の成立はある。そしてその結果、謙が出血多量で死んだのだから正に刑法第二〇五条第一項の傷害致死罪に該当することになるのだ。

弁護人は未だ一人もついていなかった。

ミッチンが、まず弁護人なんか要らないワと云ったので、警察では令子も利子も京子も不要だと云い切った。

「必要なら裁判所でつけて呉れるヨ。何しろ私達は未成年者なんだからネ」

或る朝、四人は検察庁へ送られた。ミッチンの差入れは令子の家でやってくれたから、四人とも手廻品さえ無く、手ぶらだった。白

く冷やかに光る手錠が揃えて差出した両の手首を悲しい音と共に繋ぎ留めてしまった。一本の割に長い捕縄の端が、まず京子の腰を一巻きして手錠に通される。次に利子の手錠、そして令子の手錠を潜り、最後にミッチンの手錠を通してまだ大分、余った。然し、囚われの少女は四人しかない。成人の、しかも男の留置人を繋ぐのは別にしなければならぬ。捕縄の余りは、堅く締めればミッチンのウエストに二巻きできる程だった。ミッチンは顔をそむけ、じっとしていた。流石に呼吸が喘ぎ、豊かな膨らみが深く息していた。伏せた瞳の、長い睫が愛くるしく、一巻きしてはグイッと引締まる力によりめく姿態が可憐だった。珠数繋ぎの捕縄は最後に囚われのミッチンのウエストの細さを特に極立って明らかにしていた。

「いろ／＼お世話様でした。」

「さようなら！」

緊張の挙句、些かヒステリー気味だった令子も、すぐ背後に暖かく繋がっているミッチンの神妙さにつられたのか、黙って頭を下げて、四人は警察署から護送バスに乗せられた。バスの道のりもかなりある。時々家屋の建て混んだ間から東京湾らしい水の輝きが見える辺りを廻って、やがて今度は東京タワーが見える街を走った。挙句の果、建築工事の音に取囲まれた白いビルディングの裏口にバスが漸く横づけされたのは朝の十時前後だったろうか。

手錠をかけられ捕縄で腰を縛られた儘、顔色の悪い被疑者が腰かけて待っている溜り部屋は陰気な空気が充滿していた、少年係の検事の部屋から電話がかかる。扱った警察署と少年の名を、何処の誰と呼んで調室まで連行させる。調室内でも不詳事を防ぐために少年の手錠ははずさない、腰縄は連行の係官がしっかり握り締め

ている。その姿を人目に曝すわけには行かないから、部外者の出入の激しい検察庁には被疑者連行のための専用エレヴェーターがある位だ。

防音のために二重廊下になった調室で、検事は窓を背にして坐っていた。東向の建物の採光は、検事の机の前に腰かけさせられた少年の眼に、検事の姿を黒く厳しいものにして見せる。鋭い感じの青年検事が眼鏡の奥から凝視し、彼よりも年長らしい事務官をキビキビ指図する姿は頼母もしく怖ろしい限りだ。

手錠をかけられた手首が振上げられないように、四人は一人ずつ腰縄をつけられ縛り直された。型通りに氏名・生年月日や住居を云わせたあと、検事は被疑事実を確かめたが、誰も明らかな否認はしなかった。然しまた、自分が謙の何処を何の兇器で傷つけたと云う陳述もしなかった。その様な細かいことは一切不明だから云いようがなかったのだ。過ちにしても謙を殺してしまったことについてどう思うかと訊かれて四人は一樣に項垂れた。

最初に令子が顔を上げて不平を鳴らした。

「だって、そんなこと云ったって、アタシばかり悪いんじゃないわ。あんなに尽くしてやって、ぶん殴られたり馬鹿にされたりすりゃ、いくらアタシがイカれてたって、頭へ来るのは当り前だと思うわ」

検事のお説教を非難するような発言をした令子には、原因に於いて考慮すべき事情はあるが、改悛の情も薄く非行前歴もあり、犯情悪質につき、本来、刑事処分に該当するものではあるが、少年の性格矯正の必要上、少年院送致を相当とする旨の意見が付けられた。

何も云わず、上目使いに時折ジロツと検事の顔を恨めしげに見る

利子については、少年の性格は陰険かつ激発性であり、常に刃物を携行し虞犯性も強く、前歴もあって改悛の情に乏しいので少年院送致相当とされた。

お調子者の京子が一番シュンとしていた。何と云っても他の三人に謙を刺した確証が無い。つまりは自分が直接の犯人らしいのだが他の三人も同罪で手錠をかけられ、縄で縛られ、あちこち引っぱり廻されているのだから、申し訳ない気持と恨みを買いたいような怖れでオド／＼していた。

「済いませでした」

「済みませんじゃ、済まないだろ？」

「悪かったんです。御免なさい」

取調の途中で泣き出しちゃった程恐れ入っている京子には検事の心証も幾分良かった。

少年は雷同性が強く、派手好みで自己顕示性も強いので本件非行を犯したと思われるが、尚前歴もあり、環境調整等も必要なので、保護者の嚴重な監督を条件にして保護観察を相当とする意見が付けられた。

残されたのはミッチンだけだ。

「相手が、たとえどんなに悪い人でも、人を殺したことは重大な罪だと思えます。私、自分では全然そんな覚えはありませんけど、一緒にいた以上、共同責任を取るべきでしょうし、それだけの罰を受ける覚悟はしています。でも私はともかく、令子は可哀想です。令子を欺すようなことさえしなかったら、こんなことにはならなかったんです。私は女として令子の気持を尤もだと思えます。令子をあんまり責めないで下さい」

低音で、しかし落着いた口調でミッチンは検事に嘆願した。少しも悪びれぬ諦めきったような態度だった。検事の心証も悪くはなかった。少年は兇行に直接手を下してはいないようである。然し、少年は筑波会の精神的支柱であって種々の問題点を有し、良好な環境の確立が先決であるから、初非行という点を考慮して保護観察を相当とする意見だった。

作り上げられる調書はどうせ分っているのに、書き上がると検事が読み聞かせるように云い、誤りの無いことを確めた上で机の上に置いた。急ぐとは云え、正になぐり書きだ。その末尾へ手錠に繋がれたままの手で少女達は名前のペン書を強いられ、黒の印肉で拇印を取られた。

エレヴェーターで溜り場へ戻された少女達は全部の少年達の取調が済むまで互いに口をきくことも許されぬまま、手錠腰縄で待たなければならぬ。最早、正午間近いことを、空腹が思い知らせられるのだった。

|| 未完 ||

限定版特別号第三集

目下印刷中

“女体緊縛グラフ集” 特価 五百円

予約申込受付中

略号(グラフ)

現在まで温存していた秘蔵的緊縛フォトの公開、極めて鮮明なグラビヤ印刷による各モデルの魅惑的ポーズを網羅した六十数頁の豪華版／＼一般書店にては一切販売いたしません。真接発行所宛お申込下さい。



〔創作〕

無 残 繪

帆 足 泰 輔

(一)

春だ！ というのに、この業界の例年に比して何と寂しい事であらう……

此処は北九州の炭都N市の街である。

ひと頃うたわれた「神武景氣」も何処へやら、今はまるでその反動のように押し寄せた不況の波。——さればこそ周囲を殆んど炭鉱に取巻かれて、それら鉱業所に働く人々の収入に依存しているこの街としては、日常必需品を除く総ての商人が、青息吐息するのも当然であった。

料亭「おかめ」は、この街の繁華通りを、つい少し横に外れた場所にあった。

この女将は、もう四十路を、とくに越した姥桜だが、何でも戦前のひと頃は京大阪の一流料亭の女中頭を勤めあげ、多くの女中の上に立って花柳界の遊蕩児を手玉にとったと自称するだけあって、水際立った客捌きと今一つは、この業界に依存する妓達の面倒を時には商売気を離れて見てやるので、——さればこそ今年のこんな不況下にも、他の料亭の閉業に並ぶ事もなく、済ませて行けるのだった。とはいえ、「おかめ」が盛業を続けている訳では勿論ない。

が、しかし、今宵は、その料亭に珍らしく「福の神？」が舞い込んだようである。

客——というのは、もう六十に手の届きそうな老人で、身装等も鉄無地の和服に兵児帯という……この家の女将にとっては正しく昔懐かしの良客とは見込めた。

老客は、小柄ではあったがデップリと肥った、見るからに経済力横溢型であったが、ただ然し、永年この道の多くの客を扱い馴れた女将の眼に映る「カン」というか第一印象が（このお客さんは、ひよっとするとアノ方ではないのかしら？）と思えたことも遠であっ

たが、それは後のこと……。

老客の「名差し」は「美奈子」であった。

美奈子は、この街唯一の検番に籍を置く妓で、歳は廿才。色白中肉の美人で、芸妓としての実力はまだ素人に近かったが、取柄はその素直さにあった。然し、世馴れた女将の眼から見て、彼女には又一方、川筋気質の荒っぽい、この辺りのお客には向かない陰気さもあったが、そこは女将の実力と取りなしが物をいって、この「おかめ」の客に招かれた限り、美奈子のお座敷勤めは先ず先ず無難であった。というのも、もともと美奈子をこの業界に世話したのが当の女将自身であってみれば、その気性としてどうでも彼女を一人前の妓にしてやりたいのは、これ又、もっとも至極の話であろう……。

そして又、陰気で余り男心を魅きそうに思えない美弥子に気を配って、常に物要りな高島田に結わしめるようにしたのも、同じく女将の心遣いであった。

そんな関係から、女将は今宵この老客が美奈子を名差してくれた時、（これこそ美静ちゃんにうってつけのお客だ）とばかり、早速検番に電話を飛ばせたのであった。

(二)

「今晚は……おかあちゃん、おおきに……」
間もなく当の美奈子が、裏口から挨拶の声をかけ乍ら這入って来た。

戸外はまだ春の日が暮れて間もなく、自然の艶しさだけが世の不況を知らぬげに、生暖かく霞のトバリを漂わせていた。

「おや美奈ちゃん、早よおましたな。さ、お待ちかねでっせ！」

お女将は、いそいそと立上ると、「お座敷は？」と眼で問う美奈子の傍に寄り添って、その耳に囁くのだった……。

「美奈ちゃん、お座敷は奥のスペツシャル、ホラ！離れだっせ。……それからね、如才もないやろうけど、このお客さん、あんたを最初からピシャリと名差しなさったところを見ると、余程あんたがお気に入りらしい。そこで、あんたも腕にヨリをかけて……といって、あんたの腕では心細い気がするけど、まあ何でもええからハイハイと、お客さんに抗わん様にしてさえすれば、相手はお年寄り。ネ。それに、こんなことはいいたくないけどあんたもこの社会では法度の筈の、為にならんお人を想っているんやし、これが検番に

知れたら、いくらワテが庇うてあげても、しよせんはあんたの身の破滅や。そやよってに今晚のお客さんの様なお人にウンとお気に入られて、ひいきにして貰えるようになったらそこは又、ワテが何とかして綾さんとの首尾の間をつくらうて上げますよ……」

客はその離れの、この家にとってはスペースシャルの座敷に、独りポツネンと待たしてあった。こんな時、生じつか待つ間を仲居などにチャホヤさせないのも、この女將独特の配慮とみえた。

「今晚は……おおきに、おそなりまして……」

襖を静かに開き、三ツ指ついて、しとかに挨拶する美奈子の艶しい衿足に、早くも老客の相好が崩れる。

お定まりの酒席。老客は、然し、お女將が期待をかけた程にもなく、全く捌けない男——と自分の未熟さを知っている美奈子にして思う程、何か野暮臭い芸者買などに来る柄とは見えぬ、ぎごちなさで、盃もさして掌にしようとはせず、さりとして巧みな話術で妓を引き寄せるスベも知らぬげであった。

「あんたは、おとなしそうな人だ……」

ややあって老客は、全くとって付けた様にポツンとそんな事をいった。

(ふん——何だい、キザな!)と、普通この社会のこんな場合の妓の気持が、それが美奈子には出せなかった。

仕方なくニッコリして見せる彼女に、勇氣を得てか老客は言葉を続けていうのである。

(三)

「実は……私はあんたのおとなしそうな人柄を見込んで、お願いがあるのだが、聞いて下さるだろうか?……」

そういう老客に、美奈子としてもやっと、話の糸口が解けかけた安堵感が、この機を逃せじと——「私で出来る事でしたら……」の返答をさせてしまったのであった。すると、客は又、いった——。

「私のお願いとは、……私はあんたの魅を自由にしたい——いや一寸待って、自由にするといいても、私は何もあんたの操をどうしようというのではありません……。私は美しいあんたのその「純日本風」の姿を縛り上げてみたい。私はただ、それを見ていさえすればよいのです。——勿論、お礼は十二分に差上げますが……」

と、恥しそにいうのだ。

美奈子は今、何よりも金が欲しかった。そ

れに今の客の話だと、操の心配はないという……。彼女にはつい先刻、女將の囁いた通り「為にならないお人」が居た。そのお人とは……。

この街に興行する劇場が六カ所ある。が、そのうちの殆んどが時勢の波に抗し切れず映画を上映している中に、唯一カ所、残っている実演劇場——この劇場で殆んど一年中トグロを巻いている格好の、いわゆる「常打興行」をやっているのが、通称、白雲団之助一座の剣劇であって、この一座で二枚目役の中堅——それが美奈子の「為にならないお人」であった。——その芸名を白雲綾太郎という——。

芸者と役者の恋愛。それは何も不自然でも不文律でもない。むしろ、この社会での「あり来り」であり、当然ともいえる事柄であったが、それが妓にとって、為にならないお人——であり、——やがては妓の身に破滅が来る——と、お女將がいったのは、この兩人がこの社会で恋愛を続けるのに絶対的な必要条件たる「経済力」に、双方共、欠けているからであった。

男が、団之助一座の中堅といっても、もともとが炭都の安芝居であってみれば、その収



入は高が知れている。しかし、彼等の中には昔ながらの「役者冥利？」ともいうべき女蕩しの術によって、別途収入を得ている者もある。

この術に引っかけたのが、美奈子であった。——神が与えた男女の差——それが、この社会に未だ充分馴染まれ美奈子をして、

男に絞られる結果を生んだのも、致し方ない次第であった。

検番への負債、それに「おかめ」の女将にも一寸々々と積った借りが、もう相当な額になっている。金！ 金！ 金！

(四)



「ええ。いいワ……」

美奈子が、老客の要求にそう答えてしまったのには、以上の様な潜在意識が、金を求めるに急なる事と、今一つ、それは彼女の生来の純情がこの老客に（これ以上、恥をかかせまい）とする思いやりからでもあったが。

老客は、美奈子の「諾」を聞くに嬉しそうに、何度も何度も礼をいった。それから小声で、「長襦袢一枚になってくれないかね」といい乍ら、無言で頷く彼女の背後に廻ると、その帯に手が掛った。——見る間に、何としたことか？これは又、先程からの野暮ったさとは似ても似つかぬ素速い動作で、それこそアツという間に着物を剥ぎ取って、美奈子を長襦袢一枚の姿にしてしまった。

そして、「少し痛いよ。辛抱出来るかね」といって彼女から剥ぎとった緋の扱帯でギリギリと後手に縛り上げるのだった。

その日から美奈子は毎晩のように、この老

客から「おかめ」を通じて招ばれるようになったのだ。

客は、だんだん好みの注文をつけて——明日は匹田鹿の子の長襦袢は着て来られないか——とか、——芝居で演る「明鳥」の「浦里」のように、緋の長襦袢にして、帯もダテ巻でなく昔風の幅広扱帯で、その扱帯の色は薄水色がよい——とか命じる様になった。

勿論、それらの品々を、よしや新調したとしても猶余りある。「謝礼という名のお宝」がその都度、美奈子の掌に握らされた事は、いふ迄もなかった。

また或る時などは、丈夫な革製のボストンバッグ等持ち込んで、一体何するのだろうか？と思っていると、「今日は大分痛いだろうけど、用意して来たからこれにするよ」と、そのバッグの中から黒い鉄の鎖を引き出して、それで美奈子の五体を容赦もなく縛り上げるのだった。

美奈子は、時代劇の映画で観る、攫われたり拷問を受ける女のように、浅間しく縛られて、まるで荷物か何かの様にゴロンと座敷に転がされたり、又、結い上げたばかりの島田鬚を驚嘆みにされて、部屋中、引ずり廻されたりすることが、始めのうちは情けなく厭で

あったが、日が経つにつれて、それが次第に薄れ、いつしか恋しい綾太郎との逢瀬もそのけに、老客との不可思議な遊戯に日夜を分たず没入するようになっていった。

「お女将！ 景気はどうや？」

そういつて、綾太郎が「おかめ」の台所口へ姿を見せたのは、アレから大方、半月の余も過ぎてからであった。

（何や、いけ好かん！これやからへボ役者は嫌いや。ひとに散々危ない恋の橋渡しをさしておき乍ら、わが都合のええ時は半月の余も顔出しもしくさらん。）——とは心の中……追に顔色には出さぬお女将が……

「おや、綾さん、珍しいこと。近頃はトントお見限りでんす。ま、あんたの事や。とっかけひっかけ、良い女子はんに不自由はないやろけど、たまには美奈ちゃんにも逢うたげんと殺生でっせ。なんしょ、始めが始めやよってに……」といえは綾太郎は——

「いや、それがお女将。こっちは何度も美奈ちゃんに連絡していたんだが、こういうものか半月程まえから、梨のツブテなんだ。といつて、こっちが検番に押しかけるなんぞ、虻蜂取らずだって事は、お女将、あんたも承知の助の筈。——で、どっちにしても一度、美

奈坊に会って気持を聞いてみざア……」

と、此処迄一気にまくし立てていた綾太郎が、そのアトをムニャムニャと口の中に潰してしまったのは、道がお女将の炯眼通りで、あながち美奈子一人をアテにしている彼ではなく、むしろ、この半月程、連絡のないのを勿怪の幸いとはばかり、その「別途収入」のなる方へ羽を拡げていたのでもある。

(五)

そんな綾太郎の内幕は、この社会で甲を経たお女将にしてみれば、鏡を見るように判り切っているの、今更こんな若僧を相手に性根を入れた話をしたくもないのだが、お女将も実は先頃からの美奈子の様子に、不審の眼を瞠っていた矢先であったので、ついその事を、話す気になったのであった。

「美奈ちゃんねエ……実は今夜も離れに来てますねんけど……それが、もう一寸、いや大分訝しいんでっせ。いえ、お客さんちゅうのはもう随分、お歳を召したお方でっけど、その方の帰りはったあとの美奈ちゃんいうたらもう無茶苦茶でしてなあ。——そらワテかてこんな社会で歳とった女やよって、客と妓との遊び方には随分、型異りがある事位しって

マ……けど一体、何してんのんやら？美奈子ちゃんいうたら、結い立ての髪はいつもグシャグシャになってしまふし、それに近頃は、女中に麻縄を何本も買いに行かしたりしてるとうや。何でもアノ妓がお風呂に這入ってるとこを見た妓の話では、舂中、縄の跡型がついてたそうや。ワテも一遍心配やよって、覗いてみんなん思うけど、なまじっかな事したら、うちのノレンに疵がつくし、どうしたもんやろか思いつつ、差し控えてまンねん……」

お女将は、こう語ってホッと吐息をした。「へえーッ、そいつは奇妙キテレッツだ！しかし、面白い。美奈公のやつ、どんな手管を覚えて、そんなに老いばれ客を、惑わしやがるのか？……お女将、頼む。何とかその離れの部屋を、ソツと覗かして貰えないだろうか……な、この通りだ」

綾太郎程の男が、かくも熱心に頼むのは、矢張り自分の女ときめていた美奈子が、そんな老客に夢中になっていることに対する嫉妬からであつたが――。

それからどう話が纏まったのか、綾太郎は老客の専用化した例の離れ座敷のつい隣り部屋――といっても、余程の団体客のあつた時に使う以外、ふだんは器類を蔵ってある、主

室を少しへつった物置に過ぎない――に身を潜めて息を殺し乍ら、アチコチとスキ間を探し、漸くホンの僅かに、襖のサンの弛みを見出すと、そこから、じつと内部の様子に眼を凝らせるのだった。

そして綾太郎は、もう少しで、危うく「アッ」と叫ぶところだった。

見よ！美奈子は赤い長襦袢一枚の姿を、床柱に立ったままで、まるでハリツケの様に麻縄で雁字搦目に縛りつけられ、口には猿轡を噛まされて、結び上げたばかりの島田髷もガックリと根が弛んで傾いている。螢光灯の薄青い光が、その無残絵をクッキリと描き出していた。

老客は、その哀れな妓の緊縛姿を、何か鞭のようなもので、ピシリピシリと叩いている様子だったが、やがて暫くして……

「今日はもうこれ位にして、止めようかね……痛かったらう……？」

といい乍ら、たった今、自分が虐めていた妓を、さも愛し気にいたわるのだった。

綾太郎は黙って、その場を離れた。

最早、何をかいわんや……である。

女――という生物の体内に潜在する「マゾの欲求」を、満更、知らぬでもなかった彼で

はあっただけに、かの老客に美奈子のマゾ誘出の先を越された以上、今更、自分が姿を見せて何になろう。

それにつけても、彼等兩人の後始末を、お女将は一体どうつける肚だろうか……？

「おや？ 綾さん！ どないしたん？ えろう、青い顔して。一体、何がおましてん？」心配気に訊ねるお女将に、綾太郎はポツンといった。

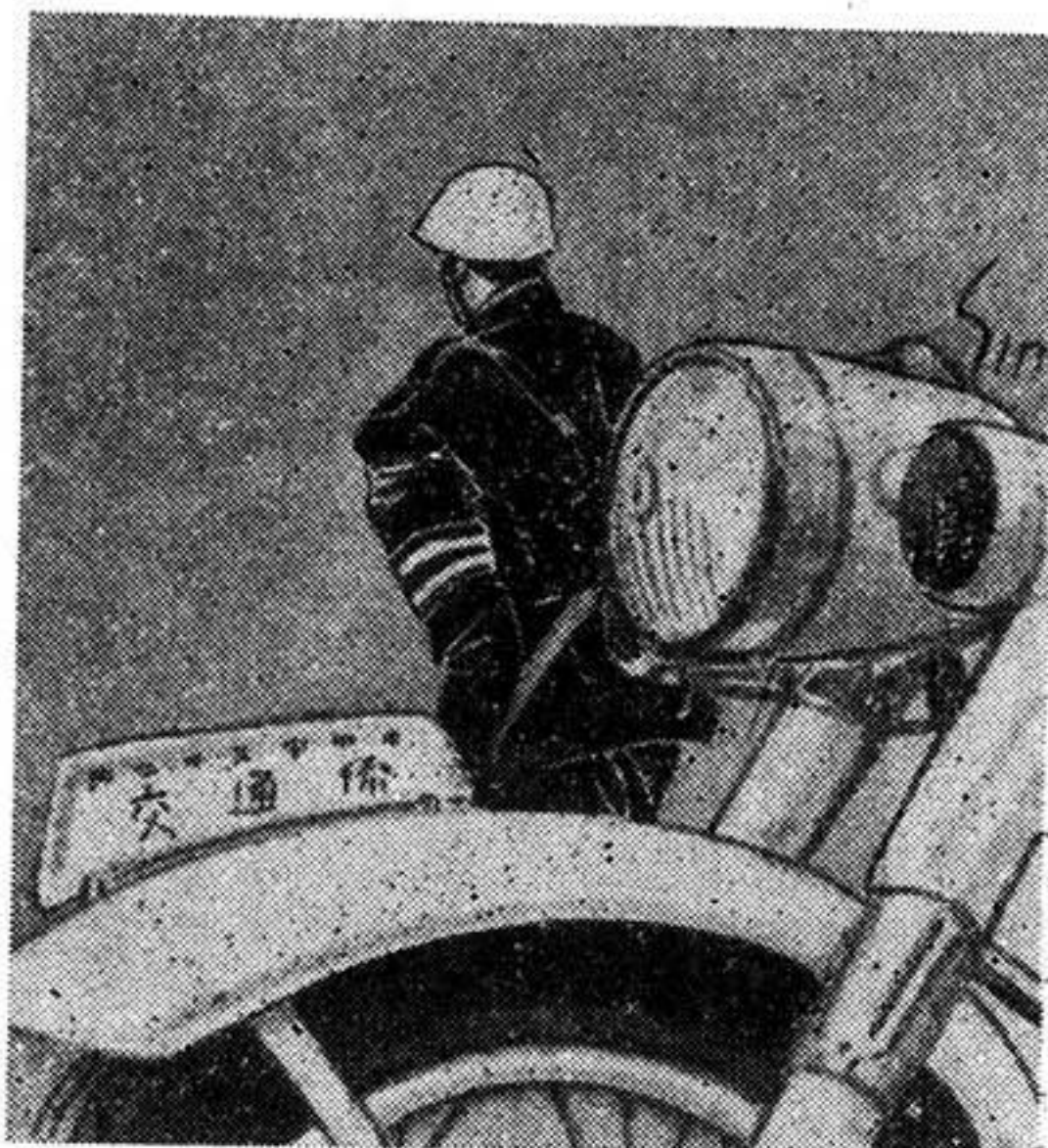
「男女の仲というものは、ただ惚れたハレたというだけじゃない。――そんなことは勿論お女将、あんたもよう知ってるやろうけど、マ、折角、商売大切にすることっちゃ」

（いくら「何でも知ってまっせ」のお女将でも、今度のアト始末には、ちよっと困りよるワイ）とは心のうち、綾太郎は早々に「おかめ」を辞して戸外に出ると、我知らずペロリと赤い舌を出して、客待ち顔のネオン瞬く夜の巷に消えて行ったのであった。（完）

△お詫び▽

「黄色オラミ誕生」は引続いて連載の予定でありましたが、都合により中絶のやむなきに至りましたことをお詫びいたします。

（編集部）



創
作

單車と禪

榎村 奏
青木 審・画

小柴幹夫がオートバイに異常な程、熟中するようになったのは、二人の女に裏切られてからである。

その一人は彼の母親だった。

幹夫の父の幸蔵は鉄工場の熟練工で、母のさきが小料屋の女中をしていたとき知り合っ
て結婚した。幹夫が生まれ新制中学を終える頃までは人並の家庭と変らなかつた小柴の家
も、幸蔵が工場の事故で死に、さきがまた料

理屋へ勤めるようになると暗い翳が射しはじ
めた。中学を出ると、すぐ父と同じ工場の工
員になった幹夫は、早く父のような熟練工に
なって母が働かなくてゐすむようにしたいと
少年らしい自負心をもって仕事に励んだ。そ
して彼の夢も三年は続いたが、突然のさきの
出奔で無残に碎かれる日がきた。さきの置手
紙には、

『随分、考えたのだけれど、どうしてもそう
しないではいられなくなつたので家を出ま
す。決して探さないでください。おまえも、

もう一本立ちになつたのだから、いい人を見
つけて結婚することです。駄に氣をつけて、
幸せになつてください』

と書いてあるだけだったが、幹夫にはすべ
てを了解できた。半年ほど前からさきに恋人
ができたらしい噂を耳にしながら、それをう
ち消していたのが事実となつて現れたのだ。
(母が幸せになるのなら、それでいい) そう
思うことで、幹夫は自らを慰めようとしたが
(母には俺より他に愛する者があつたのだ)
という氣持を抑えることはできなかった。

さきが姿を消してから、今まで住み馴れた家がひどく空虚なものに思われ、それに経済的な理由もあって、幹夫は木造建のペンキの剥げた安アパートに移った。

それまでは異性に見向きもしなかった幹夫が、ふと知った加津子に心を寄せるようになったのは、むしろ自然のなりゆきといえるだろう。

キヤバレーのダンサーをしている加津子は幹夫より五つも年上だったが、粗末な身形だが子供のように初な感じの幹夫に、新鮮な魅力を唆られた。

「あんだ、川津祐介に似てるわね。好きよ！」
映画俳優に似ていると云われたことは、さほどでなくても、それが加津子の気に入るのなら幹夫は嬉しかった。

「坊や。あんだ、また本当に子供なのねえ……」

加津子は特に母性型というのではなかったが、年令の相違もあって、幹夫は姉に甘えかかるような気持ちに浸れた。

どんなに遅くなっても幹夫は決して泊っていかなかったし、加津子もそれを止めはしなかった。

「あんだ。どうしてそんな六尺禪なンかして

ンの？。そんな古めかしいもンよしちやいさないよ。それとも何ンかわけがあんの？」

夏のある日、汗を拭いている幹夫を、次の間から顔だけのぞかせてひやかしかし口調で加津子が云った。

「わけはないけど、死んだ親父がやってたもンで、何となく俺も締めるようになったんだ」「へエ……。でもさア、みっともないじやないか。今どきヤクザだってそんなのやっちゃいないだろう。第一めんどくさいヨ」

「めんどくさいことはないけどな。慣れてるから——」

加津子に何と云われようと、幹夫は六尺禪をやめる気はなかったのだが、次の日、

「ホラ、これ買つていたわよ」とブリーフを出されると、それでも我を張るわけにはいかず、しぶしぶながら穿かざるをえなかった。

しかし幹夫は、加津子に隠れるようにして依然として六尺禪を締め込んでいた。

加津子との破綻は意外に早くきた。或る日約束はしてなかったが突然にいつて驚かしてやろうとアパートを訪ねると、女の部屋には男の先客がいて、幹夫は反対に驚かなければならなかった。

「誰だ、あの男？」

幹夫は廊下へ出た加津子に激しく詰め寄った。

「誰って、つまり、あたしのパパよ」

「パパ？……じゃ、あなたは——」

「大丈夫よ。そんな顔しなかったって。坊やとは今まで通り遊ンだげるわよ」

「結婚は？」

「結婚？何のこと？」

「しらばっくれるな。俺とあなたにきまつてるじやないか」

加津子は一瞬、ポカンとした表情をしたがすぐに、おかしくてたまらぬようにケラケラと笑いだした。

「やっぱり、あんだ子供ネ。そんな気でいたの。でも可愛いわ。いい？坊や、よく聞くのよ。あたしみたいな女はね、結婚ナンテできないのよ」

「なぜだ？」

「それは、いまにあなたにも判るわ。とにかく今のあたしには、お金を得る為にパパも必要。それから、あなたはまた別の意味で必要。第一、あなたに買ったげたこのジャケットだって、パパからお金しほらなきや買えやしないのよ。ね、いい子だから、ききわけて」

幹夫は全部を聞いていなかった。いきなり

脱ぎ捨てた上衣を床に叩きつけると、階段を駆け下りた。

幹夫は、自分の底抜けの甘さも、加津子が特種な職業の女であるということも考えず、ただ一途に女というもののへの不信で頭が一杯に煮え返ったのだった。

自分のアパートへ駆け戻るなり、幹夫は女から贈られたものを全部とりだした。

「畜生、こんなもの！……」

彼は窓を開け、それらのものを一つ一つ力まかせに抛った。水音もたてずに、建物の下を、すれすれに流れている汚物を浮かべた川の黒い水が、忽ち、それを呑み込んだ。

月賦で買った中古車だったが、ピカピカに磨きあげた幹夫のオートバイは、性能も調子も新車に負けぬ素晴らしさだった。

毎週、火曜の休日には、幹夫は殆んど一日中、オートバイを乗り回すようになったが、あるとき、フト海岸まで飛ばしてみる気になった。想えば、それが彼の運命を決定する端緒になったのだが、勿論、そんなことを予測できる筈もなく、海を見たいと思ったのは全くの気まぐれにすぎなかった。

防潮堤の上にオートバイを乗りすてると、

幹夫は一息入れる為に砂浜に下りていったが、またも気まぐれが彼に突飛な行動を思いつかせた。春とはいっても三月になったばかりでは、海風はまだまだ冷いし、まして海の水は肌を刺すだろう。だから彼が、いきなり裸になったのを、もし見ていた人があったとしたら、余りの酔狂に愕き呆れたに違いない。

風さえ避けていれば陽の光は充分に暖く、砂丘の蔭でウトウトと、まどろんでいた村尾信也は、はじめ単車の爆音で眼を覚したときは不快そうに眉を寄せたが、ヘルメットがチカッと太陽を跳ね返すように鋭く反射して横ぎっていくのを認めると、思わず上体を起した。

そんなこととは知らない幹夫は、瞬くうちに着ているものをかなぐり捨てると、禪一本の裸になり両腕を開けるようにして、波に身をぶっつけていった。

信也は我が眼を疑いたくなるような愕きで胸がドキドキしてきた。いや、それは単純な愕きだけではない。何かもっと別の感情が、信也自身にもハッキリと説明のつかぬものだった。妖しく心を揺すったのだ。

立ちあがって歩きだしながら、信也はなぜか菊村到の小説「ああ江田島」を思いだして

いた。

皮ジャンパーや半長靴の脱いであるところまでいくと、波に見え隠れしている青年の肩先は、遠目に見たときよりは、ずっと逞しく筋肉が盛りあがっている。信也は益々高くなる動悸をもてあまししながら、そして多少のうしろめたさに悩まされながら、波に戯れている見知らぬ青年に凝っと眼を注いでいた。

さすがに冷いとみえて、青年はすぐに海からあがると雫の垂れる全身を現した。

(小暮生徒！……)

その瞬間に信也が胸のうちに呟いたのは、「ああ江田島」に登場する海軍兵学校生徒の名前だった。『——あのからだに発条でもしこまれているような強靱な感じの——』という描写は、一字一句、違わずに暗誦できた。陽灼けた顔。引き締った体軀。真っ白な六尺禪。そして短く刈ったスポーツ刈の頭まで丸刈の兵学校生徒を連想させる。しかし何にも増して、発条でもしこまれているような感じが、その青年にはピッタリと当て嵌った。青年は信也に気付くと、一寸驚いたふうだったが、人懐っこそうにニツと白い歯を見せると、アンダーシャツを取って、それで身を拭きはじめた。

幹夫は、誰もいないと思っていた砂浜に学生服姿の少年がいたことで、はじめはひどく狼狽したものの、すぐに気をとりなおした。

「寒いでしょう——？」

信也が、眩しそうに見ながら云った。

「イヤ、それほどでもない。かえって、いい気持サ」

「羨しいナ。僕にも、そんな元気があったらいいんだけど……」

「君、高校？」

「そう、三年なんだ。でも、今病気で休学中なんだよ」

そう云われてみると少年の顔は、やや蒼みを帯びている。しかし病弱そうな感じはなく濃い眉や張りのある眼許は、むしろ凛々しくさえ、あった。

向うむきになり手早く服装を整えた幹夫が濡れたものの仕末をどうしようかと思案する様子に、

「あ、それ、あそこの草の生えているところへ干しといたら？すぐに乾いちやうよ」

と、信也が指をさした。

「そうだな」

さされた草の上に六尺を拡げて幹夫が戻って来ると、二人はどちらからともなくニッコ

りした。それでもう彼らは、昔からの友人であつたように心がうちとけた。

「僕ネ、姉さんが一人いるだけでしょ。だから男の兄弟がいたらいいナといつも思っていたんだ。君がもし僕の兄さんになってくれた

ら本当に嬉しいんだけどナ……」

信也は、そんな遠まわしな云い方は、かえってキザだと思いつながら、他に言葉もみつからぬままに、少し赤くなって云った。

幹夫のほうは、もっと卒直だった。



「俺は兄弟はなかったが、別に兄貴や弟をほしいと思ったことはない。だけど、君は好きになれそう。一寸頼りないけど兄貴になつてやってもいいぜ」

そう云つて、てれかくしのつもりではなかったが、幹夫は急に立ちあがった。

「本当？嬉しいナ！ネエ、今から僕ン家へ来ない？」

「君の家って近くなのかい？」

「病後の静養に別荘へ来てるんだ」

「ヘエ、金持なんだナ。君ン家」

「そうでもないけど」

「他に誰かいるんだろう？家の人が——」

「ウン。姉さんがいるけど、でもいいじゃないか」

「でもナ、俺、女は苦手なんだ」

「どうして？」

「女は嘘つきだからな」

「何かあったの？——」

「イヤ、とにかく、女は困るんだ」

「本当は家の姉さん、一寸うるさいんだ。結婚に失敗してから、よけいなんだよ」

信也が声を落すと、幹夫は快活に肩を叩いて、

「いいじゃないか。ここで逢えば、君は毎日

散歩するんだろ。俺もまた来るよ」

「明日？」

「明日ってわけにはいかないけど」

「じゃ、いつ？」

「今度の火曜。キット来るよ」

そう云ったとき、防潮堤の上に黒っぽい和装の女が現れた。

「信ちゃん、何しているの？……」

郁枝は、見かけない青年と話している弟の姿を見ると、思いがけないことを発見したように眉をひそめた。

二

「信ちゃん。なぜあんな人と話なんかしてたの？嫌アね」

爆音を残して幹夫のオートバイが走り去ると郁枝は、さも不快そうに云つて、なじるように信也の顔を見た。

「なぜって……いい人だよ。あの人——」

「ガミナリ族」じゃないの。あんな種類の人間と口をきくなンて、あなたもどうかしてるわ」

「オートバイに乗っているからって、ガミナリ族」とは限らないよ」

「そんなこと云つて、信ちゃん、あんな何か

云われたんじゃない？うまいこと云つて誑たぶらかされたんでしよう」

「もう逢わないよ。——サ、帰ろう」

「あなたは村尾家のたった一人の男の子よ。本当にしっかりしてくれなくちやア……」

「判ったよ、もう」

信也は不機嫌に先へたつてズンズン歩いていったが、急に立ち止ると、

「ア、忘れものをしちやった。とつて来るから、お姉様、先に帰つてて」

「忘れたって何なの？」

「ウン、本さ」

「そう、しかたないわね。じゃ先にいつてから、すぐに来るのよ」

「大丈夫だよ」

信也が堤防に上つて見ると、幹夫の六尺禪は、まだ干したままあった。郁枝の出現に慌てて帰った幹夫も、今頃は気がついていないかも知れない。信也は、もうすっかり乾いている禪を手にとると、思わずクスリと笑った。もしかすると、幹夫が引き返して来ることも考えられる。そしてここに無かったら、どんな顔をするだろうか。それよりも今度逢ったとき渡してやったら、何て云うだろうナ。

信也は、悪戯を思いついた子供のようにな

キウキして、きちんとたたむとポケットに入
れ、それでも幹夫のオートバイが見えはしな
いかと振り返りながら別荘のほうへ足を早め
た。

その晩、浴室で脱衣しかけて、信也はズボ
ンのポケットに禪を入れたままだったのに気
づく、あることを思いついて胸がワクワク
した。彼は中学の頃から、入浴の際、鏡に己
の姿を映して眺める習慣をもっていたが、禪
を締めみるのは、はじめてだった。締め方
は知らなかったが、色々にやってみると、ど
うにか恰好はついた。十代とはいっても、も
う立派に大人として成長している体軀は、六
尺禪を締め込むと我ながら惚々とするくらい
男らしく頼もしかった。

幹夫は、

「オイ、恋人でもできたンか？やに嬉しそう
じやないかヨ」と同僚からひやかされて吹い
ていた口笛をやめたが、他人にも判るほど朗
らかにしている自分をはじめて知った。

「恋人」という言葉には不快を感じたが、それ
は女性を聯想させたからで、愛は必ず裏切ら
れると信じてしまった彼でも、信也の存在は
別だった。幹夫は今まで同性に対して特別の

感情を抱いたことはない。だから信也を好ま
しく思う気持ちを分析しようとはしなかった。

ただ信也が金持の息子らしいことには抵抗
を覚えないでもなかった。しかし、いかにも
お坊っちゃんらしい、他人を疑うことを知ら
ないような信也の瞳は、不思議なくらい幹夫
を引きつけた。

火曜のくるのを待ちかねた幹夫は、朝早く
から愛車の整備に余念がなかった。

スタートした単車は、いつもの通り上々の
調子で風を切る。

前方の歩道から「交通」の腕章を巻いた制
服の警官が飛び出して来たのを認めると、幹
夫は思わずヒヤリとした。気持はすでに海へ
いつていたから、ついスピード違反をやって
いたかも知れない。

「君。この道路の制限時速を知っているだろ
う？」

色の浅黒い若い巡査は、獺犬のように眼を
光らせると、両脚を開いて立ちはだかった。

二十五、六であろうか。肩巾も広く、上背も
幹夫よりある。

「五十キロ以上、出してたな！」

「すみません。一寸急いでもンですから……」

「急病人でもあるのか」

「ええ、いいえ、アノ——」

「まあ、今回だけは見逃しておこう。だが二
度とやるんじゃないぜ」

巡査の口調が柔く変わったのに、不審を抱い
て眼を上げると、顔付まで先刻とは変ってい
て、精悍な中にも意外に人懐っこい表情をも
っていることを知り、幹夫はホッと胸をなで
おろした。

オートバイを駐車して堤防を駆け上った幹
夫は、（オヤ？）と眼を凝らした。砂浜で揉
み合っている二、三人の人影が、どうも、た
だごとでない。そして、その中の一人が信也
らしいと見てとると、もう幹夫の足は砂を蹴
っていた。

ケリは案外に早くついた。憤然とした幹夫
の鉄拳に恐れをなした二人組のグレン隊は、

「覚えてろよ！」「この礼はキツトしてやる
からな！」と、お定まりの捨て台詞を残して逃
げ去った。

「大丈夫かい。怪我しなかった？」

起き上った信也の砂を払ってやりながら云
うと、信也は子供っぽい笑い方をして、

「でも、君が現れるまでは、どうなるかと思
ったよ。あいつら、元は僕と同じクラスだっ

ただ、素行が悪くて退学になったんだ。今はグレン隊の仲間に入ったらいい。よくないやつらさ」

「たかられたんだね」

「ウン。金をよこせて云うから無いって云ったら、そんなら服をよこせて云うんだ。もう少し君の来るのが遅かったら、僕、裸にされちまっていたかも知れない。でも君、本当に強いんだね。僕、胸がスーッとしちやった」

「イヤ、それほどでもないがネ」

幹夫は腕力に自信のあるほうではない。少年時代、かなり腕白だったが、大人になってからは暴力に訴えるような喧嘩は、したことがなかった。だから、いわば無我夢中で応戦したのだったが、そう云われると、何だか自分がアクション・ドラマの主人公にでもなったような気分になり、流行歌でも口吟みたくなってきた。

「今の色の黒いほうの奴ね、学校にいたときから僕に目をつけていて、何やかやといっっては妙にいいがかりをつけて、一度、誰もいない倉庫へひきずりこまれそうになったこともあったんだ。幸い、そのときは先生に見つかって無事にすんだけど——」

「フウム、太え野郎だ！よし。もうこれから俺が絶対にそんなことはさせないぞ」

幹夫は、鬱勃たる怒りが込み上げてくるのを感じた。

「今日は水浴びないの？」

「そうだな。浴びてもいいな」

「浴びなさいよ。僕、見たいんだ」

「そうか。よし」

幹夫は見るまに六尺禪一本になると、背後に信也の視線を充分に意識しながら、泡立つ波に足を踏み入れた。

信也はポケットから先日、幹夫の忘れた禪をとりだすと、クスリと笑って後を追うように水際へ歩いていった。

三

銭湯の中は大して混んでいなかった。

浴槽に身を沈めてボンヤリ天井を眺めていた幹夫が、急に騒々しい気配がしたので顔を向けると、若々しい体が次々と飛び込んできた。三人連れの彼らはいずれも高校生とみえすがすがしく頭を丸刈にしている。

幹夫は、フト信也を思い出していた。

流しに出て洗いはじめた幹夫は、誰かに軽く肩を突かれて、同じアパートの住人かと思

いながら眼を上げたが、そうではなかった。筋肉質のスポーツマンのように均勢のとれた体格のよい青年で、いかにも親しげに笑いかけているのだが、幹夫にはどうも思いたせない貌だ。

「どうだ。背中が流しっこしないか。俺が先に流してやろう。サ、そっち向いて」

そう云って気軽に桶へ湯を汲む青年に、幹夫は返事のしようがなく、云われるままに背中を向けた。人違いをしているのだろうと思つたが、追及するのも悪い気がして、そのまま調子を合わせていようと、何となく決めたしまったかたちだった。

「君、仲々いい体格をしているじゃないか」

「いえ駄目です。それよか、あなたこそ……」

「フフ、いささかね、駄目には自信あるんだ。」

君、何かスポーツやってるかい？」

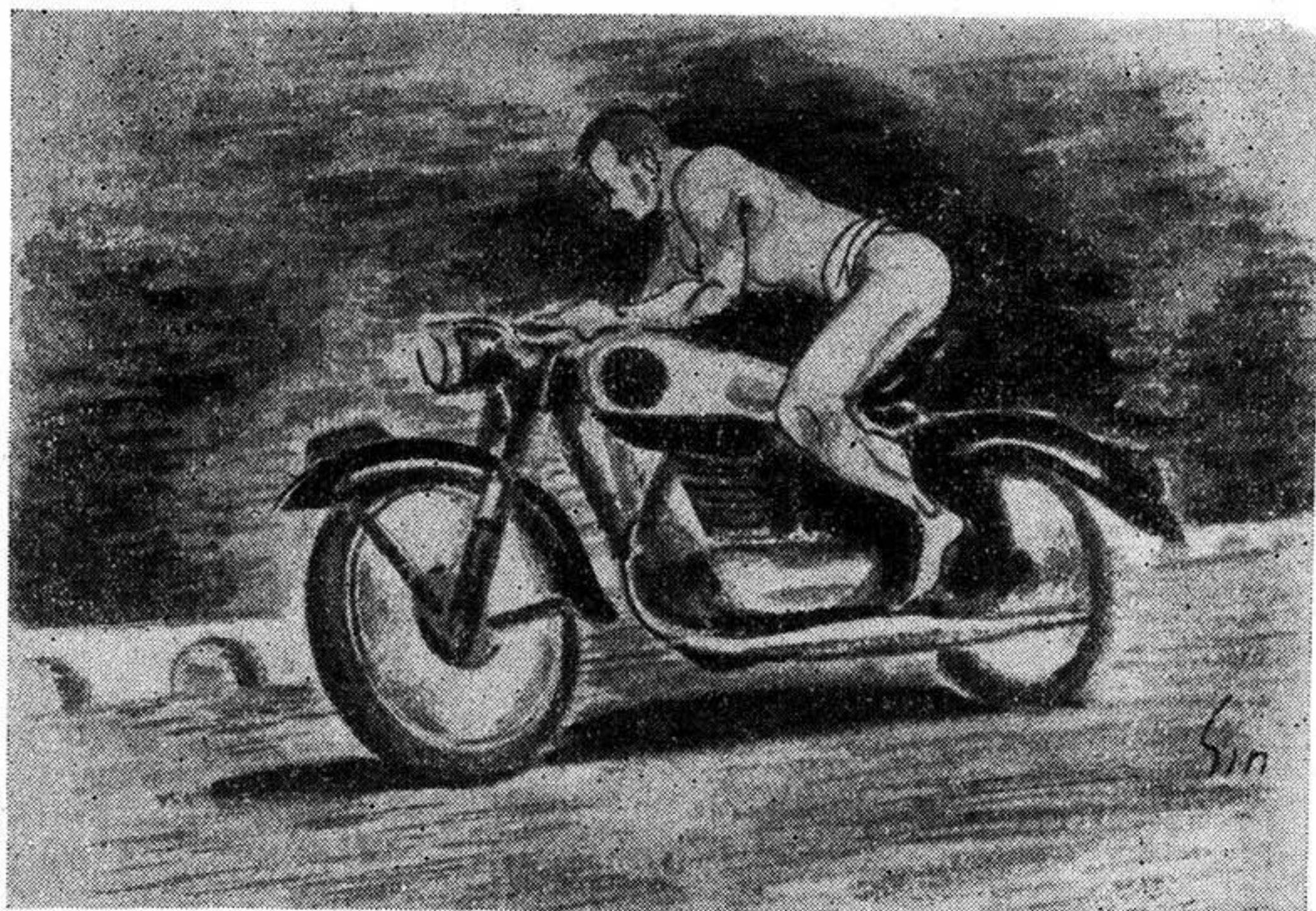
「いいえ、別に——」

「柔道やってみないか。何なら俺が揉んでやってもいいぜ」

「ええ……」

「駄目な、鍛えなけりや駄目だ。——サ、代ってくれ」

幹夫も駄目だけは誰にも負けぬつもりだったが、青年の素晴らしく発達した僧帽筋を擦りな



がら、ある種の畏怖を感じていた。

風呂からあがると青年はサッサと越中禪を着けたが六尺を締めている幹夫を見ると、

「ホウ、若いのに六尺を締めているのか。俺は忙しい勤務で、もっぱらこいつサ」と云って、シャツに腕を通した。

服を着終った幹夫は、いつものまにか青年が警官の服装をしているのに、アツという表情になって、

「ああ、あなたは、あのときの……」

「何だ、今頃、気がついたのかい。ハッハハ、イヤ、実はネ、勤務が終って帰ろうとすると、銭湯へ入る君の姿を見かけたんで、制服だったが、つい俺も入る気になったってわけだ」

「そうでしたか——あの節

は、どうも……」

「乗ってるかい。相変らず——」

「ええ、まア……」

「余り飛ばすなヨ。じゃ、ここで別れよう。また逢えるかも知れない。失敬」

甲田巡査の上げた手の白い手袋が、夕闇のせいか印象的に眼に映ったが、しかし幹夫はすぐにそれを忘れてしまった。

一週間が幹夫には次第に永くなり、仕事も手につかぬくらい、休日のくるのが待遠しかった。

その日は三回目の逢瀬だったが、幹夫は、もう此の世で誰よりも強く信也のことを気にしている自分を不思議とは思っていないかった。いつもより早目に出かけた幹夫は、砂丘の斜面に寝ころんで信也の来るのを待った。

幹夫はムックリ起き上ると、腕時計を覗いた。約束の時間は、とうに過ぎている。

（どうしたのかな？）と思う気持は、時間の経過と共に疑心暗鬼を生む。日を間違える筈はない。それとも病気かな。とにかく、何かあったんだ。何本も白く散っている吸殻を蹴散してオートバイのところへ戻った幹夫は、一寸考えてからスタスタと歩きだした。

別荘地帯はそう遠くないし、軒数はいくらかもないから、探すといつてもわけはない。

「村尾」という標札は、すぐに見つかった。

陽に輝くフランス瓦を見上げながら、ポーチに立ってブザーの釦を押すと、女中らしい女が扉を開けた。

「アノ、信也君いますか？」

「はア、一寸お待ちを——」

女中が奥へ入ると、（ああ、いたんだナ）と幹夫は安心しかけたが、スリッパの音をたてて出て来たのは、信也ではなく姉の郁枝だった。

「信也はおりません。イエ、たとえ、いたとしても、お逢わせするわけにはまいりません」

郁枝の調子は最初から切口上だった。

「でも約束したんです」

「何の約束か存じませんが、今後、弟とのお交際はキッパリお断りいたします」

「なぜですか？」

「その理由をのべては失礼になりますから申しあげません。とにかく信也には今後一切おかまいにならないいただきます。お判りですね」

汚いものを見るような郁枝の眼から逃れるように外へ出た幹夫は、屈辱と失意が胸の中

で渦を巻き、頭がクラクラとした。

その幹夫を待っていたのは、二台のオートバイに分乗した四人のグレン隊である。その中の二人には確かに見覚えがあった。この間の腹癒せに仲間を連れて仕返しを企んだのに違いない。一対四では到底、勝目はなかったが、その時の幹夫には、そんなことを考える余裕はなく、また避けようにも避けられない事態になっていた。忽ち乱斗になり、それではじめのうちは幹夫も一人二人を殴り倒したが、五分も経たない間に身動きならぬよう手足を押えつけられてしまった。

「畜生！こうなったら俺も男だ。今更ジタバタはせん。殺すなら早く殺せ！」

幹夫がそう叫んだのは、必ずしも虚勢ばかりではない。信也を失った絶望が死を恐れない気持にしていたし、いわば信也の為にふりかかった危難だと思えば、死というものが甘美でさえあった。

「フフ、殺るなアいつでも殺れるサ。その前にジワジワと苦しめてやらなきや腹の虫がおさまらねえんだ。オイ」

例の色の黒いのが合図すると、皆、面白がって幹夫の衣服を剥ぎにかかる。たとえ着ているものを全部、剥がれたとしても恥ずかし

くはなかったが、年下のチンピラ共にいいようにされるのは我慢できない。

「オイ、よせ！どうする気だ？」

幹夫は猛然と抵抗しようとしたが、四人の力には敵わず、梱包でも解くようにシャツを剥ぎとられ、遂に禪一本となって転った。

「オイ、ロープをだせ。あそこの手摺へ縛りつけるんだ」

そんなものまで用意してきたのか、てんでんにロープを取りだすと、防潮堤の階段についている鉄製の手摺へ幹夫を括りつけた。それも、ただの縛り方ではない。足を上にして左右の手摺へ別々に括りつけたのだ。上体は階段についているものの、逆吊りに近いその恰好は、見るからに嗜虐趣味だった。これから、まだどんなことをされるか判らない。しかし、もはや抵抗の無駄なのを知った幹夫は観念の眼を閉じるしかなかった。

それより少し前、単車で走っていく幹夫を見つけた甲田巡査は、白バイの速度を落して手で合図したが、幹夫は気がつかずに国道へ曲ってしまった。ヘルメットをかぶた甲田巡査の顔が判らなかったのかも知れなかったが甲田巡査は妙に気にかかった。といって、別

に後を追う理由はない。甲田巡査は再び加速して繁華街へはいったが、一巡りして元の地点へ来ると、僅かな逡巡の後に国道へハンドルをきった。もし甲田が幹夫に逢いたいと思ったら、手帳に住所が控えてあるのだから、いつでも目的は達せられる筈だ。甲田巡査は虫の知らせのような胸騒ぎ（それが職業的ないわゆる第六感かどうかは判らなかったが）で己の行動を正当化することにより、多少の良心の疼きを抑えて疾走を続けた。

「ポリだ。逃げるッ！」

一人が叫ぶと、バラバラと駐車してあるオートバイのほうへ駆けだす。幹夫が眼を開けると、青空から降ってきたように白いヘルメットがキラリと光った。

甲田巡査は、

「おいッ、待て。待たんかッ！」

と呶鳴っておいて、縛られている幹夫に駆け寄った。

ロープを解かれるなり幹夫は、殆んど巡査を撥ねのけるようにして、禪一本のまま自分の單車に飛びつき、強くキックを踏んだ。

「君ッ。どうするんだ？ 追跡は俺がする。君待ちたまえ！」

慌てて叫ぶ巡査の声も耳に入らぬように、幹夫のオートバイはもうスタートしていた。

甲田巡査も急いで白バイに跨がる。

二人ずつ乗った二台のオートバイ、それを追う幹夫は禪だけの姿。その後から白バイと世にも奇妙な追跡が始まった。「ガミナリ族」を見馴れた通行人も、禪姿のライダーには眼を瞠り、呆気にとられて見送る。

各々の單車の距離が次第に縮まると、さすがに空恐ろしくなったのか、先頭の二台は諦めて神妙に停車したが、幹夫は追跡の意志を放棄したようにグレン隊には目もくれず、百キロを越えるスピードのまま、忽ちその横をつきつた。驚いたのは四人だけではない。甲田巡査は顔色さえ変えた。気でも狂ったのか。そうとしか思えなかった。甲田巡査は無駄を承知の大声で叫びたい衝動を抑えて、前方を注視しつつ全速で追った。それ以外に方法はない。

幹夫は、後から白バイが追って来ることも知らず、ましてそれが甲田巡査であるとは知らなかった。いや、たとえ、知っていたとしても、彼の行動に変わりはないだろう。幹夫には、自分がオートバイを飛ばしているという意識すらなかった。あるのは、ただ、真

黒な怒りだけだった。誰に対してというよりそれはすべてに對してだった。

道はいつか国道を逸れて、山道にかかっていった。その道はダムに続いていて、そこまではいくつか危険な箇所があった。

（止れエ！頼むから止ってくれ！……）

甲田巡査は胸の中で絶叫し、神に祈る気持で幹夫の無事を願った。

しかし、恐ろしい終焉は眼の前に迫っていた。二度目の急カーブでハンドルをきりそこねた幹夫の單車は、アッと思う一瞬に甲田の視界から姿を消していたのだ。

数十メートルの崖下に転落しては万に一つも命の助かる見込みはなかった。

「馬鹿なヤツ！……」

そう呟いた甲田巡査は、躰中の力が抜けてしまったように、踰越として崖の縁まで歩を運ぶと、

「俺の夢まで持っていきやがって……」

と、もう一度、呻くように呟いて、ドサリと崩れるように地面へ胡坐をかいだ。

静寂にかえった樹立の中では、何ごともなかったように小鳥の囀る声が、しきりにしていた。

毒舌独説法

スナップ水揚げ論

志 高 牧

表題を見るや、ハアハアーン、アレかななどと早合点されては、こっちが困ります。そんな気の廻わし方は、他のいずれかの雑誌の目次で、ゆっくり拾って頂き度い。

最近着のアメリカの雑誌を一読すると、実に目まぐるしいことが記載されている。もっとも、頼みもしないのに人類の願望だと称して、他国を尻目に、ソツと月の裏側を覗いたり、時間と秒速単位で地球を一周するゼットプランが、秋空の赤トンボの如く飛び廻る世の中になってみると、一番安上りで身近かに感ずる娯楽の第八芸術たるシネマが、いつまでも世紀を遅らせている訳にも行くまいだろうから、あッ……またしても頼みもしないのに女が縛られたッ”どれ何処にッ。チェッ……もう居ねえや”と相成っては、誠に気の毒な次第と申さねばなるまい。

なればこそ、理詰めのリケット学とは別個に、われわれは人類の被縛学を、さしずめ映画ならば、秒速24駒のスピードでスクリーンに放影する画像を、適確にキャッチする必要があるのであろう。

「……と仰言いますが、事實は仲々、そうは行きませんや。何んしろ、相手が相手ですからネ。まして女が後手に縛られた姿ナンても

のは、ヘッヘッヘッ……宝くじの当りくじを探すようなもんでさア。全く以て、お気の毒みたいでげす」と、その道のベテランが忠告したのを、鼻の先で軽くあしらいながら、某月某日、宛ら腹のすいた児童の巷をさまよう如く、懐中何程かの有金を秘め、飲み屋の縄のれんをくぐる呑んべい居士の如く、先ず手当り次第に既刊のシネマ雑誌を乱読、三文新聞の批評を丹念にスクラップして、あらましの見当をつけるや、さり気なく場末の三流映画館に至るまで懇切丁寧に罷り通って、50%が偽りである壁スチールをさアッと横眼で瞥見する。

誰かさんの物語りじやないが、店頭でパラパラッとめくった雑誌で、被縛挿絵が、チラッ”と妖しく心臓を打つ如く、数枚のスチールで縛り場面があれば兎も角、なくとも、こいつは臭いと目星がつくであらう。

次に、おもむろにチケット・ボックスの前面で、映写時間と只今満員の有無を胸算定しなければならぬ。これまでの経験によると、立錐の余地のない満員場内でのシャッターの音は、一瞬、雷のように響いて、我ながらギクツとする、ほろ苦い思い出があった。されば、なる可く、空き気味の頃合いを見て入場

するに越したことはない、と己れにいい聞かす。

さて、およそ然るべく料金を払って肅然と画面を拝見するからには、只今、映写中の映画のストーリー位は予め承知して置くべきであるが、縛り場面の多く登場する映画に限ってどういうものか、カットの構成が、えてしてぞんざいであり、従って飛んでもない処に、女が縛られて驚かされるのは、胸に一物、手



新東宝「朱桜判官」若杉嘉津子

にカメラのネズミ小僧にとって、はなはだ困りものだ。

ただ、洋の東西を問わず、女を縛る場面は一つの大きなヤマと考えてよい素質を多分に持っているらしく、そんなヤマがボコボコとふんだんに出られては、いかな謹厳居士であろうと、木石ならぬ感に巻き込まれるのは必定だが、終戦当時は兎も角、最近のように世の中がよきにつけ悪しきにつけて万事落ちつ

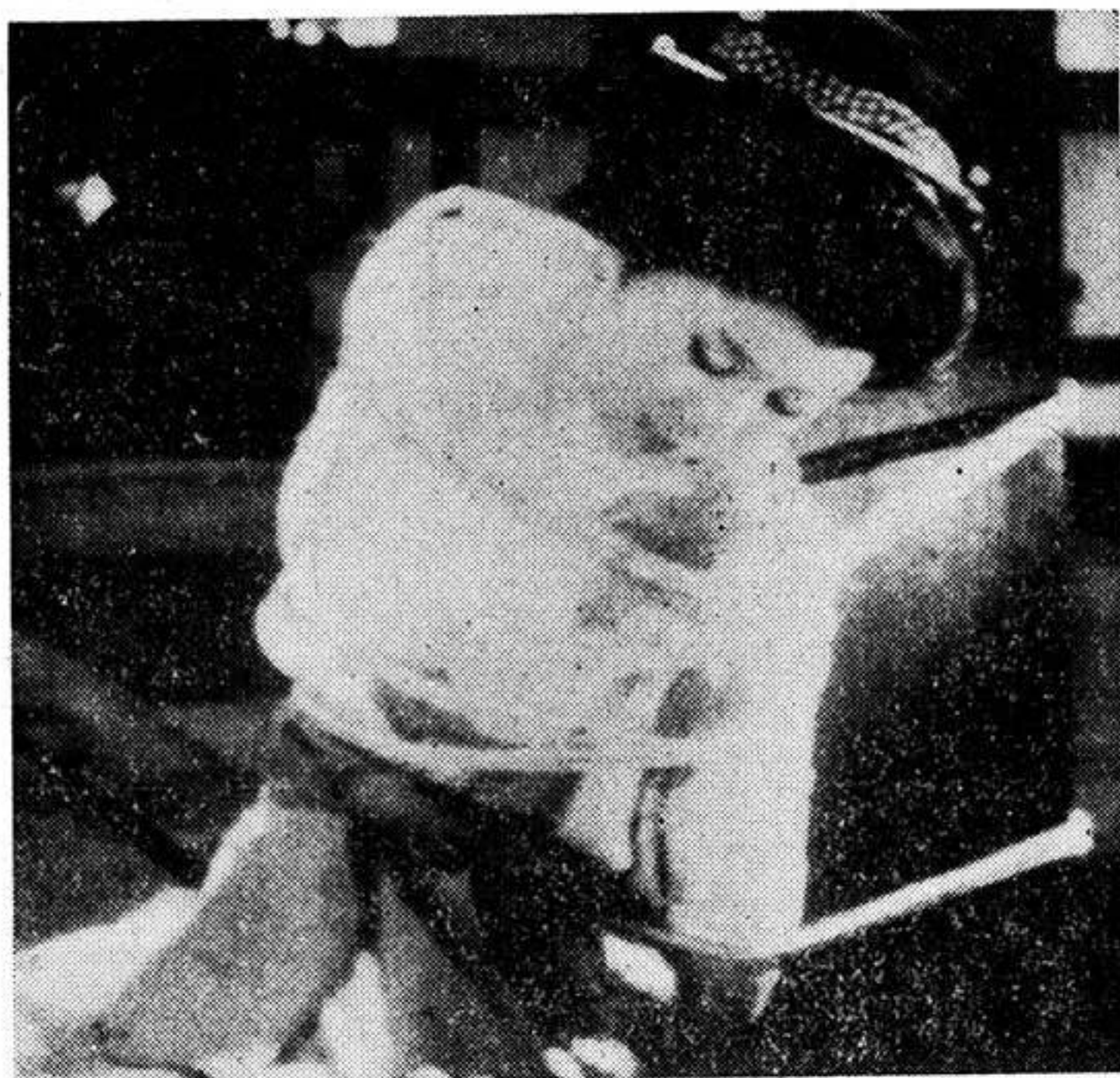
いて来ると、兎角、定評のある映画製作会社ですら、至極上品な縛りで乙に澄ますようになつてしまった。

一先ず修身講座、礼儀作法の復活と考えれば文句はないつもりだろうが、その是否は論外の沙汰として、上品な縛りに合槌を打つかのように、競ってその出現を秒速的に片づけの傾向になりつつあるのは、誠に遺憾の極みである。

つまる処、臭い物には一切、蓋をしろ。おエッチ(H)な感情にかられるのは道徳上、よろしくないと映倫パスマークを尊重するの余り、花火線香の如く、パツと光ってパツと消えてしまう手法——撮影の中味はどうあろうと公開に当って、カット・フィルムの構成を最上級に物惜しみして放影する映画界の根生は、どう考えても情けないものではなからうか、などと満されぬウツプンをボヤキたくなるのも人情か。

だが何故、大らかに弱い女性がヒシと荒縄で後手に縛られ、スクリーン上、二、三分間、映り止まって悪いのだろう。もともと、ズバリ、ニュース映画でもあるまいし、どうせ芝居事にきまつている縛り姿を、思う存分たっぷりと、お客さんに見せて何処が不都合

大映「紅あざみ」毛利郁子



条とばかり、左程、観たくもない映画館に飛び込んだのではありませんか。それをハメ板のすき穴から女風呂を覗かせるように、妙に恩に着せ、もったい振るのは、おやめなさい。でもね、この間は美事に失敗して、泣く泣く家に帰りましたっけ。斯うだから斯う来るだろうと構えたら、数駒でおさらばするなんて本当に罪なもんでさ。

それで、つくづく映画なんてものは水商売だと悟りましたよ。水揚げされたいのはこっちの方からと願いたい位……あの、繰り返えしますけどネ、菓子屋に奉公する小僧さんに、たっぷりツマミ喰いをさせるように、スターに限らず女優さんの被縛姿をタンノウするまで、お客さまに観せて呉れてもいいじゃありませんか。

なのだろう？ ヘン、面白くもねえ。スターにあこがれ、ストリーイに惚れて入場したミィちゃん、ハァーちゃん族と一緒にしたくなってるんだい。

晴雨老の言葉じゃないが、女の美しさは、すべからく縄目の縛りに在り。これを金科玉

男らしくもないグチは止めましょう。しかし思えば、よくも苦勞したものだ。四、五万円のカメラを買い足したのも、カメラ・デーの為ではなかったし、テレビの前に坐り込ん

でチャンネルのやりくりをするのも、可愛い被縛姿の女がチョコチョコ現われるの余り。

ここに御披露する三葉の挿入印画は、いずれも涙の出る位苦勞を重ねた珠玉の宝物ばかりである。そのスクリーン上のお出でましたるや、一秒の何分の一、まるで電光石火の速さで現滅したのを、辛うじてキャッチした光芒スナップの断面集——映写技師の方々が聴かれたら、さぞ片腹を押さえて呵々大笑されることであろうに……。

「ウム、いい処だ。こう来りゃ、多分あなるだろう。後手姿がチラッと見えたから、この次は折檻されるに定まっている。今度こそ逃さんぞ」

何を逃さぬか判らないが、暗中、眼を皿のようにして睨んでいるうちに、横滑りに、かんじんのシーンが飛んで、どうにもキャッチすべき方法がなく、またまた失敗した。心がいまいしくて堪らない。釣り落した魚が、べらぼうに大きかった如く、裏姿の女が絶世の美人と思ひ誤まるの如くに、たったあの場面のスナップ一枚が欲しいために、こりもせず再度、漁場に殺到。否、再々度、岸壁をさまよい歩いて釣り道具を投げ込む——何んと



松竹 佐野 乃子

また数時間の御辛抱である。

こうなれば早い話が、ファインダーに釘づけされ、雁字がらめに縛られたのは、スクリーン上の女ならで、斯く申す拙者の方であつたのは皮肉な沙汰と申さねばなるまい。

ここに放影「海の縛り女人魚」に対し、水揚げの難易が、しみじみと味わされるのである。

処で惨憺たる苦勞の甲斐があつて、辛うじて水揚げされた三人の女人魚——賢明なる諸兄姉は既に御存知の事と思うが、陸に上っ

た魚タクと思召されて、曰く因念に暫時、耳を傾けて頂きたい。ヘッヘッヘッ……口はばったいようで背中の方がゾクゾクするようですが、一匹宛、白洲の上へならべてみることに致しましょう。但し、味の美醜は、うけ合

い兼ねます。
「チョイト、それなる第一番目の女性人魚よ
キリキリと出ませいッ……」貴女は新東宝
海で不幸にして網にかかったと申すが、姓は
何に、名は何んと申した？」「ハイ、若杉嘉
津子と申します」「何故、縛られた？」「判

りません。多分、スパイと思われたからで御座いましょう」「住いなせし戸籍は？」「朱
桜判官とか申しました。」「ウム……さてさ
て気の毒なことをしたもののじや。見れば牢獄
内に監禁されているようじゃが、上質固め、
捻りのかかった麻縄で、緋縮緬の長繻絆の上
から三巻締め、さぞ痛いことであつたらうに
……。でも、もうよい、永久にそのポーズは
余が秘蔵してつかわそうぞ。」「ハイ、有難
う御座ンす」まさか、そんな事は云うまいと
思うが……。

さて次なる人魚とやら、さっさと出ませい
ッ。何んと、そなたであつたか？ ラッパが
鳴ると云う大映海近く、通称、紅あざみ川の
川口とか申す処で、散々釣り落しては糸を垂
れ、漁場(映画館)を変えること三、四カ所。
ああでもない、こうでもないとそなたのポー
ズを……そして、とうとう、ビクの中に捕え
られての、この始末。愛い奴じゃ、名は何ん
と申す？」「毛利郁子で悪う御座ンしたネ」
「いやいや、左様にすねるものではない。そ
のまるで城柱と見紛う大黒柱に文字通りの雁
字がらめ、二捻り麻縄の五巻締めとは、誰の
仕わざで御座ンしょうかねえ。成程、そなた
の申す通り、これじゃ、あんまり人目にさら
す訳にも行くまい。本番で撮っても10駒が精

映画通信

最近の

女優縛りシーン

大河原珠樹・記

▽拳銃を磨く男（東映） 峰 博子

にせドル・ルートの捜査中に殺害された友人の復讐にたつ若い刑事の恋人が、ボスの手におち人質にされる。薄色のスーツの胸へ、細引きで二巻ずつ、後手に縛られて連行される。

▽ひばり捕物帳・ふり袖小判（東映）

中里阿津子

公儀御用金盗難の責を負う父にかわって犯人を捜す三鈴が、逆に彼等に捕わってしまふ。細引で胸を数巻して後手縛り。これを背後から写しているので、手首のキッチリした縄目も一瞬みられる。このあと船底

へ移され、今度は太い縄でグルグル三巻ばかり巻かれているが、この方は背中の方は写さない。

▽薄 桜 記（大映）

真城千都世

知心流と堀内一刀流の流派の対立のそば杖をくって相愛の妻を犯され、その妻と離婚の折に、義兄に片腕を斬られた不具の剣客丹下典膳が、五人の仇のうち二人を討つが、傷つき、通りすがりの妻千春に介抱されている時、残る仇三人が助っ人を連れて彼を倒しに来る。彼等は千春を後手に縛りあげ、隻手片足となっている典膳と庭で斬り合うが、離婚しているとはいえ愛情の変

一杯。それ以上、人目にさらしては映倫さんはおろか、着飾った娘さんが顔を赫らめるかも知れませんナ。いくら貴女の縛られポーズが営業上のそれであっても……。

さて、どん尻に控えしは？ 誰さんでしたかな。一人二役のお姫様がどうかして、腰元風情のこなさんを、どう云うハメでこのように柱に縛った松竹部屋。時代調では取り残され、あせる余りが女の縛り。忠臣蔵じゃないが、こゝらで散々女を後手に縛り上げ、赤字を黒く染め上げねばなりません。てな訳で、不本意ながら佐野乃子嬢を長繻絆一枚にむいて縛った次第。いや縛ったばかりか、音響効果よろしく責め折檻のシーンと相成った。どうでした？ 痛かったでしょう。痛くない？ そうですとも、芝居ですからネ。何んですってフジテレビの芸能ニュース松竹の巻でスタジオ・スナップが放影された？ ウム、その折、あなたが後手に縛られて柱の前に坐っていた。すると、北上弥太郎さんが悪ふざけして裾をなぶって、ひざ小僧を出させた。いけませんネ、そんなことをスタジオの内実演なすっては。勿論、こんな場面は本番のシーンには出ませんでしたかネ。それにしても、いい教訓をお教えしましょうか。あのネ、若し、あなたでも、どんな女優さんでも、人気を取りたかったら、お客さんが思わず身をのり出すようなポーズを取ることです。決して

らぬ千春は夫を気づかって受縛から抜けようと、もだえる。白布の猿ぐつわが口にしつかりと噛まされ、胸をグルグルと数巻した縄目も厳しい。スクリーンでは見えないが、足も縛られていた様子だ。ようやく解けなかった縄をまとったまま、屋外へ駆け出した時、短銃で射たれ苦痛の中を、すでに死期せまった夫の側へ縄を引ずったままいざりよって行くシーンが印象的だった。

同映画で、さきに紹介していた拷問や処刑のシーンは、脚本を変更し男優だけしか使われていない。

▽長七郎旅日記・はやぶさ天狗(東映)

円山 栄子

將軍暗殺を図る一味が、その手段に必要な日光東照宮の抜け穴を記した、秘密の絵図面を手に入れるため、大工弥平次の妹小夜を人質に奪う。さらに絵図面の符合を解くため、弥平次の眼前で小夜を折檻しようとする。平凡な後手縛りだが、胸をぐるぐる数巻した細縄のしまり具合が、ほど良い印象。縛られ姿の似合う女優だという感じがした。

▽風小僧・やまびこ剣法(東映)

円山 栄子

TVと同じだが、これは上映用にワイドでつくっている。金山の場所を知りたい悪人どもが、父親の責め道具に娘を使うという寸法。細縄で数巻、後手首を帯の下で縛られていたが、背後から写しているので縛り加減が良くわかった。また山道を連行される場面もある。

▽七色仮面・消えた紳士(東映)

小林 裕子

これもTVと同じだが、二番館や田舎街ならみられるので念のために。お定まりの筋で金有へボ探偵の助手の三子がキング・ローズ一味を尾行してつかまってしまう。細い紐で後手、縄目を乾分に握られて連行される。時間的には、かなり長い。

このところ不作勝ちで「血槍無双」「緋鯉大名」「風雲児・織田信長」東映。「歌麿をめぐる五人の女」大映。「天地夢双剣」「月夜に消えた女」「巖流島前夜」松竹。「善光寺黄金道中」新東宝などには縛りシーンがなかった。

下品ならず、極めて上品な縛りのポーズを先ず演ってみて、出来れば段々に、気が遠くなるような責め折檻に慣れて、歯を喰い縛るような表情が出ればもう大丈夫。あなたは一躍大部屋からスターになれるのです。

そうです、それには偽粉の雪の中ではなく、本当の冷たい雪責めを一ぺん映画化して御覧なさい。それこそ、ワンさとはかり、無名の死んでもいい、金を湯水のように使うマニアのおっさんがたが押寄せますからね。早く本格的に縛られなさい。アハッハッハッ……という訳。古びた魚タクではあるが、何んらかの参考になれば幸いである。

以上を要約して、女縛伝、第一巻第一章の巻頭の条文を引用すれば、即ち

「およそ人若し、深海に遊泳する両腕、後ろに縛られし眉美しき女人魚をサアッ……と海中より水揚げせんには、心安らかに吉日、吉方を選び、愛機のレンズを磨き、臆することなく、またたきのシャッターを押し、不可視の綱をもて、美女を捕うべし。然る処、綱をたぐり、美女を発見出来ざりし折は無下に落胆することなく、再度、これでもかとばかり喰い下って美女を追うべし。タタけよ、さらば与えられん。天なるおHの神は必らずや汝等の掌中に、渴望の被縛人魚を授けるであらう——。ユメ、疑う勿れ……とある。

さて、さて御苦勞の話ではないか。

創

作



TAKAO

○そのトラックを見逃すな

星が、きらめく夜だった。ひっそりと静まった町に、なんとなく怪しげな気配がみなぎっていた。人っ子一人、通らない。寂しい道路に、どこからともなく大勢の目が集っている感じである。執念のこもった空気……どうしてこんな空気が重たく流れるのであろうか。答は簡単だ。今夜こそ決戦場と考えている柏木名捜査課長。恋人を危機

謎の緊縛フोट

(最終回)

久留木

栄

にさらし、それがそのまま不退転の決意となつた上田記者。同僚を救わねばならないと、まなじりを決した多くの制服の警官たち。そういった人たちが物かげに潜んでチャンスの到来するのを待っているのだ。碁や将棋に秒読みというのがある。柏木警部の心は終盤の攻防をめぐる激しい、しかも、せっぱつまつた秒読みの心境と全く同じであった。誰も同じことだが、事情を知るものにとっては、あの謎の緊縛フोटのシーンが脳裏から去らないのだ。もしや中村婦警が、あんな恥しいポ



ーズに……そんなことは、ありえないことだ。そう願いたい。と、みな心配しているのだ。とりわけ、この心配は上田記者には強い。彼の胸は、おだやかではなかった。自分の愛人を、誰がどのようにして、さいなんでいるか……そう思うこと自体が、たまらないことで

あり、劫火の試練といえた。彼の体が自然、武者ぶるいするの無理からぬ話である。――

柏木警部は腕時計と睨めっこをしていた。夜光時計の文字盤の上の黄色い標識が、月光のように怪しく光る。明るい夜空と対応してなんとなく不気味だ。ふと彼が、つぶやいた。

「そろそろ時間だな。もう明け方に近い。ヤッコさんたちがボロを出すなら今頃だな。この町の一角から、きっと自動車が走り出す。そのエンジンの音が、しはじめるぞー」

まるで、人生の一切の賭博が、この一瞬に決まるかのような、つぶやきである。確かにその時、わずかながら自動車のエンジンの音がして来た。柏木警部の顔が、わずかにほころぶ。

「うふ、やはり日東ビルの地下だな。あすこにガレージがある。G一号パトロール車、追跡用意！」

小声だが確信のある号令が下った。若し敵が、これまで集めた女を運び出すとすれば今夜か――明け方。とにかく一兩日のことに違いない。そう判断した警部のカンが当たったの

だ。そしてこの町の一角、パチンコ屋だけでなくビルをふくめた全部が怪しいと見抜いた柏木課長の洞察は、まことに的確な尊いものであったのだ。彼の努力は今、実を結ぼうとしている。ここから出る車をつければ、奴等の別のアジトか船の密輸基地がわかる。それが第一だ。それによって娘たちを外国に送り出している国際人身売買団の手がかりが掴めるのだ。ぜひとも、そうしなくてはいけないと、彼は部下に口すっぱくなるよう指令していた。その判断は完全に当たったのだ。やがてトラックが、ゆっくりと姿を見せた。柏木警部の右手が高々と上った。闇の中に白い手袋が、あざやかに浮んだ。

トラックには細長い箱が整然と積まれている。G一号車は砂煙りを上げてトラックの跡を追った。トラックの追跡と同時に家宅捜査を行う。――これも当初の方針だった。G一号車の姿が視界から消えると、柏木警部は再び右手を上げ、合図の笛を高らかに鳴らした。

○おぼろな意識の下で

その頃、当の犠牲者、中村婦警は泥のようなねむりの中にあった。丁度、夕方の六時頃から真夜中まで、四人の無法者によって演ぜ

られた責芝居のヒロインを、しつように繰り返えされ、力つきて、その場に突つ伏してしまつたのである。死んでいない証拠に、かすかに呼吸はしていた。すべて空しい、すべて悪意に満ちた世界の指導者が再度、主役を演じて貰うために計画した悪魔の設計の巧まざる演出によって与えられた、エネルギー蓄積のマドロミであつたのである。

しかし、やがて美美子はパッチリと目を開いた。

疲れた目に二燭光の電灯の淡い光りが飛び込んだ。おや、ここはどこかしら、まだ生きていたのだわ。そういう意識が胸の中にひらめいて、次の瞬間、激流に浮んだ泡ぶくのようにはなく素早く消え去つた。次の瞬間、ふと彼女は隣の部屋に迫る人の気配を感じ、思わず身をすくめた。しかし、それは一種の幻覚にすぎなかつた。美美子は、かすかにおびえた。その時は、おびえても仕方がない心理状態であつた。あたりは又、静まりかえつていた。美美子の目は、ねむることより、さえる方に向つた。その時である。部屋中を無意識に舐めるように見廻していた彼女の視線は、一つの布片を見つけ凝視した。そして身体中に電気が走るようなショックを受けた。

そうだ、私は婦人警官だつた。思わぬ意識が彼女の心に戻つて来た。

その布片は洋服ダンスの一番下の引出しから、わずかにみ出ている卵色のブラウスの一端であつたが、その布に美美子は見覚えがあつた。私の服だ……本当に私の服なら……そうだ、何とかせねばと考へた。チャンスは与えられるものでなく、自ら作るものだといふ。それなら一つ、やってみようと彼女の心に、はじめて一条の光りがともつた。あの金という女、それが自分をこの部屋に連れこんだに違いない。そして私の衣類を、あの洋服ダンスの引出しに入れたのだらう。若しそうなら、あの衣類のポケットには、私が上田さんから貰つた合図のメタルが隠されている筈だ。そのメタルをとり出さねばいけない。そして、なんとかして彼の目に触れるような処に撒くのだ。そのため、自分がたとえ、どんな目にあわされようと、私には不幸な女たちを救う責任がある。この世の中から、悪と不正をなくすために戦うべき義務がある。その残されたチャンスは、たった一つ。メタルを人目に触れさすことだ。しかし、それはうまく成功するかどうかかわからない。非常に成功率の低いものだ。だが、その努力を惜んで

はいけない。そう判断すると美美子は直ちに実行に移した。しかし長時間いたためつけられてきた体は、意志どおりには動かなかつた。

床を這いずりながら、どうやらメタルを入手することが出来た。思えば敵方にすれば、美美子に縄をかけていなかったのが手落ちであるといえはいえたのだ。美美子は素肌の上に薄いナイロン・トリコット製のピンクのネグリージエを着せられていたが、手首や二の腕には、まだ縄目の痕が赤くはれて残っていたし、体中、ムチ跡が痛々しくついていた。体を起すだけでもやつとのことであつたが、この千載一遇のチャンスをなくしてはいけないという大勇猛心が彼女を動かしたのだ。しかしメタルを手握りしめて立上ろうとしたが、力つきてその場に突つ伏してしまつた。意識が微かに遠のいた。メタルは手を離れ部屋の隅の方に転がった。思えば、これが美美子救出の手がかりになるものだった。

○捜査はおどる

それから五分とたたなかつたであろう、捜査隊の一行がこの家に到着したのは。柏木警部が玉水パチンコ屋の正面から、上田記者が喫茶『川の音』から、そして日東商事には池

田巡查部長が夫々、多数の武装警官と共に襲撃した。折から白々と夜の明けわたった中で、まったく物々しい捜査がはじまったのだ。

パチンコ屋の住込み店員達が右往左往する中で、柏木警部とやりとりをしている万吉である。寝込みを襲われて赤く充血した目を、こすりこすり出て来た万吉は、家宅捜査状と逮捕状を見せられると、さすがに緊張した顔になったが、しかし、そこはふるつわもの、ニヤリと笑い乍ら直ぐトボけてしまった。

「旦那、これは何事だ」

「ごあいさつだな。こっちが何事かっているというわけだ。万吉、かいてあるとおりだ。君は何度も経験した度胸の持主だから、十分承知していることだと思うがな」

「ごじようだんを、旦那。私は今、しがなないパチンコ屋のマスター代理ですぜ」



TAKAO

「そうかな。その他に国際密輸団の手先という職業はなかったかな」

「めっそうもない」

万吉、わざと、おどおどした手つきで洋服に着かえた。その時、彼は辰に知らせるための非常ベルを押すのを忘れはしなかった。これさえ押せば安心とばかり万吉は柏木警部に連れられて外に出た。

その頃『川の音』では、上田記者が薄水色のネグリジエを着た妖艶な感じのマダムと、やりとりしていた。

「マダム、知っているだろう。ここに婦人警官を連れ込んだら」
「婦人警官？」

マダムは半信半疑の態であったが、やがて事態がのみにめたのか、ようやく顔が青ざめて来た。まさか、あの女が婦人警官だったとは。そんなことは考えられない。もしそれが本当ならあの女は生かしてはおけな

い。だが、その前にこの場をどのようにして切り抜けようか。なんとしても切抜けねばいけない」

マダムは、そう決心した。さすがは海千山千の女である。

「あら、一体、何んのことをいつているの？いま時分、人をたたき起して……そんなこと、わたしが知っている筈がないじゃないの」

「とぼけるなよ、マダム。刑事さんが、ちゃんと見ていたのだ。卵色のブラウスを着た若い女を車で連れて来て、この店へはいったのがわかってるのだ」

「フッフ、はばかりながら、この店は一日、千人からのお客があるんですもの、そんなことまでおぼえているもんですか」

「だまされんぞ、マダム。ほら、ここにバツクル止めのピンがある。昨日、俺がここに来てあそこで拾ったのだ」

マダムの顔は、ちよつとこわばったが

「あら、それ、私の服についていたのじゃないかしら」

と澄ましたもの。

「うそも、ほどほどにしろ！」

上田記者は思わず声を荒だてた。一人の刑事がマダムの両手に手錠をかけた。

「なにするのよ。畜生！」

マダムは毒舌を吐きながら連行されていた。上田記者は先日、怪しいと思っていた一番ボックスに入り、椅子や机、ソファなどを動かして部屋の様子を調べはじめた。

一方、トラックを追跡していたパトロールカーは、賊との間で激しい拳銃の応酬がはじまっていた。そして賊の一人を倒したが警官も一人負傷した。しかし応援のパトロールカーにより残った賊も逮捕された。トラックは、そのまま警官が運転して警察へ——そして積荷の箱をあけたときの驚き——。

又、万吉の押した非常ベルで急を知らされた辰は、あたふたと秘密通路を駆け上り、金のいる部屋に飛びこんだ。

「姐御、手入れだ！」

「手入れ？ 畜生、やりあがったか。だが、

辰。いい時に女どもを送り出したなあ。ウッフ、これであの女を、なんとかすりやあ、結構、証拠はないというものさ」

「じゃ、これで」

辰は首をしめる真似をした。

「いや、それほどのことはなからう。とりあ

えず、あたしのベッドの下に箱詰めにしとけばいいさ。あたしは、その上でねていようよ。あの女の着ていた服は硫酸液と一緒に地下に流しておけば証拠はなくなるよ」

二人は、芙美子を閉じこめている部屋に行く途中、こうした相談をした。

「おや、まだ気がつかないらしい。辰、縛り上げておしまい」

辰は洋服タンスの引出しから一束の縄をとり出すと、まるで機械のような正確さで芙美子を縛り上げていった。芙美子は、辰の荒々しいやり方で正気にかえったが、まったく抵抗のしようもなかった。金は、この間に、さつさと芙美子の衣類を始末し、タンスの中にあつたフオートも処分したのだ。

上田記者が秘密の通路を通過してこの部屋に到着した時、一人の女が後ろ手に縛られて猿ぐつわを噛まされて、ベッドの上に転がっていた。

上田記者は、或は中村婦警ではないかと心を躍らせて駆けより助けおこしたが、芙美子ではなかった。実は、その女は金であつたのだ。

「どうした、一体、どうしたのだ」

女の猿ぐつわをとってやりながら上田記者

はいった。女は身をふるわして上田記者の胸の中に泣きくずれた。上田記者は当惑しながら縄目をとこうとした。

その時、後手錠をはめられた喫茶『川の音』のマダムが刑事につつかれて這入ってきた。

マダムは、この光景をみると咄嗟に、もう

金姐御もかぶとを脱いだのかと判断した。

「まあ、お姐さん。あなたも」

と思わず声を出したのだ。その時の金の恐しい顔。その顔を上田記者は永久に忘れないだろうと思う。彼は思わず、縄をほどく手をやめたのだ。

「おや、こいつも仲間か。俺は完全に騙されるところだったぜ」

上田記者は逆に縄をしめあげる結果になったのだ。

一方、辰もその部屋の壁の一角からガレージに通じる抜け道で、そこに張りこんでいた警官に捕われる結果となったのだ。捜査に向った警官隊の中から、はじめて喜びの声があった。しかし、その中で浮かぬ顔をしているのは、上田記者その人だけであった。

すべて限なく怪しいと思った処は特に念入りに捜査したが、問題の人、芙美子は見つからないのだ。その中、パトロールカーから、

捕われていた女たちが救われたという報告があった。しかし芙美子のことは全くわからないうのだ。すでに警察に連行された辰たちの取調べがはじまっていたが、誰も知らないといいはっているのだ。さすがに警察側も苦慮の色が流れはじめていた。

その頃、上田記者は猶も地下室を探していた。

「もうダメだ。引上げたらどうだ」

別動隊を指揮していた池田巡査部長がいった。

「いや、僕は帰らない。或は中村婦警が、何か大きな証拠を掴んだため消されたかも知わらないのだ。だから、それを見とどけるまでは、どうしても帰れない」

「なるほど、その気持よくわかるよ。君は惚れていたからな。では、もう一度よく探すんだな」

池田巡査は、そういうと最後まで捜査の手をかしてくれた。そういう矢先である、金のいた部屋で、あのメタルが発見されたのは。

「池田さん、メタルだ！」

「何、メタル？」

「うん、そうだ。このメタルは非常の時の連絡に中村婦警に渡したメタルだ。あの金とい

う女は、最後の最後まで芝居をうつ女だ。このメタルをつきつけ、あの女を尋問してくれ。きつと手がかりが掴めると思うよ」

「わかった。君は、ここにいろか」

「うん、僕は、この部屋を徹底的に調べてみるよ」

「じゃ、しっかりやれ」

池田巡査部長は小走りに部屋から出ていった。そのあとである、上田記者が中村婦警をベッドの底から発見したのは――。

彼等二人が、どんな一刻を過したかは、もう書く必要はないであろう。

ただ、謎の緊縛フोटが製作された目的は二つ、あったこと。その一つは、日本の女を外人に売り渡すための見本として、屈從的な奴隷のような姿を見せて価格をつり上げるためのもの。いま一つは、外人のアブ・フोट蒐集マニヤにフोटそのものを売りつけるため色々なモデルを使って撮影したもので、井上和子と中村婦警が、このモデルに使われたわけである。

(おわり)

(作者記) 病氣やら仕事多忙で十分執筆できなかったことをお詫びいたします。いずれまた暇を見つけ、新たなものを書くつもりですから御寛容下さい。

乗馬ズボン シリーズ

女神の塚

—— 或る男装の女丈夫の断末魔 ——

藤 山 秀 緒

秀緒の乗馬ズボンシリーズも足掛け六年になります。この間、只一筋に男装の女腹切を追究して参りました。書くべきことは書きつくし割腹の描写も行き詰って来ています。

しかも私は腸結核に浸され、療養はしていただきますものの、もう全快までこぎつける自信もなくなり、医師には、決して取乱さぬから、と約束して、死を予告して貰うことにしました。先生は、まだそのようなことを考えるのは早い、と申されますけれど、私には長くてあと一、二年としか思われません。廃人同様

の生活を送るなら、一思いに激しいプレイに灼かれつくして、血汐の中に俯伏したいとも考える時もあります。

……でも、その気力はもう到底、出ないでしょう。私は、死の六カ月前に筆を断ちます。それは、自分の書いたものが記事になり、それを使ったプレイを、自分の健康の許す、ぎりぎりの線で心ゆくまで試みる時間を計算して、そのようにきめたのです。六カ月前に書けば遅くも三カ月目には活字になりました。うから、また男装する気力は残っていること

でしょう。或いは、その苦しみをメモしたものが、私の最後の文になるかもしれませんけど。皆様、もうあと僅かの間です。私の特徴ある、どぎつい文章、乗馬ズボン、乗馬ズボンと呻きつづける男装のヒロイン。どうぞ「またか！」お怒りにならないで下さい。秀緒は女体切腹のシリーズを、このようにして遺すことができたこと感激をしています。秀緒は男装の断腸譜に殉じて行きます。長くても、あと一年。……おゆるし下さい。

乗馬ズボンに身を固めつつ

秀 緒

死の男装

秘密の軍法会議は、高倉道子に死刑を宣告した。

彼女は、特務機関に所属して、女乍ら将校待遇を与えられ、大陸で活躍して来たのであった。彼女には、和田と云う腹心の部下が居た。でも和田は、彼女の信用をつかむと、敵と内通しはじめ、日本軍の機密が危くなつて来た。……彼女は何故か、和田のこの動きを黙認して来た。日本軍の情報を洩したという証拠はなかったが、敵スパイのアジトを和田の情報をもとにして急襲したとき、そこにはもう人影はなかったし、和田はそれ以来、行方不明となっている。

この失策は、和田の心証を決定的なものとした。高倉道子は、和田の直接の上官として罪に問われたが、彼女は和田を執拗に弁護しつづけた。その結果は、道子こそ、内通の主犯だという印象を裁判官に抱かせてしまったのである。

道子は「きっと和田は、大きな計画をすめているに違いない」と信じている。

道子は、死刑の判決をうけても、ひるまな

かった。これが、お国への御奉公になるなら、喜んで和田の身代りに死のう、と決心している。

道子は、判決には不服であつたけれど、法廷で、はっきり、こう云つた。

「御命令ならば、喜んで死にます！」

道子は、この判決を悲しむ大勢の上官たちの居ることに満足していた。道子は、上官を通じて、死刑は女乍らも自決で、と願ひ出た。戦地のことである。彼女の、このような申出は、むしろ歓迎された。規定は銃殺であつたが、とにかく囚人が死にさえすれば、それでよいのだし、潔い自決は、勇ましい女スパイの死に最もふさわしく思われた。

道子は、死の前夜から、革ジャンパーを着、純白の乗馬ズボンを着き、そして黒革の長靴を穿いた。

彼女の一番好きな服装だった。

ジャンパーの、あの、ぎしぎしとした革の感覚、臭い。純白トルコ地の乗馬ズボンの肌ざわり。そして、どさりと重い乗馬ブーツ。

彼女は、このスタイルに身を固める度に、身の引締まるのを覚えるのだ。いいえ、女スパイでなかったら、女だてらに、このような服装で人前をのし歩くことはできないかもし

れない。特務機関の女———という意識が、この倒錯的な服装を正当化してくれる。彼女は、この服装を着ける楽しみの為に、つらい仕事と取組んで来たようなものであった。

彼女は、美しかったけれど、どこやらに、倒錯的な「かげり」を宿していたし、軍人仲間でも「巴御前」とか、「女ざむらい」などと、あだ名されているのであった。

その彼女が、思い出の男装に身を固めたのは、明日の最期を控えて、本当にふさわしいことなのであった。

道子は、体をくねらせて、己が姿を眺め、酔った。凜々しいポーズで独房に立ちつくす道子。……だが、かがとが浮き、乗馬靴がきしむ。両ヒザが、こまかくふるえている。

……死への恐怖だろうか。いいえ。

あすの自決は、女乍らも切腹で。と心にきめた道子。いまこのように乗馬服姿で立ちつくす心のうちは、武者ぶるいにも似た心のおのきを、きっと必死に抑えつづけているのにちがいない。

道子は、遺書を机にのせ、再び独房の中央に立つと、革ジャンパーのボタンを外した。男物と見間違ふような、ガバとしたワイシャツが現れた。ワイシャツのボタンは外さず、

有合わせのペーパーナイフをハンカチで巻く。

道子は、そっと、そのペーパーナイフを、革ジャンバーの開いた処から、ワイシャツの

左脇へ押しつけていった。

ぐうっ、と力をいれてみた。いいしれぬ氣持に襲われ、思わず、ううっ、と云った。

道子は、一寸、右へ引廻して見た。ここは



低くすぎる。

更めて左脇へ突立て直すのだ。

道子は、革ジャンバーの胸のポケットから薄いノートを出した。それは切腹のテキストであった。どこで調べたものか、道子の筆蹟で、ノート一杯に、歴史上の人物の腹の切り方、苦悶の様子、作法など心理学の方面にまでわたって、絵入りでしたためられている。かなり汚損しているところを見ると、繰返し読んだものであろう。

彼女は、それを、更にくわしく読み返している。

テキストの絵をひもときつつ、ペーパーナイフが右に左に移動をつづけるのである。

切るスタイルが、きまった。彼女は、出来ないまでも、最も凄惨で、壮烈な方法を選んでいた。

先ず一文字に引廻す。……腸を掻き切るほど深く。つづいて、乗馬ズボンをぐっと押し下げ、出来るかぎり力をこめて、刃を上向きに突込む。

そして、のびあがりつつ、上へ上へと切り込んで行き、鳩尾まで引廻して抜き取る。切りおろしたのでは、腸が溢れ落ちて見苦しいからである。

氣力がつづけば、右手の刃で腹の中央部深く突き立て、抉つて腹部大動脈を切断し、刃を捨て、胸に手を組んで俯伏す。

そして、どのような苦悶にも乱れず、胸に手を組んたまま断末魔を咏えぬいて初志を貫く。——なんという勇ましき。でも彼女にも、やり通せる自信はないのだった。出来るところまでやる——。これが現在の彼女の悲願なのだった。

死のテスト

道子は、ペーパーナイフで己が腹をさいなみつつける。

「う、ううっ！」

「ああ、あ、あ……」

プレイは白熱化して行った。

「ウウム、ウーッ」

という絶叫が、思わず彼女の唇を洩れて行く。

意外なことがおこった。

突然、独房の扉があいて、数人の看守が雪崩込んで来た。本当の自決と間違えたのだ。

いいようのない恥しさで、流石の女丈夫も思わず頬を染めてしまった。

しかし、これが自決の稽古とわかったとき、

看守たちが怪しみもせず、失礼を詫びたことは、まだしも幸わせであった。道子は落着きを取り戻し、看守に切腹の方法を、美しい微笑と共に説明する頃には、看守たちの目には、道子の男装が、まぶしいほどに神々しく映っていた。

道子は、その場を取りつくろって、かえって看守たちを感激させてしまったのだ。

道子の心の秘密は、遂に看守たちには測りかねたのである。

疲れた道子は、そのままベッドに横になって居た。眠れはしなかった。明朝には、道子は自ら選んだ激しい試練の中に突込まなければならぬのだ。

どこまでやれるかしら、取乱さずに死ねるだろうか。

心配だった。

無意識のうちに強く握りしめている右手の拳が、ぐっと、武者ぶるいした。

頼むぞ、右手……。

祈りをこめて握りしめる道子の心は、女乍らも若武者のそれであった。

何度も、何度も寝返りを打った。

そして、まんじりともしないで迎えた暁。

道子は、がばと起上って服装を点検した。

そして最後の化粧。髪は、ぐるぐる巻きにしておいて、ピンで抑え、白鉢巻をした。介錯を頼む場合の用意である。

乗馬服の死衣裳に身を固めた道子。

白い鉢巻が、くっきりと生えぎわを区切る。やがて、迎えの獄吏に導かれて、道子は静かに独房をあとにした。

燃ゆる臓腑

刑場では、型通りの式があった。道子は特に、異例の切腹を許され、割腹用には、司令官の軍刀が与えられたのであった。

軍刀は、大きくて引廻すというより、体の方を動かさなければ切れそうにもなかった。

道子は、それでも司令官の厚意が嬉しかった。道子は、云った。

「松野閣下の御厚志、忝くお受けいたします。

この上は、思うままに腹かき切り、祖国の弥栄を祈り奉ります。介錯は、原則としては不要でございます。私に氣力が失せ見苦しい死に様となりましたときだけ、それも私が介錯を、と申上げますまでは、お捨ておき下さいますように。

女乍らも、男と同じ切腹で護国の鬼となる私、恥しいのですけれど、このような男装で

逝かせていただきます。

ただ心残りなのは、和田のこと……。今日にも、吉報がありそうに思えてなりません。私、今日の死は、どなたをお怨みもいたしません、無実のまま逝くのが……残念でございます……。いまわのきわでも結構です。吉報があったときは、すぐ、この耳へ……。お願いいたします。」

これこそ、彼女の最後の希いなのだ。

執行官たちも、彼女に罪はない、とは思っている。しかし、部下に裏切者を出した責任は当然、彼女のものである。その裏切者を、最後まで信じている彼女を哀れなものである。思っているのである。

でも、道子は違う。和田は必ず手柄を立ててくれると信じきっているのである。しかし、半歳の流れは弁護の余地もないのであった。道子は、静かに定め場所へ膝をついた。革ジャンバーのボタンが外され、つづいてワイシャツの前が寛げられた。

ワイシャツの下は素肌であった。乗馬ズボンは悩ましいまでに押し下げられて、ベルトで締めつけられた。

用意の軍刀は刀身に、きりきりと白布が巻かれ、刃先が無気味に光っている。

「……では、いざぎよく参ります。高倉道子、只今より、切腹！御機嫌よう！……。……ッ。……ッ。……ッ。」

何度も何度も呼吸をはかった道子。

オウツという気合もろとも、体をたたきつけるように軍刀を脇腹へ突込んで行く。

ああ、もう、どのような説明も、道子の凛々しい最期を表現出来はしない。

前日練習したあのコースを、いま道子は必死になって切り進んで行くのだ。

「うっ、うっ、……むうっ……」

「う、う、うううっ、ううむっ！」

「ああっ、あうっ、……た、高倉……道子。

十、十文字腹……き、き、き、切り……完せた……。き、切り、とげ……ました……。ウ

ウム、ウウム、ウウム……」

（上官に抱き起こされた道子）

「む、むう、むう、は、はやく、死、死にたい。ううむ、ううむ」

道 遠 し

高倉道子の死は、刻一刻と迫って行く。でも、この劇的な最期は、もっと劇的な結末に終る筈になっている。

道子が、ものの見事に腹十文字に掻き切り

乗馬ズボン姿をのたうって苦しむ頃、新しい事件がおこっていた。

それは、和田が帰って来たのだった。

おそかった。道子は、朱に染って悶えるばかりであった。

和田帰るの急報を受けた執行官は、道子の手を抑えて、とどめの刃を待つように耳もとで叫んだ。血の気の引いた道子の頬に、紅の色がさした。

「む、むう、ま、待ちます……待ちます……つ、つづく、かぎり……」

道子は薄れて行く意識を呼び戻しつつ、必死に泳ぐのであった。

司令部から、この刑場までは一時間は、かかる。このままで待たせることは不可能だ。

医師が呼ばれた。でも道子は、医師が「手当」することを強く拒んだ。もう決して助かりはしない。それよりも、毒でもいい、注射を打って、和田の来るまでもたせて下さい。道子は、こわばる舌で訴えつつけるのだ。

灼熱の乗馬ズボン

医師は、執行官と相談して、劇薬を打つてもたせることに決心した。

もう助らぬのは目に見えていた。執行官も

いまは、必死である。彼女の消え行く灯を守りたい気持ちなのである。

注射器に劇薬が充たされた。

だが、のたうち廻る道子のどこへ打つことができようか。

医師は、決心したように、悶える乗馬ズボンをしっかりと抑え、俯伏せに苦しむズボンの上から突立てしまった。

ズブッ。

厚地のズボンを貫通して、針は道子の体へ入った。

薬が流れ込むにつれて、道子は、いいようもない苦しみに襲われて行った。

「あ、あああ……。あ、ああああ……。」

薬は道子の薄れかけた意識を呼びさまして行った。苦しげに、のたうつ道子の眼が、かっと見開かれていた。

毒を以て毒を制す、と云う言葉の通り、彼女は、劇薬の刺戟を受けて失神を免れているのである。はげしい薬の刺戟に道子の五体は灼けつくような苦しみであった。

「ああッ、ア、むむッ……ウムーッ……ああッ……。」

彼女は、取り乱すまいと、歯をくいしばって喘ぎつつける。

おびただしい出血のために、乗馬ズボンは唐紅に染った。厚地のズボンが血汐を吸って、ごわごわと、きしんでいる。

「う、ううむ、死、死ねぬ……。」

和、和田……和田……ま、待っています……待って……居、ます……。和、和田、和田、ウーッ！」

苦しい息の下で、深傷に屈せず、部下の名を呼びつつける女将校。

ああ、再び彼女の両眼が力を失った。

……でも、和田は、まだ来ない。

更に強力な注射が打込まれるのだ！

「ああッ！ く、くくくく……。」

道子は、あられもない姿で悶えた。

乗馬ズボンの両脚を宙に泳がせた。そして空をつかみ、ジャンパーのボタンを掻き撈っての



けぞった。

凄惨な、そして妖しい美しさであった。

劇薬の注射に、のたうつ男装の麗人の苦しみに、鞭打ちや縛りでは及びもつかないサディズムの極致があった。

それは、彼女の健気さによって美しさを増して居た。苦悩する彼女の顔のゆがむのさえ壮烈な最期にふさわしい、妖しい美しさであった。彼女は凛々しい男装に身を固めたまま劇薬のムチ打ちに勇ましく対決しつづけた。失神しようにも、この苦しみは、そのスキさえ与えないというのが、本当のところだった。

「ウーッ、ウーッ、も、もっと、もっと、う、打って！ キ、キ、キ、キ、氣力が……つ、つづかぬ、は、はやく！」

ああ、なんという壮烈さ。もっと打てと叫ぶのだ。

立会う人々も、思わず目を伏せた。

医師の針が、ズボンを貫いた。

「オウッ！」

今度は彼女も心構えが出来たものか、気合に似た喘ぎを洩らすのであった。

「う、ううう……。む、むむむッ！」

……しかし、この三本目は、彼女の生命を

奪って行った。

彼女は、体をおこし、美貌をひきつらせて激しく喘ぐ。

そして、口元から一筋の血が流れた。

白鉢巻は飛び、生えきわからは、玉のような脂汗が流れつづけている。

「ウー、ウー、ウーッ、く、く、くるし……。な、なんの……なんの！ く、く、くくくくッ！」

両眼は、飛出すばかりに見開いている。でも、もう立直る力さえないのだった。

弱り果てて行く道子。気はあせるばかり。

「う、うって、打ってーッ！」

……医師は、もう方法がないのだ。この薬が、きれれば臨終である。

四本目。果して四本目を受付けるだろうか。ズブッ！

「オウッ！ ウムーッ、ア、アアッ、灼く、灼く、こ、こ、これまでかッ……和田、和田、ざ、残念……。シ、シ、死んでも、死んでも、ウーッ、ウーッ、アアッ、死、ん、で、も……。ク、ク、ク……。」

顔は土色になり、男装は血汐にまみれていた。でも、それは異様な美しさであった。

激痛と闘いながら、取乱そうとしない勇ま

しい道子の、断末魔の絶叫がつづく。ぐ、ぐうッ！

ああ、道子は、和田を待たずに散って行くのだ。乗馬ズボン姿の、悩ましい男装が、棒のように硬直した。

薬のために、意識は最後まで明瞭なのだ。

道子は、駆け寄った上官たちの一人々々を吃と見つめている。そのひとみの光が、やがて、遠のいて行くように消えていた。

……断末魔であった。道子の上半身が、どさりと、床に崩れて行った。

絶叫に、ふるえつづけた刑場の空気も、あとは只しつとりとした土の香と、血の臭いを含んで重苦しく静まりかえるのであった。

あまりの壮烈さ、凄惨さに、声もなく、立会う人々も、じっと立ちつくしている。

間に合わなかった……可哀そうな道子。

その耳で、和田の手柄を聞いたかったのだろうに。立会人たちは、せめて断末魔の姿のまま、和田を待とう、と相談した。

道子の死体は、そのまま刑場の床に倒れている。

そして、遂に和田が来た。あまりのことに和田は、人目もかまわず、痛ましい屍にとりすがって男泣きに泣きつづけるのであった。

立会人は一人去り、二人去った。

和田は、生ける人に云うように、自分の果たした任務を、道子の耳元で叫びつつけるのだった。

護国の女神

和田の情報は、日本軍を狂喜させた。これまでの高倉、和田のコンビが、いまは和田ひとりとなったけれど、和田は、この眼で日本軍の勝利をたしかめたかった。和田は、敵城を占領したのを見届けるまで、軍と行動を共にするのであった。

激戦の末に、日本軍は勝利を収めることが出来た。和田は、身の疑いが晴れると同時に上官、高倉道子の遺体を、敵城深く埋葬したいと願いだした。昔、坂上田村麿の死体は、皇居に向かい直立して埋葬したと伝えられる。いま和田は、道子の体を、そのようにして葬りたい一心であった。

上官たちも、勝利を見きわめるまで道子の死体を棺に納めて刑場に安置して居た。

従卒が交替で、ドライアイスを入れた棺に入れつけた。

道子の遺体は、棺の中に仰臥され、看護婦たちの心づくしの化粧に、眠るような死顔を

見せていた。最期の服装のまま乱れを正し、

手は胸に組み、作法通りの遺体となっていた。ただ違うことは、りりしい乗馬ズボンを、どす黒く染めている血のあとであったけれど。

棺はトラックにのせられ、占領全く成った敵城ふかく運び入れられた。

死体は棺から鄭重に運び出された。ほのかな異臭が漂い、乗馬服に包まれた全身は、ぐったりとしていた。

褐色に変った乗馬ズボンの血の色が人々の心をハッとさせるのだ。手も血で、こわばっている。蠟人形のように、しかも、ほのかに死臭の漂う男装の麗人の遺体……。

「護国の女神」

それは本当に、そう呼ぶにふさわしい名前だった。きりりと身を固めた乗馬服、りりしい顔だち、そして男も及ばぬ殉国の切腹――。

いま、その遺体は、妖しい美しさ、悩ましさを秘めて、静かに埋葬されようとしている。

土が、穴の中に直立させた道子の乗馬靴を埋めた。そして、血みどろの乗馬ズボンも、ジャンパーも、美しく化粧した死顔も、やがて黄土の下に消えて行った。

突然、銃声がおこった。和田であった。

和田は、拳銃でこめかみを打抜き、のめる

ように穴の中へ崩れて行った。

赤い赤い夕陽が、立ちつくす軍人たちの影を、長く大地に這わせて沈んで行った。

(終)

切腹だけでなく、劇薬の苦しみをヒロインに与えて見ました。劇薬が、果してこのような時に用いられるものかさえ、私には分りませんが、鞭打ちの一つの変型といった感じが出せればと思っています。(秀緒)

◎女体切腹フオート◎

腰元 自刃

略号(こし)

大判判印画紙焼付 六枚一組

村井知可子 八〇〇円

禪美 切腹

略号(こせ)

大手札型印画紙焼付 二枚一組

愛川 悦子 二五〇円

切腹のプレイ

略号(れい)

大手札型印画紙焼付 三枚一組

愛川 悦子 三〇〇円

女性 自刃

略号(ししん)

大手札型印画紙焼付 三枚一組

愛川 悦子 三〇〇円



私の旧聞帳

須藤 律 夫

普段、目一杯、仕事に追われていたが、お正月は流石に若干の余暇に恵まれ、昨年、後半のスクラップに目を通して見た。抄出したものは何れも別段、目新しいものではないが、本誌の読者には或は御参考になるかと思ひ、全部、原文のまま書き出す事にする。文中の切腹記事については、掲載紙によって様々の違いがあるが、その中での詳報をとる事とし、OS劇場の記事については誌友の方からの詳報を期待している。年もあらたまつた一九六〇年、題して「私の旧聞帳」といったところ。

(一) ビルマの農婦切腹して出産

(三十四年八月二十一日附、内外タイムス)

ビルマで三十歳の農家のおかみさんが、自分の手で自分のお腹を帝王切開し、無事、子供を産んだ。

ビルマ中部のメイチクラから二十日、伝えられるところによると、妊娠十カ月のマ・パさんは仕事にかかろうとすると急にお腹が痛み出した。ところが夫は留学、家には子供が二人だけ。マ・パさんは長さ六十センチの刃物を取り、自分のお腹を切開、こどもを取り

出した。こどもを産着に包み終り、自分も毛布にくるまると、彼女は氣を失った。

赤ん坊の泣き声で近所の人がかけてつて、血まみれのマ・パさんを発見、母子は荷車にのせられ、四時間かかってメイチクラの病院にかつぎ込まれた。外科医の処置で母子の生命は助かったという。(UPI共同)

(二) スクリューに腹を切られる

競艇選手が海に落ちて

(三十四年八月二十二日附、毎日新聞)

二十一日午後一時ごろ東京都大田区入新井

一の一〇三五、平和島競艇場で第三レース発走直後、最初の曲り角で先頭を走っていた五番艇Ⅱ鈴木成彦選手(二八)三重県、競漕会所属、三重県津市三重町津興Ⅱに、二番目を走っていた三番艇Ⅱ岩月一男選手(二四)愛知県競漕会所属Ⅱが追突、鈴木選手は海中に落ち三番艇のスクリューに腹を切られ重体。モーターボートレース中、水中に落ちた選手が他のボートのスクリューで怪我をしたのは初めて。

(三) ノコギリで腕を切られる

(三十四年九月三日附、国民タイムス)
二日午前一時ごろ、東京都中央区銀座東一の二、『銀座アイス』前で同町一の一〇、毎日新聞、京橋専売所店員、米倉健さん(二三)は、酔っぱらって帰宅の途中、前記場所、表のガラス戸を壊した事から同店の店員安部恒男(三〇)に『生意気だ』とノコギリで左腕に傷を負わされ、近くの京橋病院に収容された。加害者の安部は間もなく京橋署、松山部長に傷害の現行犯で逮捕された。

(四) ビンの破片で割腹

大田飯場で病苦の大工

(三十四年十一月三日附、毎日新聞)

三日午前九時半ごろ、大田区羽田本町六〇六、紀州建設飯場で、大工の中村直吉さん(二八)Ⅱ大田区南六郷一の三Ⅱがショウチュウのビンのカケラで腹を切り死んでいた。蒲田署の調べでは中村さんは結核を苦にして、ふだんから同僚達に『俺は死ぬんだ』といっていた。この朝、中村さんは朝食をすませてみんなが仕事にかかったあとも仕事に出ず、同僚の一人が手袋をとるため飯場に引返して死んでいるのを発見したもの。

(筆者註、ガラスの破片で切腹した例は、曾って『死のう団』など数例あるが、何れも未遂が多い)

(五) 女給を監禁、入ズミ

(三十四年十一月五日附、毎日新聞)
三鷹署は四日午後、三鷹市下連雀二八九、自称、理研映画助監督、桐原大樹(二九)を傷害、不法監禁の疑いで逮捕した。十月三十一日午後八時ごろ、知人の中野区宮園通り二の一七、女給、小倉とし子さん(二〇)を自宅へ連れ込み、八畳の間に閉じ込めて右腕にカミソリで入ズミをするなど全身に二週間の傷を負わせた。小倉さんは一日午前七時ごろ

便所の窓から逃げ出し同署へ救いを求めたものの。

(六) 老女が割腹自殺

(三十四年十一月十一日附内外タイムス)
十一日午前十時四十五分ごろ「東京都世田ヶ谷区喜多見町三一三二、無職、望月幾太郎さんの母、小林せいさん(六八)が玄関横の四畳半で、菜切り庖丁で腹を突き死んでいるのを家人が見つけ、成城署へ届け出た。同署で調べているが自殺らしい。

(七) 高峰秀子の切腹観

(三十四年十二月一日附、朝日新聞)
同紙のかこみ記事に、高峰秀子さんの『切腹と屈服』と題するエッセイ風のもの載っていた。あながち日本女性の切腹観とのみ断ぜられぬかも知れぬが、御参考迄に抄録してみよう。これは又、中康さんから書簡に対する私の御返事でもあるのだ。
(朝日新聞、きのうきよう、欄、所載——)
フジヤマ、ゲイシャ、ハラキリの三つは、世界的に有名だが、中でもハラキリは戦争中の神風特別攻撃隊に形をかえて、若い命を羽毛の軽きにおくことに殉国への本懐とみつけ

ていた。何よりも生命第一に考える外国人にとつては到底、理解の出来ない程の驚異と神秘の的であつたらしい。

戦前、私達が『切腹』という言葉から受けるニュアンスは、刑罰というよりも、真心をひれきするとか、己の責任に死を以て応えるという人間性の尊厳な美風？ として受けとつて来たものであつた。しかし、腹を切つておわびするという強烈な責任感明治以後、政界や一般社会では辞職という安易な、そして無責任な方法によって代行されるようになった。選挙違反の主人を守るために自殺したり、汚職を擁護する為にビルから飛び降りたりする愚行は、いさぎよかるべき切腹が実は双手を挙げての屈服である事を如実に物語っている。(後略)

(八) 第三の穴

(三十四年十二月二十一日号、週刊文春)
大阪のトビタOS劇場で、二十数人の踊り子のお臍コンテストを行なつた。晴れのミス、お臍の栄冠を得たK嬢のお臍は、間口二センチ、奥行五センチという堂々たるもの。K嬢が優勝の弁に曰く、『便利だわ、聖徳太子の一枚ぐらいならまるめて押し込めるもの』

(筆者註、このデータが若し事実だとしたら誠に素晴らしい美事なお臍である。臍相学では拇指の爪がすっぽりとかくれれば一応、金銭的に安定した吉相なのだが、深さ五センチとは私の統計では最深のものだ。読者の中、こうしたデータを御存知の方があれば是非、御教示戴きたいと思う)

(九) 住職割腹自殺

養子縁組、断わられ

(三十四年十二月三十日附、内外タイムス)
二十九日号、台東区坂本町一の一六、静蓮

寺住職、中沢光蓮師(五八)は、自宅の台所で出刃庖丁を腹に刺し自殺しようとしているのを家人がみつけ、附近の病院へ運んだが、三十日午前七時ごろ死んだ。坂本署の調べによると、中沢さん夫妻には子供がなく、養子を貰う事になっていたが、最近、きまりかけていた縁組みが先方から断わってきたため、ひどくふさぎ込んでいたという。中沢さんは、テンカンの持病があり、半年程前にもハサミで腹を刺し、隅田川に飛び込んで自殺を図った事もある。

——完——

女体責 写真厳選集

大手札型印画紙焼付 各三枚一組二五〇円
口絵に掲載不可能なる力作
中より厳選した粒選り品。

危機一発 (絹川文代) 略号「きき」

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手に引きはがれようとするパンティ……

女体開陳 (絹川文代) 略号「かい」

美しい女がきびしい縄目に足の指をくの字に曲げての喘ぎようは……

哀花悶々 (絹川文代) 略号「あい」

白く輝く柔肌をぎりぎりとタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿……

雁字搦目 (絹川文代) 略号「から」

首、胸、腰、股とガンジガラメに喰い込めとばかり滅茶苦茶に縄をかけられ……

寝室俯瞰 (愛川悦子) 略号「ふか」

ポリウムのある愛川さんの肉体が縄目にくびれて盛り上りベッドに転々と……

柔肌地獄 (大塚啓子) 略号「やわ」

押せば凹こみ放せば弾き返す張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈して……

マゾヒズム百景

馬場好男

第二十八景 人馬競争

昨春秋、旧制中学時代の友人の招きで彼の郷里M市を訪ねた時の事だ。此処は温泉町なので芸者の非常に多い処で、それだけに各地からいろいろの客が集っている。

私が招かれたのは別にこれと云った理由もなかったが、まあそこらの温泉に行くのなら、十数年振りの対面がしたいから是非、来てくれと云う彼の手紙に、ついその気になって出かけた訳である。それに彼の商売が此の温泉町の旅館の主人ときていたから私も又、一石二鳥的なものを狙ったと云う処だ。離れの一番いい部屋をあてがはれた私が、一夜を彼と四方山話に語り明かした二夜目の事だ。

私の離れの部屋から、日本風の庭園を通して見える大広間に或る土建会社の慰安宿泊旅

行客と云うのが宴会を開いて居り、芸者も十四、五人から入って、なかなか賑やかな騒ぎぶりなのである。始めは皆が一緒になって、歌ったり踊ったりしていたが、やがて、あちこちで野球拳をやる組あり、ダンスの組あり、三味線相手ののど自慢ありで、その面白い様子が私の部屋から手に取る様に見られるのだ。その代り、そのうるさい事も天下一品で、友人が恐縮がっていた位だが、彼の店にとつては年に数回のよいお客とあっては私も又、それとは云えず、事実、一人寝の私には、みているだけでも面白く決して迷惑な感じは全然なかった。ところが、しばらくして友人がその心配はいらないと云うのに気を利かしたと云うのか、一人の芸者が私の部屋を訪ねて来て、さしむかいで話し乍ら飲み始めたのだ。まだ若い妓で、何処となく愛くるしい感じで

洋服でも着せた方が似合う様な現代的な顔だちで、その顔の故か、話す事も明るくて、ハキハキとしているので、いつか私も大広間の騒ぎを忘れる程に、彼女との話に夢中になっていたのだ。

処が彼女が「あら、おむかいさん達、お馬ごっこを始めたワ」と云ったので、私は大広間に気がついたのだが、全く思いがけなく、いい光景を見てしまった。それは三十人近くの客から選ばれたのか自分から出たのか知らないが、十人位のゆかたの男達が四ツ這いの馬になり、各馬の背には芸者が一人一人すそをはしよって跨っていたのだ。そして部屋の端から七、八十畳敷きの細長い向う端までを往復すると云う人馬競争なのである。

「負けるな、頑張れ」

の酔客の大声、笑い声、そして馬上の芸者の嬌声、全く先刻の騒ぎを通りこしての乱痴気騒ぎで、私は夢中になって身体を乗り出してしまった。いつも自分の胸深く、こんな事が出来たらと欲望を持っている私には、皮肉にもその機会がなかなか来ないで、M的要素など全くなさそうな土建業者の面々が、女の馬になって悠々と得意そうに這い廻っている。

世はままならぬと、それでも眼を輝かして此の光景を、うつとりと眺めていたのである。

そして私の部屋に來た妓の話で、此の人馬競争は、二、三組の団体客が恒例の様にしているところかで、勝った者には賞金がついているらしい。そして此の遊びのヒントと云うのが、五、六年前に上映された、アメリカ映画、デートリッヒ主演の「欲望の谷」(本誌にも既に紹介された)からと聞いて、私は映画の持つ大衆的な大きな影響を知ったのである。此の「欲望の谷」の酒場での人馬競争のシーンを見た時、私は全く異様なショックにうたれて、同じ映画を二度も三度も見、女を騎手とした此の男の馬が這い廻る姿を、いつまでもいつまでもと脳裏にきざみつけたものである。それが数年にして目の前に、あられもない(我々にはあられもないと云う表現では物体ない)此の姿を、ありありとみて、再び云い知れぬショックを受けたのだ。

「此の春、私もあの会社の方達だったけど、騎手になったことがあるのよ。でも私って此の通り大柄でしよ、だからお馬がつぶれてしまって動けなくなって、ドン尻だったワ」

と私の耳許で、私の部屋に來た妓が、ささやいたので、私は思わずまじまじと、いたず

らっぱい眼をしている彼女の顔を見返したが私はその妓の手を、そっと握ったまま黙っていた。大広間の方では人馬競争の勝負もついたりみえて、笑いさざめく男女の声を高々とあげ乍ら、又元の様に席に着いて終宴となるらしかったが、大の男の背に跨って、鞭打つ身ぶりよく嬌声をあげていた芸者達の此の遊び馴れた姿がなかなか消えず、馬になりたい自分の気持が、どうしても出せない皮肉さをつまらなく思っただけである。

尤も見ることが出来ないと思っていたものが見られた時代なら、願ひ事が叶えられなかったものが、簡単に成就出来る時も、或はあるのかも知れない。とにかく人生は如何に生きるのも一生なら、やはり自分で楽しく生きるのが利口かもしれない。いつまでも若く長く――

第二十九景 私私私の馬乗考

本誌に連載された馬化白書を、私は興味深く読み、筆者のたんねんな記録の集大成は全く我々M系に又とないもので感謝している。さてM系にも種々あるが、要するに「馬化」と云う事が根本かも知れない。尤も、私の性癖と此の馬化白書が、ぴったり合致したから、そう思うのかも知れないが、とにかく私も「馬

化」である。馬化、即ち馬乗り。私は子供の時から此の馬乗りと云う言葉には非常に、面映ゆい気持をもって育ってしまった。自分が女性から馬乗りになりつかけると云う事を念願にしていた故か、馬乗りと云う言葉が出る、もう胸のときめきを感じたものである。

誰にも迷惑をかけるわけでなく、又悪い事をしたわけでもないのに、此の言葉を口にすると、そんな気になる妙な言葉だったのだ。どうしてそうなったかと云う事は別の機会にと云う事にして、難しい意味の馬乗考でなく、私の馬乗考に私自身が酔ってみたいと思う。

A夫とB子はとり組めたまま、どおっと砂上に倒れて争った。――が勝敗は、かんとんに決まった。B子がさっと起き上ったとみる間もなく、砂の上に俯伏せに組みしかれたのはA夫だった。片頬を砂に埋めたA夫の背中、どっかと馬乗りになったB子は、もかくA夫の両手を膝でふみしき、両手で上からA夫の首筋をしっかりとおさえて、もう身動きもさせない。A夫は、それでもはね返そうとバタバタと両足をふんばっては砂を蹴ったが、B子は盤石の様におさえつけて、もかくたびに自分の身体は砂の中にめり込んでしま

うのだ。砂が口の中に入り、それを吐き出そうとして眼にとび込んで来る。顔をあげようとしても首すじをおさえられて動かせない。ううと思わずうめくと、

「どうだ、降参か」

B子は勝ち誇った声をあげる。

「ううん、まだ」

と目をあげると、口はキリッと結んでいるが、眼は笑っているB子の美しい顔が自分を見下している。

「ふふふ、強情ね。降参しないと、ひどい目にあわすわよ」

「ええい」

「ダメダメ、もがいたって駄目よ。さあ、どう？」

B子の身体は、ぐいと上の方にすり出しますます強く圧力をかける。

「むむむ」

A夫は顔を砂の中におしつけられ、わずかに顔をそむけて息をつく。両手を動かそうにも、B子の脚におさえつけられて、どうにもならない。

「さあ、どうするのよ。降参しないと人が来てからでは許さないから」

A夫は口や鼻に入ってくる砂を、首を僅か

に動かしてよけていたが、もう動けなく、それに呼吸もろくに出来なくなつて、とうとう悲鳴をあげてしまった。

「降参、降参する、降参する」

「ほほほ、遂に降伏したわね。じゃ、許してあげる。だけど、すぐは許さないわよ」

B子は、笑い乍らA夫の手をふみしく事をやめた。

「ふうふう、ああ苦しかった」

A夫は大げさに、俯伏せのまま、一寸顔をあげて大きく呼吸をした。

「ほほほ、早く降参しないからよ。さあ、今度は捕虜のお仕置よ」

「え？ まだかい。もう許してくれよ」

B子は体をうかせて、不服顔のA夫を強引に仰向かせると、

「すぐ降参しない罰よ」

と笑い乍ら今度は胸の上に跨って再び膝でA夫の両手をふみしいた。

「ううん、く、くるしいよ」

「当り前よ。私だって、五十二キロはあるのよ」

「く、くるしいよ。降参したんだから、もう許してくれよ。ね、B子さん」

「ふふふ、嫌よ、許さない」

「ね、人が来たら困るよ。お願いだ。もう降参したよ」

「とうとう無条件降伏ね。いいわ、勘忍してあげる。その代りA夫さんは私のドレイよ。云う事は何でも聞いて、此の女王様に奉仕するのよ。いいわね」

「ウン、判った。B子さんのドレイになる」

「じゃ、許してあげる」

B子は、ようやくA夫の上から立上ろうとした時、A夫が突然、がばっと起き上り乍ら、B子の足をすくおうとしたのだ。

「アッ」B子は声をあげるや、危うく倒れそうになるのを支え乍ら、A夫の首ッ玉をしっかつかまえた。

「やったわね。ずるいわよ」

はね返しそこねたA夫は又々、砂上に俯伏せに、今度は左手を逆に後手にねじあげられて組みしかれた。

「痛いッ！ ウデが折れる」

「何よッ、反乱の罪は重いよ。さア、どうだ。これでもか、これでもか」

「アッ、イタ、手が折れるよッ。テ、テが」

泣き出しそうなA夫の悲鳴にかまわず、ぐいぐいと手をねじりあげる。さあ、これからどんな折かんが始まるのやら――。

懸賞愛読者原稿
入選作品

或る新劇女劇の受難

間違えられた女

滝沢史郎

○ニセ金

「有楽町、一枚」

多加子は、五十円硬貨を出した。

駅員は切符を放り出すようにし、四十円の釣銭をよこした。

多加子は歩きながら、それを改めてからポケットへしまおうとして、ふと不思議なことに気がついた。四枚の十円硬貨のうち、一枚だけが異様なのだ。ギザギザが全く無いのである。

「あら？」

多加子は小首をかしげて、出札の窓口へ戻った。

「あの……いま貰ったお釣りの中に、こんなおカネが混っていたんですけど……」

と、ギザなしの十円玉を示した。

「それが、どうかしましたか」

駅員は、相変らず不愛想である。

「よく見て下さい。これ、ギザギザが無いです。ニセ金じゃないかしら？」

多加子は、少し興奮していた。ニセ金を発見するなんて素敵だ、と思った。しかも十円硬貨のニセ金——そう滅多にあることじゃない。

改札口の辺りにたたずんでいる人、伝言板に何かを書き付けている人、売店で週刊誌を漁っている人、等々が集まって来た。

駅員は何か、せせら笑いのような表情を浮かべた。彼は積み重ねてある十円硬貨の中から何枚かを選び出して並べて見せた。

「忙がしいんだからね、余り変なことをいわないで下さいよ。お嬢さん、これも全部ニセ金ですかね」

見ると、彼が並べた硬貨は全部ギザギザがなかった。多加子は顔が赤くなった。

「ギザなしの十円玉なんて、もうだいぶ前から出てますよ」

「済みません。……もしニセ金だったら、お知らせしようと思って……」

「ここは警察じゃないんだよ。あんた、探偵小説読み過ぎ症じゃないのかい？」

弥次馬が、ドッと笑い崩れた。

多加子は顔から火の出る思いがした。あわてて、その場を離れ、駅の内へ逃げ込もうとした。

その時、弥次馬の中の一人と正面衝突をしてしまった。相手は若い外人の女で、彫りの深い顔立ちの美女だった。眩しいような金髪である。

「あ、御免なさい！」

思わず日本語で詫びた。すると相手は驚くほど流暢な日本語で応えたのである。

「いいえ、構いません。……日本の男はレディーに対して失礼ですね。わたくしもギザギザのない十円を見て、不思議に思いました」

「あの……失礼いたします」

多加子はその女に背を向け、改札を通過して小走りに階段を上って行った。

（全く、ツイてないわネ。多加子、どうかしてるんじゃない。しっかりおしよ！）

自分を叱りつけてみた。

多加子とは新劇女優の卵である。まだ研究生で正式の劇団員ではないのだが、そこは群小劇団の有難さで早くも役が付いた。

今日が初舞台である。銀座のガスホールで公演がある。出場は少いが割合に重要な役を貰ったので、張切っている。

電車がホームへ入って来た――。

乗って暫く経ってから気がついたのだが、多加子のすぐうしろにさっきの金髪の女がいた。

美しく微笑んで軽いウインクを示した。

（イヤだわ……）

全くバツの悪い失態だった。多加子は、ゆっくりと前方の車輛へ移って行こうとした。気を静めないと初舞台で失敗するかも知れない、と思った。

連結部の扉をあけた時、金髪女が続いて入って来たので、多加子は驚いた。跡をつけられているような感じがした。

「あの……何か御用ですか？」

多加子は相手を睨むようにして訊いた。

連結器の上。扉と扉の間の狭い場所は電車の中の密室みたいだ。

そこに緊張した空気が流れた。

「……前の方が、坐れそうですね」

金髪女はいい捨てて次の扉をあけ、静かに歩いて行った。気味の

悪い程に日本語の巧い外人だった——。

○ 初 舞 台

客席は八分ぐらゐの入りだった。

赤字は覚悟の公演である。多加子も前売券を一生懸命に売り捌いた一人だった。

劇団員は、映画やテレビやラジオの仕事をして、そのギャラの何割かを積み立てておく。

年に一度か二度、自分達の舞台を踏むためだ。見て貰うことが第一の目的であり、利潤の問題は二の次だ。

「旭日日報と芸術新潮の記者が来ているぞ」

「映画の白沢監督とスカウトらしい二人連れもいる」

「だからといって、オーバア・アクション大熱演はいけませんよ」

「気にしないこと、気にしないこと」

楽屋の噂は、やはり客席のことになる。

「外人の女が来とるぜえ。あいつ、セリフわかるのかなあ」

誰かが、そんなことをいったので、出番を待っている多加子はギリとした。

だが、偶然に別な外人の女が来たのだらうと思った。電車の金髪女は、やはり有楽町で降りたのだが、その後は、歩きながら振り返ってみたが『追跡』はされていなかった。

「多加ちゃん、出だよ」

「はい」

多加子は気を落着けるためにコップに半分ほどの水を飲んでから舞台へ出て行った。

足が少し震えたが、間もなく度胸がすわって来た。

ライトに照らされた舞台へ立つと、客席は暗くてよく判らない。

あとは、ただ夢中であつた。

演出された通り、また自分の考えた通りの演技を懸命にやっただけである。

劇の途中で退場する役だ。

楽屋へ戻ってから、俄かに汗が出て来た。

舞台の袖から見ていた演出部の青年が、

「割合に良かったよ。あれだけ演れれば及第点だ」

といいに来てくれたので、感激した。

「カーテンコールが有るから、顔はその儘でいいんだよ」

と注意して、彼は去って行った。

入れ違いに経営部の者が顔をのぞかせた。

「多加ちゃん、君に逢いたいって人が来てるよ」

「わたしに？」

振り返った時、肥満した中年男が姿を現わした。見知らぬ人間だった。

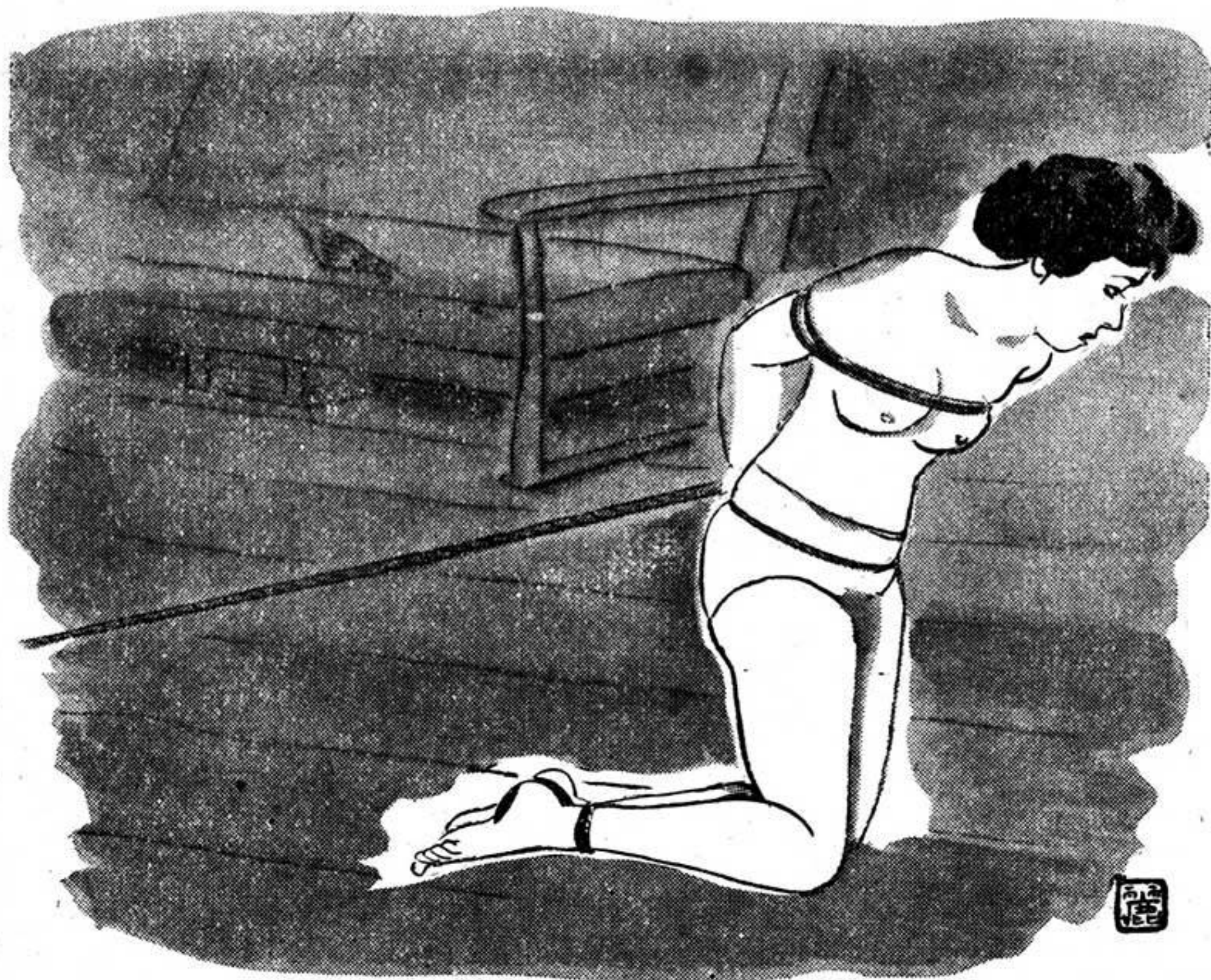
「何か……」

「私は映画社のプロデューサーをしている田中という者ですが、あなたに是非、お願いしたいことが有るのです」

「何ででしょうか？」

「無論、仕事のことです。実は今、準備中の写真に新人女優で行きたい役が有るのですが……」

多加子は、夢かと思った。初舞台を踏んだ直後、映画から誘いが来る——こんな幸運が有ろうか。



「そうですね、ここでは話もできません。ちょっと表へ出ませんか」

「はあ。……でも、芝居が終った後、出演者全員が舞台から挨拶をしなければなりませんから」

「あと、どのくらい、かかりますかな？」

「一時間ぐらいですけど……」

「何だ、それなら構いませんよ。二、三十分も有ればよろしいよ。さ、出ましょう」

「ええ。でも、ちょっとお待ち下さい。化粧を落しますから」

「いや、その儘でよろしい。その儘の方が却って良いでしょう。会わせたい人が有るのでね」

「そうですか……」

多加子は、映画監督にでも引き合わせるのだろうと思ってメーカーキャップの儘でコートを羽織った。

セカセカと、太っている割には早く歩く男である。裏の出口に高級車が待っていた。

「お乗りなさい」

多加子は、こんな車に乗るのは始めてだった。車は滑るように走り出した。

「あの……どこまで行くのでしょうか？」

「すぐ近くですよ」

男は車のスピードをぐんぐん上げた。

ところが間もなく不意に急停車したのである。

そして多加子は車の外を見て、アッと驚いた。そこには例

の金髪女が冷然と立っているのだ。

女は素早く乗り込んで来て、多加子の横に坐った。

「余り、世話を焼かせないで下さいね」

女は正面を向きながら低声でいい、多加子の脇腹に何か固い物を押し付けた。

ピストルであった。

○ 金 髪 女

「いくら欲しいの？」

金髪女はピストルを弄びながら、そんなことをいった。

多加子は途中、眼隠しとしてセロテープを両方の瞼に張られ、黒眼鏡をかけさせられて運ばれたので、ここがどこかはわからない。

閑静な高級住宅地——時間の経過から考えると、世田ヶ谷から大森、あたりかと思われた。

車を降りてから玄関まで歩く間が大分長かった。そしてここは豪華な応接間だ。つまり、大邸宅へ連れ込まれたのである。

「何のことか、判りません。一体、わたくしをどうしようというんです！」

「とぼけてはダメよ。あんたは報酬を受け取っている筈でしょ。その上、私達を相手にもっと荒稼ぎをしようというの？」

「一体、何の話ですか……」

「出す物を出せばいいの。早くお渡し！」

「何か感違いをしてるんですわ。わたくし、渡す物なんて何も持っていないません」

「図々しい女だこと。私達の組織は、そんな甘っちょろいもんじゃ

ないのよ。あんたはタカ子でしょう？」

「ええ、羽田多加子ですけど……」

「駄でニセ金騒ぎを上手にやったわね」

「上手も下手もないわ。お金のことをよく知らなかったんです。それが、どうかしまして？」

「やっぱり、芝居をやるような人は違うわね。このピストル、サイレンサーといってね、音のしないピストルなのよ。怖くないの？」

金髪女は腕をのばして、銃口を多加子の胸の中央へ押し付けた。

「さ、お出しなさい。お金は、あんたがねだらなくても、少しなら私の方からも出してあげるつもりだったのよ。十万もあれば満足ですよ」

ますます訳がわからない。まるでスリラー映画みたいだ、と思った。

「とにかく……乱暴はやめて下さい。人違いなんです。わたくしは羽田多加子、二十三才。新劇の研究生……。あなたのいうタカ子とは違うんです」

「羽田、なんて巧く付けたじゃない。羽田空港の羽田でしょ？」

「そうですけど……」

「いい加減にしないと、ひどい目に遭わせてでも出させるわよ」

「一体、あなた達は、どういう人達なんですか？ 知らないといったら知らないんです。わたくし、帰ります」

「お待ち！」

金髪女は鋭い眼となって立ち上った。

ベルを押す。すぐに現われたのは、贗プロデューサーだった。

「どんな具合ですか？」

「すぐくシタタカだわ。値をつり上げる気なのよ。体をしらべて頂戴」

「承知しました。おい、女。服を脱げ！」

「馬鹿なことをいわないで下さい！ 迷惑です！」

「こっちも迷惑してるんだ。余り手こずらせるもんじやないぞ！」

男は近寄って、ポケットの中からウィスキーの小瓶を取り出した。続いてハンカチを取り出し、瓶のフタをあけて中の液体をひたした。クロロホルムだ。

多加子は掌で顔を掩って、逃げようとした。

だが、金髪女が立ちふさがり、ピストルのつつ先が威圧するように押しつけられた。

「おとなしくするのよ。睡らせてからユックリとしらべてやるわ。」

その方が、あんたも辛くないでしょう」

全く無法である。恐怖と憤りが同時に起った。多加子は抗議をしようとした。

だが、その時、背後から男の腕で首を巻かれ、濡れたハンカチを口と鼻へ押し付けられた。

必死に身をもがいたが、それも束の間で、意識が急速にかすんで行った――。

○ 地下室

肌寒さに、多加子は意識を取戻した。

頭痛と目まいが尾をひいて残っているようで、不快だった。頭を押さえようとして、気がついた。

手が少しも動かない。両手が背中に廻されている。両手首を腰の

後ろで縛られていたのである。

着衣を剥かれていることに気がついたのは、そのあとだった。

眼をあけて自分の体を見た。胸の上にギリギリと縄がかけられていた。

（誘拐されて……脅迫された……人違いで）

漸く、頭がハッキリしてきた。

（そうだ。あの男は私をしらべるといったわ。……すると、意識を失っている間に、あの二人が……）

口惜しさと羞恥が胸の中で溢れてくる。

一体、あの二人は何者だろうか？ ギャングの一味——というような感じとは少し違う。金をふんだんに使って何か秘密の行動をしている外国の女——女スパイ。

（そうだ！ 女スパイの感じだわ。でも、スパイなんて、戦争もしてないのに、弱小の敗戦国日本に存在するのかしら？ しんないとはいえないわ。時々、そういう事件にまき込まれた人の話が週刊誌なんかにも出ていたし……）

まことに迷惑至極な話だが、大変な危険にさらされているのだ、ということがわかった。

多分、あの金髪女は指定の場所、つまりあの駅で誰かを待っていたのだろう。タカコという名前の女で、駅員を相手にニセ金騒ぎをやる。それが目じるしだったに違いない。

だから、金髪女は跡をつけて来た。そして仲間を使って誘拐——こうしてはいられない。多加子は起き上ろうとした。足首も縛られていたので思うようにはならないが、どうにか立ち上った。

天井に蛍光灯がついている。殺風景な部屋で、窓が一つもない。

物置きとして使われているらしい。こわれた家具や埃だらけの扇風器などが雑然と置いてある。

(地下室かな?)

なおもよく見廻すと、スプリングがはみ出た古い長椅子の下に、道具箱が有るのがわかった。鋸の刃が見えている。他にも大工道具が入っているだろう。刃物が有れば、縄を切ることができる。

多加子は両足を合わせた儘、少しずつ跳んで進んだ。とても恋人に見せられるような恰好じやない。だが、必死だ。

三、四回ほど跳んだ時、急に後ろへ引き戻されるような感じが起こって、多加子は転倒してしまった。苦痛と口惜しさに、多加子は唇を噛んだ。

見ると、壁の下の方に鉄の環が打ち込んであり、縄尻はそこへ結び付けてあるのだった。犬のように、つながれていたのだ。

この部屋は、人を捕らえておく場所でもあるらしい。壁には、他にも鉄の環が付いていた。

縄の束や、鎖、足枷のような道具、皮の鞭までが不気味に揃って垂れ下がっている。

(あの鞭で叩かれる……)

そう思うと、ゾツとした。

環の方へ這い戻った。床は板張りだが申し分もなく汚れている。だから自然、多加子の美肌も存分に汚れてしまった。

やっと鉄の環に辿り着いて、結び目を観察した。次に体の向きを変え不自由な手で環を探がした。指が環に触れる。結び目が有る。

手首は深く交叉されて嚴重に括り合わされているため、片一方の手しか使えない。

その上、いやに念入りに結んであるので仲々解けない。首を捻じ曲げたが、見ながら解くのはアクロバットの専門家でない限り、到底、不可能なことだった。

多加子は何度も絶望を感じそうになった。

まだこの後、手首の縄を切らねばならない。扉を開けるのも、たやすくはないだろう。開かないかも知れない。この家から脱出が出来るだろうか? 出来たとしても、埃だらけの体である。困難は幾つもある。

しかし、『絶望的』ではあるにしても、絶望できる場合ではなかった。劇団の稽古場でセリフを度忘れしたのとは訳が違う。

多加子は今にも泣き出しそうな表情となりながら、痺れた手で縄と闘った。

ようやくそれが成功した時は、爪がはがれて、滲しみ出た血が縄をしめっぽくしている程だった。

多加子は大きく吐息をして、グッタリと首を垂れた。

だが、すぐに顔を上げて、長椅子の下のだ道具箱へ視線を走らせた。

○ 軽いリンチ

三、四十分の後――

多加子はようやく縄を切ることに成功して注意深く扉をあけた。

幸い、錠は掛けられていなかった。僥倖である。

音を殺して階段を上がると、そこにもう一つ戸が有った。戸――というよりも襖といえは正確だろう。襖の裏側のような感じなのである。耳をすましてみたが、どうやら向う側に人の居る気配はない。

恐るおそるそれをあけると、目にうつったのは既に夕暮れが近い日本座敷であった。これは、普通の家の造りではない。外側から見れば一間の押入れである。だが、その半分は唐紙をあげれば地下室への入口となっているのだ。

ダイヤガラスを使った窓の内側には頑丈な鉄格子が嵌まっていた。庭からは普通の和室としか見えないのだろう。つまり、この部屋に脱出口はないのである。

多加子は次の部屋へ、足音を忍ばせて入って行った。幸い、ここにも人は居なかった。

洋室である、それも、ベッドルームだ。

派手なダブルベッドが有り、その上を真っ白なシーツが波を打った形で乱れていた。

(何か着るものはないかしら……)

という考えが浮かんだのは、肌寒さの為でもあるが、この格好では逃げ出せないとも思ったからだだった。

どうやら、あの二人はどこかへ出かけてしまったらしい——と多加子は思った。寸秒を争う、という緊迫感よりも、女としての羞恥心が先に立ったのだ。



(洋服箆箆が有るわ! よかった)

多加子は箆箆の扉をあけた。大型の箆箆である。金髪女が使っているのだろう。内には、それらしい服が幾つか掛っていた。その一つを取ろうとした時、表で車の停まる音がした。

(いけない! 早く逃げなければ!)

震える手で金髪女の服を掴み、多加子はドアへ飛び付いた。だが、その部屋のドアは微動もしなかったのである。結局、鍵はこの部屋にかけることによって、地下室の囚人の逃亡を防ぐようになっていたのだろう。

多加子は血の気を失って室内を見廻した。

箆め込みの丸窓が一つ有るだけで、採光は天井から充分に出来るような設計となっている。

モダンというべきか念入りというべきか、まことに周到な建て方だ。

「……ぐずぐずしないで、さっさと歩くのよ」

金髪女の声が聞こえてくる。

進退きわまった多加子は、洋服箆笥の中へ身を隠した。心臓が早鐘を打つようだ。

間もなく、鍵をあける音がし、彼等はその部屋へ入って来た。

「裏切者はどんな目に遇うか、知っているわね?」

金髪女がそんなことをいつている。

「信じて下さい! 裏切りなんかしません!」

別な女の声が必死な口調で何やらしい開らしきをしている。

真っ暗闇の中で多加子は、何か新しい事態が起こったことを察知した。

「約束を守らなければ裏切りよ。日本では、そうはいわないの?」

「ほんの二、三分の手違いなんです! わたしの乗っていたタクシーが事故を起こしたために、指定の時間に少し遅れたんです。本当です!」

「神風タクシーのせいにする気なのね」

「許して下さい!」

「許せないわ。何故タクシーをあてにするの? 確実を期するのが我々の仕事には一番大切なことなのに……」

「どうやら、彼等は本物のタカ子という女と会うことができたらしい。」

「お前が遅れたために、余計な女を一人、ここへ連れて来ちゃったのだぞ! その始末をどう付けるか……無駄な仕事が増えた!」

苦々しげな男の声は、太っちょの臍プロデュウサーだ。

「品物は確かに持って来たのだから、故意にしたことではないのは認めてあげるわ。だから殺したりはしないけど、過失の償いはさせるわよ」

「何でも致しますから……」

「そう。二つの事をして貰いたい。まず最初は、今この場で軽い

リンチをね……」

「リンチ……」

「そう。私はリンチを見物するのが趣味。精々私を愉しませて頂戴」

○ 悪魔の会話

タカ子という女――。

これも美貌であった。年令は多加子より二つ三つ上であろうか。恐怖におののく大きな瞳が印象的な女だが、美しさの中には歪んだ生き方から来る暗い影のようなものが、やはり隠し切れずに漂っている感じである。

「田中。始めなさい」

金髪女は冷然と命令を下だした。

賈プロデュウサーの田中は洋服筆筒へ近付いた。ひき出しをあける。

「ミス・ジェーン。縄を使いますか？ それとも……」

「手錠にしないさい。その方が能率的です」

不思議な問答を交わしたものだ。

田中は、ひき出しの中から手錠と鞭を取り出した。妙な所に妙な物が入っている屋敷である。

「おい、服を脱ぐんだ！」

どうやらこのセリフは、氏の最も得意とするところらしい。

「ゆ、許して……」

哀願の言葉が終らぬうちに、男の鞭が飛んでタカ子を叩いた。

「ヒーッ！」

「服が台無しになるから脱げというんだ。有難がって脱いでみろ！」

女は仕方なく、切なそうに身に着けた物を脱ぎ始めた。

「早くしろ！」

大変な奴等である。ストリップショオでも見物するような調子で、いとも冷酷に催促をする——。

「よし、両手を後ろへ廻せ」

カチリ——と手錠が冷たく二度鳴って、女の両手首は背中で繋ぎ合わされてしまった。

「正坐をして、首を前へ倒せ。ミス・ジェーンは背中の音がお好きなのだ」

勝手なことをほざいて、男は鞭を振り上げた。ピシーッ！

「ああーっ！」

女は髪を振り乱して呻吟する。

白い背中に鮮明な赤い線が痛々しく浮き上った。

その線が縦、横、斜めに次々と増えて行き、重なり合って交錯し数も知れなくなった頃——女は遂に失神して『償い』を完了した。

「……お気に召しましたか？」

「結構な鞭音でした」

茶の湯の挨拶みたいな会話を平然と交わせる暴虐な連中である。

いや、連中というよりも、これは主従のようであった。

男は鞭を投げ捨てて、汗を拭った。

「……この女の始末は、どうしましょうか」

「地下室の女と一緒に、倦きたら処分してしまうのです」

「方法は？」

「ベルリンで仕事をした時と同じやり方……」

「惨々、颯り者にした上で、土の中へ埋めてしまおう……何だか可哀想のような気がしますな」

そういう男の顔は、口とは全く反対である。ニヤ／＼と悪魔の笑いを浮かべているのだ。

「二人とも、日本の女としては美人だから。……でも、大事の前の小事です。仏心はいけません」

洋服筆筒の中の多加子は、愕きの声をこらえるのに必死だった。

それにしても、この女の国籍は一体どこなのだろうか。まるでロイ・ジェームスを女にしたみたいなの、おそろしく達者な日本語である。

○ 大陰謀



「ところで、その大事は、いつ決行しますか？」
「それは、この品物を現像した上で、暗号を解読すれば判ることです。愉しみですね……」

金髪女は未現像のフィルムを掌の上で転ろがし始めた。タカ子が届けた物は、そのフィルムだったのである。

「いよいよ、日本も大騒ぎとなりますな」

「そう。歴史的な重大事件が二つも重なって起るのですから、それこそ……何と云いましたか……そう、テンヤワンヤの大騒ぎでしょう。西海村の原子力研究所が大爆発を起こして、一瞬にして吹っ飛んでしまう。同時に見学に訪ずれた学問好きな日本で一番偉い親子が死んでしまう……」

「すると、日本中がひっくり返るって云う勘定ですな」

洋服筆筒の中の多加子は、驚愕した。危うく声を立てるところだった。

『原研』を爆破する計画なのだ。その陰謀が実行される日に、見学に訪ずれる者……『日本で一番偉い親子』とは誰のことか？

総理大臣親子だろうか？多加子は今の

日本の首相が『学問好き』だという話は聞いたことがない。ソッが無い——というのが特徴の政治家だが、ソッと学問とは関係がない。第一、総理大臣を一番偉いとみる感覚は、現代の日本には通用しない。

とすれば——行きつく考えは一つである。多加子は暗闇の中で戦慄した。

多加子は、無名ではあるが新劇女優の卵である。間違っても国粹主義者なんかである筈がない。だから、大逆とか不敬とか、そんな感じ方をしたのではない。然し、非常にショッキングな殺人計画であることは確かだ。まことに恐るべき陰謀に巻き込まれてしまったものだ。

何とかして、この殺人を阻止したい、と多加子は思った。それには、この屋敷から逃がれて警察へ知らせなければならぬ。忠君愛国——そんな言葉は知らない若さだが、人間として、善良な市民として多加子は、殺人を憎むのである。

「……この計画が成功すれば、日本に大混乱が起こりますな」

「もちろん。それが本部の狙いです」

「それが終わったら、次の任地はどこでしょう？」

「ニンチ？……オウ、仕事先のことね。それも暗号の中に示されている筈です。田中、お前は将来も私と一緒に行動しますか？」

「ミス・ジェーン、もちろんですとも。上海、香港、シンガポール、パリ、ロンドン、モスクワ……貴女の行く所なら、私はあく迄も忠実にお供をしますぞ」

男は不意に、ギョチない仕草で床にひざまずいた。金髪女の足の甲に顔を寄せ、不器用に接吻をくり返した。

金髪女はウットリと眼を細めて、男を見下ろす。どうやらこの二人は、不可解な線で結び付いている特殊な間柄らしい。

だが、それは長くは続かなかった。

金髪女は突然、嘲笑を明らかに浮かべて、男の顔を蹴り上げるような動作をした。

「ミス・ジェーン！」

男は哀しげに眼を上げた。

「私の犬、不恰好なデブ犬。御馳走にはまだ時間が早い。フィルムを現像するのよ。暗室まで四ツ足で這っておいで！」

女王のように尊大な口調で命じ、金髪女は廊下へ出て行った。

男は命令された通り、四ツ足這いの儘でドタドタとそのあとを追うのであった。

○ 本 縄

随分、長い間の辛抱だった。

(今だ！)

と多加子は思った。音をしのばせて簾簾から外へ出た。もう着る物なんかに気を使っている暇はない。

リンチを受けた後手錠の女が床に倒れていたが、今や、そんなことは問題じゃない。

多加子は忍び足で廊下へ出た。

(今のうちに、早く逃げなければ……)

若い豊胸の皮膚の奥が、高波を打つように揺れ騒いでいた。ところが、運は多加子に味方をしなかった。

突然、廊下の一隅に有る電話が鳴り始めたのである。心臓が凍る想いで、多加子は立ちすくんだ。身を隠す場所が無かった。

男が廊下の端に姿を現わし、すぐに多加子を見つけた。

「あ！ この女、縄抜けをしたな！」

多加子は身を翻えして逃がれようとしたが、男は意外な早さで追い迫り、髪を驚掴みにした。

「待て！ とんでもない女だ！」

多加子は足払いをかけられ、その場へ引きずり倒された。とんでもない奴は自分の方なのに、勝手なことを云う男である。

多加子は右腕を背中へ捻じ上げられ、少しの身動きも出来ない。

金髪女は悠然と電話へ出て、横目で多加子を見ながら、何やら外国語で短い応答を済ませた。

男は遠慮会釈もなく多加子の腕を捻じ上げる。多加子は哀しい悲鳴を洩らした。腕が折れるかと思うばかりの激痛である。

「どこまでも世話を焼かせる女だ！」

と男が舌打ちした。

「逃げようとするのは当然。逃げられそうになるのは、こっちの油断です……」

金髪女は妙に静かな口調で云いながら、二人へ近寄った。

「ミス・ジェーン。この女、どうしますか？」

「もう一度、縛り上げて思い知らせてやりなさい。今度は逃げられないように、本縄にかけておあげ」

金髪女は愉しむように冷酷な言葉を口にした。本縄——などという言葉まで知っている奇怪な外人である。

「承知しました」

男は荒々しく多加子を引き起こした。

「立つんだ！ ……歩け！」

今度こそは絶望である。多加子は全身の力が抜けてしまつて、全く男のなすが儘、再び地下室へ追い立てられた。

手荒く突き放され、多加子は床へ倒れた。眼の前に、さつき解いたばかりの縄が散乱している。

金髪女は壁に掛けていた鞭を手にとって、多加子の横へ立った。ゆっくりと振り上げて、烈しく打ちおろす。ピシッ！

引き締った若い肌が鞭の下で音を立てた。

「ヒイッ！」

多加子は床を掻きむしった。

「どう？ 日本のお嬢さん。私の鞭は痛いでしょう？ 逃げるなんて、大それた考えを起こした罰よ……」

ピシッ！

「ヒッ！ ユ、許して！ 叩かないで！」

意地も誇りも捨てて、多加子は、この暴虐な相手に哀願をした。

今迄、親からも折檻などはされたことの無い体である。

「責めないで！ お願い！」

極度の苦痛の前には理窟など役に立たなかった。無抵抗の立場で責めに喘ぐからだだが、その理不尽を呪う心を押しつけて、ただ必死に許しを乞わせるのである。

「素直にする？」

「は、はい……」

「そう。それでは……貴女はこれから、もう一度縛られなければいけないわ。いいこと？」

「許して下さい！ もう逃げたりなんかしませんから、括るのはやめて下さい！」

「駄目よ。貴女はアクトレスの卵だったわね。今からジャンヌ・ダルクみたいな役を演って貰うわ。ジャンヌは英国の兵隊に捕まって縛られるのよ。さあ、両手を背中に廻しなさい」

鞭の先が、多加子の肩のあたりを軽く叩いた。多加子はギクリとして全身を硬直させた。

「さあ、いつ迄も横着に寝ていては駄目よ。正坐をして、胸を張って、手を後ろで組みなさい」

云われた通りにする他はない。

多加子は力無く身を起こし、両手を背後に組んだ。思わずうな垂れて、臉を伏せてしまう。

「田中……」

眼くばせに応えて、男が多加子に縄をかけ始めた。真っ先に両手首を括り合わされる。

多加子は、少しも抵抗を示さない自分の姿が、まるで中世の女囚か女奴隷のようだと感じて悲しくなった。観念する——というところがこれなのか、と思った。

胸へ廻された縄がギリ／＼と締め上げられる。

多加子は切ない呻き声を上げた。

続いてウエストが縄に責められた。更に、二の腕を、縄は止血帯のように圧迫した。

男は、人間を——特に女の体を縛ることに馴れているかのようにであった。

○ ジャンヌ・ダルク

「さあ、どうやら出来上ったわね。本縄のジャンヌ・ダルクさん、何か即興でセリフでも云ってみたら？」

金髪女は面白そうに云った。

火刑台上のジャンヌ・ダルク——大がいの女優が憧れるというその役を、多加子も生涯に一度は演じてみたい、と思っていた。

金髪女がそんな言葉でからかったのは、もとより偶然の暗合である。

だが、多加子はそんな姿にされながら、何やら奇妙な心の疼きが起るのを覚えていた。

晴れの舞台で、冷酷な縄目に喘ぐ奇蹟の処女ジャンヌを演じてみたい——若し、そんな素晴らしい主役が貰えたならば、本当に括られた儘でリアルな演技を示してみたい。縄目や鉄鎖の痛さぐらい、何時間でも我慢できるわ——。もし、仮りに、これがその舞台であり、大勢の観客が私の哀れな姿を見守っているのだったら、どんなに倖せだろう——。

「……こいつ！ ウットリとしてやがる！」

烈しい平手打ちを両頬に受けて、多加子はハッと我に帰った。

現実の自分は、理不尽な縄目を受けて冷い床に引き据えられている哀れな女囚でしなかった。

だが、多加子は感じていた。苦痛と恐怖と羞恥の他に、現在、自分の心の片隅でうごめいているこの戦慄的期待は、一体、何を意味するのだろうか——と。

自分はこれから何をされるのか——と不安におののく心の蔭で、

いま一つ、恐ろしいことをされるのを待っている妖しい心がひそんでいるのだ。

(わたしは、いじめられることを欣ぶ女なのかしら?……)
と考へて、多加子は自分の心理状態の奇妙さに愕ろいた。頬が朱



く染まって行くのを、多加子は自覚した。

「フッフッフ……このジャン・ダルクは羞ずかしがってばかりいて一向に芝居っ気を見せませんな」
男は云いながら、多加子の膝を踏みにじった。多加子は身悶えした。背中へ固定された両手首の先の十本の指が、虚しく屈伸して宙を掻きむしった。

紅い唇から切ない呻き声が洩れる。

いっそ、猿轡でも簞められていたら、こんな声を聞かれずに済むのに——と脳裡にそんな考へがチラリと浮かんだ。

「まだお仕置が不充分のようね。足枷でも簞めて、その壁へ吊るしてしまふといいわ」

金髪女が新しい命令を出した。

男は壁に掛っている鉄の足枷を取って、囚女の足へ嵌めた。両足の間が三十センチ程の鎖で連結されている。西洋の奴隷にかけられる戒具のような物である。多加子は混濁した眸でボンヤリと自分の足首へ嵌められた枷具を見た。

男は縄尻を、高い所に有る環へ通して、釣瓶のように多加子の体

を吊り上げ始めた。

多加子はわずかに身をもがいたが、既にどうにもならない。肌が壁にこすれて傷付く。

十四貫の若々しい躰は、肥満した男の力でグイグイと吊り上げられ、足の下一尺ほど床から離れて宙に固定された。

「それでいいわ。邪魔者のタカコ、その恰好では、ハリイ・フーデエニイでもない限り、自分の力では縄抜けはできないわよ」

金髪女は面白そうに云った。

ハリイ・フーデエニイとは、手錠抜けや脱獄の名人として有名だったアメリカの奇術師のことである。

自分の体重が身を責める苦しさに、多加子は哀しい呻吟を洩らした。足枷の鎖が音を立てる。吊られてみて始めて涙が頬を伝わった。

「あとは、あの女にやらせましょう。私は直接的な人殺しは嫌いだから……」

冗談か真面目か、それとも、いくら練達はしていても、やはり他国の言葉だからなのか、この金髪の女スパイは時々妙なことを云う、

二人は階段を上って行った。

絶対絶命の多加子を襲ったものは、先ず痛烈な後悔だった。

贗プロデュウサーが楽屋へ来た時、余りにも相手を信用しすぎたのだ。あの時、男は名刺も出さなかった。映画へ出演する喜びは確かに大きい。だが、誰か劇団の先輩に一言でも相談すべきだったのだ――。

軽卒な行動が、取り返しをつかない災難を招いてしまった。

「明さん!……」

多加子は思わず、恋する男の名を呼んだ。

○ 必死の説得

何度か気が遠くなりかかったが、

多加子は辛うじて意識を保ち続けた。

どれ程の時が経ったのかは、もはや知る力が失せていた。

すぐ近くで女の声を聞いて、多加子はボンヤリと眼を見ひらいた。

リンチを受けた女――タカ子が目の前に立っていた。傷だらけの女豹のような凄艶な表情でサイレンサアを構えているのだ。

「よく頑張っていてくれるわね。貴女も可哀想だけど、わたしも貴女のお蔭で非道いリンチを受けたわ。気の毒だけど……これが暗黒街の掟なのよ。死んで頂戴」

「ま、待って! 待って下さい!」

「何か云い残すことでも有るの?」

多加子は残り少ない体力を全部この一刻に使い果たしてもよい、と思った。

「有るわ。聞いて頂戴! 貴女は、あの二人を何だと思ってるの?」

「よくは知らないけど、大規模な密輸団の人達らしいわ。貴女も、とんだ所へ捲き込まれたものね」

多加子は、精一杯に首を振った。

「違うわ! 密輸なんかじゃないのよ!」

どうしてもこの女を説得しなければならない。多加子は吊られた不自由な身で、一世一代の演技力をふり絞った。

「あの二人は、スパイ団の一味なのよ。貴女が今日渡したフィルム

は、暗殺指令の暗号が記録されているものだったのよ！」

「まさか……スパイだなんて」

「本当なのよ！ わたしはその秘密を知ってしまったの。西海村の原子力研究所が爆破されて、日本で一番偉い人が死ぬのよ！」

「……」

女は半信半疑の様子であった。

「貴女はお金のために働いているんでしょうけど、本当は欺されているんだわ。暗殺の手伝いをさせられた挙句に、貴女も殺されるのよ！ 土の中へ埋めると云っていたわ！ いくらお金が貰えても、殺されたら何にもならないわ！」

「……そういえば、それくらいのことはやり兼ねない女のような。品物を渡してやったのに、面白半分私を責めたわ」

「相手は人間じゃないわ！ 金髪の鬼なのよ！ 悪魔だわ！ ね、日本の為、とは云わないわ。貴女自身のために、今のうちに陰謀を喰い止めるのよ！」

「嘘じゃ……ないでしょうね？」

女は多加子を凝視した。既に多加子のいうことを信じている眼の色だった。

暫くの後——ようやく説得が成功して、多加子は女に縄を解いて貰うことが出来た。

鍵がないので足枷を外すことはできないが、鎖が割合に長いので、歩行は不自由ながらも可能であった。

武器は一挺のピストル。——これを頼りに決死の脱出を始めるのだ。それ以外に道はない。

「さあ、グズ／＼してはいられないわ！」

多加子は女を促がして、静かに歩き始めた。だが、どうしても鎖の音がする。

「わたしは又、捕まるかも知れないけど、貴女だけでも逃げて頂戴。そして、警察へ知らせるのよ」

もう演技ではない。だが、甚だ劇的で悲壮な言葉が出た。

「もう、そろ／＼片付いた頃でしょう……」

膺プロデュウサーの声がした。

二人が階段を降りて来たのである。

「……あ！ 裏切ったな！」

一目で情勢は呑み込めたのだろう。男は上衣のポケットから武器を取り出した。

一瞬早く、女のサイレンサーが火を吐いた。

鈍い発射音が起こって——もちろん男は崩れるように階段を転げ落ちた。

「何をするの！」

続いて金髪女である。階段を駆け降りて倒れている男の手から拳銃を素早くもぎ取った。

ダーンッ！——

地下室一杯に拳銃音が鳴り響いた。

だが、それは相討ちであった。

タカ子が倒れたすぐあと、金髪女も折れ崩れたのである。

あっという間の出来事だった。

倒れた三人の鮮血が、埃だらけの床を三箇所、紅く染めた。呻き声が重なって聞こえる。

多加子は夢中で階段をよじのぼった。

足が鎖でもつれて、何度も転びそうになった。
漸く電話の有る場所へ辿り付いた多加子は、受話器を外ずし、ガ
タ／＼と震える指でダイヤル百十番を廻した。

——ハイ、百十番です。もし／＼、もし／＼！

齒切れの良い声が耳へ飛び込んで来た時、多加子はスーッと気が
遠くなって、床へ膝をついてしまった。

その時、廊下の端に金髪女がよろめき出て多加子を睨んだ。

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 纏)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R 11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり (須川令子)
R 13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R 14	開股しはり (川辺砂登子)
R 15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り (須川令子)
R 17	立木野外しはり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足湯梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R 20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しはり (萩千恵子)
R 22	強烈な梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R 23	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R 24	後手吊りゼメ (中塚文子)
R 25	股間しはり後手 (伊吹真佐子)
R 26	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R 27	高小手しはり (加賀利江子)
R 28	変型足手しはり (萩千恵子)
R 29	松樹後手しはり (村田那美子)
R 30	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R 31	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)
R 32	
R 33	

R 33	股間タテしはり (中富綾子)
R 34	首縄股間しはり (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり (藤田節子)
R 37	仰向全裸悦虐責 (川端多奈子)
R 38	後手首縄シメ (加賀利江子)
R 39	乳房下しはり (村田那美子)
R 40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R 41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R 42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R 43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R 44	コルセット縛り (中塚文子)
R 45	股間しはり (萩千恵子)
R 46	手と足と緊縛 (加賀利江子)
R 47	後手しはり (萩千恵子)
R 48	御開帳 (萩千恵子)
R 49	くさりゼメ (川端多奈子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R 52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R 53	開股椅子ゼメ正面 (花坂道子)
R 54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R 55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R 56	ヌードしはり (田中芳代)
R 57	本縄しはり (萩千恵子)
R 58	股間しはり (村田那美子)
R 59	落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
R 60	樹間のハリツケ (益田房子)
R 61	帆立舟のゼメ (益田房子)
R 62	
R 63	
R 64	
R 65	
R 66	
R 67	
R 68	
R 69	
R 70	
R 71	

R 72	逆エビ責め (愛川悦子)
R 73	変型全裸股間縛 (花坂道子)
R 74	ヌード縛り (萩千恵子)
R 75	全裸横臥緊縛 (村田那美子)
R 76	ビクニツク (須川令子)
R 77	ハイヒール (萩千恵子)
R 78	湖畔の宿にて (須川令子)
R 79	尻立逆しはり (大塚啓子)
R 80	下着の色模様 (田中芳代)
R 81	目隠し開股縛り (愛川悦子)
R 82	後手高小手 (花坂道子)
R 83	乳房しはり (愛川悦子)
R 84	開股ベッド縛り (萩千恵子)
R 85	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R 86	亀ノ甲縛り (大塚啓子)
R 87	ヌード股間縛り (愛川悦子)
R 88	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R 89	ガンジガラメ (愛川悦子)
R 90	臀部丸出し猿轡 (中塚文子)
R 91	後手股間しはり (伊吹真佐子)
R 92	腹股部シメ (萩千恵子)
R 93	破れたシムミーズ (坂口利子)
R 94	女学生のしはり (須川令子)
R 95	仰向開股しはり (萩千恵子)
R 96	乳房くさりゼメ (川辺砂登子)
R 97	野外バンド責め (村田那美子)
R 98	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R 99	開股正面しはり (伊吹真佐子)
R 100	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)

——もし／＼！もし／＼！ どうかしましたか！ こちら百十番！

受話機の中から、異状を察知したらしい声がガン／＼と多加子の
耳を打った——。

(終)

— 誰にも知られぬが楽しき花園 —



愛 好 家

の

記 録

とやま・かづひこ

(127) パーティにて

十二月二四日クリスマスイヴ。ある実業家の家庭でのパーティに招かれた夜の見聞記。
カクテルパーティで、みんなは楽しくホロリと酔って、このよき夜を語り合っていた。
「ボーイさん。むこうでお食事してしまおうわ」
ホステスの夫人が、ボーイを招いて隣室へ消えていった。どうせ今夜は、まだまだ、お客を招いてある。あけ方まで、ホステスは寝

るワケにはゆかない。そこで、コッソリ腹ごしらえをしておこうというのであろう。
夫人は、うまく来客に気づかれないように姿を消した。

その直ぐ後、かづひこは急用を思い出し、電話を借りるべく廊下へ出、玄関へと足を運んだ。その途中に、夫人の私室があるの
で、玄関へゆくよりも、夫人の室の電話を借りた方が早いことに気づいた。そこで、気易くドアをノックして、室へ足を踏み入れた時

面白い光景を見たのだった。

夫人は、食事のサービス盆をボーイに持たせ、自身は椅子にかけて食事の最中なのだった。よほど忙しかったのだらう。

ボーイは、うや／＼しく食卓を両手にして不動の姿勢、サービスを受ける夫人は、無雑作に、食卓をボーイに持たせて、平気でナイフとフォークをつかっている。

かづひこは、ここで、咄嗟に、いつぞや沼正三さんの『手帖』で、軍隊の中で兵隊に高々と食膳を捧げさせて、食事をしている上官の姿に、マゾの意味を持たせた。あの記述を思いだしてしまった。美しい夫人の、人間食卓による御食事の図は、正にあの挿画と似通うものと見えた。

(128) トルコ風呂

トルコ風呂と、Mの幻想は縁の深いものであると思う。十二月八日の『毎夕新聞』のカットで『トルコ嬢も金儲けに懸命』という説明文で、ミストルコが、腹這いの客の背に両足で完全に乗って、両手を高くあげ文字通り客を踏んづけているフオートには、うーんと、うならせられた。

同じくミストルコのフオートでは『週刊サン

ケイ』別冊新年号グラビアの、『女流作家化け込み探訪』で作家の園田てる子氏が、俄かミス・トルコとなり、コスチュームで、見事なマッサージ振りを見せている。からだの線が仲々美しく、見て楽しめるグラビアだ。

(129) ロケーション

大みそかも近い年の暮の一日、近所の公園で映画のロケをやると聞いて、散歩がてら行ってみた。黒山の人だかりだ。かづひこも知っている女優や、喜劇俳優の顔も見え、寒空に見物の価値はあるようだった。

撮影はクライマックスのようだ。

ふと見ると、ロケバスの出口から、メーカーヤップをおえた女優が、地上へ下りようとしているが、地形の関係上、足が届かず、マゴマゴしている。遠くのカメラは、早く早くと彼女を呼んでおり、彼女は、出るに出られず困った顔をバスの口から覗かせている。そのとき、一人の若い助手のようなのが、

『……さん、ハヤク!』

と呼びに来た。彼女は

『ステップが高くて下りられないのよ』

とかいっているらしい。その助手のような男は、ちゅうちよせず、地面にひざまずいて

己れの背を足場に下りなさい、という様子。残念ながら崖の上から覗いているかづひこには、二人の会話は聞きとれないが、二人の表情なり、ゼスチュアで、それがよく判る。彼女は案外、平気で、草履のまま助手の背を伝って地上へ下りた。

助手の背中に、クッキリと彼女の草履の跡がついて、素晴らしい眺めであった。

(130) 羽根つき

新年は新年らしく羽根つき。いくら時代が変わっても、羽根つきのゲームだけはなくならない。会社で新年会を終えたあと、若い人々は屋上で、楽しい羽根つき大会。

エラー一回で、顔にスミを塗る。あのしきたりも、おもしろいアトラクション。

勝った千恵子さんが、負けた山田君の顔にタップリ、スミを含ませた筆でサツと一刷毛ヒゲを書いた。麗人に、顔を汚される敗北感と、人の顔を、残酷にもスミで塗りまくる勝利感。ここにもマゾとサジの交錯がある。

新春四日、東京神田のある出版社の屋上でのワンカット。

(131) お 礼

ボンヤリ窓から外を見ていた。いつも来る、お茶行商のオバさん。オバさんといっても若い未亡人とかで、美しい顔立ちのシッカリ者のひとだった。

窓の外から、こちらを見上げて、

“あのー”

と口ごもる。

ガラス扉をあけて顔を出したら、
“すみませんが、ハバカリを貸して頂けませんか?”
という。

“お安い御用と、案内してあげる。”

彼女は“助かりました”という。

行商中に、何が辛いといって、こういうことが、いちばんこたえるという。

帰り際に

“お礼の気持だけ”

と手拭いを一本置いていった。

つまらない手拭なんかより、置いて行って欲しいものは他にあるのに。いかんせん、覆水は盆にかえらない。美しい未亡人の後姿を見送りながら、真剣にそう思うのだった。

創作

落葉
(おちば)

栗瀬長

舗道の銀杏並木は、すっかり葉を落し尽くして、弱い冬の日差しの中に寒々した枝をふるわせていた。さなきだに陰鬱な感じのする地方裁判所の裏手、大正時代に建てられたかのような木造二階建の家庭裁判所は、都会の中心にありながら、何か忘れられたように、ひっそりと静まり返っていた。

折しも、玉砂利を踏む音も心なしか沈んだように、父娘かと思われる一組が古びた戸を開けようとしていた。

男の方は、房々とした銀髪、年の頃は還暦をやや過ぎた頃か、小太りの体をグレイのオーバーに包み、両手をオーバーのポケットに突っ込んだまま、家裁の戸に手をかけたまま不図、ためらうように立ち止り、娘らしい人をふり返って、

「ねえ、お前、もう一度考え直してくれないか。何度もいったように、わしが悪かった。お前が嫌いでやった事じゃない。結婚以来、十年この方、他の唯一人の女性とも接することなく愛し続けてきた。いや今も、その愛情は変っていないことは分ってくれると思う。その愛の表現だったのだ。くだいようだが、そうなのだ。度が過ぎたかも知れん。以後、注意しよう。いや、止めてもよい。本当に、

なあ、だからもう一度、思い直してくれぬか」

「お話、分っております。今は貴方も冷静ですが、しかし、その時となれば、貴方どうなるか自分で、よくお分りでしょう。何度もお互いに譲歩致しました。でも、もう私も我慢出来ません。お分れする決心は固いのです。繰返しおっしゃらないで下さい」

人目を憚るように伏目勝ちに答えた人は、年の頃三十七、八であろうか。紫のお召とコートの下、白足袋が印象的な、上品な婦人であった。

家裁の扉が軋むような音をたてて、二人は中に吸い込まれる。

ここは家庭裁判所二階、七号調停室。西側の腰高の窓からは、弱い冬の午後の日ざしが洩れ、落葉した銀杏の梢が、ゆれるのが見える。外は全部、白壁。ルーベンスか何かの風景画の模写らしいのが左手の壁にかかっているが、ろくにはたきもかけられたことがないように薄よごれているのが、わびしさを、いや増している。あとは机一つに、これも十年以上もたったような、古ぼけた椅子が三脚。ただそれだけの、いとも殺風景な、八畳程の

広さの部屋であった。

スプリングも、ろくにきいていない、その椅子に腰掛けて、無言のまま、男は所在なさそうに窓外をながめ、女は、膝の上に組み合わせた白い手に、じっと視線を落したままであった。いわずと知れた先刻の一组。

「お待たせ致しました」

軽いノックと共に入ってきたのは佐原審判官、というと、いかめしいが、柔和な童顔に満面笑みをたたえた、でっぴりと太った五十がらみの初老の婦人。

夫婦は救われたように腰をあげて黙礼する。

「さあ、どうぞ／＼お掛け下さいませ。ずい分、お寒くなりましたわね。生憎ここにはストーブもございませんのよ。予算がない予算がないの一点張り、十二月十五日迄は官庁では火が入りませんの。私のような寒がりには、ほんとに困ってしまいますのよ。ああ、お寒いですから、オーバーもコートも、どうぞお召し遊ばして。さあ、どうぞ」

つとめて二人の気分を和らげようとして、佐原女史は、最大限の世辞を使うが、二人の緊張は、なか／＼ほぐれそうにもなく、

「では、お言葉に甘えまして」

と、男の方はオーバーに手を通すが、女の方は、だまって軽く頭を下げるばかり。

「では、お話し承りましょうか。椿原さん御夫妻でございましたね。御主人は椿原甫さん六十四才。奥様は、厚子さん三十四才。本籍は、岩手県下閉伊郡松尾村大字天間、現住所は川崎市南加瀬田町八九二。お間違いないでございませぬ」

無言で頷く二人の顔をかすめて、冬の日差しを浴びた雀か何かの鳥影が、右か左にスツと、よぎった。佐原女史は続ける。

「協議離婚の申し立てが奥様の方からございましたが、御主人は同意なさらない御様子。これはなか／＼むずかしい問題で、既にお二人で充分お話し合いになりました事を、今一度ここでお聞かせ願うわけですが、御承知の通り、家事審判法二十九条によって、秘密を漏らす事は絶対にございませんから、腹藏ない御意見をお聞かせ下さいませ。では先ず、御主人から、離婚不承諾の理由をどうぞ」

老紳士は一瞬瞑目し、深く吸った息を静かに吐き出しながら、

「お答え致します。私は昭和二年、その当時としては珍らしい、今申すのもお恥ずかしい次第ですが、所謂、恋愛結婚を致しまして以

来、一男一女を儲け、至極平穩な家庭を築いて参りました。昭和二十年、戦災に遭ってその先妻を失い、二十四年、さる人の紹介にて厚子を知り、再婚致しました。その後、長男は結婚して現在は日亜化学の大坂工場に技師として勤務して芦屋に居住し、長女は外交官と結婚して、現在ではニューデリーに居ります。私は先年、東和銀行を停年退職してより若干の家作と、株の配当、退職金を貸付信託にしてその配当金にて、先ず経済的にも、二人としては過分とはいえないまでも略々満ち足りた生計を営んでおるわけであります。

厚子と再婚致しましてから、十年となりましたが経済的に何一つ不自由な思いをさせた事もございませんし、私に、もし万一の事がございました時には、僅かなものですが、土地家屋、貸付信託、株券、社債等を、長男長女と共に三分の一宛、相続するよう遺言の形をとっております。

私と致しましては、戦後の苦難の時機を共に手をたずさえて、十年にわたり家庭を築いて参りました厚子を手離す何等の理由はございません」

「途中ですが、一寸お待ち下さいまし。貴方のそうしたお気持はよく分りますが、厚子さ

んの離婚請求の趣旨は、一寸違った所にあるようですが、如何でしょうか？ 貴方の性格と申しましょうか、行動でしょうか、何か弁明なさる事はございませんか？」

「いやどうも、お恥かしい次第で——。その事なのですが、厚子とも、よく話し合いまして、私としては、そう大それた事とも思いませんし、厚子も理解をしてくれているものと判断しているのですが」

「もう少し具体的にお話し願えませんでしょうか。先に申しました通り、秘密保持は勿論具体的な御意見伺いませんか、審判の判断が致し兼ねますので」

「そうですか、では老の恥をお聞き下さい。私には妻を縛る性癖がございます。まあ変態というのでしようが、私は変態という言葉が気に入らないで、アブノーマルと自認致しております。縛ると申しまして、何も憎悪からでは勿論なく、いとおしさ余っての極言するならば愛情の一つの表現と申しましょるか。更に緊縛から醸し出される異様な雰囲気の中に発見される女性美こそ、人間が造型し得る最も美しい美と感じ妻の体に緊縛を屢々要求し

たわけなのです。しかしそれは、あくまでもプレイとして、美の探求としての緊縛であり少くとも我が最愛の妻の肉体を傷けるという事はありませんし、虐待などとは程遠い概念であり、妻も次第にその境地に浸りつつあったと信じておりますのも、強ち我田引水ではないと思うのでございます」

「お話、大体、了解致しました。貴方のお考えも、もっともと存じますが、奥様は、申立によりますと、大変な苦痛を感じておられた御様子、一方的に判断は致し兼ねますので、

今度は奥様から具体的にお話伺いましょう」

「あのう、わたくし、……」

さすがに顔赤らめた夫人は、目を伏せたまま口ごもるのであった。

「奥様、御決心になって、ここへいらしたのでございます。聞いておりますのは私だけ。私も随分、珍らしい方々のお話承ります。ちよつとや、そつとでは驚きませんことよ。さあ御心配なく、貴女のお気持をお聞かせ下さいませよ」

「では申しのべますが、こんなこと、とても恥ずかしくて、ここだけでお忘れになつて下さいませ。私、椿原と結婚致したのは昭和二十四年、平凡な見合結婚を致しましたが、当時、私は世間の事は何も知らない二十三年の娘でございました。子供の年令が私と殆んど変わらないだけに、兎角の非難を受けながらも、椿原の紳士的態度と、前の奥様を戦災で失われたことに対する同情とが、私を結婚に踏み切らせたものでした。私の実家は、今でこそ、戦後の荒波に乗り切れず、没落致してはおりますが、江戸以来の旧家で、戦前は士族の誇り



故に、明治以来も軍人と医者以外の職業を認めないといった、封建的そのものの、堅い家庭に育ちましただけに、嫁しては夫に従い、の女大学的な気持が知らず知らずのうちに骨の髄まで教育されて来たわけでございます。従いまして、この度、離婚を決意致しましたのも、並々ならぬ気持であること、同時に椿原にも済まないという気持、何か矛盾するようでございますが、どう解決してよいのか分らないこの気持御賢察戴きとう存じます」

静かに語り出した夫人の手には、何時しか真白いハンカチが握られ、時々鼻の所を押さえるのも、熱いものがこみ上げてくるからであろうか。

「今、申しのべましたような家庭に育ちましたので、このようなことなど知る由もございませんでした。今思い出しても、ぞっとするような修善寺への旅行でございました。そこで愈々来るべきものがきました。でも、これが妻のつとめと観念する私に、椿原が先ず要求したものが何と縄ではございませんか。でも椿原は、その時は申訳程度に、肌着の上から軽く一卷きしただけでした。」



『痛くないかい』軽く私をなぞながら耳元に囁く椿原に、私は身を固くしながらも、黙って、こっくりと頷いたのがいけなかったのです。この時、椿原は承諾と感じたに違いありません。

それから東京での平凡な家庭生活が始まりました。当時、支店長をしておりました椿原の帰宅は、得意先の招待などで、毎晩十二時を過ぎる事も稀ではありませんでした。秋の

夜長など、夫の帰りを待つ妻のやるせない気持を私も人並に味っているのでも、今考えれば、夫の好む縛りは、私を次第に訓練する積りだったのでしょう。殆ど性急に要求することはありませんでした。帰りのおそい晩など、私が夫を待ちわびているような夜に限って『どうだい、緋縮緬の下着で、一寸向うむきに立ってみないかい。手を後に廻してね』

『いやですわ。又、何か、いたずらなさるんでしょう』

『いや、君が今夜は馬鹿に美しく見えるんだよ』

女とは馬鹿なものでございます。

見えすいたお世辞にも、ころりと参ってしまつて、

『まあ、お上手なこと』といいながらも、そうしなくてはいけないような気持になって、ふら／＼といわれる通りに、手を後に廻してしまふのでした。でも椿原は手荒なこともせず、一卷二巻して、

『ほう、なか／＼いいよ。歌麿ならずとも絵筆の一つもとりたいくなるよ』

『よして下さいませ。早くお取りになって』
『うん、よしよし』夫は、すぐ素直に、ほどこのでした。私は何の感興も催さないながらも、夫を喜ばせるために、言いなりになるよう努力していたのですが、夫は次第に私が縄になじんでくるものと思ったのでしよう。

結婚後、半年程たった或時、夫は大阪へ出張して十日程、家をあけました。その毎日の退屈で長かったこと、矢張り女として、夫の帰りが待たれてなりませんでした。

『さびしかったわ』

『僕も君がいないとね。何か忘れ物をしたように、夜も寝つきが悪くてね。どう、一寸うつぶせに寝てごらん。手を背中に廻して』

夫にされるままに、私は両手を背中で結ばれ、更にそれは両足首に連結され、えび縛りの形にされました時、私ははじめて肉体的苦痛を感じたのでした。

『いやだわ、こんなへんな恰好にして。苦しい、痛いわ、手足が』すぐほどいて呉れると思ったのに、今日は煙草を一服つけて落ちついている夫の前で、手足のいましめの痛みを軽減させるように、思わず私は身悶えしました。すると何という事でしよう、悶えれば

悶るほど、縄は手足首にくい込んでくるではありませんか。

『貴方、よして、よして』思わず叫ぶ私の口には、何とタオルが押し込まれるではありませんか。

『そうさわぐんじゃないよ、今すぐ取ってあげるからね、大人しくしておいで』私は観念の眼を閉じ、何の因果でこんな浅ましい姿にならねばならないのか。私の父や母はまさかこんな有様など、と思いは千々に乱れる思いでした。パチッというシャッターの音、一瞬パアッと明るくなった光に驚いて眼を開ければ、夫はカメラをかまえているのです。

『おやめになって』は声にならず、猿轡の下でウウツと呻き声になっただけでした。

『もういい、もういい、そら取ってあげるよ』

苦痛から解放されて放心したように横たわる私は、今の羞恥も、苦痛も、淡い夢のように消えてゆくのでした。

こんな事が繰り返されてゆくうち、何時しか私は夫の要求する時が分るようになり、顔色をうかがいながら身構えるのでした。ただ従順でありたいという私の願いが、夫には私がそんなことが好きになってゆくように思

わせたに相違ありません。でも私は本質的にそういったことになじめなかったのです。緊縛が、それは／＼嫌な時間でございました。でもその後の心に安らぎを覚えたかのような夫のものの柔かな態度に、嫌悪も忘れてしまうのでした。

そうこうする中、椿原は停年にて退職、しばらくは、傍系会社の常任監査役として毎日出社致しておりましたが、昨今では非常勤となりましたため、出社も一週一度程で、大体は家で好きな庭木いじりなどに毎日の無聊を慰めて居る始末。子供も成人して何れも遠く離れておりますだけに、相手をするのも私一人。年令的の差異からしても、どうしてもイブセンのノラの様に、愛玩物視されるのは避けようもございません。

で、今迄お話し上げました椿原のこの奇妙な癖も、こうした無聊な毎日と共に募って参りまして、昨今では口にするのも恥ずかしいような毎日なのでございます。

婦人は大きく溜息をつき、じっと床に視線を下しながら、やおら言葉をついだ。

「夜になるのを待ち構えたように、夫は私を書斎に呼び入れるのです。

『一寸、お前』

夕食の片付けが済むや、きまってこう呼ばれますと、私は何か電氣にでも打たれたように、おずおずと書齋に入り、絨氈の上にきちんと坐らざるを得ないように訓練付けられてしまいました。

『さあ、西の方を向いて、神様仏様に今日一日を反省して、告白をなさい。』

重々しい夫の声にひきずられるように、あたかも夢遊病者の様に、私は告白するのです。

『朝寝坊を致しまして、夫より後から起きました。朝食の支度の際、味噌汁をふきこぼれさせました。小鳥の水をとりかえるのを忘れました。夫の靴を磨くのを忘れました。夕食の御飯をこげつかせました。こうした数々の不注意をお許し下さい。』

『よろしい。では、その罰のお仕置を受ける覚悟は出来ていますか』

『はい、どんな罰でもお受け致します』

『では、用意をなさい。』

命ぜられるままに私の思考は催眠術にかかった者のようになるのです。うつぶせにベッドの上に乗せられた私の両手は、合掌して縛られてベッドの頭の部分に、両足はベッドの後部の金属の柱に、右足、左足首が夫々く

りつけられました。口には勿論、猿轡です。

夫は、と見ればランニングシャツに、テニス・ズボン、大きく胸を張って私を見下す姿はとて六とは見え、どうしても四十代の若々しさです。

『よい、お前は今日五つの罪を告白した。これから五つの罰を受けねばならない。分ったか。』

こう宣言するや、私は強烈な痛みを感じました。ピシッ、ピシッ、ピシッ。おお、恐ろしい鞭打ちです。三ふり四ふり、最後の五ふりがふり下される頃には、背中全体に火のついたような痛み、それが脊髄を通して頭の芯までジーンと響きわたります。

こうして、その日のお仕置は終わりました。さてその翌日は、同じような罪を告白させられ、今度は仰向けにベッドにくくり付けられました。

『今日はお前は三つの罪しか告白しない。まだ隠しているだろう。さあ、言ってごらん』

『いいえ、お許し下さい。それだけでございます。』

『嘘をつくな。言えなければ言えるようにしてやる。よい』

素早く口がタオルで覆われ、同時に鼻がつ

まみ上げられました。所謂、窒息責めです。

息のつまる、その苦しさ。突っ張る手足は固くベッドに緊縛されて身動きもならず、左右に振らんとする首も夫の手に押さえられ、胸の動悸が激しく波打つ頃、

『罪を告白せよ』

タオルが取り除かれ、

『はい、お庭の、お庭のお掃除をおこたりました。お許し下さいませ』

『まだある、まだある』

『もう、それだけ』

『嘘を申せ。では、もう一度、窒息責めにするぞ、そらッ』

『ううッ』

『早く言え』

『ああ苦しい。申します、申します。お茶碗を割りました。それから——』

こうして責められるままに、ありもしない粗相を十も並べ、やっと許される始末でした。そのお仕置が大変でした。胸の上に罪の数だけの艾を並べ一つ宛、点火するのです。一度に火を付けて呉れれば、苦痛も一時ですみますものを、一つ宛、間を置いて点火するので、一つが燃え切って、熱さが消えると同時に、次の熱さが襲うという訳で、連続する

火の玉に、胸全体が焼け付くよう。身をよじらせて熱さを軽減する方法もなく、猿轡の下で呻くばかりでございました。

又、或時は、両手を合わせて縛られ天井の梁に釣り下げられました。足は一応、自由ですが、丁度つま先立ちでやっと敷居に届くか届かないか、後から突かれれば、ブランコのように揺れるといった状態です。そうしておいて今日も亦、罪の告白が強いられます。

『まだく罪の告白が足りない。さあもう一つ、言わないと、ひどい目にあうよ。痛い思いがしたくなかったら、罪を告白しなさい』同じような、ありもしない罪を繰り返し十余りも言わされるのです。今日のお仕置は何だろう。恐怖に身も心も氷るような思いで身を固くする私に、何時ものように猿轡が噛まれます。

『さあ、今夜は朗らかに笑ってもらおうかね』

笑うどころの、さわぎではございません。擦り責めなのです。釣り下げられた私の体は、全く無防備でした。羽



毛を持った夫の手は、やっと爪先立つ足の裏を、のがれようとものがけば、体が浮き上って縄が、ひしひしと手足に喰い込みます。これは熱や痛みと違って、頭の芯まで電気をかけられたように、しびれさせずには置かない。それはく強烈な責でございました。遂には意識が何か朦朧としてくるまで、繰り返しく擦られたのでございます。

又、或時は、今度は逆か立ちをさせられ、体が落ちないように、両足首を縛って吊るされました。逆か立ちは、あまり長いと頭に血がのぼってしまうのを知ってか、夫は急いで罪を告白させるのに、脇腹をつねり上げるのです。

『罪の告白が終らないまでは、放さないよ』痛みを耐えかねて、夢中で同じような罪の告白を繰り返すのでした。『婦人は一気に、ここまで話すと、又、一息ついてその日の苦痛を又、噛みしめるようであった。』

陽も次第に西に傾いて、部屋には異様な重苦しい雰囲気の流れ、誰も口を開く者もなく沈黙の一時が過ぎた。

「こうした毎晩が続くうちに、私は夜のそばりが下りるのを恐怖をもって迎えるようにな

りました。ところが遂に責は夜ばかりではなくなつたのでございます。或日、庭いじりから上つてきた夫は、私の顔をながめながら、『なんだ、顔に吹き出ものが出るじゃないか。便秘でもしてるんじゃないの』

さりげない様子で聞くので、私は、うっかり

『ええ、二、三日お通じがなくて』

まさか、この返事が、思い出しても恐ろしい悪魔の責となろうとは想像も致しませんでした。

『そうか、そりゃいけないね。一寸、横になつてごらん』

私が、何の疑いもなく横になつた時、早くも夫の手に縄が用意されているとは気が付きませんでした。アツと言う間に足首に縄が廻されました。驚いてとび起きようとする私の両手は、足の自由がきかなくなままに、容易に合掌させられ堅く緊縛されてしまいました。

『貴方、昼間からおよしになって。人が来ますわ。お願い』

必死に哀願する私を尻目に、

『大丈夫。今、戸締りをする前に、一寸、薬屋へ行って浣腸器を買ってくるから、そのまま大人しく待っているんだよ』

あつ、浣腸。子供の頃、母に何度かされたことのあるあの浣腸。嫌だった、ほんとに恥ずかしくて嫌だった。でも母は、子供の心を傷つけないよう、家人の気がつかないように物影で、そっとイチジク浣腸をして呉れた。

だが、これから夫は何をしようとするのだろう。わけが分らないだけに、緊縛されて転がされたまま、想像が恐怖に変わって、僅か五分か十分が、それは／＼長い時間に感ぜられました。

『ほら、五〇〇〇入りの浣腸器、買って来たよ。吹き出ものなんか出さないように、お腹のお掃除をしようね』

と私の目の前で操作する夫。恐ろしい悪魔のガラス器には、薬が一杯に吸い上げられ私は死にたい程の思いに突き落とされました。

随分、長い間、お聞きづらい、お恥ずかしいことばかり長々と申し述べました。でも本当の事なのです。こうした責が、はじめは月に一、二度だったのが、週に一、二度になり一日おきになり、最近では、程度の差こそあれ、殆んど連日、夫は何か言いがかりをつけては、私を責めるのでございます。嫁しては夫に従うの倫理観念も、今では耐え難いものとなって参りました。事が事だけに、誰にも

相談する事も出来ず、悩みに悩んだ挙句、私は離婚を決心した次第でございます。どうぞ事情、御賢察の上、よろしくお願い致しとう存じます」

説明し終つて、婦人はホツとしたように息をついて肩を下した。その後姿が、とう／＼踏み切るべき線を越えて、ただ独りとなった人のように悄然として見えた。

「お話、よく分りました。奥様、さぞ、おつらかった事でしょう。夫の虐待にたえかねての離婚請求は、ごもっともと思います。でも一寸、お待ちになって下さいませね。普通、虐待というのは加害者が被害者に悪意か憎悪を持って虐める場合なのですがね。椿原さんは奥様に憎悪の念を抱いておられましたでしょうか。よくお考えになって下さいよ。今のお話では、結局の所、御主人は貴方を大切に大切に、室のようにしていらっしゃるではありませんの。

今度は御主人、椿原さんに申し上げます」

「はあ」

妻の告白に目をつぶってうなだれていた紳士は、心持ち首をあげた。

「椿原さん、貴方は今迄の社会的地位、学歴等から決して教養のない方とは思いません。

又、世に言う変態という言葉も私は使いたくありません。人間には、そういった心理もたしかにございます。どこで一線を引くかは良識の判断にまかせます。

貴方は奥様を愛する一つの手段として、聊か他人には公言しにくい方法をお取りになったにすぎないと、貴方はおっしゃりたいでしょうし、私もそうだと思います。でも現実には、奥様が苦痛だとお感じになっていらっしゃる、とすれば、それでも貴方は、真に妻を愛している、愛の表現だと公言されますか。ものには程度がございます。今更、私が孔孟の中庸の教を、くどく申し上げる必要もございません。

今度は、お二人に申しましょう。折角、築いていらした十年の家庭、破壊するのは簡単です。署名捺印でよろしいのですから。しかし覆水は盆に返りません。もう一度、よくお考え下さい。御夫婦のひそかな喜びは、お二人が協力して作り上げねばなりません。御主人には、たしかに行き過ぎがありましたでしょう。それは既に認めていらっしやいます。奥様も、あまりに箱入りの的ではございませんし、旧女大学も確かに結構です。何も、あばずれになれなどは勿論、申しません。

でも、もっと大らかに、御主人の懐に赤裸々にび飛込んでいらしては、いかがでしょう。誰に気兼ねもいららない、お二人だけの世界ですもの。

ここで、私は結論として、お二人に提案させて戴きます。お二人で御相談の上、ルールをお作り下さい。何なら、お差支えなければ私が証人になって差し上げてもよろしゅうございますよ。これは冗談ですが……。例えば、御主人は奥様に苛酷な苦痛を与えない、縛りの時間は二十分以内とか、火は用いないとか、適当に無理のない範囲で、お互いに協定なさっては、いかがでしょう。そして調度、彩光鏡の利用など、それから言葉の使い方等で、肉体的苦痛をやわらげ、しかもムードを増す方法が、いくらも考えられるではございませんか。奥様も、もっと積極的に御主人の愛を素直に受け入れ、御自分でも進んで新しい表現を考えられたら、他人の知らない素晴らしき楽しみの世界を創造されるのではないでしょう。敢えて申しますならば、私等にはない素晴らしいお楽しみを貴方達は知っていらっしやる、お羨しい限りと申し上げては失礼でございますでしょうか。

さあ、お帰りになりましたら、ルールを必ず紙に書いて、一通宛、御署名の上、各自好きな所におしまい下さい。違反しましたら、さて、お仕置はなんて言うかと、どうく廻りになりますわね。随分、遅くなりました。私は、この離婚申立て、もう少し、お預けにした方がよくはないかと思いますが、如何でしょう」

恥ずかしそうに無言で頷く二人。
「そうですね、一応、取り下げて戴いて、又改めて。おっと、これは失言。改めてでは困りますわ。ホホホホ」

冬の陽の足は早い。西の空に一条、二条、残っていた夕焼けの光も消えて、ビルの窓口には一斉に燈のともる道を寄り添うように歩いてゆく二人に、銀杏の落葉が二、三枚、ひら／＼と落ちかかった。

「いい年をして、全くすまなかった」

「いいえ、あたくしも、もっと貴方を――」

「どうだい、ふぐでも喰ってゆくか」

若い恋人のように二人の足取りは軽かった。

麻生保氏の生活と意見



(一四)

麻 生 保

鞭と拍車に関する随想

昨年四月号の中で、近年女性の乗馬に際しジョパー用短靴で拍車をつけない場合が大部分だ、という記事がありました。最近はこのジョパー用短靴に拍車をつける事も行われている様です。(特にヨーロッパの女性乗馬スタイル。エリザベス女王やマーガレット王女なども、拍車をつけたジョパー用短靴を用いておられるようです)

拍車の持つ残忍度はいまさら言うまでもありません。それは鞭よりも遙かに残酷です。

特殊な鞭をのぞいて、乗馬用ならどんな強い鞭でも知れたものですし、しかも打たれる場所は、臀・脾腹・肩など、比較的に敏感でない部分です。極めて激しい懲戒をする時、首すじを強く打ちますが、これはむしろ例外でしょう。

これに反し、拍車は、金属製の歯車を、如何に毛皮でおおわれているとはいえ、敏感な

脇腹へ蹴りこむのですから、鞭とは比較にならず残忍なものです。どんなに馬を激しく鞭で打っても、血を出させることなど通常あり得ませんが、拍車によれば、珍らしいことはあります。(註一)

然し、それこそ血でも出れば別ですが、拍車は傍観者にとってはあまり効果的でないようです。即ち、拍車を以て馬腹を蹴けけるという行為は、馬には乗手への服従を要求し、一方乗手にとっては、気分の高揚を意味

しますが何分動作が小さいので余程近くで氣をつけて見ていないと見逃し易いものです。

鞭は断然その点に於て拍車にまさります。

乗馬をたしなむ女性中で、心ある人はきつと鞭でポーズを作ります。ですから、その鞭を實際に使用する時は、なおのことです。

乗杉貴代子さんも、見物人の男性のために乗馬中にスタンド・プレイをする事を力説しておられます。(三三年五月号「障碍への道」参照)それには、どう考えてみても、鞭によるそれが一番のように思われます。白魚のような手に握られた鞭の美しい動きを追うのは何と楽しいことでしょう。(註二)

いや、視覚ばかりではありません。鞭の効用は、聴覚に訴えるところが非常に大きいのです。鯨のヒゲや、上質の鋼鉄線を芯にして籐や革で巻いたしなやかな乗馬鞭が馬を打つ時に発するひびきは、何と形容したらよいでしょう。乗杉さんは、これを「清々しい」と形容しておりましたが、まさに言い得て妙です。

音の良否は多くしなやかに比例します。ですから、鋼鉄線を四本もいれて作る競馬騎手の持つかたい短い鞭は、ピシリッといった

余韻のある響きでなく、ピタッ、ピタッといった乾燥した、しかも鈍い音しか出ないものです。(註三)

反対に、あまりしななした鞭は、音にしまりがありません。革製のものが一番いいのですが、よく使われた籐製のものも、なかなかいいようです。

総じて鞭は、新品当初よりも、ある程度使用して馬の汗とあぶらをしばらく、しみこませたものの方が、しない具合もよく、従って音もピシリッ・ピシリッと快いようです。

美しい女騎手の手に握られた、しなやかな鞭が振上げられて馬の逞しいお臀が、ピシリッと打ち据えられる時や、手綱を思いつ切り引かれて、口が痛くて動かせなくなった馬の首すじにピシッ、ピシッと鞭が鋭く鳴る時などは、全く視覚聴覚ともに十全の満足が得られるのです。

(註一) ロレンス作「恋する女達」の第九章に、馬の反抗と騎手の氣勢との斗争場面がある。馬は腹から血を流すが、なおも拍車を蹴こまれて服従させられてしまう。騎手が男性で、女性が二人傍観している。話がアベコベ

だが、文豪ロレンスの筆だけあって、ものすごい迫力がある。一読をおすすめしたい。

(註二) 拍車による馬への加虐は、映画「ジャイアンツ」が有名であるし、迫力を持っているのは、ワイドスクリーン一杯に拍車をクローズアップしたからで、これはいささか特殊な例であらう。即ち、こういったクローズアップなどによらなければ、拍車の威力というものが見せにくいのである。これに反して鞭による加虐は、映画的效果の上からずっと容易である。例えば、(本誌一九九二年十二月号)にも紹介されていたフランス映画「ワインの別離、又は動乱の前夜」に見られる様な優れたシーンを作り得るのである。それは、ルパシユカ風の白い上衣、毛皮の帽子、ピッチリと肢体を包んだ細いズボン、宮廷風の乗馬用長靴をはいた気丈な若い公爵夫人カリリーヌが、乗馬を乗り潰してしまうところである。音楽家のリストと彼女に相思の仲であるが、或日二人は口論の末、彼女は部屋を飛び出さうまやに行き愛馬に飛乗り、うっぶん晴らしに馬を責めたて荒野を全速力で駆けさせる。このギャロップのカットが続いて、その日の夕方、夕焼雲の下で疲れ切った馬はも

うギャロップが続けられず、白い泡を吹き乍らヨタヨタと歩き出すと、カロリーヌは焦立って鞭を振上げ、ピシーリ・ピシーリと激しくあてる。哀れな馬は、鞭の痛さに再びギャロップを始めるが、十歩も続けることが出来ない。再び激しく鞭が鳴る。再びギャロップ今度は五歩がやっと。ピシーリ、ピシーリ、ピシーリ、ピシーリ。最後の力をふりしぼってギャロップをしかけるが、もうギャロップにならない。然しカロリーヌはまだ容赦せず無情な鞭をあてる。ピシーリ、ピシーリ、ピシーリ、ピシーリ。忠実な馬はもう一度と思ってふんばった時、石につまずいてドウと倒れてしまう……。

麻生はあまり映画通でないから他を知らないが、この位迫力のあるシーンは見た事が無い。そして、これが拍車による加虐では映画としてこれだけの迫力は持ち得まい。これは単に馬に対する鞭による加虐ばかりでなく、それが、女主人の全くの気紛れ、うつぶん晴らしに行われたという点に注目すべきであろう。

それから、単なる疾駆場面ではなく、疲れ切ったヨタヨタした馬に鞭をあててギャロップ

をさせ、しかも、その馬が鞭打たれるたびに力をふりしぼって少しでも騎手の意に従おうとするマゾヒスティックともいえる性根の哀れさをこれでもか、これでもかばかり見せるのが珍しい。

このシーンを見たさに麻生は何度もこの映画を見たが、この部分は常に観客の緊張を呼んだのは、あながち我田引水ではない。事実「ああ、あの馬、可哀想に」などと言う歓声が洩れたのは毎度のことだったが一度、若い女性が圧し殺したような声で「あんなに鞭をあてて。あんなに打（ぶ）って……」とつぶやいているのを聞いた事がある。ま、解釈のしようは各人勝手。

なお、この乗り潰された馬は、前脚骨折というわけで、すぐにピストルで安楽死させられるが、カロリーヌは自分の無茶な行為を悔い、愛馬の鼻面に頬ずりして涙を流す。ああ何と幸福な馬だろう！（なお、この映画にはまだ二つ三つ麻生の興味を惹いた場面があった。）

（註三）競馬の追いこみに、鞭の音は欠かせない。騎手の鞭は、半分は馬のため半分は観客のための由。視覚、聴視ともに。但し、近

頃の競馬騎手は、ますますかたい鞭を使う傾向にあるので、音はいよいよ悪い。丸太ン棒で叩いているようなものであるし、かえって効果も少いらしい。なぜなら、馬の体は尻も首すじも肩も、ある程度の曲線をえがいているので、硬直したような鞭では、鞭のあたる面積が極めてせまくなる。これに反し、しなやかな鞭は、馬体の曲線に巻きつくという程でなくても、ピッタリとあたり、しかも弾力ある馬体に、しなやかな鞭がバウンドして、「ピシリッ」という、清々しい音が得られるのである。

沼氏に

新年号の「沼だより」拝見。厚く御礼申し上げます。おさっしの通り、麻生はKK通信は一部も持っておりませんし、入手の方法もありません。御教示のKK通信十四号のR子さんの一文は麻生には特別興味あるもの故、何とかして全文を読みたいと思います。又、シュールベルトの「吸血魔女」なども、おひまの節に是非、記して頂きたいものです。

猿 轡 放 談

(その三)

浮 家 鷹 三



大衆小説が、読者の人気を勝ち得るには、これに伴う挿絵にも大いにあずかって力の要る事は、周知の事実でありましょう。……が、その挿絵のうちホンの一部分にしか過ぎない「猿轡の描き方」に就いて、二、三、異なる挿絵家のものを比較させて頂いてのち更には映画の上での「女優被猿轡記」なるものを筆者は是から綴ってみましよう。

さて、大衆小説の、その挿絵を担当する画家諸氏は、いう迄もなく原作にマッチした作品に努力される事でしようが、だといって、かりに原作者の文章が「彼女の豊頬は、強力に絞め上げ

られた猿轡によって、まるで別人の様に変型してしまった」等という表現をした場合はどうでしょう？ まさかデコボコの唐瓜の様な顔に、猿轡を嵌せた絵は、お描きにならないだろうと思われます。——尤も、こんな奇妙でけれつな事をいい出す筆者自身が、多少ノーマルさを欠いていますので、これからの文中に登場させて頂く関係者の方々には、前以て、その非礼をお詫びしておいて、さて稿を進めてみましょう。

× × × × × ×

本誌新年号紙上に発表されていた「緊縛モデル撮影会」の実況記事で「猿轡を余り強くしたので手拭が鼻の上にズリ上ってしまっ

た」という様なことが出ていましたが、これ



思っています。(筆者自身が実演してみたら外れてしまった)

人間の五体の自由を奪う目的で行われる縛りの方式には、大別して「東洋型」「西洋型」の二つがある様です。

東洋型とは、既に皆様御承知の邦画時代劇に現われるそれで、もう少し詳しく説明しますと、両手を背後に廻して、縄目はその胸から両腕を廻って背後に行き、最後に両手首の自由を奪う縛りをして終わります。

西洋型といいますが、これも皆様略々御承知かと思いますが、両手は概して背後に廻さず、ダラリと両腋にくっつけたままで、縄目だけが胸から背後に廻っています。勿論、この姿勢での縛りは、背後で手首の始末をする必要がありません。

筆者は幼少年の頃——その頃は「活動写真」といっていましたが——かの「連続冒険大活劇」なるものをよく見ましたが、何れも前記両腋型か、若しくは両手を前に差出した形で縛られたものばかりでした。

戦後の洋画の中には、東洋型を真似たようなのが、次第に多くなって来た様ですが、然

しまだまだ、その雰囲気なり、魅力の点に於て、東洋型の比ではありません。(またしても話が横道に外れましたが、前回及び前々回にも御断りしました様に、五体の緊縛と猿轡は密接な関係がありますので……………)

さて、猿轡にしましても、どうやら前記五体の縛りと同様、東洋型、西洋型の二つに分れているのではないかと、筆者には思考されます。では、その例について述べてみましょう……………

先ず順序としまして、人間の口に猿轡を嵌ます為に用うる——つまり「用具」は、普通どんな物が選ばれるか? という事から話してみましよう——。

一言にして申せば、猿轡に用うる物は、余程前々から計画した「惨虐方式」でない限り大抵「手近かな布切れ」である筈です。

と、しますと、東洋(特に日本)人が常に携帯している布切れ、というのが即ち手拭(タオル)も現代は含めずばなるまい)でしょう。

そこへゆくと西洋人は、旅行用を除くのは殆んどタオルを携帯していることはないでしょうし、バス・タオル(日本では「湯上げ」と称す)の様に大型なものもあって、——だから手拭(タオル)が猿轡に用うるに

は全くそうなるのが当然で、人間の鼻口をモロに外側から縛るテの猿轡は、余り強くすると鼻骨と唇と頬との高さが、一致平衡しない為、いつか弛んで鼻の上にズリ上るのでしよう。

そこで今一つの猿轡の方法——つまり口を割って布切れ、その他のものを噛せる——ですが、これも余り無茶に力を入れて絞めますと、或は顎が外れるのではないかと、筆者は

手近かなものとはならないで、代りに洋装の携帯品たる「ハンカチ」が利用される訳でしょう。そこでまたいえる事は、この「ハンカチ」を用いてする猿轡が「西洋型」であり、それとは対照的に手拭及びタオルを以てする猿轡が「東洋型」という事になる訳で、この「手拭」と、それとはズット短かく真四角な「ハンカチ」を用いて行かう猿轡が自然の様式で「東洋型と西洋型」に型別れているとも見る事が出来ます。その例を挙げてみますと、

本誌の毎月号には、よく緊縛映画の紹介欄なるものが設けられています。が、話題の焦点は、どうしても「時代物」に集中され勝ちのようです。そこで筆者は、読者にもお伺いしたいのですが、これら時代映画の中に現われた女体緊縛場面の、その中で猿轡を噛まされた——つまり口を割って噛ます——筆者が茲でいう「西洋型」のものを御覧になった方がお有りでしょうか？恐らく滅多にないだろうと、思われます。

しかし、これが現代劇映画ですと、服装は洋装でも手拭やタオルを用いた、これもこゝでいう「東洋型」の猿轡に出会わす事は、決して稀ではないでしょう。

そこで、くどい様ですが結論的にいえる事

は、東西その何れもが共に手近かな布切れを猿轡に應用して、その利用価値を認めた事により、爾後だれから伝承したともなく、いつか、その型を用いる様になった。——と、まあ筆者は、こう思っている訳なのですが、他に違った御意見がありますれば、何卒、本誌を通じてお聞かせ下さいませよう。

尚、最後につけ加えます事は、諺にもいう「大は小を兼ねる」と申します通りで、手拭やタオルを用いて西洋型を行う事は出来てもハンカチを用いて東洋型を行う事は不可能だということですよ。

さて、話題を愈々「大衆小説の挿絵の上に現われた猿轡の描写」について持って行きましょう。

筆者は、先に——鼻口を外側から縛るテの猿轡を余り強く締めると、却って猿轡が鼻の上にズリ上ってくる——と申しましたが、この事をまるで証明するかのような、猿轡の書き方をしたものがあつたのを覚えていますので一寸、御紹介してみましよう。

大正の末期頃——（ヤレヤレまたしても古臭い事を、と読者が顔をシカメられるのが目に見える様ですが、これしかないのです）——

の雑誌、講談倶楽部に連載されていたも

ので、祇園小説で有名だった「長田幹彦」氏の作に「波のうえ」と題された小説がありました。

この小説のラストに近い場面を画いた挿絵に、筆者が是から述べんとする「女体緊縛の上、猿轡を嵌めた」それがあつたのです。

この「波のうえ」の挿絵を担当した人は、当時、岩田専太郎画伯と共に、時代物、現代物、探偵物などの何れにも彩管を揮って大活躍をされていた「井川洗崖」画伯でした。

そして、この絵の解説を致しますと、それはお決まりの？ 女を攫って来て監禁してある場面で、博徒の親分の家の納屋にほり込まれていて、四辺には米俵等が不規則に置いてあり、後手に縛られて、猿轡を嵌められた女は、その米俵に縛りつけられています。——」体位も一風変わった格好で横上向きであつた事も、記憶に残つた原因の一つですが、何といつてもその一番の原因というのが、即ち鼻の上にズリ上つた猿轡なのです。

勿論、これは作者が意図してその様に画いた訳ではないのですが、——悪口を許して頂くならば、全くそれは「猿轡」で無くして「鼻轡」とでもいわねばならぬ程、豆絞りの手拭が唇を危うく外れてしまふようなズレ

方でした。手拭の広がり（猿轡の幅？）も極く狭く、鼻柱の上に乗った様な絵は、私の今日迄に見て来た猿轡の絵の中では、後にも先にもまず一つであったといえます。そして、この事が私をして何故、そうも印象付けさせたかと申しますと、同じ洗崖画くところの猿轡の絵でも、この時のものの一つを除いてはアトは全部、普通一般？の画き方であつた為です。

事実—洗崖画くところの女体被縛、並びに猿轡の絵は、戦前の大衆小説中で枚挙にいとまのない程お目に掛っています。前田曙山作「燃ゆる渦巻」に於ける。大仏次郎作「鞍天狗」に、岡本綺堂の「半七老人捕物帳等」等。……これらに画かれた絵は皆、通常あり来りの無難なものばかり、手拭を中広に鼻口へモロにかけ、緊縛感は一五体の縛り共、中等位と見られました。

画家に限らず、総て芸術家というものは皆それぞれに異った。個性的特徴をお持ちの筈で、それ故にこそ、大衆小説の挿絵のうちのホンの一部分に過ぎない猿轡の描き方一つにも、それぞれに違ふのは当然の事と申せましょう。しかしながら、猿轡の如きもともと実在の方式そのものに種類の少ない、しかも僅

少の画面にしか価値しないのでは、左様また大差出来ないのも、尤も至極と申せる訳です。

そこで筆者の見解をヒレキしますと、猿轡の画き方は、大別して幅広、幅狭の二通りに別れ、幅広は鼻口を覆ったのみに止まらず、更に布を拡げて頸に迄掛っているものがあり、これには緊縛感が弱く見られます。

これに反して幅狭に画いたものは、緊縛感によく出ますが、そのかわり、気をつけないと筆者が先程披露しました「波のうえ」の挿絵の時のような「鼻轡？」になつてしまふのではないのでしょうか？ その点、岩田専太郎氏画く猿轡は、筆者の最も好むところで、それは布を鼻穴スレスレに唇を覆っており、鼻頭には掛けずに頬の線に添って引締つています。戦前の婦人倶楽部に連載された。吉川英治氏作「無明有明」や、その他の場面で、黒布に見せたそれを、筆者は、こよなく愛好したものでした。

幅広の頸に迄掛けた猿轡の画き方は、これも戦前、大いに活躍された「小田富弥」画伯の極り？であつたようです。

最後に、戦後のそれも最近、活躍されつつある「栗林正幸」氏画く猿轡を、一寸紹介させて頂いて、他にもまだまだ引用、比較した

いものがありますが、今回はこれで終つて、次回いよいよ「映画の上に現われた女優被縛轡記」に進みましょう。

栗林氏のものは、画風そのものに非常に異つた点が見受けられますが、残念乍ら筆者は画風に関する専門的な知識を持ち合わせませんので、生じかな評は止めて、氏の描かれた猿轡についての私見だけを述べますと、氏のもの、幅広猿轡のうち最も拡げた形で、こういう形は、何かこう少年探偵物の中に出て来る覆面を思わせる様です。

「顔の半分は猿轡に隠れて……」という表現を用いた作家のものには、この画はピッタリでしょうし、逆三角形を呈していますので、風呂敷の様な四角い布を用いてある様に見える場合もあります。（失礼多謝）

（その三）終り

KK叢書発刊予告訂正

◎本誌三月号一〇五頁掲載のKK叢書発刊予告の中、第四巻土路草一「潰滅の前夜」の予定を取消し、新に第四巻の予定として、左記を追加訂正いたします。

第四巻 永山久美雄「第七天国放浪記」

変

(かわりみ)

身

創作

(第一回)

南 時 夫



彼の眼の前には数葉の写真が置かれていた。彼はそれを一枚々々手に取って凝視した。彼の手は微かに震え、顔は紅潮し、胸は異様に脹れ上っていった。それと同時に、とうとうこまで行き着いてしまった自分の姿と、もう逃れることが出来ないであろう異常な宿命を意識していた。今日まで、どんなにか理性の力によって自分の異常性を正常に引戻そうと努力したことか。学問によって、スポーツによって、あらゆる健全な娯楽によって、この執拗な欲望の誘惑を振り払おうとしたことか。しかしすべてが無駄であり、憧憬の業火に身を焼き尽され、それが諦めに変った。秀才の呼び声高かった彼は、自分の異常性の根強さを知ったのである。

彼、原口恵吾が震える指先で持っている写真には一人の女が写っていた。パーマの髪を乱し畳の上に横倒しになった一人の

若い女。中国服を着て、耳に大きなイヤリングをして、眉毛が細く長く引かれてあった。この盛装の女の両腕は背後に廻り、白い細引で首から胸へと厳しく縛しめられ、綺麗に揃えた両足も膝と一緒に無残に細引が巻かれてあった。身動きならない姿のまま転がされた女の両頬には黒い布が喰い込み唇を割っていた。今にも女の口から呻き声が聞えて来そうな見事な写真の撮り方だった。二、三枚の中国服の写真の他にはブラウスにスカートの同一の女の姿もあった。中には縛られた女の前一人の男が鞭の様なものを手にして立っている写真もあった。人には見せられない惨酷な写真である。

「これが自分の姿なのか……」恵吾は心の中でそう呟いた。女装に憑かれ、縄に憑かれた自分の姿。彼が凝視していた眼の前の、無残に縛り上げられた若い女こそ、彼自身の姿だったのである。

彼が今、自分の幼い日を思い出しても、別にこれと云った強い思い出は浮ばなかった。しかし、その中で自分の異常性の芽生えだけは途切れ々々の記憶ながら思い出せる。それを思うと恵吾は自分のこの奇妙な憧憬は、何

か強烈なショックによって突発的に生じたのではなく、先天的にその様な人間として、この世に、生れ出たものの様な気がしてならなかった。まだ小学生の頃、どんな遊びかは忘れてしまったけれども、三、四人で一人の子供を捕えて来ては手拭で後手に縛ってロク木に繋いでおくと、その縛られた子が身をよじって必死に暴れる。それを皆で面白そうに見ていたことを思い出す。「樋口」という級長をしていた可愛い顔付きの男の子が一番多く捕った。後手に縛ったまま「追放」してしまふことがあり、そうすると、その子は不自由な身体で女の子達の群に入ってゆき、次に現れた時には手は自由になっていた。恵吾はそんな時でも自分からは決して手を出さなかった。友達を捕える役でもなければ自分が捕まる役でもなく、ただ、そんな光景を胸をドキ／＼させながら見ていたに過ぎない。と云っても彼はおとなしい病的な子供であつたわけではなく、成績もよくスポーツも万能であつて友達間にも人望があつた。しかし無意識の中に、その様な光景に異常な血のたかぶりを覚え、それが、かえって彼の行動を消極的なものにしていたのである。

中学に入ってから思い出すのは矢張りそ

んな遊びしかなかった。ただ違っていたのは主役となる子供が今度は「松下」という男の子に変わっただけであつた。この生徒も美少年であり成績も抜群であつた。彼が中学二年生の時、授業が終つてから運動場に出て見ると水飲み場の脇にある太い松の木に白い縄が、ぐる／＼巻きついているのが眼に入った。よく見ると幹の左右から一本ずつの手首が見え、その縄で堅く縛られていた。幹が太いので両手首が交わらないで、その間が可成り離れていた。彼の眼には最初入らなかつたのであろう。急いで前に行つて見ると、果して男の子が松の木を背負う様に縛りつけられていた。その時の子も「松下」だつた。この美少年が強く両腕を後に引っぱられて縛られているのを見た時、彼は、まぶしいものを見た様な気がした。

彼は今もって自分がマゾヒストなのか、それともサディストなのか分らない。サディストは、その裏を返せばマゾヒストだと云われ、又、その逆もいわれるのを聞くが、彼はそのもっとも典型的なものだつた。彼は試験勉強の時など、すぐ自分の足を自分で縛つたりした。ねむ気を覚ますためだと自分ではい

いわけをしているけれども、そればかりではなく足や手に縄が触れた時の胸の高鳴りが忘れられないためであつた。そうかといってそれだけで満足は出来ず、隣の若い奥さんがやって来ると、あの人を縛ってみたいなど思つたりしているのに気がつき、驚いて自分を叱つたりしたものだつた。

彼の生活は表面的には、なんら変化はなかつた。中学から高校、それから大学へと家族や友人の期待を背に優秀な成績で歩んでいった。彼の心の奥底にこの様な異常性が巣喰つているとは気づく人としていなかった。しかし彼のこの欲望は、ますます／＼強くなる傾向にあった。女の人を縛りたい！鼻や口を縛つてその顔をじつと眺めることが出来たら！。誰かその様な行為を快よく受入れてくれる女の友達がいたら。しかし彼は自分がもしそのような女友達に恵まれたとしても、そのようなことがいい出せる人間ではないことを知っていた。そう思えば思うほど欲望は高まつていった。そしてそれは必然的に自縛への道を深めていったのである。対象が得られないことの不満を、自分自身をその対象として晴らすとした。自分で自分の身体を縛ることも、もう何回も行つた。家人が寝静つた後、彼一

姉の鏡台から粉白粉と紅を取り出して自分の顔に
ぬい付けた



人、部屋に閉じ込もって縄を自分の身体に巻き付けてみた。手以外の部分は何の苦勞もなしに縛ることが出来た。両足を揃え、又、胸を両腕諸共ぐる／＼巻くことも出来た。口の中に布をつめ、鼻口を縛ることもいくらかでも出来た。彼は縄で、ぐる／＼巻きに自分の身体を縛って、猿轡の顔を畳にこすりつけながら、ごろ／＼転った。

しかし足や胸、そして鼻口に猿轡を嵌めることは出来ても、両手首を一つにして自分で縛ることは非常に困難な仕事であった。自分の手を使って自分の手を縛る。考えてみても不可能に思えた。といつてもただ足や身体に縄を巻きつけてみても、両手が自由では何の実感も湧かなかつた。両手を後に組んで、それらしいポーズを取ってみるのだが、あくま

でもそれはポーズ以上の何物でもなかった。彼は何んとしても後手にしっかり緊縛された自分が欲しかった。初めの中は片方の手首に縄を掛け、片方の手を使ってそれを身体に縛りつけてみた。でも、それも両手首を縛るまでにはゆかず、次には口を使って両手首を前に揃えて縛ってみた。これは確かに確実に縛ることが出来たが、前手の縛りは彼の趣味ではなく、被縛感も少なかったし、それよりも口を使うので、予め猿轡をしておくことが出来ないのが不満足だった。

彼は十七、八の時、激しい恋愛に陥った。年上のその女人は恵吾の友人の姉であつたが肉付きの良い大柄な美人で、恵吾を弟の様に愛して呉れた。彼の方もそれ迄はつきりした形の恋愛をしたこともないので、この恋に自分の生活の総てを捧げていたと云つてもよかった。恋は彼の生活を正常にしたかに見えたけれども、独り、部屋に籠り、想をその女人の上に馳せる時は矢張り縄と布が彼の脳裏を去らず、それは彼女という対象を得て、前にも増して具体化していった。あのヒトを後手に縛っていつまでも側で眺めていたい。黒眼勝ちの大きな瞳、布で鼻口を覆ったその美

しさも幾層倍になるだろう。彼は彼女の写真の顔の、鼻から下を別の紙で隠してみた。その様な恵吾でも彼女との逢瀬には、その様な傾向はおくびにも出さなかった。二人で居る世界においてはいいらしい程、彼は純粹であった。それが純粹であればある程その反動も大きかった。そして約半年の付合の後、そのヒトの結婚によって彼の恋に終止符がうたれてからは又、彼は自分独りの世界に戻った。

初恋とも云えるこの恋は、彼の女性観を絶対のものにした。女！女！彼は男性に對する「女性」と云うものに異常な関心をもった。それは憧れといった感情に近いものであった。男である自分には立入ることの絶対出来ない世界。……彼の胸中に「女装の願望」が宿ったのは、この時からである。それと同時に秘かに続けていた自縛においても、自分を女性化することによって、男性としての自分を縛るより、比較にならない程の大きな感動を受けることに気付いたのである。

彼の顔は、どっちかと云えば男らしい顔立ちであった。眉は太く鼻口は整っていた。美男子とまではゆかないにせよ知的な容貌をしており、中肉中背、まあ普通にいう「好青

年”の部に入る。「美少年」「好青年」と云われるものにも二つの型がある。所謂、女のような優男と男らしく引締った顔立とであるが、彼の場合は後者の部に入る。背は五尺四寸強で男としてまあ普通の体格である。男らしい顔立といっても整った知的な顔という意味なので薄く化粧をしても美しく引立って見えた。それはなよくとしたそれではなく、言わば男装の麗人のそれであった。

彼が初めて女装してみたのは二十才前後の頃である。もっとも、この女装にも、いくつかの段階があつて、初めから完全な女装をしたわけではない。

彼は自縛から女装へと進んだ。自分の身体に縄を掛け、猿轡を咬んだ顔を鏡に写して見るから、やがて自分の眼の前にある姿や顔が女性のものであつたならばと思う様になった。それは現実には殆んど見ることの出来ないものであるだけに、彼の憧憬は増々その度を深めていったのである。鏡の中の縄に巻かれた人間が美しい女性の姿であつたなら。彼は自分を女性化することによって、自分という男性と向い合っているもう一人の女性を見たかったのである。或る一つの夢を一人二役

することによって現実に見ようとしたのだ。それは自分の身体が受けている縄の感触によってマゾヒストとしての自分と、鏡の中の美女の緊縛姿態を見ることによってサディストとしての自分との、両方を満足させる最上の手段であつたのである。

恵吾には二つ違いの姉がいた。姉は日本橋のMデパートに勤めていたが近所でも評判の美人であつたし又、真面目な女性だった。或る夜、彼は姉の鏡台から粉白粉と口紅を取り出して自分の顔にぬつてみた。なか／＼旨くゆかない。第一に白粉が皮膚にのらないでむらになってしまふ。鼻のわきなどは特に白粉のつきが悪い。しかし、あの何んというか甘酸っぱい、お白粉の香いに彼は異様な魅力を感じた。どうにか白粉が彼の顔を白く変えたので次に口紅をぬつた。唇を突き出して丁寧に輪かくを画き、その中を赤く染めた。眉毛の太く濃いのが気になったが、我慢して鏡の中の自分の顔を見た。彼はそこに自分とは別の一人の人間の顔を見た。それは正しく女の顔だった。

それから自縛の際には必ずお白粉で顔をつくることにした。彼の幼稚な化粧も回を追うに従って段々と上手になっていった。初め

モデルの独り言

紅色の自画像

絹川 文代

読者の方から自己紹介をしてほしいとい
ってきているので何か書いてほしいと、も
う半年も前から（今年の九月ごろ）きいて
いましたが、丁度そのころ、過労から一月
ばかり寝込んでしまい、自分ひとりのアパ
ート暮らしなものですから、急に手伝いの家
政婦さんに来て貰うやらで、すっかりとり
こんでいて忘れてしまっていました。

病気が直ってしまっただけは、不思議な
ことに急に肥りだして、今までお風呂から
上がったとき計って五十キロ位だったのが、
五十六キロにもなって、なんだかモリモリ
と元気が出てきました。それから、いま
までの休みをとりかえすように、お仕事の方
が忙しくなってしまうと、とうとう昨年中
はペンを取るひまありませんでした。

今年に入ってから、暮からお正月へかけ

てのあわただしさもすんで、やっと自分の
からだを取り戻したような気持ちで机に向っ
た、といっても本当はおコタの中で書いて
いるんですけど、とにかく、お約束のお便
りを差し上げることになります。

私は東京生れ、でも、両親も兄弟もない
天涯孤独のひとり暮らしです。私の表面だけ
を見た人は、気性の強いしっかり者のよう
にいられますけど、人のよい純情な娘の気
持でいますのよ。昨年、いや、おとしの
春でしたかしら。今までのお仕事が一寸し
たトラブルでしくじってしまった、初めて
こちらのお仕事がいただけるかもしれない
って、いうのでお逢いしたときも、ちょっ
と、びっくりしてらっしゃったようですわ
ね。長い髪を茶褐色に染めて、アイシャド
ウにツケ眉毛、手と足の爪も真赤にマニキ

は皮膚になじまなかった白粉もアストリンゼ
ンその他、乳液やクリームで下地を作ること
によって一面に伸びる様になった。口紅もそ
のぬり方によって顔の表情が変ることも知っ
た。眉毛に少し手を入れて柔く作りなおし、
眉墨で細く長く見せる様に画いた。男らしい
顔とは云っても、眉毛の他は全体にふっくら
とした瓜実顔なので、要所々々を注意してや
れば完全なる日本美人の顔をつくる事に彼は
自信をもてるようになった。ただ頭髪だけ
は、どうにもならなかった。黒く長い髪毛は
女性のシンボルである。日時を費して長くす
れば不可能ではなかったが、男性として正常
な社会生活をしている身では、そのようなこ
とも出来ない。現在と違って女のかつらを買
う資力もない。仕方がないので頭髪をネッカ
チーフで覆うことにした。冬には多くの女性
がネッカチーフで頭を包んでいるのでこれも
別に不自然ではなく、かえって別の魅力があ
った。彼は、これも姉の引出から手頃なデシ
ンのスカーフを取出して頭を包んだ。多少、
面倒でもターバン風に巻くと、顔全体のバラ
ンスが取れ美しくなった。自分の髪を前に垂
らし、くるくると巻いてヘアピンで止めて見
た。この様にして彼の首から上は今や、もう

ユアしていましたものね。

いまはもう慣れっこになってしまいましたが、道を歩いていても顧ってみる人が多いので、わたし、かえって世間の人が目を瞞るような服装で外出してやろうかと思うの。でも一種の保護色というのでしょうか、この方がかえって安全なのです。こんな女なら凄い男が三人も四人もついているだろうって、街のヨタ者でも、尻込みしてしまふってわけなの。

そういえば私の一番の憧れは、昔だったから、さしあたり清水の次郎長か国定忠次のような大親分の姐御になって、くわえ煙管で若い者を顎で使ってやるのよ。日本舞踊の方が洋舞よりは好きなのも、粋な日本風例えば鉄火な姐御といったのが大好きなのからきているのかしれません。現代だったら裕ちゃんばりの街の愚連隊の情婦というところかしら。とにかく背広を着た真面目なサラリーマンタイプといったものは、わたしの性に合いそうもありません。

趣味は映画とダンス、それに賭ごと。競輪やパチンコもやるけど、やはり麻雀、トランプ、花札というところだわ。モチ、お

いしいものを食べたりドライブ大歓迎。スピードにも弱いのだ。時速百キロ位でハイウェイを飛ばしてみたい。冬はスケートにスキー。毎年冬になると一度はスキーに行かないと、なんだか、身体がむずむずしてくるみたい。行く処は神鍋山。

誰かこんなわたしをパトツてくれないかしら、と考えているんだけど、「キミだったら凄く金がかかるだろう」って、はじめからこわがって話にならないの。私って、そんな見かけのような浪費家じゃないんですが、どうも信用がないんですのね。

体重は前にも申し上げました通り五十五キロ前後、身長は百六十三センチ。年齢は明けて二十と一才。今、髪は赤く染めていますが、そのうち緑に染めかえようかしらと思っています。

でも、毛を染めるといったんで仕方ありません。もうずっと伸ばしっぱなしなんですけれど、先の方が切れてしまつて、この頃は伸びるよりは短くなるような気がして、困っています。

では、今日のところはこれくらいにしていずれ又、のちほど。

完全な女性と化した。彼自身、そう思ふばかりでなく側から見ても美しい女の顔だった。彼は、その女の顔に猿轡を嵌めてみた。猿轡によって下半分を覆われたその顔は余りにも美しかった。

顔に化粧すると自分のトックリのセーターを着て、これも姉の古いスカートを着けた。全体には完全なる女装とは言えないにせよ、今迄の様に男である自分を見つめるのとは違った別世界の気持だった。眼の前に一人の女性が生る。美しい女だった。彼が笑うと彼女も微笑んだ。彼が身を動かすと、眼前の彼女も恥しそうに身をよじらせた。やがて彼の鼻口に厳しい猿轡が嵌められると、前の女もその美しい顔に無残な猿轡が噛まれた。真紅の口唇も形の良い鼻も覆われ、うるんだ様な眼だけのぞいている。胸にぐる／＼と細引が巻かれて、しっかりと締めつけられ、両手は背後に廻された。彼の身にまとわりついて痛めつけている縄は、そのまま彼女の自由を奪っていた。『ううう……』と彼が呻くと、眼前の美女も痛さに絶え切れず呻き声を上げた。

恵吾は、こうして女装に憑かれていった。それは果しない泥沼であるかも知れないけれど、彼にとっては秘めたる悦楽の巷であった。(つづく)

ハイド侯爵夫人

辻村 隆

(一)

鹿鳴館の夜会、華やかなりし頃、恋の甘酒に酔い痴れ、夜毎に続く狂態にうつつをぬかす輩に非ずとも、人々は黒木侯爵夫人の、女王蜂にも似た存在を知らぬ者は無かったであらう。

万人に秀でた美貌で、彼女自身の操縦する四頭立ての馬車が、群衆の中を闊歩すると、人々は羨望と憧憬の念をこめて道を譲ったものだ。この絶世美人が何かの折、私の側を通り過ぎる時、私は心の中で思った。

「ああ、あの美しい肌に、この指先だけでも触れてみたい」

私のこの願いは、侯爵夫人を冒瀆したものに違いない。黒木百合子は美しいばかりでなく、近より難い気品を備えていたし、その名前は新橋通りを走らせる四頭の白馬の様に純潔であったからだ。

彼女が男と並んでいるのを見たこともなく鹿鳴館に現われる時も、何時も細っそりした優雅な中年の女が同道していた。

維新に勲功のあった黒木侯爵の、あの枯れ細った瘦軀が人々の視野から消えて既に久し

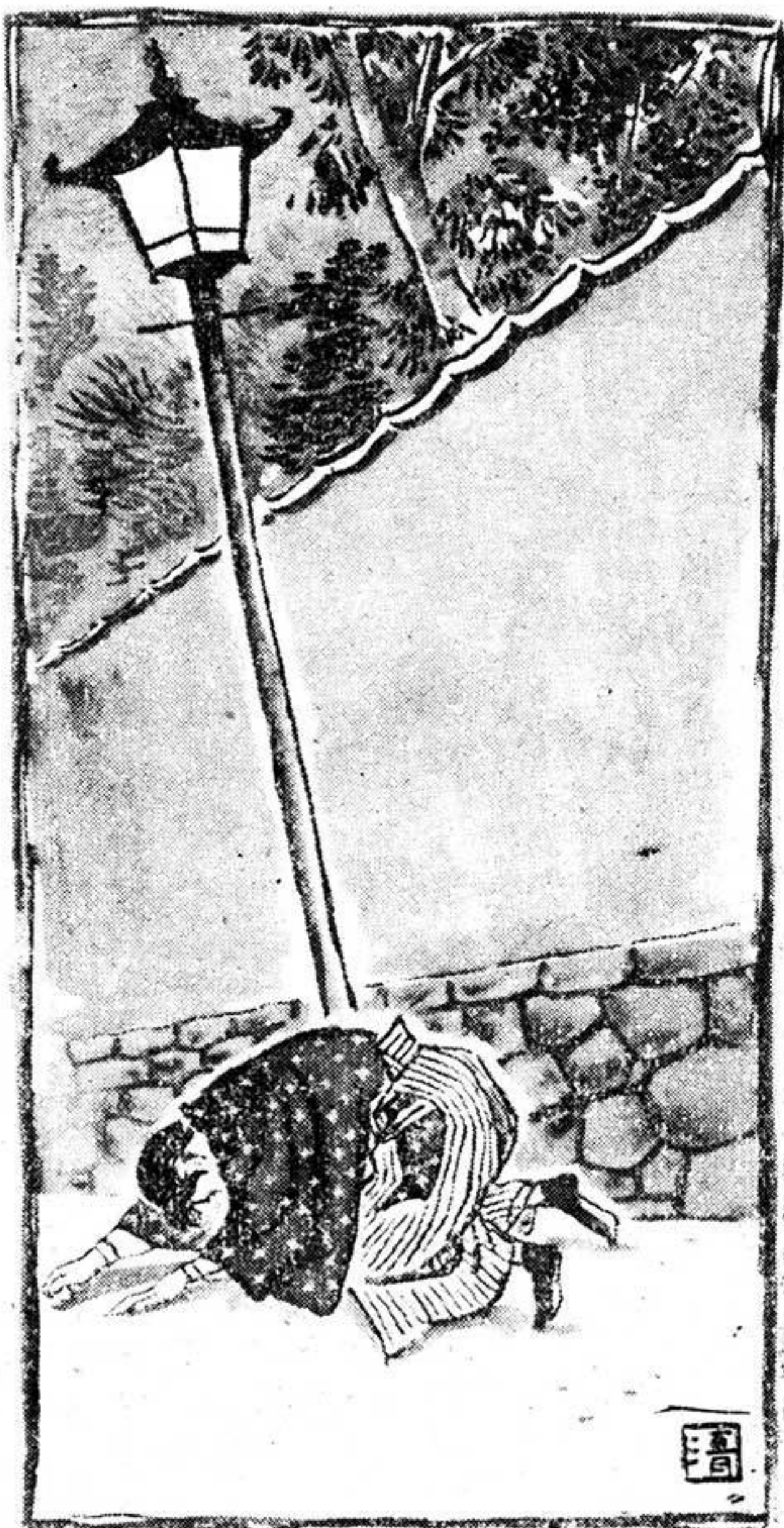
く、鹿鳴館に群がる人々は、誰一人として、黒木侯爵の噂すらしたことはなかった。

黒木侯爵夫人百合子として、爆発的な男性の憧憬の的である彼女が、瘦軀老衰の侯爵と生活を共にしているとは誰も考え様ともしなかった。事実、彼女は瑞々しく、化粧の新鮮さは抜群で、社交界に君臨したその上品さは他の貴族として洗練された夫人連に比しても一際、光っていたからである。その癖、彼女の潔癖さは、貴族や富豪をも身辺に寄せつけず、親しく誰とも交際せず、その身辺は不思議な謎に包まれていたのである。誰一人とし

て彼女の生まれや素姓を知る者はなかった。或る者は、彼女が四国の蜂須賀家の姫だったともいい、他の者は、島津侯の愛妾の落胤だと噂した。鹿鳴館では侯爵夫人が現われても、来なくとも、いつもその話題で、もちきりだった。

偶然が、この美しい黒木侯爵夫人の秘密のヴェールをはがす事になった。

彼女が信じられない程の残酷な恐るべき女



だと判った時の、私の驚きようったら、なかった。若し、この事実を世間が知ったならば明治の奇聞として新聞は大々的に彼女の秘密をあばき立て書きなじったに違いない。

斯くいう私、ダンディを自認し、且つ又、自他共に許した伊達男、今小路公彦が、彼女の秘密を思いがけなくも、はがす羽目に立ち至ったのである。

と立止った。本能的に私は並木に姿を潜ませ様子をうかがった。この深夜、何者なのか？ 黒い影が滑る様に逃れた。その影が、黒木侯爵夫人の屋敷の庭園から出て来たのを見て私は、あっと息をのんだ。

尚も目を凝らすと、もう一つの姿が楚々と扉をしめ、急ぎ足に家の中へ戻って行くのを確めた。

ああ、あの気高い百合子夫人——、私は、

(二)

師走の慌ただしい冬の夜更けて、友人の家でのカルタ会が、興の乗る儘に思わずも永引いて私は夜遅く静かな四谷を歩いてた。その辺りには例の黒木侯爵の豪壮な別邸が、楓の木立深く、黒々と闇に静まりかえっていた。牡丹雪が音もなく降り出したので、私はマントに顔をすっぽり包んで、夜の道を一步、一步、踏みしめて行った。

突然、夜のしじまの中に、用心深く微かな音を立てて鉄門の開くきしみを聞いて、私はハッ

とうとう彼女に、じかに逢ふことの出来る時が来た。

瞬間、私は体で身近に彼女を感じた。昼間は勿論、あの華やかな夜会にも、男性の輩を近づけさせずにいて、夜ともなれば本邸の侯爵の眼を盗んで愛人を、そっと送り出すのであろうか――。

だが待てしばし。彼女の弱点を掴むには、闇に消えた男の素性を知る事が先決だと、咄嗟に腹をきめた私は、音もなく夜の訪問客を尾行した。距離が縮まるにつれて、私は審かしく思い出した。その人間は、美しく優美な侯爵夫人の愛人には凡そ不似合なのだ。その謎の男は、身に沁みる夜寒に、透きとおる様な薄着で、死にたえそうに疲れ果て、足を引曳り乍ら、よろめき歩いているのだ。

時々、立ち止っては苦しげにうめき、今にも崩れ落ちそうによろめいていたが、遂にバタリとガス燈の下で路上に倒れた。

私は足早に近づいて、彼を抱き起した。ガス燈に照らし出された彼は意外に若く、二十才になるかならぬかの青年の顔は、死人のように蒼褪め、髯のない端麗な頬から顎にかけて、笞打たれたように血の惨んだ条がいくつも見えた。抱き上げ様として胸を押えと、

苦痛に耐えられないのか、ウーンと呻いた。

意識が、もうろうとするのか、青年の手は虚空にのけぞった。血の気の失せた唇はけいれんして、何かを訴え様としていた。私は彼を抱きかかえ、人通りの稀な街路を急いで、やつの思いで自宅に辿りつくことが出来た。とっておきのブドウ酒をのませ、暖をとって静養させると、青年は漸やく元気づいて来た。

「何という名前なの？」

私は彼に訊ねた。

「荒井淳一……」

彼は、やっと人心地ついたのか、ゆっくりと自分の名を答えた。

「どうして黒木夫人の別荘へ行っただい」

彼は凝と。私の瞳を読んでいたが、やがて弱々しく眼を伏せてしまった。

「なあ、荒井君――、しっかりし給え。君は何の用であそこへ行っただい――」

彼はやっとポツリと答えた。

「僕、あそこの書生だったんです」

「嘘をいうんじゃない。書生なら、なんだって盗人のように、夜そっと抜け出したりするんだね。それに君を送って出た人は一体、誰なんだ？」

「君子です」

「君子？、誰なんだい」

「女中の君子なんです」

そうしている間にも、苦痛が蘇がえったのか、荒井淳一は体中を押えて歯を喰いしばっていた。私は、彼を自分のベッドに休ませることにした。この青年の服を手伝って脱がしてやった時の私の驚き！。体中、鞭傷が隙間なく蔽い、みみず腫れの血条が無数に浮き上っている。

「荒井君、別荘での出来事を話してくれないか――」

「それだけは出来ないのです」

「何故、出来ないんだ？」

「約束しちまったんです」

「約束？ 一体、何の約束だね。一体、誰と約束したというんだね？」

「いえ、裏切らないという……」

荒井淳一は弱々しく、うつむいた。

「どうして、そんなバカげた約束をしたんだね」

「いいえ、仕方なかったのです。でも誓いは誓いですから、破る事は出来ないんです」

「荒井君、君はバカだよ。それ程鞭打たれ、虐められてまで誓いを立てるなんて愚の骨頂だ。僕は絶対、秘密を守る男だ。打明けてく

れないか——」

私の散々の説得は、かたくなな彼の心を漸やくに柔げた。荒井淳一は序々に打明けだした。黒木夫人での別荘の出来事を涙と共に語る彼の体験は、氣狂いじみた夢想家の幻想としかうけとれぬ程、奇々怪々を極めていた。

哀れなこの青年の話を聞いているうち、私はゾッとする寒気に一、二度ならず襲われたくらいだから……

(三)

新聞広告で彼は書生として、この別荘に雇われることになった。彼は馬小屋で御者の老人と起居することになった。仕事は殆んど雑用が多く、物腰の柔かい老女、杉山が女主人の用事を伝達していたので、彼は黒木侯爵夫人と顔を合わせる事は極く稀だった。一週間に一度か十日に一度、女主人は御義理の様に馬車で侯爵の本邸を訊ねては直ちに別荘に戻り、華やかな夜会や、鹿鳴館の催しにも、気が向けば出掛けて行く様であった。影の如く老女の杉山が護衛する様にお供していった。

別荘は彼と年老いた御者の外は男氣はない様であった。雇われている奥女中、侍女は総て女ばかりであることが段々と判って来たの

である。彼等に食事を運んでくれる女中の君子とは、何時しか人知れず親しくなり、やがて、恋を語る様になった。若い血汐が冒険を敢えてさせたのか、或る夜、自分の部屋で待つからと、荒井青年に囁やいたのである。

約束通り夜更けて、十一時を過ぎた頃、彼は君子が潜かに開けてくれてあった裏戸から邸内へ忍びこんで、君子の部屋へ恐る／＼近づいた時、突然、数人の女から襲われて、勝手も分らずまごまごする間に、その場に倒れ伏せられ、後手に縛り上げられた。ランプ灯が点じられ、彼はもがいたが、縛られては所詮あがらえず、あきらめて女達の為すが儘に二階へ引曳り上げられた。シャンデリアのきらめく目もまばゆげな豪華な部屋に黒木侯爵夫人が、安楽椅子に横たわった儘で彼を待っていた。彼を運んで来た三人の女は、そこで改めて太縄をとり出すと、情容赦もなく、犇々と手足を縛り直し、彼を荷物のように、夫人の足許へ転がせた。

「この犬めが、女の子に手をつけようとしたんだね」

優雅な夫人は体を起しもしないで、ドキリとする言葉を平然といつてのけた。

青年は驚愕からさめると、豪華な部屋で、

美しい若い四人の女に囲まれているのを知って、冗談の様に思えた。自分を縛っておいて何かお芝居のような遊びに耽けるのだらうと想像したのだった。彼は度胸を据えて女の玩具になる気になった。笑い交りに

「ハハ、私が君子に手をつけなくとも、何れ誰かが彼女に手をつけるでしようて……」

瞬間、彼は目から火が散るように思った。侯爵夫人が飛び上って、彼の頬を白いしなやかな手で力一杯なぐりつけたからだ。

甘い笑いは青年の唇から瞬間にして消えた「よくも凶々しくいったね。今にうんと後悔するよ、この犬め！」

彼女は叫んだ。

「女を可愛がる方法を教えてやるからね。さあ、この書生を刑罰部屋へ引曳ってお行き」驚いた青年は、あわてて女主人に赦しを請うたが、容赦なく女達は拷問部屋の様な不気味な一室へ彼を引曳って行った。

壁に掛った四ツのランプが、鈍い光を投げかけていた。

寒々した身の毛のよだつその部屋の中央に愛人の君子が下穿き一つのまま、低い椅子に縛りつけられ、その前に目を引きつらせた妖婦が一人——まぎれもなく、それはあの優雅

な老女、杉山の化身だった——革答をもって立ち上がった。意識を失った君子の腕や背中、激しい答を受けて、血が赤黒くにじんでいたが、老女は尚も無慈悲に、ピクピクけいれんする彼女を打ち据えるのであった。

彼はこの恐ろしい光景に、氣も転倒した大声で援けを叫んだが、後ろから這入ってきた侯爵夫人の激しい一撃で沈黙した。

彼女達は寄ってたかつて、彼を部屋の中に立っているX型の十字架に、がっしりと縛りつけたので、体を動かす事も出来なかった。着物は忽ち引裂かれて、彼が渾一本になると侯爵夫人は、冷たい恐ろしい笑いを浮べて、彼の顔へ吐き出す様に言葉を投げかけた。

「御覧、ここにお前の相手のばいたがいます。お前をこの神聖な家へ引き入れようとして、今、答五十の刑を受けたんだよ。お前の場合は又、別の方法でたんまり責めてやるからね。この事を爪の垢程も口外しないと約束しなきゃ、すぐ殺すことだって出来るんだよ。いいかい。約束すれば、罰は負けてやれないけど、命だけは助けてやるよ」

そうして、恐ろしい拷問が始まった。

細い柳の答を束にして、彼女は彼の腹や尻

や腿を打ちつづけた。周りには愉しげに女達が苦悶する彼を打眺めていた。青年の皮膚から血が噴き出し、幾条ものすじとなって流れた。氣を失うと冷水が、ざぶりと頭から浴せかけられた。答の数が五十に達すると、女達は彼を十字架から降ろし、改めて足を上にし逆さにX型の十字架に縛りつけた。着物の裾がはだけるのも構わず、侯爵夫人は青年の顔をふみつけ、蹴り上げ、血走った夫人の美しい顔は赤くほてっていた。

今にも氣を失いそうになった彼を、彼女達は十字架からおろし拷問は尚も続いて、次いで切釘の一杯に打ちつけた板に彼を縛りつけた。尖った釘先が、無慈悲に彼の肌に喰い込み、必死に赦しを乞うたが、恐ろしい答が返事代りに背中にくいこんだ。それが返答だった。

あお向けに切釘の板に寝かせられて、その体の上を侯爵夫人は、力をこめて踏み歩いた。ブスブスと尖端が皮肉にささり、板は真赤に染った。侯爵夫人は着物をかかげて彼の体の上に腰を落した。彼は、しほるように呻き声をあげたが、侯爵夫人は妖しく笑いこけるばかりだった。

「さあ、二人仲よく縛って上げる事にしよう

お前も本望だろう。売女をここへ連れておいで——」

血まみれの君子が、よろめいて彼の側に倒れた。冷やかな夫人の眼が女共に合図をする。と、青年と君子の首に頑丈な鉄の首輪が嵌められ二人の首輪は短かい鎖で連結していた。

二匹の畜生は並んで四ツ這いにさせられ、女主人の答に追われ、鮮血をいたたらせて、女達の環視の中を、堂々廻りせねばならなかった。彼の左手と女の右手、彼の左足と女の右足が強く縛り合わされ、二人三脚の態で、間断なく振りそぐ答に、いわれる儘に四ツ這いで二人は部屋中を這いずり廻った。

「この儘で夜明け迄、二人っきりにしておいてやるからね。横になるなど、這い廻っているなど好きな様にするがいい。今はそうして横になっていてもいいが、明日は又、働かなきゃ承知しないよ。約束を破って他人に今夜の事を話したりしちや命がないよ」

こういう乍ら、侯爵夫人を先頭にグループは部屋から出ていった。体一面、一寸触っても飛び上る程の痛さで二人は、首と、手と、足を繋かれた儘の不自由な姿で朝を待ちかねた。

朝が来て、老女、杉山が無言で首輪を外し

手足を解いてくれた。ずたずたに傷ついた彼の体は、ひどく痛んだ。夜になると君子が足音を忍ばせてやって来て、彼を裏戸から外へ逃がしてくれたのだった。

「君が彼女と逢曳きするのを、奴等はどうして知ったのだろう？」

彼の話が終ると、私は訊ねた。

「僕を待とうとして、君子が部屋から出て行くところを外の女達に感付かれて、捕まったのです。きっと鞭打たれ、無理に白状させられたのでしよう。ああ、あの奴等をなんとかして一遍、叩きのめしてやりたい……」

「引受けたよ。君に力をかしてもいいよ」

彼は、ぐったりしていたが、飛び上って喜んだ。

「ああ、お願いします。あの阿魔達に復讐させて下さい。すぐ元気になりますから……」

「まあ、ゆっくり休んで元気を回復することだね」

私はアヴァンチュールに対する決断がドキ



ドキと胸を弾ませた。名声高い、優雅な侯爵夫人のあの淑やかな皮を一枚はいでやる快よさに、私の胸は疼いた。

(四)

翌くる日の夜、我々二人は家を出て、十一時頃、別荘の前に立った。暗い窓が庭の中で

眠っている。合鍵で庭戸を開け、雪の降り積った途を音もなく歩いて、家の戸をあけた。全てが寝静まって、ひっそりとしていた。

「侯爵夫人の部屋は二階です」

荒井青年が耳許で囁いた。勝手知った侵入者の様に、我々は暗がりを手探ぐりで階段を昇った。奥のドアから明りがもれている。

「あそこです」

青年は、ガチガチと興奮で歯を鳴らし乍ら先行した。女達相手とはいえ、万一の用意の脅しに、私は舶来短銃をとり出して握りしめた。暫らくためらった後、心の中で、ままよと私は把手をぐっと廻して押し入った。

美しい黒木夫人は安楽椅子に身を横たえて西洋の本を読んでいた。

彼女は薄青色の寝間着を着ていたが、解きほぐした黒髪が背中に垂れ下って、神々しい迄に美しく、安らかに横たわっていた。

彼女の心底に巢喰う陰獣の慾求を知らなかったら、誰一人としてこの美しい侯爵夫人の本体を発見出来た者はないだろう。

咄嗟の驚きに、彼女はバネの様に立ち上った。

「誰です!。この夜更けに!」

「この男に見覚えがあるでしょう」

私は彼女の返事に答えず、おどおどする荒井青年を前に押しやった。

「書、書生です、私の方の……」

彼女は呻いた。眼がキラキラと妖しく鋭く光り出し、先程の安らかな神々しいばかりの傲慢さは、忽ちにして影を潜めた。私は正体を今こそ見た。

「そうです。貴女が非人間的なリンチを加えた荒井君ですよ。生憎と私はこの男の無二の親友でしてね。つい黙っておられなくなったというわけですよ——。貴女は彼が女中と逢曳きしたのを理由に、徹底的な罰を加えられました。その酬いとして貴女自身、罰せられなければならないのです」

「貴方は警察官じゃありません。何の理由で私に罰を加える権利があるのです」

「わかりました。貴女は私を御存知ないかも知れませんが、私は貴女を鹿鳴館で度々お見受けして、秘かな仇心を抱いていた者です。

では明日、鹿鳴館で、この荒井君になされた言行、罰を、皆さんの前で発表しましょう」

「脅迫するんですか。いくら欲しいんです」

「とんでもない、侯爵夫人。マネーなら私は憚り乍ら、はきだめに捨てる程ありますよ。

私の欲しいのは貴女だ!!。それも唯の貴女

ではない。私の鞭の下で呻き、悶え、苦しみ哀願する貴女だ——」

いい終るや否や、私は侯爵夫人に飛び掛った。彼女は呼鈴を振って急を知らそうとしたが、一瞬、私の手は、その呼鈴をしっかりと握っていた。私は彼女をつかまえて、安楽椅子に引曳り込んだ。素早く猿轡を嵌め、両手足を手練の早業で縛り上げた。

高貴の婦人に向って私のした事は、確かにフェアプレーではなかったが、彼女は少しの手加減も要らぬ女である事を、私は先刻、荒井から委細を聞いて承知していた。

彼女が縛られて体を動かす事も出来ず、安楽椅子に横たわっている時、私は一寸考えた。誰にも阻げられない為には、女どもを片付けておかねばならない。

「女達は何処なんだい——」

私は荒井青年に訊ねた。

「三階です」

「じゃ、上へ行こう」

侯爵夫人の体を安楽椅子の足に、逃げられぬ様、しっかり括りつけて、私達は音もなく三階へ昇った。女達は正体もなく睡りこけていた。縛り上げるのは雑作もない事だった。十分もすると君子を除く四人を、すっかり後

手に縛り上げて珠数つなぎにした。猿轡は彼女達のハンカチや下着類を口に押し込んで、声の立てられぬ様にした。

恐怖におののく女どもを拷問室へ運んで、後でゆっくり責める積りで、束にして部屋の隅へ投げ込み、侯爵夫人の部屋へ引返した。

「僕が呼ぶまで、君は君子さんと三階でゆっくり休んでいるがいいよ」

嬉しそうに二人は三階に消えると、愈々僕の独壇場だ。彼女は安楽椅子に縛りつけられた儘だったが、憎しみに曇る眼差しで、この深夜の侵入者を睨んだ。

「侯爵夫人！貴女の仲間は縛られて拷問室で束になっていますよ。今度はあなたの番だ」
彼女は毒々しい射す様な眼差しを投げたが私は笑っていた。

安楽椅子から外して、両手足を縛った夫人を軽々とかかえて拷問室に引き返した。女達の眼前で、この女主人を思いきり、むごいめにあわしてやりたい衝動に私はかられた。少々の生易しさでは、この女は音を上げないと思ったからだ。

手始めに私は夫人の両手をしっかりと縛り直して、部屋の片隅に置いてあったT字型の吊り木を中央へ持ち出して来て、これに吊り下

げることにした。

鞭打つには余りにも惜しい白磁の美体に、私はしばし、打つ手を忘れて見とれた。床すれすれに爪先立って浮いた体は、私の答を恐れてふるえていた。

思い切って一せん、二せん、鞭がうなりを生じて白い肌に巻きついた。見る見る数条の鞭痕が桃色に染まって、うねった。彼女の眼は大きく開いて絶叫していた。絶望的な呪う様な眼差しに、私の心は、いや増して武者震いした。

T字型の責め木は、いい按配に環を随所にとりつけてあった。私は夫人の右足首に縄を巻きつけると、上部の環に縄を通して、ぐいぐいと引張り上げた。足が宙に浮いて右足が伸び切って、最大限に片足は吊り上った。

荒井青年を呼ぶと、彼は間もなく君子を三階に残して独り拷問室にやって来た。この光景に彼は、いたく満足げに喜び、私の手から答をとって、打ちのめした。

それから狂った様に、隅で一魂りになって脅えている女達を一人／＼別々に引曳くると、X字型の十字架にかけ、十字架の裏にも、別の女を逆さに縛りつけた。

妖婦、杉山は切釘の板に縛りつけ、私と彼

が、かわり番に、この妖婦の体の上を力をこめて歩いた。一本一本の切釘が女の体に数限りなく突きささった。

最後の一人は、君子の縛られた低い椅子に腰掛けさせて縛り、鞭が限りなく行き交った。侯爵夫人の黒い瞳から、とめどなく涙が頬を伝っていた。何の涙か――。私は勝利の快感に酔っていた。夫人の傲慢な唇は音を立てて崩れ始め、麗顔に哀願と泣訴の表情が現われて来た。私は侯爵夫人の両手を吊環から外した。

私は荒井青年に四人のいましめを解いて、この拷問室に監禁するようにいつけて、この部屋を出た。

こうして私は鹿鳴館の謎の美女、黒木侯爵夫人の秘密を掌中の珠にしたのであった。

だが、人を人とも思わぬ傲慢な侯爵夫人の美しい苦悶を痛快に想い出すとはいえ、その度に私は、ちよっぴりと良心の痛みと、かすかな戦慄を覚えずにはいられないのである。

(外国小説を筆者の換骨脱胎で翻案しました。御諒恕を)

(完)



ファンタジア

マゾヒスティカ

山 本 節 夫

散文的な人間は、やはり散文に止どまった方がいらしい。自伝めいたイタ・セクシュアリスすら、それが現在に近づくにつれて、もう筆が進まないのも、本来が長篇に向かない種類の故であろうか。

火花の様に散っては消える空想。想出の中に生きる現実と想像の混合。それらの断片を消え去って終らぬ中に記録として置きたい。これが以下の小文の、つましい企画なのである。

(一) 与謝野昌子の歌について

三尺の柳を折れば大馬に

春は女も乗らまほしけれ

情熱の女流歌人ならではの名歌である。

ああ、この柳の小枝を鞭にして、大きなお馬にがっしりと跨ってハイシ〜と乗ってみたいという春の乙女の情熱の吐露。大馬でなければいけない。小さな騎馬では感じが出ないのだ。肥馬に跨って思いきりせめてみたいのだ。成熟した女の春は、女神の様に柔和な

面ざしの裡に深く、この様に切ない衝動が秘められているのであろう。

大馬と仰せられずに、この六尺の男子の背中ではいけますまいか。

「仕方がない。今日の処はお前で我慢してやる」という高貴の女性はありませぬか。

(二) 浦島太郎の歌について

御座敷芸の一つでドン〜節の替え歌である。

ナントカナントカで浦島太郎は——ここ

で二人はジャンケンポン。負けた方は四つ這いになり、勝った方は「亀に乗り」といいながら背中に馬乗りになる遊び。

若くて綺麗な芸者相手にやる時など冥利につきる時がある。威勢のいい妓なら、そのまま暫くの間は乗馬気取りで這いまわらせる。勿論、こちらが勝たぬ様、うまく目くばせをする注意は忘れてはならない。

(三) 馬乗り衝動について (その一)

戦前の映画に、今は亡き(?) ジーン・アーサー主演の「恋は春風に乘って」というのがあった。

金持の女主人公アーサーがホテルに泊るのだが、幾間も続いた豪華な部屋を支配人に案内させている中に、運動部屋というのがあってそこに自動式の木馬が置いてあった。

つれづれの折には木馬などに打跨って、ひとりハイシドウ、ハイシドウと乗馬気分を出す風習でもあるのか。

それかあらぬか、デイヤナ・ダービンの女学生ものの中にも、広い子供部屋で雨の日に妹達と自動仕掛けの木馬に跨って楽しんでいくカットがあった。

そこで空想するのだが、うら若き乙女の独り泊る部屋に、こんな木馬を置いておいたら

果して彼女は遊ぶであろうか。鍵のかかったホテルの一室で無聊のままに暫くはためらった後、一寸いたずらばい顔つきになって乗り心地のよい鞍に、そっと跨ってボタンのスイッチを押すであろう姿を想像してみたい。

馬乗り衝動は、いかなる乙女も抱くものと信ずる。ハイキングなどにいったて畠を耕す馬をみても「ああ馬に乗ってみたいわ」と彼女らはいうに違いない。

馬乗りロケで落馬、負傷した桑野みゆきにしてからが、病氣本復後多摩川べりで水浴する馬を見て「ああ可愛いらしい、乗ってみたいわ」と叫んでいるではないか。「可愛い」だから、乗馬したい」という論理を説明して下さい。

最近では既に幾度か引用されたが、「氾濫」の馬乗りシーンは近來の圧巻である。馬上豊かに打跨った三宅川和子の大写しが正面に近づく頃、「ホラ、シッカリ。ハイシハイシ」などと馬を励しながら両脚で英二馬の脇腹を圧しつけるあたりは、監督の指導とも思われず、本能的な馬乗り動作から出た自然の演技としか受けとれない。或いは、このアマゾン、秘かにこの様な室内遊戯を既に幾度か経験しているのだろうか。

(四) 女優と乗馬について (その一)

ここでは特にポリウムの観点から触れてみたい。楚々たる麗人の乗馬姿も結構だが、やはり感じが出るのは肉体の豊かなタイプではなからうか。たとえば京マチ子。彼女は相当の騎手で、殊に巳御前をやる前頃は毎日、暇があると馬場に向った由。そんな一日なのであろう。きりっとした乗馬服姿で右手に鞭を持って仁王立ちの写真説明には「いい天気。今日は思い切り乗り廻してやるわ」。次頁は颯爽と愛馬に跨って山野を走る勇姿が続く。その跨り方は、誠に悠然というのか泰然というのか、肉づきのよい脚でピツタリと馬腹を押えつけ、ギユウとも云わせぬ跨りっ振りは誠に堂々として非の打ちどころなし。取っ組み合いにたとえれば、ぐいっと組み合せてデンとばかりに馬乗りに跨ってビクとも動かさぬ風情。お馬も光榮な事ながら、さぞ疲れた事だろう。

今は奥様でおさまっている木暮実千代も乗馬の名手。障害飛びの写真もある。馬上正面からの写真は今でも目先にチラつくが、独特の口許に笑を湛えて馬首を起す姿は、余りにも深々と騎っている故か、人馬一体に近い感じであった。



最近では、高倉みゆきが有名だが、万里昌代、筑波久子、泉京子らグラマー諸嬢も大いに乗馬してはしいものである。

(五) 女性の話法について

M型女性の会話は、一般に男性化するわけで、その都度、いい知れぬ気持ちに酔うのだがこれも終局的には「いじめられたい」気持ちに通ずるのだろうか。

「ヤイ、どうだ、参ったか。これでもいこうとをきかないか。きかないと承知しないぞ。よし、許してやる。生命だけは助けてやる。家来になるか。おとなしく馬になるか。馬になれ——これは発音ではウマンナレとなる——手について、あやまれ。あやまらないか」等々、いち／＼挙げれば切りがないが、要するに荒っぽい「征服語」を使う女性に心が魅かれるのである。

更にこれが間接的になると、たとえば作品の朗読の場合など、岸田日出子の様な太い声で男の言葉を聞くと、胸の内が疼いて来る。武士が百姓をいじめて、手打ちに致す。それへ直れ」とか、強盗が「有金、出さぬと生命

がねえぞ」などという処。人間を組敷く処を女性が読んでくれるのは誠に味わいがあるものだ。

いつだったか、ラジオで坪田譲二の三平ものを聞いたが、「父親の首の上に馬乗りに跨って」と女性アナが平然と読みつづけた。

「熊にまたがりお馬のけいこ」は、ラジオの歌のおばさんが度々やっている処である。

これもラジオの電報クイズというで、谷崎の「痴人の愛」の主人公ナオミを当てるのがあり、電文は「早く僕を馬にして下さい。譲二」というのであった。ジョージ・ルイカーは、どうも意味が判らぬらしく、しきりに女性司会者に訊くのだが、その場はいい加減にごまかしてしまった。恐らく放送の後、例の場面を説明したことだろう。

(六) マゾ的精神について

倉田百三の「愛と認識の出發」の一節であったか、強国日本が弱い支那をいじている新聞記事を読むだけで心をときめかすと告白している。強い者が弱い者をいじめるといふことに魅力を感じるのはマゾの真髄ではない

だろうか。これが根本になって色々なケースが生ずるのではないだろうか。女性のお馬になつて奉仕したいマゾヒストであれば、きつと「いじめられている弱い者」の姿を見ても、心をしめつけられるに違いない。

日常、みかける弱い者いじめは、えてして小さい子供達の世界に多い。しかもその動機が全く無因的で、ただ衝動的に、乃至は周囲を意識して、自己の存在なり力なりを誇示するだけの目的であることが多いだけに、傍觀者の受感も大きいのである。

夕暮れのゴルフ場。イシの最終コースの辺りの境界を越えて、小学五、六年の一群が侵入してきた。別に定まった遊びでもなく、ただ追いつ追われつのものであった。パットが終ってみるともなしにみていると、取組み合ひには好適な芝生。ワーワーいいながら結局強い子達らが、それぞれの相手を捻じ倒し馬乗りに跨って押えつける。下敷になった子は或は俯付せに、或は仰向けに転されてバタ／＼もがく。それを愉快そうに馬乗りになっている子供達。更に興味を添えるのは、キヤ

ディーの十七才ぐらいの女学生が「あんた達危いから止めてよ。駄目よ」と制止しながらも、つぶらな目で楽しそうに眺めていることだった。

そして頃合いになると、押えつけた子を解放してやる。しかし再び逃げ出した子を追いかける。どこかで又、哀れな馬たちは攔まっ

て情容赦なくいじめられるだろう。或る春の日の郊外。草原をバケツを下げていく一群れの小学生であろう。男二人に女三人で小魚釣りにいく様子であったが、二言、三言、いいあっている中に男の子同志が喧嘩をはじめた。「コイツ、泣かしてやる」と、

いいながら一人の男の子が、もう一人の男の子を押し倒して馬乗りになった。三人の女の子は、これを取り巻いて口々に「可哀そうよ許してヤンナさいよ」というのだが、強い方の子は、なか／＼許さなかった。また行進がはじまったが、押えつけられてつぶされた子は、後の方から遠慮勝ちについていった。河原にいても、また潰されてギユウギユウいわされるだろう。

(七) 馬場にて

高校の二年ぐらいであろうか。髪はオカッパ、色は薄黒いが、体つきはガッシリした健

康そうなお嬢さんであった。

二、三日前は柵の外で馬丁に長い手綱をあずけて練習をしていたが、胸を張って、なかなか筋はいいと思っていた。今日は馬場の中で一人で栗毛に跨っている。黒い新調の乗馬靴が、ピカ／＼光っているのが印象的であった。並足、駆足はどうやらなのだが、早駆になるとどうも馬がいうことをきかない。拍車を一生懸命いれるのだが駄目だ。時間が来て私は下馬したが、彼女はまだ栗毛をせめている。そのせめ方がはじめとくらべて段々大胆になってきた。

その中、ようやく馬がいうことを聞き出した。額の辺りに薄汗をにじませ、前髪も少し乱れた彼女は鼻孔を少しふくらませて早駆けを楽しんでいた。五回、六回と廻らせると、馬の足は時々遅くなる。彼女は手綱をしごくとその端で首の辺りを引っ叩いては拍車を扶る様に喰い込ませて、せめたてては再びいうことをきかしている。心から馬乗りの爽快さを味わうだけの余裕が出てきている様子に見えた。声には出さないが、せめたて鞭うつ時には「コイツ奴、いうことを諾かないか。諾かないと、こうだぞ。これでもか、参ったか。よし、その調子。うい奴、もっと走れ。よし

というまで、あたしを乗せて走るのだぞ、馬奴」と心の中で叫んでいたことだろう。そして家に帰っても、今日の楽しい攻めを思い出して愉しみを想像することだろう。馬乗り姫に幸あれ、馬たちは御姫様の御出を首を長くして御待ちしております。

(八) アイディア

“NHK即興劇場”で巴御前のヒントに荒馬を乗りこなすところを宮城千賀子がやった。昔は宝塚の男役でエンビ服がよく似合った人だが、どちらかといえばM型のこととて「ヤイ馬奴、ハイシドウ、ハイシドウ、ピシリ、ピシリ、これでもか」と、いいながら乗りこなす。アナウンサーが身振り手振りの大熱演と紹介していたが、テレビではないのでその勇姿はみられなかった。

そこでジェスチャー遊びにかこつけて馬乗りの場面を演ずる様に美しい女性を仕向けては如何。男女一組とすれば効果は満点であろう。例えば「痴人の愛」のナオミ。これだったら必ず馬乗りの動作の無言劇が展開されることだろう。仁田四郎、猪の倒さ馬乗りでもよろしい。須磨浦の熊谷真実はどうだろう。無官大夫敦盛を組数いて首を切るところだ。浦島太郎でもよからう。



忘年会のホロ酔い気嫌、茶目のB・Gが日頃のウツ憤、晴らすはこの時と、女だてらにアラレもなくロマンスグレーの課長さんを四つん這いにして、ドシンとばかり馬乗りに跨る風景は、ほほえましいではないか。

金太郎、巴御前、クリスチナ女王、無頼の谷のデートトリックなど、みなさんも考えてみて下さい。

(九) 女性の乗馬について

ルナールは、その有名な日記の中で、美しい女性が馬に乗っているのは、いい眺めだ。しかし鼻の下に薄汗をかきながら馬を下り立った時は、興ざめだ」と、いつている。さすがに大作家だけあって鋭い感には恐れ入るが馬化族にとっては、それが何ともいえない魅力なのである。さんぐ馬の背に跨ってせめたてる馬乗り姫様の御幸福だけ願っていればよいのだ。

初心の乗手の動きを見ていると大体、自分独りが反動をつけてハイシ、ハイシとやっている様だ。馬の方は止むを得ずチグハグな動きをしている。それが済むと今度は馬の動き

にまかせきって、ユラリユラリと歩ませる。

謂ゆる小児語でいうパカパカという感じであるが、これが初心者には案外いい気分を与える様だ。パカパカが一しきり済むと、今度は少し意欲的になって、手綱を無暗にあちこちに引っばって、お馬をいじめたり拍車を入れて駈足にうつらせる。みていると馬がいうことを諾いているのに、なおも拍車を蹴りつけている人が多い。生物に跨って腹を蹴りつけること自体に興味を抱いているとは思えないことすらある。女性の潜在的サジズムが、ここら辺りから、そろそろ頭をもたげて来るだろう。

しかし熟練者の乗り方となると全く別である。第一、始めて跨る時からして違う。引き出された乗り物を先ず、じっと見据え鼻面のひとつも撫でて、さて、サア、お前の背中に騎って仕わす。よいか、十分に御奉仕申し上げるのだぞ」と申し渡し、それから、ゆっくり側面に廻り手綱をととのえ、ヒラリと美事なフォームで右足が馬背を越しパカリと御騎り遊ばす。暫時、腰の位置を定めて十分に騎

座を正し、手の位置もきまると初めて行動を起させる。一廻り二廻りは例の並足でユラリユラリと静かに騎乗。背を伸ばし胸を張ってキツと前方をみつめながら、どうだ馬め、恐れいったか。さあ、これから、みっちり仕込んでつかわす。覚悟はいいか、そして拍車はいり訓練が始まるのである。

(十) 馬乗り行動について(その二)

アゲーノール王の娘、エウローペーが牛に姿を変えた大神ゼウスにさらわれる話は、ギリシヤ神話でも有名で、泰西映画のテーマにも、よく使われる。

春の野辺に草つみをしていた美姫の前に現われた大きな白牛が、膝を折ってゆっくり横になる。それは「私の背中に乗ってごらん」といつている様だ。「フーン、私を乗せるというの」エウローペーは一寸いたずらっぽく笑い、「でも、おとしては駄目よ」と、いいつつヒラリと牛の背に跨り「どう、勇ましいでしょう」と、いうや否や、牛は矢の様に走り出す。かくてエウローペーは、クレーテの島に連れて行かれ、そこで新しい王国をつくる事

になるのだが、馬乗り衝動の一例として掲げるにふさわしい話ではある。

「火山灰地」という。これも戦前に割合、評判のよかった新劇の一節で、両親が自転車に乗りたいたいという娘をさとして、女の子が自転車なんかに乗るのは身体にいけないのだというのが出てくる。高校で友人に誘われて馬術部に入りたいといったら両親から「女の子には自転車とか馬はいけない」と叱られた女の子の話を最近でも耳にした事がある。自輪車に乘ったり乗馬などするとオテンバになりはしないかと懸念して、その様な教訓となったものかも知れない。

(二) 横乗り鞍について

前頃に関連するのが女子馬の場合の横乗り鞍である。馬化族に一番喰い足りないのがこれ、エリザベス女王の阅兵式で、いつも期待が外れるのもこれである。

我国でも鎌倉時代頃までは女も男並みに跨ったらしい。西洋では、どうであろう。少くともギリシャ神話のアマゾン達は、どっかりと馬乗りしていた筈である。馬乗り姿勢が男性的な姿勢であるとすれば、女性的な騎乗姿勢をとることを以て第一の眼目とした女大学的教養が、かくは横乗り鞍の出現となったのか。

こうみてくると戦後、我国の女性乗馬熱の腹元は、馬乗り姿勢のルネッサンスといえよう。

(三) 女優と乗馬について(その二)

二、三日前の新聞に西独の新進女優リザロツテ・パルファア嬢の来日インタービューがあった。

小柄の美しい金髪娘の様だが

「趣味は乗馬。メス、オス一頭づつ栗毛の馬を飼っている。毎日、代る代るに乗りまわすのが何よりの楽しみよ」とのこと。

同じ頃、多分、正月映画であろう。珍版ヤジキタ道中記で鞍馬天狗ならぬグラマ天狗になる万里昌代。頭巾だけは本物だが、胸のはだけた筒袖のカタビラの下はブラジャーとパンティの露わな姿。このいでたちで「馬に乗ってバツバツと切り廻してやるわ」と御本人、大いに張り切りの由。スタジオでも切られ役志願者が殺到しているのではあるまいか。

(四) イタ・セクシユアリス草稿

それは、スミさんと附合い始めてから数回目のこと。いつもの待合の二階の一部屋で私はスミさんの細っそりした手に口づけしながら

ら甘えていた。御酒のせいかな少し上気した彼女の顔は、ますます美しく、つぶらな黒目勝ちの瞳は、ひとしきり輝いてみえた。

「お姉さま。僕を馬にして」

私は思い切ってこういふと、彼女にすりよっていった。

「おバカちゃん。人が来るじゃないの」

「大丈夫。ここに上って来る階段は一つしかないんだ。その入口に、ちゃんと開き戸も閉まっているんだから」

「仕様がな坊やね。それじゃ一回だけよ」
 そういふと彼女は、黒っぽい紗の、下のピソクの肌着がすけて見える姿で立ち上ると、四つん這いになった私の後に廻って、横坐りに静かに腰を下した。

「腰掛けじゃいやだ。ちゃんと騎らなくっちゃあさあ、早く騎って」

私がせきたてると彼女はその通りにしてくれた。

「ハイ、これでいいでしょう。さあ、歩け、ハイ〜ドウ〜」

漸く念願のかなった私は一生懸命、体を起しながら美しいスミさんの白い足袋を横目に、卓の廻りを廻りはじめた。馬上の彼女はさすがに少し前かがみになって、時々、障害



物の座蒲団などをどけながら

「もう一回まわるのよ」

そして、私は八畳の部屋を三回まわされた騎手は、だんだん大胆になって行く様であった。二回目頃からは背中もシヤンと起して両の足には、ぐいっと力が入ってきた。速度が鈍ると

「ホラ、もう少しよ。もっとシツカリ」

などと励ましながら手の鞭で叩かれる。

大分、調子が出てきたなと御馬は判断した。たスミさんは三十二才の未亡人である。妹の経営する赤坂のさる料亭に今は身を寄せてお

り、そこで何となく気があって時々一緒に食事をする様になったのである。

(四) 首乗りについて

題名は逸したが何かのサーカス映画で、美女が象に跨る過程が出た。

まず象を長々と寝そべらせる。よく日向で犬がする様に両足を揃えて横に出す。あれである。そして半分起した首の辺にまず跨ってから、長靴のかかとで首すじを蹴り上げる。

その勢は相当はげしいものである。すると象は大きな体をおこしにかかる。象の体が横向けから真直ぐになるので、乗手はそれにあわ

せて、だんだん真中になる様に上手くバランスをとって行く。しかも前足が起き上がる時は身体は前に、後足では後に大きくゆれて、漸く象上、正確には象首上の美女となる。グラ・ン・テカールよろしくノッシノッシと歩きまわらせる姿は、なかなかよい。しかも象使いは絶えず象の耳の付け根あたりを足で蹴って命令しているのは、馬の場合の拍車に当るだろうか。

マリリン・モンローが、やはり象の首の上に跨って「始めは恐かったけど、とてもいい気持」と、大はしゃぎの写真もあった。

花坂道子緊縛フォト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

女体『浣腸風景十二態』

(9×13cm) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

絹川文代緊縛姿態集 大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

切腹の医学的考察

壬 生 三 郎

十月号の皆川波留子さんの切腹実験記は全くすばらしかった。お二人の息づまるような緊張と鼓動がじんと胸に伝ってくるようだ。短大生といえは十九か二十の豊麗な肉体に有りあまるエネルギーを持てあますお年頃と観察できるが、周到な計画と冷静な観察をなし得た余裕は、さすが教養の高さを思わせて敬服の至りである。

本誌の切腹研究も歴史、小説、告白、心理の線をたどって遂に医学的考察というところにたどり着いたが、皆川さんが身を以て遂行した実験は、氣息えんえんたる最近の本誌の切腹研究に活を入れたばかりでなく、十一月号の折伏下男氏の「腹を切る事」と共に、新しい研究の領域を開いた殊勲甲の価値があると思う。

新聞記事、外科病院や検視の記録等を調べると下腹部を三―四寸切ったものが一番多くその次が五―六寸で、一尺以上は極めて稀である。総体からみると男子に較べて突き創が多く、長さも概して男子よりは短い。但し長いのものになるとずば抜けて長いものがある。しかし深さについては不明なものが多いのは確実な資料が残っていないからで、皆川さんが深さの測定をされたのは大変よい参考になった。

なつた。

腹壁の厚さを開腹手術の折に測ってみた。副直腹筋位、すなわち直腹筋の外縁で、側腹筋との間の筋肉溝になっているところでは

一八才女 四、〇センチ
二〇才女 二、六センチ
二一才女 〇、六センチ
四二才女 三、三センチ

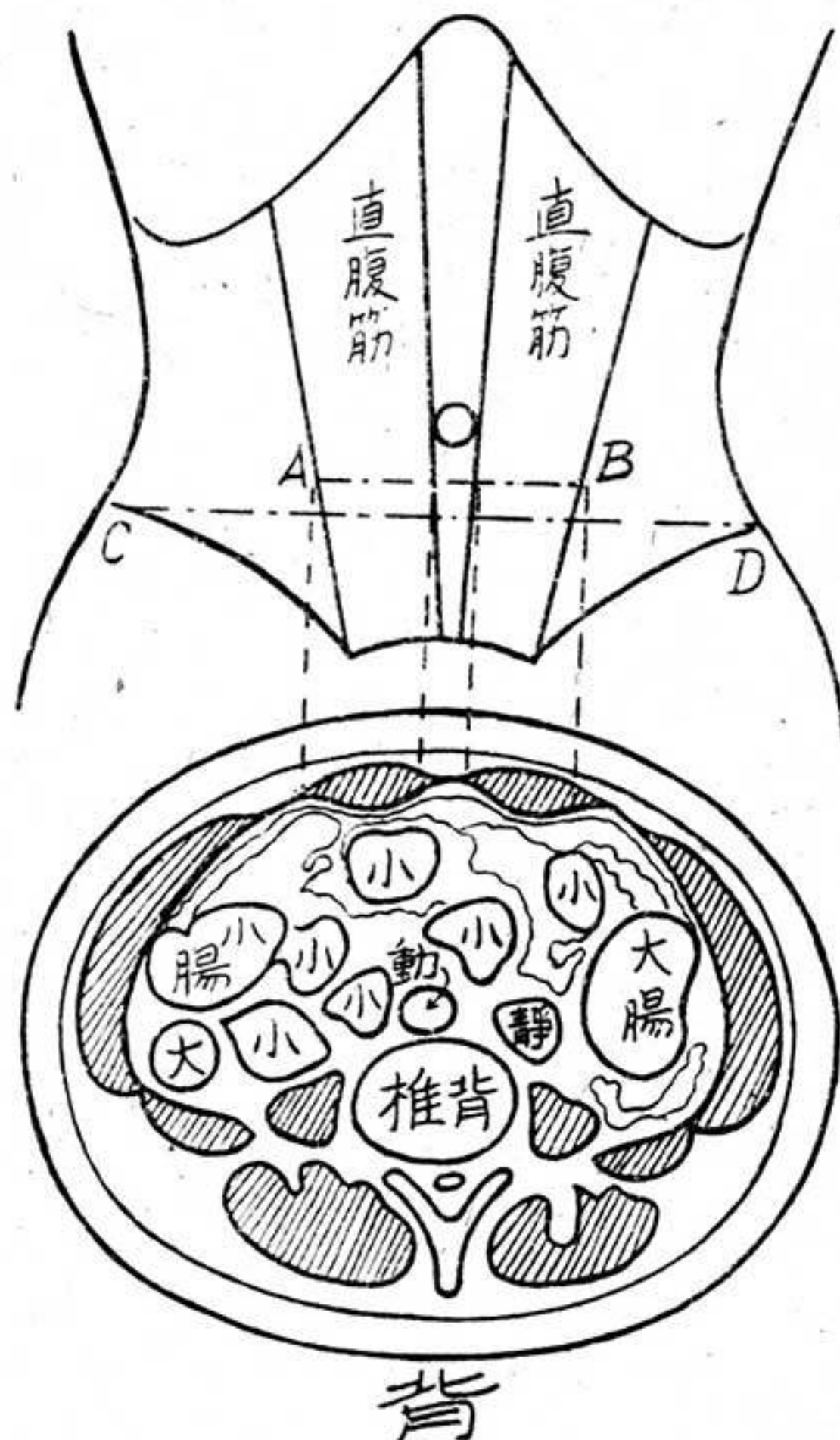
であつた(男子は省略)

こんなに厚さがまちまちなのは皮下脂肪層の厚さによって左右されるからで、個人的な差がすこぶる多く、平均値を出すのはあまり意味がない。

ところで九月号の日本医師会雑誌に十七才の女性の腹部切断面のカラー写真が掲載された。これは臍のところで腹部を輪切りにした切断面で、腹壁、内臓の關係が一目りよう然にわかる。若い娘だけに皮下の脂肪層が厚く生前中は艶やかであつたろうが、女性としては未熟だから胴廻りは細い。昔の歌ならば十七の細腰というところだ。

この切断面では皮膚の表面から筋肉層に達するまでの深さは二センチ弱、直腹筋の厚さは約一センチ、従つて刃を少くとも三センチ以上突込まないと、腹膜を貫いて腹腔には達

腹部断面畧図



斜線ハ筋肉 動ハ大動脈 静ハ大空静脈
小ハ小腸 小腸間ノ細線ハ腸間膜

しない。皆川さんが皮下脂肪が見える程度に切ったのは賢明な計画で、腹腔に達するほど切ったら、網膜や腸管が脱出して厄介なことになる。

写真は臍部で切断したものだ、実際には臍一寸位の辺を切ることが多いから、もっと壁の厚みを増し、成人の女性や肥満性の人などは一層厚みを増す。皆川さんの皮下組織の厚さはどれくらいだろうか。

この切断写真では直腹筋の幅は一〇、五センチで、多くの実例で三―四寸切るのが多いことと一致している。いいかえれば実際にはほぼ直腹筋の幅に相当して切るということになる。従って直腹筋の幅が広い人はもっと大きく切ることにもなる。

腹を切るにはいたみに堪えるために腹に力を入れねばならぬ。腹に力を入れるときに一番緊張するのは直腹筋である。その結果は逆

に一番堅くなった直腹筋を切らねばならぬから、余計に力があるという悪循環に陥ってしまう。何としても切腹は能率の悪い自殺方法だが、それに堪えるという武士道的自己加虐が美談化され得るのだろう。

刃を引廻す右手の運動範囲はすこぶる重要な意義があるようだ。この運動は肩と肘の関節を支点として行われるが、右手が左方へ行きすぎても右方へ行きすぎても力が弱くなり結局直腹筋の幅の範囲が一番力が入る。

だから左直腹筋のほぼ外縁の辺に突立てて右に引廻すが、臍の下あたりでほんと一息つく場合が多いのは、精神的に緊張し、且つ痛みに堪えるのが、丁度この辺で或る限界に達し、更に右に引廻すにはもう一度勇気をふるい起し、緊張し直さねばならぬという精神、身体的な事情があるためだろうか。若し深く切ったものなら、丁度左側の直腹筋を漸く切断し終った緊張が、一時にゆるむためとも想像できる。皆川さんにこれを望む方が無理かも知れないが、臍下何センチ位で、左側に何センチの所から切りはじめたかがわかると、一層具体的だと思う。

臍下部から更に右へ引廻して、大体右側の直腹筋外縁に達したとき、引廻す力と勢いを

落さない、その個所は筋肉層がなくて、ただ筋膜層だけになっていて、薄く、且つ弱いから勢いが余って容易に腹膜を破り、刃は腹腔内に達するし、大腸が脱出するようになる。大腸が脱出するのは、中央で直腹筋を切断して大腸の一部の横行結腸が脱出する場合もある。

刃が腹腔内に達したり、腸が脱出したりしてもそれだけでは死なない。腹膜炎を併発するか麻痺性の腸閉塞症を起し、そのために死ぬことがある。出血は皮下の出血では、微々たるもので、皆川さんの実験でもわかるように、放置又は圧迫しておけば自然に止ってしまふ。だが直腹筋を切断すると直腹筋の中央の真裏にある血管も切れて、相当の出血が起る。また腹腔に入ったときは大網と腸を傷つけ出血するが、これはじわじわと出てなかなか止らない。腹底にある大動脈、又は大空静脈を傷つければ大出血が起り、たちまち失血死に至る。切断図の写真によるとこの動静脈は皮膚面から約八センチの深さにあるから、刃を二寸五分—三寸突込むと到達する。

皆川さんの記事と切断写真とからヒントを得て、腹壁の厚さと幅とを測ってみたが、次のような数字が出てきた。十代世代以上の例

はここに略す。

姓年令	腹壁の最長径 (C—D)	直腹筋の幅 (A—B)	皮下の厚さ
K二〇瘦	二五センチ	二センチ	一センチ
S二八	二五	二	〇、五
M二四	二五	三	〇、五
M二〇	二五	二	〇、五
M二二中	二三	二	〇、五
A二六	二六	四	二
U二六	二五	四	二
U二四	二六	三	一
K二二	二六	三	一
K二二	二五	三	一
C二四	二七	四	一
I二七	二七	四	一
K二二	二四	二	〇、七
Y二六肥	三二	三	一、七
L二八	二四	二	一、七
M二六	二七	三	二

未婚既婚経産妊娠等の区別をしなかったのは手落ちかも知れないが、この数字から大体次のことがわかる。

直腹筋の幅は一二—一四センチで、腹壁最長径の約半分を占め、その人の肥瘦にはあまり関係しない。皮下の厚さは一二センチが大部分で、これはむしろ中年以後、いわゆる更年期ぶとりの人では三—五センチになるものがある。そうすると中年以後の女性は切腹するのには苦勞することであろう。

(おわり)

代理部だより

○限定版特別号 第二集 「緊縛写真と緊縛画集」略号「緊縛」は残部が極めて僅少となりましたので広告を中止しましたが、只今でしたら在庫しております故お申込下さればお送りします。定価五百円(送共)です。

○臨時増刊号「青い廃院」定価二百円

長編サディズム小説の決定版として好評を得ております。未見の方はお申込下さるようお待ちしております。

○臨時増刊「悦特第四号」定価三百円

三月中旬発売予定!新人モデルを加えた緊縛モデルのポーズをふんだんに盛り上げたグラビア口絵、四馬孝新作緊縛画集、悦虐小説の再録等、豪華な特集を御期待下さい。

○分譲写真の中、「G組」並に四馬孝画「涙のダイヤモンド」(略号「かん」「なみ」)の分譲を中止いたします。

○以前分譲中のもので現在広告していないものは在庫しておりません故御諒承願います。

○特写の受付は写真部繁忙のため当分の間中止いたします。マゾフォトの焼増は打切りになっております。

私のイメージと
アイテア

われ編集長なりせば

田中二七夫



私は若し仮りに本誌の編集長であったとしたら、私自身で勝手気儘な編集をしたいと思っています。題しまして、「奇譚クラブ特集号傑作作画写真集」としましょう。

先ず最初は、滝先生にお願いしましょう。花嫁姿の緊縛画が多いですが、いつ見てもきれいですね。これを色彩で描いてみたら如何ですか、とても美しいと思います。これは二枚乃至三枚、場面を変えて描いて頂きます。次に純日本風なものとして、花嫁姿ばかりでなく、巫女姿、尼姿のものも面白いと思います。これをそれぞれ適当した背景のもとに緊縛して頂くことにします。

第二陣として南村先生に登場して頂きましょう。以前に、「観世音菩薩」というのを見せて下さいましたが、これは中々の傑作で私の頭の中に残っております。あれからヒントを得て「旅の風物詩」（とはいっても、女性を主体としたもの）なんていうのは、いかがでしょうか。時代は江戸時代。主人公以外の人物は、人間でも動物の人間化したものでもどちらでもよいとして、

一、「是より小田原へ」又は「道標」すなわち、行先を指さし、首から『是より小田原へ何里』という札をさげて、簡単なふ

んどしをつける。(以後ふんどしだけは皆つける)

二、「一本足のかかし」

頬冠りと半てん(小さいので腹が出る)を着て腹をふくらませば尚よし。

三「地藏さん」(ヌード)

坐らせて膝に石を載せて、手のひらにローソクを立てて赤い布を首にまく。

四、「獅子」(ヌード)

神社の入口にあるでしょう、あれです。ヒゲをつけて背に何かまたがせるも面白い。

五、「二宮金次郎式乗物」(ヌード)

背は乗物にして、手には奇クでも持たせたら如何でしょう。

南村先生特有の動物の戯人化をうまく活用すると大変面白いものができるのではないのでしょうか。

では、いよいよ第三陣には四馬先生にお願いすることにしませう。先生は、いつも皮革を用いた素晴らしい絵を作っているようですが、こゝでは一寸変って、次のようなのは如何でしょう。はるかじめ責めとでもいったテーマで、まず「障害物競走」と題します。

一、「パン食競走」又は「ナマの魚」

両手はうしろへ回し、手首だけを合せて括

る。パンティー一枚で上半身はハダカ。

二、「梯子くぐり」

もちろん後手の手首は縛ったまゝで口にはパンをくわえている。(これは最後まで)

三、「針の峠」又は「一本橋」

平均台を渡らせる。台の下には画紙をまいておく。

四、「ドライブ」

口にはパンをくわえ、後手首を縛られたまま、子供用の三輪車を足で押しながらゴールへまっしぐら。

第四陣では杉原先生にお願いしましょう。

題は「男女平等」という、至極結構なものを選びました。

これは本来、男性しかやらないものを、女にもやらせようというものですので、絵の空想力を最大に發揮して、奇抜なものを作ってもらいます。女性はずべて、ブラジャーとパンティだけで、肉体美を誇って下さい。

一、「ラグビー」

球を持って走るあとからタックル。激しく転倒する両者。美しくもあられもなき姿。

二、「モチつき」又は「薪割り」

三、「俵をかつぐ」又は「一心太助」

四、「横綱土俵入り」

化粧まわし(腰巻で代用しても可)をつけてブラジャーをとる。

次は日常生活の緊縛化といったもので、北原先生にお願いしましょう。

服装は、パンティ又は腰巻ということにしましょう。手は前手縛り、足は足錠をはめて短いくさりで繋ぐ(左右約二十センチ)、首には首輪(犬の)をつける。

こういった服装でいろいろの日常家庭生活の作業をやらせるのです。例えば、

一、庭に水をまく。

二、穴を掘らせる。

三、洗濯をさせる。

四、お酌をさせる。

その他、ふき掃除とか、いろいろあるでしょう。次は両手両足を前で縛り、一本の綱で吊るし上げて鐘の代用する。といった絵でないとは出来ないといったもの。それに類したものに、制服の女学生を遊園地の飛行塔でぐるぐると回しながら吊り上げてゆく。もう一つ遊覧バスガイド嬢の両手両足をひろげて大の字にして吊皮に括りつける。

こういったアイデテは、絵画の独壇場でしょう。きっと見たえのあるものが出来ると思います。

さて、いよいよモデル嬢の緊縛写真にうつりましょう。責める方の男にはヒョットコ又は天狗の面（女性の男役が扮してもよい）、責められる女はオカメの面をかぶせる。

家庭寸劇「妻と馬」

妻「あたし、あなたにいじめられたいの」

夫「ようし、今、いじめてやるからナ」

妻「ハ、ハイ」

夫「ほら、着物を脱がしたぞ、さあ、馬になれ、馬になれ」

妻「ハイ」

夫「ムチでこうして叩いてやる、ホレ」

妻「あ、あっ、いたい」

夫「バカ、馬は痛いなどとは言わぬ、前足をあげていなくのだ。それ、もう一つ、えいッ、そら、どうだ」

妻「ヒーン、ヒーン」

夫「さあ乗るぞ、それ、ハイドウ」

というぐあいになると、多分モデル嬢は尻込みしますでしょうね。

次は女性モデル一名の縛りですが、背景と服装を変えます。衣類等が必要ですが、こゝ

では、そんなことに主眼を置いていませんから、半裸体縛りでゆきましよう。

一、巫女姿の女は鳥居に。

二、尼さんは墓標又は墓石に。

三、女給はテーブル又は椅子に。

四、登山姿の女は岩角又は木の枝に。

五、百姓娘は田圃の畦道に。

六、芸者は風呂の流し場に。

といった具合に、それぞれ服装と背景をマッチさせます。いずれの場合も、上半身や脚の部分は、出しておきます。（完）

現代マゾヒズム芸術時評

（最終回）

原 忠 正

ずい分永い間、私はこの時評をつづけて来た。その間には個人的な環境の変化や、いろいろな都合で継続してゆき難い事情もあった

けれども、編集者の懇切な取扱いによって、ともかくも旧刊以来約三百項に近い紹介をして来たわけである。

ところが、去る十一月中旬、私は卑怯な中傷者の密告によって、当局に拘引された。其の結果、私たちが中心となっていた同好者のグルアップが、全く関係のない売春という名目で捜査をうけ、一部の人は召喚され、甚だしい迷惑を蒙ったわけである。但し、一部新聞紙上に報道された事は、その殆んどが全くの作り事であって、事実と反する。私達は売春をした覚えもなければ、又退会者を脅迫した事もないし、いかがわしい写真を盗み取ったこともなければ、其を種にして恐喝したこともない。これらの事はやがて開かれる公判廷で順次明かになってゆく事であるが、その

不正の有無に拘らず、マゾ同好会がこの様な形で、その一部とはいえ公然と摘発されたこと（それは明らかに架空の理由によって行われたものであるが）について、私は其の責任を取る心算である。その上、一部雑誌や新聞紙が何等関係のない本誌をまで云々するに至っては、私は最早、本項をつづけてゆく事自体が、不要な疑惑を生む原因ともなりかねないので、心から惜愛の気持ちをもちつづけ乍ら、一旦、本項を打切ることにした。

有志の人々にして、本項類似の頁を設けて一般読者に紹介をつづけていって下さるならば、それは私の望外の幸である。

私は、一方、某三誌を通じて、司法関係者の異常性愛者に対する驚くべき無智、と、とんでもない想像を矯正し、更に一般に深くひそんでいるかくれた同好者に、安心と光明を与える為の小文を発表する。週刊スリラーが、冷静に、第三者の目からみた私共の会を紹介して呉れた為、私は意を強くしているのであるが、こうした機会に、私は、一般娯楽誌を通じての啓発を始めなくてはならないと思っている。そして又、時代はすでに、本誌の如き同人誌的な性格を持った雑誌の中での自慰的な発表から、一般の人々に、私共の実

態を知らせ、通常の性愛とひとしい取扱いを考えさせるべきときに至っていると考える。

私は、今回の不祥事をよき転機として、出来る限りの啓発に意を用い、必らず、この国のどこかに、北欧やアメリカのヌーディストの村の様な、異常者の樂園を作ってみせようと考えている。

ともかく、本項を通じて知りあった多くの人々に対して、私は心から惜別の情を持ち、閲読せられた方々に、力足らずして、所期の目的を完徹出来なかったことについて、深くお詫び申上げる次第である。

かつて、本誌が猥せつ文書の容疑を受けた事がある。けれど今日の如くに復活している。私も亦、再び、近い将来に、この潰え去った廢墟から不死鳥の如く立ち上るであろうことを、そして、其の時は、大きな贈物を読者に贈るであろうことを記しておく。

復刊最終項

最終回である為に、私は各映画の題名のみをあげておく。この作品のどこかに、マゾヒストなみの部分が必らず見出される。

一、「黄色い恐怖」"Mein yeliebte

Bestie", (独)

二、「大いなる神秘」 印独合作

三、「墓につばをかける」 (仏)

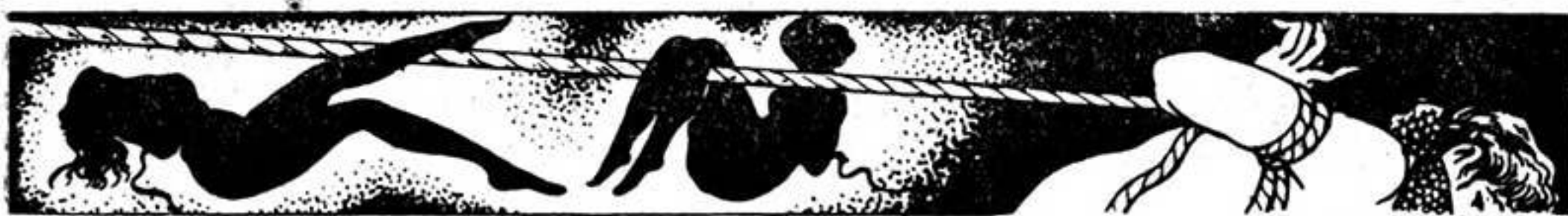
四「リングの友情」 未公開 (ソ)

五「オルフェの遺書」 未完成 (仏)

(オルフェの遺書は、ジャン・コクトオの最終作といわれる映画である、この作には美神ミネルバに近付こうとする詩人の姿が描かれる。コクトオは自ら詩人に扮して出演しているが、その経過と、ミネルバの映像、それに従う守人半馬人の姿は、異様な感銘を以って私達に迫る。この様な驚くべき作品が本項の最後を飾ることに、私は大きな満足をもっている。かえりみれば、本項はオスカー・ワイルドとコクトオの双頭の驚くVに始まった。そして今、コクトオの遺書とさえいわれるオルフェの遺書を以て終るのである。) (完)

(付)

十二月号に掲載の「F. Prfhe Fions」の著者パトリシア、ブルヌさんから丁寧な返信があった。私は彼女が贈って来た写真が、今や、本誌には役に立たなくなった事を深く残念に思っている。 (原)



最近考えたこと

近藤 一

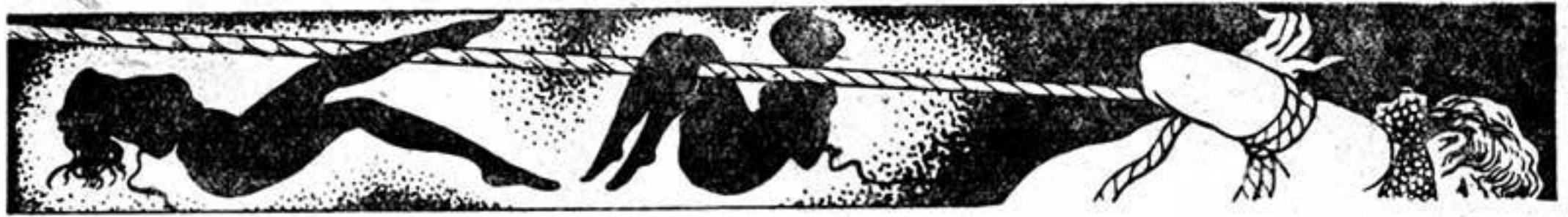
○ 正月の開放された気分が、とかく破目はずし易いのはあり勝ちな傾向ですが、その一端を狙って「女を責めること」が重要なポイントをなすことも、古今東西の通例と思われる。

所謂、正月興行の中では映画にしても演劇にしても、顔見世だけの賑々しい演目か、ホネのない勧善懲悪や他愛ないドタバタが巾を利かして、愛すべき「新東宝」などは女体が、さぞかし責め上げられるだろうと思わせるような題名を高々と掲げて、時代物に現代物に大活躍の有様です。近々新しい映画評が全国各地の愛読者の方から寄せられることでしょう。私も機会があったら投稿してみたいと思います。

今回は出版物を覗いてみたいと思います。別段「奇譚クラブ」に範を摂ろうという心算もありますまいが、暮から正月にかけての群百の刊行物には多かれ少なかれ「女の責め」が扱われています。もともと自らの浮薄で不誠実な編集、経

営から採算の取れぬ群小誌が、悪どい商魂から只々ドギツイだけの描写に走り、遠からず自らの首を締め上げて泡沫の消えるような、はかなさを示すのは至極、当然なことですから敢えて論ずるに足りませんが、現実に特異性のみを誇示して存在する二、三の雑誌については、やはり考察を要するものと思うのです。

○ 「奇譚クラブ」とは浅からぬ縁の須磨利之氏が編集の指揮を摂られる「裏窓」は確かに一つの異色と思います。須磨氏が、いつ頃からリーダーになられたのか存じませんが、取るに足りない愚劣な「かっぱ」という小誌が「裏窓」に改題されて以来、次第に強く特性を顕示して来たと思います。K・Kの読者の方は、市販される「裏窓」を手になさることもあるでしょう。第一、「裏窓」という名が、自嘲的で偽悪的でひねくれ者の都会的センスという奴に受け容れられる要素に富んでいます。責めの写真集は「或る美容体操」と称して外



るでしようか？そこには過去のもの無く、求める現在の真実のみがあるのです。「奇譚クラブ」を手にして、まず特写フォトを眺め、次に読者通信を読むのは私独りではなかったことも明らかにされました。これが「奇譚クラブ」の生命なのです。記事にしても独りよがりな文章の遊戯は殆んどありません。控えめで淡々とした文章が深く胸奥にしみ透るのです。それは「裏窓」の作品に見られる華麗さはありません。私は別に稚拙だとは思いませんが、「奇譚クラブ」の文章は「裏窓」の掲載作品に比して技巧に乏しいとは思いますが。然しその道の愛好者には充分理解し得るものであるだけにその質朴さが却って忘れ難い印象を残すのだと信じています。自然の流れとして、「奇譚クラブ」には時代物が乏しいのです。

○

過去の物語は責めは肉体の苦痛の事実で、容赦のないものです。拷問であり極刑であり、惨い外観を備えた苛責として「裏窓」の得意とする処です。しかし、現実に愛する者を残酷に処刑できはしませんし、加減なしに責め虐むことは許されません。「奇譚クラブ」の扱う責めは、外形的には遊戯かも知れませんが、責めにプレイがあるので生活が生まれるのです。肉体の苦痛より深みに富む心理的悦虐が愉しめますし、現実の生活の支えになる雑誌、真実の寄り集まりの「奇譚クラブ」には、私達が強く愛着を感じるだけの充分な理由がある訳です。

「奇譚クラブ」と「裏窓」の異同は、是非、善悪の問題で

なく、両者とも性格の異ったものとして存在価値を持つのです。私としては、小さいながらコクのある「奇譚クラブ」をより強く愛しているのですが……。

○

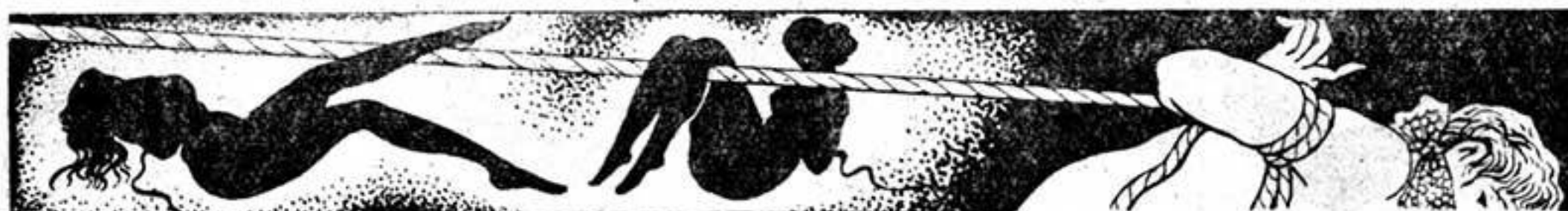
「裏窓」を手にした方は「現代読本」をも、御覧になるでしょう。しかし、これはいけません。雑然とした装いの下に浅薄なゴシップが並んでいるだけです。フォトも挿画も粗末なもので悦虐の性向を殊更、興味本位に扱かい、醜悪な犯罪トピックスとして取上げるだけで不快を感じるばかりです。

○

写真画報のようなもので新年特集号と銘うったフォト中心の雑誌が「世界はだか美特集」というようなものを出しました。中心は勿論ヌードフォトですが、その大部分がストリップ劇場でのスナップなのです。この雑誌の広告は一流新聞に掲載されていたので御存知の方も多いと思いますが中で「女の囚われ美」という数葉のフォトがありました。それがいずれもストリップ劇場の写真で、縛りも責めもお座なりの、被虐女体さえいい加減な、全然、意欲のない作品でした。裸を晒すことを何とも思わぬ手合にかつらをかぶせ、肌着もなしに着物を着せ、割れ竹さえ見せておけば、縄をただ巻きつけただけでも責めになると思うようでは、「奇譚クラブ」の村井知可子嬢の腰元折檻の足許にも及ぶものではありません。

○

今年になって、突然、姿を現わしたものに、東京池袋の辺りから出版されたい「風俗奇譚」というのがあります。



装丁を見たところでは「奇譚クラブ」と、それに今は無くなつたらしい「風俗草紙」「人間探究」等を、つきませたようですが、中味は女の縛りと責めというサディズム一辺倒の存在です。今の処グラヴィアのフォトも何かの焼直しらしく、モデルに親しみが持てませんし、記事も雑誌としては小説等に乏しく、一種の文献雑誌を模しているようです。この模倣がいつまで続くか、現在の状態から脱皮してユニークな存在になり得るかどうかは興味ある処だと思います。

他誌のあり方を観察することによって、日頃「奇譚クラブ」の長を愛し短を難じている裡にも、自からその素晴らしい特質を感じないではいられないのは、私独りではないと確信する次第ですが……。 (一九六〇・一・一五記)

○

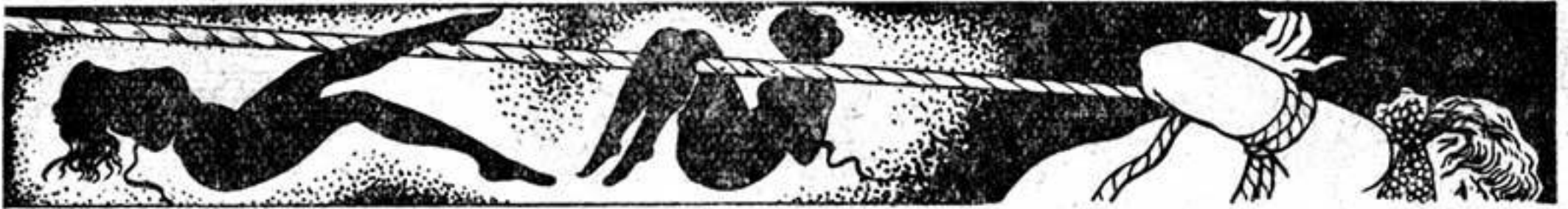
前宣伝が賑やかだった新東宝の正月作品「女奴隷船」を観ました。何とも愉快的な映画で、つまらない喜劇など顔色なしというところ。

大東亜戦争の末期に、アメリカ軍レーダーの機密写真を入手した前線部隊から菅原良太扮する須川中尉が東京へ飛び、その途中、アメリカ軍に襲われて飛行機は撃墜される。海に落ちた中尉を救ったのが、お唐さん舟という日本の女を支那へ売りに行く密輸船で、女王と称するのが三原葉子。女王が中尉に惚れた頃、丹波哲郎を頭とする海賊にぶつかって中尉と女王と女達の他は皆殺しにされ、船も焼かれる。中尉の機転の反乱も、女王のヘマから失敗に終り、三原は女達と反目して首領に近づく。アメリカ側スパイの出現で中尉の使命

がバレ、中尉は女達を連れて脱出、密林を踏破した処で三原に裏切られ女達は捕えられる。そこで海賊の仲間の脱走兵が中尉を援けて海賊達と一戦を交え、結局、悪を滅して日本へ帰る。

ストーリーは右のようなものですが登場人物の設定が実に突飛で面白いと思います。交戦国同志の日本と支那の間を、日本人が日本女性を商品として往復したり、海洋活劇まがいの海賊が現われ、拠点の島には女奴隷のセリ市を開いたり、一寸した軍隊以上に近代装備の武力を持っていたり、西部劇まがいの戦斗をするのですから驚ろきです。可憐なヒロインの三ツ矢歌子がまた実に立派で志操堅固、修身の教科書のよきな博愛主義を持ち、どんな責めにも少しもひるまず弱りもしない強い体力を見せてくれました。

最初の被虐シーンは、野戦看護婦になる気で乗船した彼女が、人買船の実体を識って投身自殺を企てた処を見つけられ見せしめの罰を受ける処です。言葉とはうらはらに自分からマストを背に負うように立ち、上体をぐるぐる巻きにされると、しゃんとしているのです。海賊に捕えられた女達が勝利の酒宴に曳き出され、さんざん鬨り物にされる処もありアルでした。衣服を剥ぎ取られる者、髪の毛を引廻される者、仰向けに抑えられて酒を流し込まれる者など、新東宝ならではのものです。一旦は反乱に成功しながら、すぐに失敗して監禁される女達。海賊の本拠地で奴隷女としての競売のあと、烙印を押されそうになります。眼の仇にいじめられるのが左京路子で、太腿へ焼ごてを当てられようとして三ツ矢歌子の健



気な抗議で救われます。中尉に恋した三原葉子が中尉と脱出を図り、失敗して首領の女から女奴隷へ格下げ、おち込まれた奴隷小屋で女達からリンチを受けながら、格闘にも弱味を見せず、三ツ矢歌子の博愛主義に救われます。強風下、中尉が脱出して女達を救い密林へ逃込みます。女達は素足で密林を逃げ廻り、ヘトヘトになってバタバタ倒れる有様で、漸く海岸へ来ると三原の密告で先廻りした海賊に全員捕えられてしまい、首謀者と見られた左京路子が首領の拳銃で惨殺され、抗議した女が一人射殺された上、密告者の三原も殴られる始末。そこへ中尉が最後の逆襲を挑んで女達と海賊の一戦が始まり、正義が勝つことになる訳です。三原は悪の酬いに傷つき、三ツ矢歌子は終始正義を貫いて中尉と結ばれるらしい、と私は考えます。

が、ともかく目まぐるしく変転するストーリーで、紙芝居的ではありますが興味はそれだけ、しっかりした縛りは一つも現われませんでした。只、三ツ矢歌子の鞭撻たれるシーンで三原葉子の悪役ぶりに移動したのは演出の救いでしよう。同時上映の「大天狗出現」で松浦浪路が芸妓染香に扮し、実に美しい被縛の姿態を見せてくれたので大いに気に入りました。(一九六〇・一・一七記)

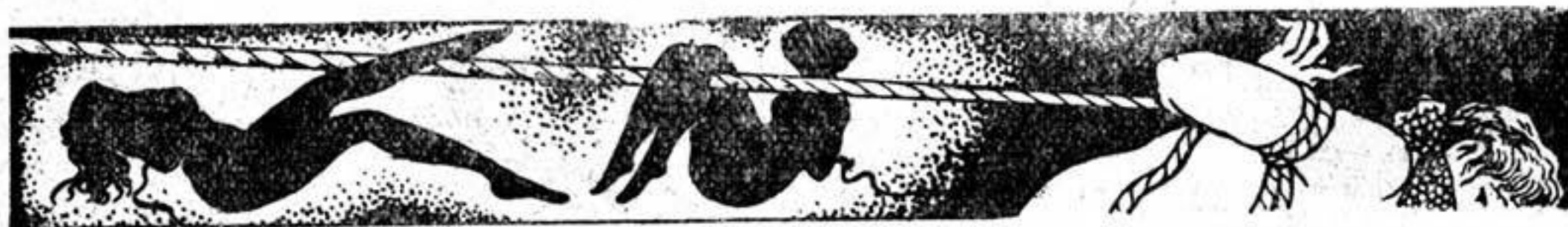
○
KKの二月号読者通信に川端多奈子さんの通信がありました。彼女の被縛姿態の美が今日のKKを産み出す重要なきっかけであったことは異論がありません。彼女のマゾヒスティンとしての成長が、KKの変遷と表裏一体をなしていたこ

とは、以前、「被縛モデルの横顔」を執筆なさった辻村氏は勿論、多くの方々の認められる処で、辻村氏がおっしゃったように、結婚のためにKKのグラヴィアから去った彼女は、或いは交替期にあったのかも知れないし、モデルとしての限界にあったのかも知れません。

果して彼女は結婚したものか、そして彼女の被虐性を愛した相手の男性と、どのような生活にはいったのか知る由もありませんでした。KKによって誕生したマゾヒスティンの彼女の体験を貴重と思うのは私一人ではない筈です。短い通信文の裡から、彼女の心の隅には、できればもう一度、辻村氏の手で縛しめを受け、塚本氏のカメラの前に晒されたいという願望があるように思います。モデルとしての可否は私の知り得る処ではありません。しかし現在の彼女を自分の眼で確かめてみたいという心も強く、彼女がグラヴィアを飾ったら……と思わないでもないのです。

彼女は現在の心境を窺わせる言葉として「マゾの欲求から死の苦しみで逃れたものを」というようないい方をしましたね。偉いと思います。

だが抑圧では解決できません。男性のSと女性のMは決して倒錯ではないと私は思います。むしろ自然の性なのです。自然の欲求は無理に抑えることが至難であり、而もSMの甘美な欲望を抑えることは不可能とも云えるでしょう。KKに育てられ、そしてKKに愛着を傾けた川端さんには到底できないと断じます。結局は、望郷に似た自然の感情は素直に昇華させることが大事だと思うのです。当初体当りで悦虐と取



っ組んだ彼女が、時の経過によって今は考える時期を迎えたと思うのです。

川端さん！ ペンをおとりなさい。貴女の貴女だけの貴重な体験を、貴女の意識で、貴女の間で文章にするのです。

私は寝ている子を起そうというのではない。鎮まっている意識を呼びさますことを考えているのではない。抑え難い筆の意欲を如何に処理すべきかというのです。今日の貴女にはKKを自分自身のものと看る心が以前より遙かに根強い筈です。カメラの前から離れてKKを観、カメラの側に立って貴女の後輩の姿を眺め、そして静かに想いを綴る時、「桃色のヴェールにつつまれて」に、まさるものが生まれるでしょう。それは貴女の生きることの拠り処になるでしょうし、貴女のKKを大事にすることにもなる筈です。

川端さん！ 是非お書きなさい。貴女の記事を興味本位で読む人も多いかも知れませんが、然し貴女の記事を愉しく、そして有意義に読む者も決して少なくないと思います。何よりもそれによって貴女自身が喜びを感じるとしたら最早、躊躇の要は無いでしょうね。

私はKKの被縛モデルであって川端多奈子さんが、モデルから脱皮して稀少なKKの女性執筆者として再び誌上に現われて下さることを期待する者です。(一九六〇・一・一八記)

○

週刊実話(二月一日号)の記事に、またまた「奇譚クラブ」という名が載っています。而も「奇譚クラブ」の今年の一月号、二月号の表紙が写真に撮られています。取立てで「奇譚クラブ」という存在を好ましくないという記述は無く、風俗

誌として紹介されているだけなので、未知の人々には「奇譚クラブ」が悦虐を中心とした存在ということも分りますまい。

原忠正氏の文章は「奇譚クラブ」の記事の中では学術的といえるものだったと私は思います。それは単に文章の形式がそうだったというだけでなく、内容的にも思考の積んだものであり、復刊後の「奇譚クラブ」が一つのスタイルを確立するまでの間、誌上を飾って相当の作用をしたものといえるでしょう。

所謂、奇譚を集めていた休刊前のものと対比すると復刊後の方向は風俗科学文献としての存在を志向しているように思うのですが、その中心が沼氏の研究発表であり、それに対抗すべく発表された諸氏のサディズムの労作であった訳です。

原氏が、それら各氏の中の一人であったことは間違いありませんし、原氏が中心になってMS同好会を結成なさったことも時宜を得たものと思います。東京近辺のKKファンではやはり身近な組織の必要を認めていましたし、事実、原氏が三百人の会員を把握なさったことは、それだけの要望があったという証拠だともいえるでしょう。記事は「奇譚クラブ」に悪意的でなく、また悦虐という性向にもそれほど冷淡でなく唯、人目をひき易い見出しをつけたもので、そういった会員組織の動きより、恐喝の悪を追及しているのが実情といえるでしょう。

何にしても私達は、自分自身の名誉にかけて愛する「奇譚クラブ」を傷つけぬよう心して行動しなければならぬと、つくづく思ったものです。(一九六〇・一・二〇記)



Sサイズのウエスト・ニッパを素肌にあて、まずホックを脇でとめると、男にしては曲線的な私の腰のあたりは、もう女のようにくびれてしまうのです。紐を引いて更に締めつけると、グラマーな女性のその様に細い胴と豊かに盛り上った腰がでかあがるのです。その時のウエストは約六〇センチ、あまり細くはありませんが、女性の平均よりは細いようです。六〇センチ以下のウエストのスカートはあまりないと云っていい位ですから。身長は約一六〇センチ、やや太りぎみでヒップは九〇センチ以上あります。バストは九〇センチ足らず。

—＜告白＞—

私の女装

村田良夫

私は自分が男性であることを否定することはできないし、男性としての機能も十分なのです。自分のからだに相当に女性的なのは知っていても、女になってしまいたいと思ったことはありません。自分が男性の意識を持ったまま、時たま外観上の女性にもなれるということに異常な刺激を感じるのです。

女装の時には、男性としての附属物は全く判別できない様に処置する仕掛けをほどこすことも忘れてはいません。女装を始めてから既に十年以上も経った今では、下着だけの姿でも男と見破られることは先ずないと云っていいでしょう。ウエスト・ニッパの上に直

接パンティをはくこともありますが、ヒップ・パッドをあててコルセットを着け、その上にパンティをはくこともあります。ブラジャーにはパッドを入れて着用しています。ブラジャーの背中のホックをとめるのが、とても難しかったのですが、今では手際よくとめることができるようになりました。私の胸は、乳房といっても可笑しくない程女性的なふくらみを持っています。パッドを入れないと、やはり淋しい様です。

私が女装に興味を持ち始めたのは、十三、四才の頃と記憶していますが、初めてから数年の間は、全く幼稚なものでした。家人の留

守をねらって、姉の衣類などを身につけ、鏡にうつしては、ささやかな満足を味っていたのです。女性の衣類、まして下着を自分で買うなどということは、とてもできることではなかったのです。自分以外に、この様なことに興味を抱く人がいるということも知りませんでした。

いつか完全な女装がしてみたい。そして誰にも気附かれずに夜の街を歩いてみたい。その様な想いが胸につかえていたのです。和装への興味は不思議に余りありませんでした。勿論、今でも、私の女装は洋装に限られていると良いでしょう。もっとも、その頃の私は、シュミーズとスリッパの違いも知りませんでした。

私が今の様に本格的な女装をする様になったのは、十九か二十の頃、女性と交際を持つ

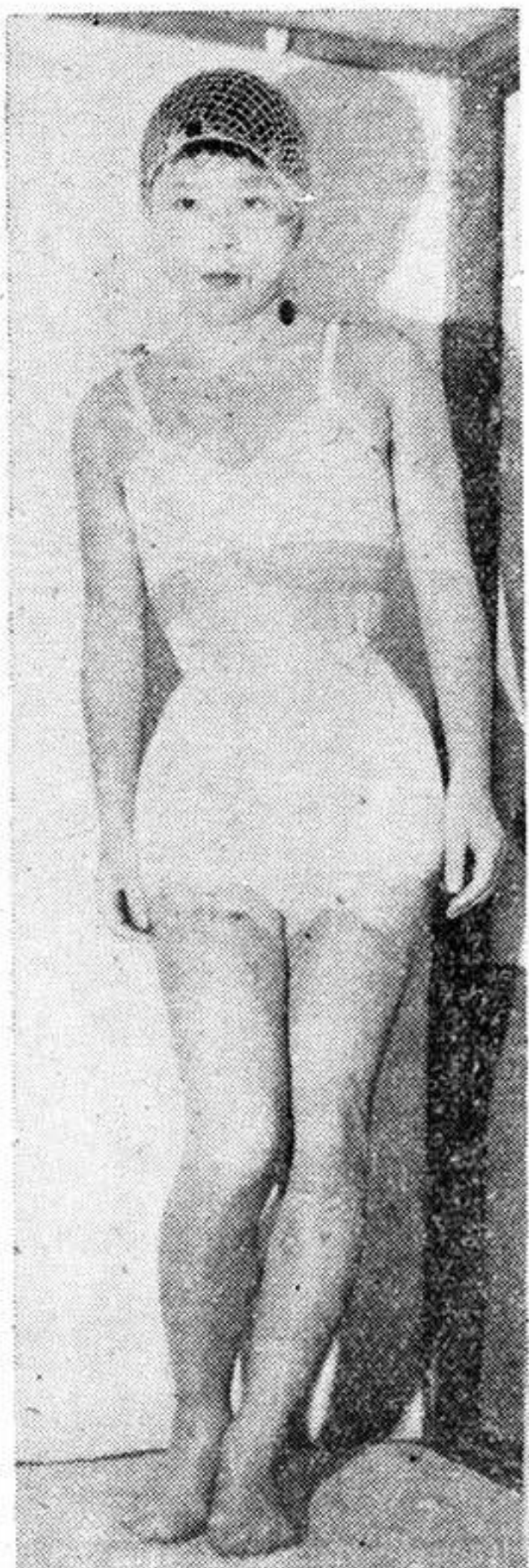


様になってからのことです。女性の服装や化粧についての知識が豊富になったことが、私の女装への憧れを更に強めたわけなのでしょう。私は、とうとう自分のからだに丁度よいサイズの女性の下着類や、スカート、ブラウスなどを買うことができました。ある女性の買物に、二、三回ついて行き、店員に顔を覚えさせ、後に私一人でその店に行き、彼女の

ための買物の様なふりをして自分の為に女性の衣類を買ったのです。幸い、彼女の背恰好は、私と殆んど変らなかったので、怪まれることもなかったのです。とは云え、始めてのその様な買物は、全く顔から火が出る思いでした。

私が女装したままで外出してみること決心したのは、その頃から更に二年程たって、学校を卒業し、ある会社に就職してからのことです。今から約三年前のことになります。十一月の末頃だったでしょうか、木枯しが冷く頬を刺すような晩でした。とくに風の冷い夜を選んだのです。何故なら、私はかつらを持っていないので、ネックチーフで短い頭髪をかくさなければならなかったからです。

初めて試みる冒険の期待に胸を躍らせ、興

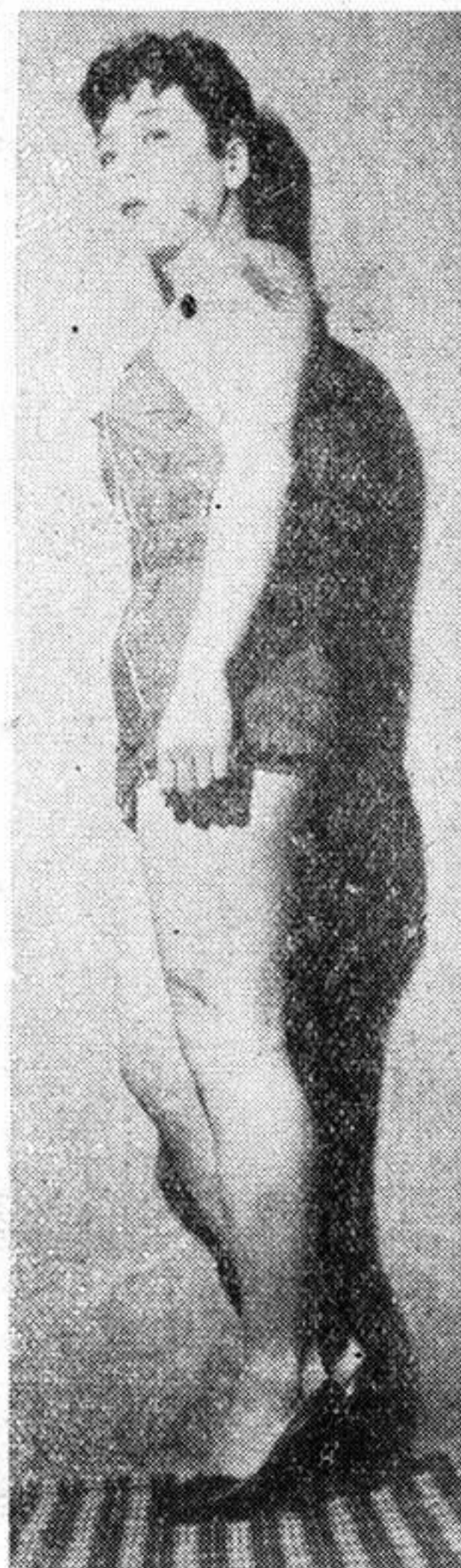


奮に感覚を痺れさせながら、私は二時間もかかって略々完全と思える程度の女に自分を仕立て上げたのです。入念にピン・カールを施し、眉毛を抜いて細くし、髭や体毛を全部剃り、人目に立つことを避ける為、いつもよりずっと地味な化粧をしました。ブラジャー、ウエスト・ニッパ、コルセット、パンティと順々に身につけると、鏡にうつる私の姿はもう女性としか見えません。ストッキングをコルセットから吊り、スリッパを頭から被りました。淡い水色のスエーターに黒のタイト・スカート、その上に白っぽいトッパと、目立たない恰好でした。ネッカチーフだけは絶対にはずれたり飛んだりしない様にと念を入れたのは勿論です。

さあ、これで女としか見られないだろうと

鏡を見ながら思わず快心の笑みを洩らすと、鏡の中の女が可愛らしくほほ笑み返して来るのです。抑えきれない胸の高鳴りを鎮めるために、何回も深呼吸を繰返してみました。ふくらんだスエーターの下に、二つの乳房が生きている様でした。

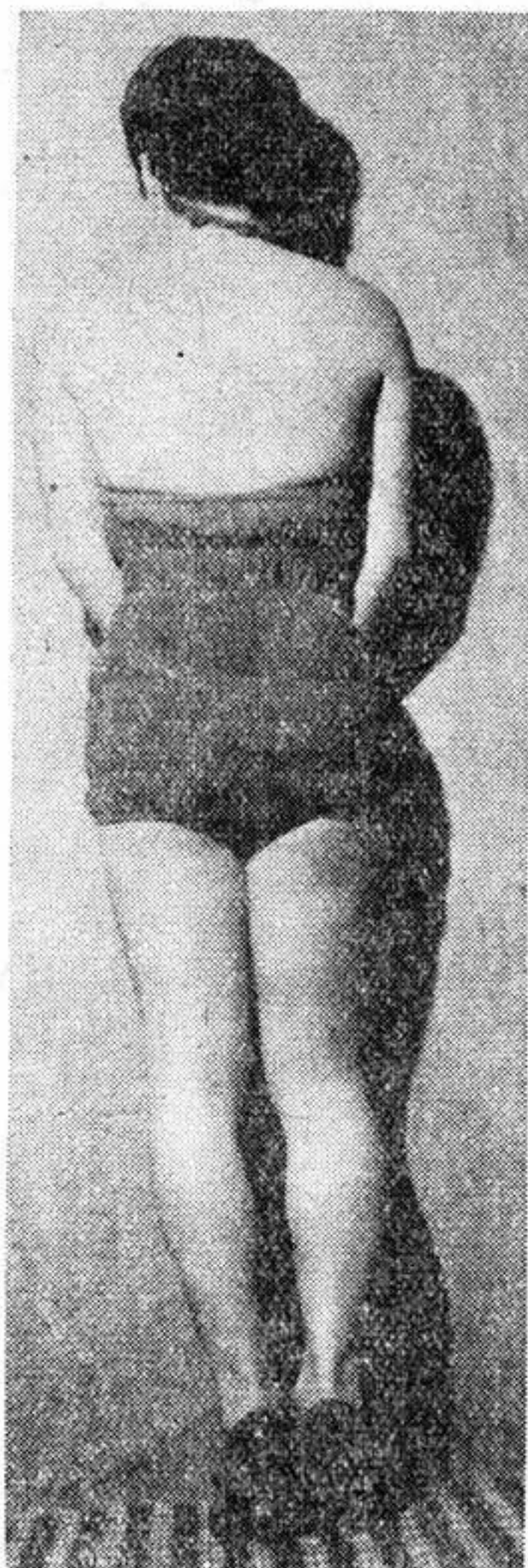
出掛ける前に、私は自分に何度も念を押して云い聞かせました。



「これから、この部屋に帰ってくるまでは、お前は絶対に女になりきっていないなければならない。すべての動作も、呼吸さえも女になっ

ていなければならない。そして、言葉を口から出してはいけない」と、
声だけは、どうしても女の声にならないのです。もっとも、ささやく様な小声なら、ごまかせることを後に知りましたが、その時はともかく、声を出したら大変だと思ったのです。

三寸近いハイ・ヒールをはいて、私はどう／＼戸外に一步を踏み出しました。私は親の家の離れに自分一人で住んでいるので、誰にも見られずに出入することができるのです。ハイ・ヒールをはいて路上を歩くのは、云うまでもなく、私にとって始めての経験だったのですが、思った程、難かしくはありません



でした。しかし砂利道の上は、さすがに歩きにくく、アスファルトの舗道に出た時には、ほっとしました。

夜とは云っても、街灯はところどころに立っているし、自分の家の近所では誰かに見とがめられるという恐れもあったので、私は大



きなマスクをかけていました。

ただ夢中で歩いているうちに、コツコツという聞きなれない足音が自分のものであると云うことが意識されてきました。足の感じがとても変だと云うことも強く感じる様になって来ました。私はハイ・ヒールをはいていたのです。そしてスカートの下には剥き出しになっている脚……私を見る人は私を女だと思ってしまうのだ。私は今、女装しているのだ。

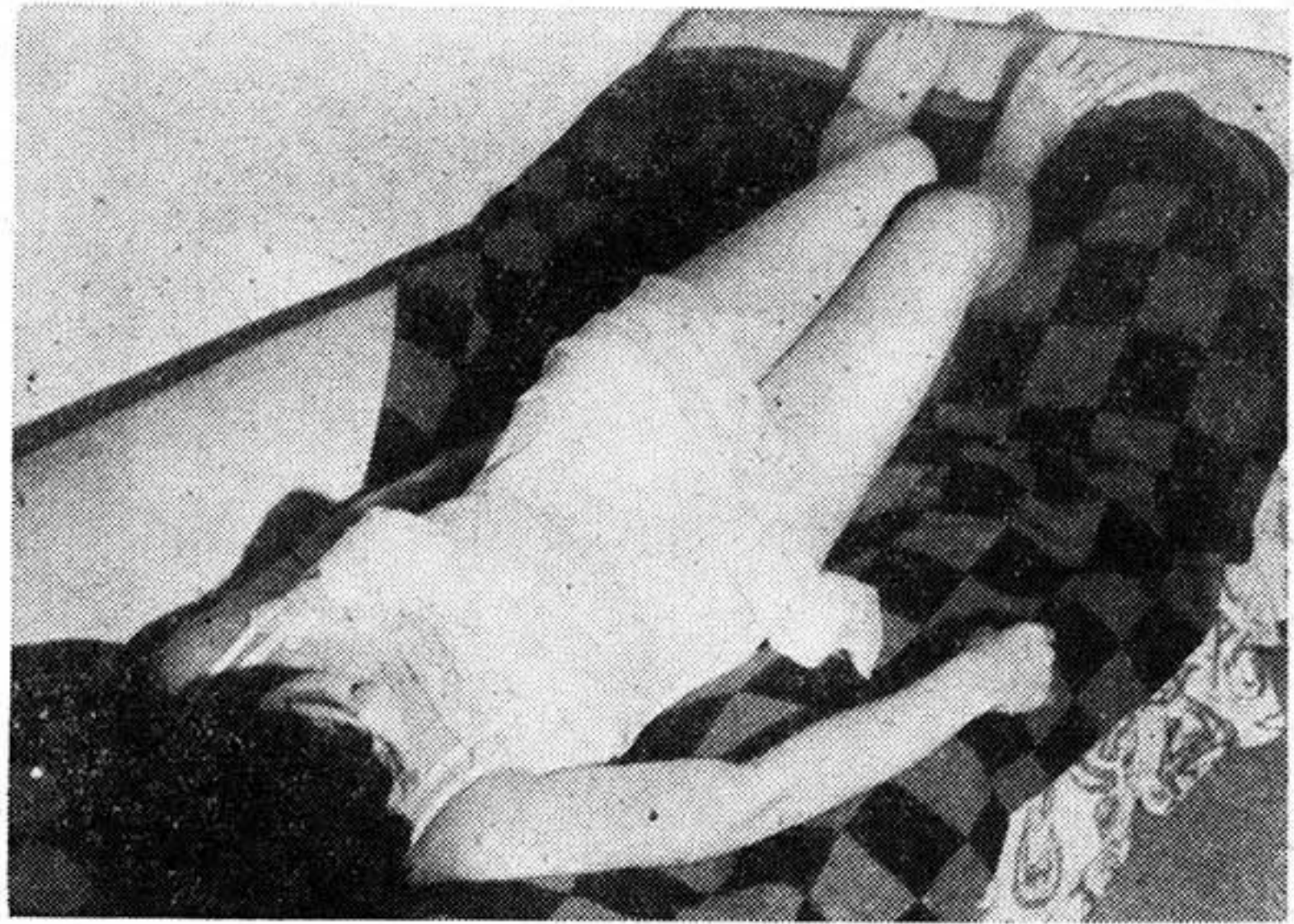
肩をわずかにゆすってみると、ブラジャーとスリップの紐が快い束縛感を私に与えていることに気附きました。薄いナイロンのストッキングの粘りつくような感触も、自分の部屋にいる時に数倍する満足感を与えてくれるのです。長ズボンとズボン下でなく



短いスカートに薄いストッキングをはいている自分が、こんなに寒い晩なのにあまり寒くないと云うことにも気づきました。ナイロンのストッキングは、案外に寒さをしのげるものなのです。

十分程も歩いて、ほとんど行ったことのないある駅前の商店街に近附くと、私はマスクを外しました。もう私の親しい人に会う恐れはあまりないし、昼間の自分と全く違ってしまっている今の私を見ても、私と判る人は先ずないだろうと考えたからです。

向うから四、五人ずれの男達が声高に話し



ながら近附いてくるのが見えました。私は思わず顔を伏せて歩き続けました。道をふさぐ様にして横に拡がって歩いて来たその男達、若くて、あまり柄の良くないらしいことが、気配でわかったのですが、彼等は私に近附くと、いっせいに、「ちよっと、ちよっと」と

か、「今晚は」とか騒ぎ立てるのでした。私は、思わず押しのける様にして彼等の間を通り抜けて、小走りに彼等からなるべく早く遠去かろうと一生懸命でした。私に押しのけられた男は、「わあ、すごい！」とわめいていましたが、追い掛けては来なかったのです。彼等に捉まったらどうなることかと、生きた心持もなかった私でした。明るい商店街がすぐ近くなので、彼等もそう無茶なまねはできなかった様です。——しばらくは、ふるえが止まらない様な気持でしたが、ショー・ウィンドをのぞいているうちに気が鎮まって来ました。

私がそれからしたことは、およそ女装して外出したところのある人なら、必ずするに違いない様なことばかりです。もっとも、女装して外出するほど物好きな人は、滅多にないでしょうけれど。

私は婦人下着専門店に入って見ました。二、三人の先客が、ブラジャーなどを手にとって見ていました。私も、昼間とは違って、平気でブラジャーを手にとって見る事ができました。そのうちに先客が「ありがとうございました」の声に送られて店を出て行きました。あとは私と女の店員がいるだけです。

まだ若い女の子でしたが、彼女は私に近附いてくると、「ブラジャーでございますか？」と尋ねるのです。私は、声を出さずに、うなずいて見せました。

「サイズは？」と彼女は私に聞くのです。

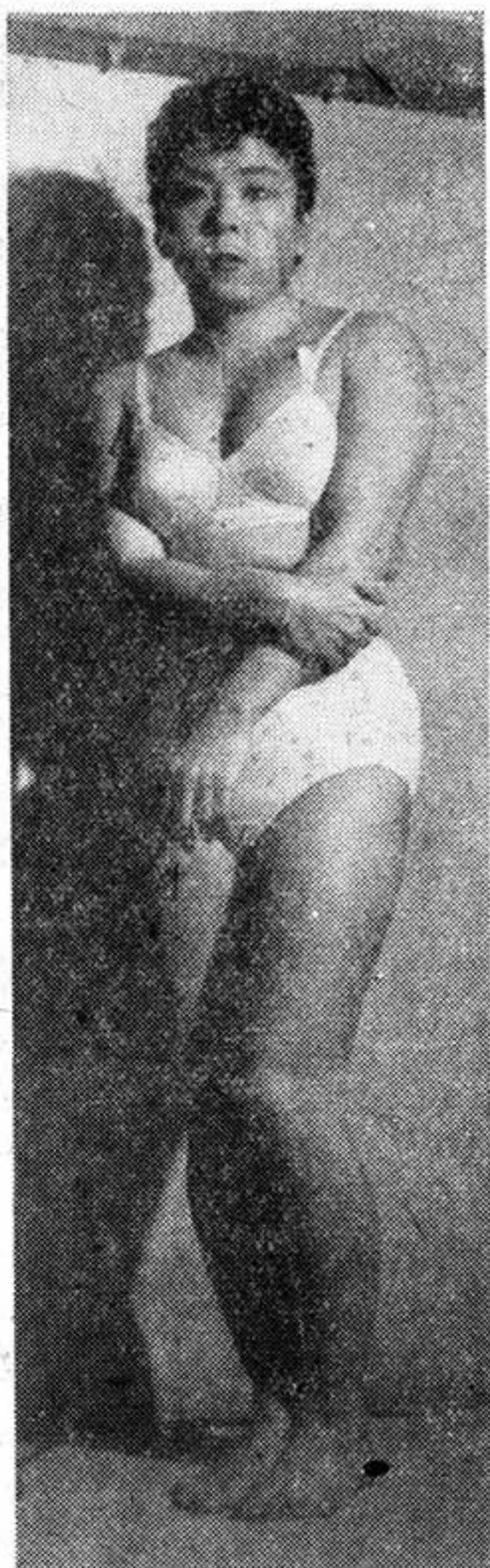
私は口のなかで、もぐもぐと

「さあ、少し太ったから」と云ってみると意外にも彼女にそれが聞こえたりしいのです。声になんかなっていない、ささやきにすぎなかったのですが……。

彼女は、「では、お計りしましょう。」と外からは見えない様になっている、奥まった場所に私を導いていきました。そこには男の店員がいて、何やら計算でもしていた様子でしたが、女店員が「一寸あっちへ行って」と云うと、店の方に出て行きました。

「恐れ入りますが、コートだけお脱ぎになって頂けますか？」と彼女は云いました。私は、ためらわずに脱ぎました。彼女は、私が、スエーターを着ているのを見ると、

「やはり、スエーターの上からでは……脇の下まで持ちあげていて頂けますか？」と云うのです。私は、びっくりしました。女同志というのは、そんなに平気で相手に脱がせたりなんかしてしまうものらしいのです。私は、



しかたなしに、相手の云う通りにしました。彼女が私の目の前に顔を近付けて、私の背中から胸へと巻尺をまわしてメジャーをする間私の動悸が彼女に感じられはしないかと心配なほどでした。快い刺激と、罪悪感と、勝利感と……私はまるで夢を見ている様なありさまだったのです。軽いめまいさえ感じたことを覚えています。何しろ、すべては初めての経験だったのですから……

「三十六時のB、うらやましいわア」と彼女は讃歎の眼を私に向けるのでした。私は、大声で笑い出したい様な衝動に駆られるのを感じました。彼女は恐らく永久に、男の胸囲を計ったことなど知らないままにいることでしょう。ようやく探し出して来たブラと一緒にパンティも買うと、私はその店を出ました。「ありがとうございました。またどうぞ」

私は、二度とその店に行ったことはありません。親しくなることは私にとって禁物だったのです。ただし、昼間に一度行ったことがあるのです。つまり、男性としての私が行ったのです。私は将来結婚を約束した婚約者である女性と一緒にいき、彼女の下着を買ってやったわけですが、髭の伸びた私の顔を見て彼女が気の附く筈ありません。いささか気の毒になったくらいです。

さて、店を出た私は、自動販売機で切符を買うと、電車で盛り場に出ました。電車のなかで、ハイ・ヒールで立っていると云うことは、全くたいした技術です。なにかにつまづかなくて、とてもできない芸当なのです。映画館が私の次の目的でした。映画など全く見る気はなかったのですが、何時も横目で見らんでいる婦人用トイレに入ってやろうと

というのが第一の目的だったのです。臭い話で申し訳けない次第ですが、あの場所こそは、男が絶対に入れない場所であると云うこと。それが何ものにも替えがたい魅力なのです。休憩時間を待ったために、しばらく場内に入らないうちに映画を見ることにした私は、相当に混雑した場内でも特に混んでいる立見席のあたりに行ってみました。

私の身体は、否応なしに他の観客に押しつけられてしまいました。

私に身体を押しつけている男性が、何となく興奮している様子なのが可笑しくてたまりませんでした。一方、私が押している女性の方は、一向にそれを気にしていない様子、これは実際、奇妙なことでした。実のところ、私は普通に男性が云う意味で女性を愛することとも人後に落ちないのですから、こんなに都合の好いことはありません。それに反して、同性愛の経験は全くありませんし、あまり興味もないのです。もっとも、女装した同性な話とは違いかも知れませんが、

休憩時間になると、私はいよいよトイレに入ってみました。もうドアの前に列をつくっています。私は、特にトイレに用事があるわけでもなし、二重の武装をはずしたりするの

が面倒だったので、鏡の前に立つと隣の女の子の真似をして、パフで鼻の頭を叩いたり、スカートを持ちあげてストッキングを吊り直したりしてみました。私が女でないというところがもしわかったら、さぞ大さわぎになることだろうと、不安でないこともなかったのですが、何よりも、秘密と冒険の美酒に酔い痴れる心持でした。

映画館を出た私は、その夜はそれくらいにして、来た道をそのまま帰って無事に家に辿りつくことができました。しばらくは、さす

がに気疲れのためか、ぐったりとしてしまいました。スカートを脱ぎ、ニッパをゆめると、ベッドの上に横になり、なれぬハイ・ヒールで痛めた足をもんでいるうちに、いつしか眠りこんでしまっていたのです。翌朝、目を覚まして、自分がまだスカートを脱いだだけの女装のままにすることに気がつく、更めて前夜の冒険が完全に成功であり、決して夢ではなかったことを実感として知ったのです。一度も奇異の目で見られることのなかったその夜の成功は、私に充分な自信を抱かせ

浣腸フアンタジー

久里須照夫

青味をふくんだあの硝子の浣腸器を見るだけで、私の胸はおどります。

先に向って少しふくらみ急に丸く滑らかに終る嘴管の曲線、私はそれに水を吸い込み、ゆっくり押出すとき、光はキラキラと輝きながら、嘴管の先から落ちてゆく水滴何んという不思議なまでの妖しい魅力。浣腸器こそ、私の幼い頃からの憧れの的でした。

十四才の春、大した病気でもないのに医院に通っていた頃。診察室の硝子戸棚の中に、五〇CC、三〇CC、二〇CCというような色々の大きさの浣腸器が並べてあるのを見た時は、身体ふるえるような気がしたものです。一度、診察室に入ってゆくとベッドのそばの台の上の真鍮のトイレの上にグリセリンに濡れた五〇CCの浣腸器が置いてあり、そばに空になった硝子のコ

その後の度重なる女装しての外出への道を展いてくれたのです。然し、何といっても、初めての夜の刺戟は、いまだに忘れることのできないほど、強烈なものでした。

前述の私の婚約者―ステディーは私の女装を知っているただ一人の人物ですが、同性愛の経験が深く、それが忘れられない為か、私が時々女装をすることを彼女にとっても一つの刺戟と考えている様です。ただ、彼女は、私が女装のまま外出することには反対なのです。彼女は私が男娼の真似でも始めるのではないかと危んだようですが、その心配だけは絶対に無いことを彼女に説明すると、それは了解できるにしても、あまりに多くの危険を侵しすぎていると云うのです。たしかに、それに違いはないのですが、私にとって、その危険のもたらす報酬の価値は、あまりに大きいのです。女装して街にいる時、そこにいるのは、いわば無人格の女性であり、本来の男性である私は消滅してしまっているのです。これに勝る現実逃避の方法を私は知りません。社会的拘束や歴史的秩序の重圧の下に喘ぎつつ生活することを強いられている人間という生物にとって、瞬時でもそこから脱け出して真に自由でいられるということは、すばらし

ツプが並んでいるのです。

浣腸器の嘴管の汚れは見えませんでした
がワセリンで曇って、今使用した直後であ
ることは明らかでした。

私は胸が締めつけられるような興奮にせ
められました。私の前に診察室から出てき
たのは、三〇位の奥さん風の婦人でしたが
それにしては、少しその人の診察時間が短
かったように思えるのです。でも私はそ
の婦人の姿を思い出しながら、その当時い
ろいろな妄想にふけたものでした。

そんな私でしたから、自分が浣腸され
らどんなであろう、とそう思うだけで、顔
が真赤になるような気持でした。しかし、
その浣腸の体験も、私が十六才の時に起
りました。私はひどい腹痛で家へ医者を迎え
られ、その医者の話では盲腸炎の疑いがあ
るというので下剤はかけない方がよい、浣
腸もしない方がよいとのことと、とにかく
安静にしているように命ぜられました。

ところが、その後の経過が案外よくて四
日目には、歩いて医者の門を潜りました。
診察の結果、盲腸炎という程でもなく、や
れやれと思っていますと、医者は傍らの若
い看護婦を願って「村上さん、もう大丈夫
だから、この方に浣腸してあげて下さい」
と言ひ私は「さあ、隣の室で浣腸して貰
って下さい」と言われてしまいました。

私は予期しない咄嗟のことに、嫌だとい
うことも出来ず、頸から真赤になりながら
もじもじしていましたが、「どうぞ」と肩
から押されるように、ドアを距てた隣室
へと導かれました。

その部屋は天井が曇り硝子の窓で、開い
ていました。壁際に黒いレザーを敷いたベ
ッドがあつて、傍に大きなイルリガートル
がかけられていました。年若い看護婦は私を
待たしたまま「先生、リスリン浣腸がよ
いのですか」と、大きな声でドアを半開
きにして訊くのです。その声は私の次に診
察室に入ってきた四十位のおばさんにも、
先程から待合室で待っている二十四、五の
お嬢さんにも、つゝ抜けなのです。

私の頭はドキンドキンと脈うって、目が
チラチラしながら、今数分後、自分がどん
な恰好にされるか、ということと思うと、
いても立ってもいられませんでした。

ガラス製浣腸器を持った看護婦の手が美
しく、しなやかに見えました。それがリス
リンを吸い上げる時のジューという音が私
の胸をうつのです。看護婦の暖かい手が私
の肌にふれたとき、私は夢中でふるえまし
た。浣腸が終って待合室まで出ると、皆の
目が自分に向けられているように思えて仕
方がありませんでした。

(続く)

いこの様に思われるのです。

人間がノーマルであるということに私は何
等、意義を認めません。人間が、人間によっ
てつくられた道徳か法律に従順であるという
ことが、それほど立派なことでしょうか。ノ
ーマルであるということが誇りになるような
世界とは全く退屈すぎる世界ではありません
か。

あまり退屈に堪えかねて突飛なことをやり
だす人間がいたって、そう驚くにはあたらな
いと思うのですが、どうでしょう。

それにしても、私の夜の行動なんかは、公
表するわけにはいかない様ですね。いかに軽
蔑に値する俗物どもが相手でも、彼等の集中
的非常や侮辱に堪えられる程人間は強くでき
ていませんからね。

昼間の私は決して女性的な行動も服装もし
ていません。同僚や知人のなかにも、私を女
性的であると指摘する人さえ全くないといっ
ていい位です。女装してのプレイも外出も、
すべて夜に限られています。私の女装写真を
見て私と気附く人は一人しかいない筈です。
それほど、私の秘密は守られているのです。
秘密を持つということは全く楽しいことデ
す。

ある女優の 乗馬日記より

倉 仁 成 人



はじめに

この日記は私が想像で書いたものです。

しかし、ここに書かれてある中のいくつかの事は、新聞や雑誌などで読んだ数人の実在する乗馬ファンの女優さんに関するゴシップ記事や、彼女等の随筆或いはその他の書物から抜いた所もありますが、これはあくまで私が頭の中に描いた或る乗馬好きの女優さんの日記であり、従ってフィクションであることを最初にお断りしておきます。

さて、この日記を書いた女優さんを仮に、馬場好枝と名づける。彼女は日本の映画界で最近めきめき名をあげた人気のあるグラマー女優である。

グラマー女優の中には既に名も知られている剣道初段のK嬢とか、柔道をやるグラマーM嬢とか変ったタイプの女優も多く彼女も「馬に乗るグラマー」として知られて居り、十五、六才

の頃より乗馬できたえた身体は身長一七〇センチ、体重五八キロと言うボリュームある超キングサイズの持主で、また彼女の父が日本人母が英国人と言う関係からか、その異国的な美貌は既に定評がある位である。そして彼女はその名の通り、馬に乗るのが何より好きと言う乗馬ファンで、昨年新築した東京郊外の邸には、広い馬場を設け、今では彼女の乗馬として二頭の馬を飼っている程の熱の入れ方である。そしてひまさえあれば自邸内の馬場で馬を責めたり、外へ遠乗りに出かけると言う事である。以下彼女の日記を少しのぞいてみよう。

〇月×日

三月も半ばを過ぎて大分春らしくなってきた。この所やっと少しひまになったので、毎日たっぷり馬に乗る事が出来てうれしい。今日は大分温いので、下女のクニに言いつけて出させたこの前あつらえたばかりの薄手の乗馬服を着て、やはり同じ薄手のグレーの乗馬ズボン履き、下男代りにしている武造を呼んで乗馬靴を履かせ、拍車をつけさせた。

乗馬靴はよく磨いてあったとみえて黒光りに光っている。しかし私はもう一度乗馬靴を

履いたまま武造に念入りにブラシをかけさせた。靴を履いたまま下男に磨かせるのは、とてもよい気分だ。私の長靴はまるで鏡のように光り、拍車のきらめきと共にまぶしい位だ。

馬丁の石川に命じて鞍を置かせた私の馬もよく手入れされている様子で栗色の毛並が輝やいている。いつもの通り馬丁に馬の轡をとらせ、台代りに馬場に四つ這いになっている武造の上から馬の背に跨った。石川は私が馬に跨ると言わなくとも直ぐ鞭をさし出し、両足の鎧革を適当に加減してくれる。しばらくの間、手綱を思い切り締めて拍車を馬の腹に突き立てたままにして責めていると、馬は私の思う通りにとてもよく動く。並足から少しの間跑を踏ませ拍車で思い切り馬腹をける。馬は躍り上るようにして駈足に入る。そして鞭で激しく馬をあおり、拍車で存分にけりつける。速足、駈足と家の馬場一杯に二時間余り責め続けてしまった。

私は身体中がほてって、すっかり汗ばんでしまっている。馬も口に泡を噛み、馬体も汗で縞のようになっていいる。動作ものろのろと鈍くなった。しかし私はまだ責め足りない思いで馬の肩や腹、尻を続けざまに鞭打って、

拍車で馬腹を思い切りけりつける。私は上着を脱いでブラウス一枚となって約三時間位、馬を責め続けた。

〇月×日

五月も半ばとなると温かいと言うより暑いくらいに感じる。ここしばらく仕事の関係でこの気候の良いのに好きな乗馬も出来なかった。ので、むしように馬に乗りたかった。そこで今日は久しぶりに僅か一日だが、自由の身になったので遠乗りに出かけた。

今日は暑いので乗馬服は着ずにブラウスと乗馬ズボンに黒の乗馬靴と言う出でたちだ。勿論、外へ出るのだからサングラスは欠かせない。そして「松王」に鞍を置くよう馬丁に命じて、武造にはいろいろと持って行くものを用意させた。

私はいつも遠乗りに出る時は、私の護衛と言う名目で武造を連れていくのが習慣だが、ほんとうは護衛などと言う名目より、昔戦時中に将校がいつも私の家の前を馬に乗り、部下の兵隊が一人馬の後を将校の鞆を抱えてトボトボ歩いていたのを思い出し、私もその真似をしたかったからだ。だから今日もそのつもりで私は馬に乗ると、馬上から今日は二人共、私の後についてくるように命じて、馬腹

を拍車でけり、外へ出た。

天気の良いこのような日に、土手の上や畑の中を二人の男共をお供に馬を歩ませていると全く気持がよい。何処かの国の女王様みたい。途中で会う人達は皆驚いたような眼で私を見上げる。何と思われようと、かまやしない。いっそ、このまま銀座のど真中を歩いて見ようかしら。

長い間、馬の背にゆられていると、何だかとても気分が出てくる。この辺で思い切りとばしてみようと思い、私は二人の男共に駈足であり遅れないようにについてくるよう言いつけて、私は馬をつづけざまに鞭打って、拍車をけり込んだ。

まわりの物かげがとぶように後へ走っていく。しばらく駈けさせて後を振り返ってみると、私の従者達は遙か後から荷物を背負って一生懸命、私に追いつこうとして駈けてくる。私は、はやる手綱を締め上げてしばらく歩かせてから適当な場所をさがして馬を下りた。やっと私の従者達も追いついて来た。早速、私は石川に馬の背から鞍を外して休ませるよう、亦、武造には私の携帯用の椅子を出して組立てて小休止の用意をするようにそれぞれ命じた。

全く暑い。私は汗びっしょりだ。裸になつてしまいたいくらい。水着か下着だけで馬に乗れば、こんなことはないのに。今度は水着で馬に乗ろうかしら。

しばらく休んでから再び馬に乗って家へ帰ったのは三時近くだったから、今日は大分、長い時間、馬に乗っていた事になる。これで一応、私の馬に乗りたいたう欲望はおさまったけれど、顔が陽に灼け過ぎなかったかしらと、とても心配になる。

私のお仕事には陽灼けが特に禁物だ。こんな風じゃ夏にはとても馬に乗れない。どうしようかしら。夜でも馬に乗ればいいのだけれど。ああそうだ！家の馬場にも夜間照明をつけよう。そうすれば陽に灼けるのなんか心配せずに好きなだけ馬に乗れるわ。これはまさしく好枝のグッドアイデアね！早速、電話しておこうと！

〇月×日

今日も雨、毎日雨ばかりでひまはあっても馬に乗れないのが淋しい。Pクラブみたいに覆い馬場があればいいんだがなあ……

そうだ今日は趣向を変えて、武造を馬にしてみようかしら。前にも武造を四つ這の馬にして背中に跨った事があったけれど、どうも

あまり気分が出ない。それで今日はある雑誌で読んだ事のある人間馬の方法で、やってやろう。鞍はスポンジを布につつんで作り、鍔は古くなった鞍のものを利用しよう。亦、支え車は適当なものが無いし、そうかと言って動かないものじゃつまらないから、適当な高さの台を作って小さな車をつけよう。

夫々考えがまとまると、私はすぐさま馬丁の石川、と下男の武造、下女のクニを呼びつけ、石川と武造には台を、クニには鞍を夕方迄に必らず作るよう言い付けた。

夕方になるとそれぞれ用意したものが出来上った。みなよく出来ている。すっかりうれしくなってしまった。さて、いよいよ人間馬に乗るんだわ。私の胸もドキドキして腰のあたりがジーンとしてくる。

先ず最初に武造の背中に鞍をつけさせたり手綱の代用の布を口に咬ませるのは本物の馬にするときと同じように、すべて石川にまかせた。そして私はブラジャーとパンティーだけで、最近作らせてまだ下ろしてない乗馬靴を履き、石川に拍車をつけさせた。スポンジはかないので長靴は少しゆるいが案外ぴたりしている。拍車も鞭も本物の馬に使うものをそのまま用いた。

私は「ほんとの馬のようにするのよ！途中で口をきくと承知しないから！」と武造に言うと思いついて武造の背に跨り、鍔に両足を載せて石川に長さを加減させた。成程、これなら真物の馬と少しも変わらないかつこうで室内乗馬を楽しめる。スポンジの鞍も少し柔らかすぎる位だけど、股にぴったりと吸い着いてくるような感じがする。私は軽く彼の腿を拍車でけった。しかし馬は動かない。今度は強く腿をけると一瞬悲鳴をあげて走り出した。武造の背に跨って部屋の中や廊下を何度も行ったり来たりさせていると、彼のたくましい筋肉の動きや、心臓の鼓動までがぴたりと彼の胸にくっついていて私の太腿の内側から伝わってくる。私は思わず馬の胸を股で締めつける。その上、私は気分が出ると真物の馬の場合もそうだが、余計に拍車や鞭を使う癖があるので、この時もつい強く拍車を入れて鞭で打ってしまう。そして武造はまた悲鳴をあげて立ち上りそうになるのを、私はグッと上体を倒して抑えつける。とうとう武造は三十分たためうちにのびてしまい、許して下さいと哀願するので、私も仕方なく下りたが、どうしても私はもっと乗りたい気がする。そこで今度は下女のクニを私と同じような

下着だけにして鞍をつけさせて、私はクニの背に跨った。女の身体はやはり男と違って柔軟で亦、別の味がするが皮膚がとても冷い。しかし同性を馬にして乗るなんて、非常に優越感を感じてたまらない。クニも僅か十分足らずで動かなくなってしまったので、一応、今夜はこれまでと言う事にした。

今夜は人間馬の味を充分味わったから、これでぐっすり寝られるわ。

○月×日

日中は大変暑くなり、もうそろそろ本格的な夏がやって来たらしい。夜の乗馬にそなえて馬場に今流行の水銀燈をつけさせた。夜でも馬場は青白い光が一杯に輝いてとても明るい。これならもう陽灼けを心配しないで存分に馬に乗れると思うとすっかり楽しくなる。今晚これから馬に乗ろうかしら。

○月×日

前々から馬をもう一頭欲しいから世話して貰えないもんかしらと頼んで置いたMさんから、よい馬が見つかったので見に来ないかと連絡があったので、早速、乗馬の出来る服装をしてMさんの馬場へ馬丁の石川と一緒に車で出かけた。

Mさんの所へ着いてみると、Mさんはもう

馬場にその馬を曳き出して待っていた所だった。その馬は今、私が持っている「松王」よりもやや小柄の白馬だった。白い毛並が明るい太陽に映えてとても美しい。私はすっかり気に入った。そこでMさんが「なんでしたら、ちょっと乗って見たら如何でしょう」と言うので、私は早速、鞍を置いて貰って馬に跨った。

少し貰えてみると、さすが四才の若駒だけあって、小柄にも似合わず悍が強く、拍車を入れても、鞭を当てても跳ね返るような反応を示すのですっかりうれしくなっていました。値段は二十万円、勿論すぐ話は決まり、私は出来る事ならこの馬に乗って家へ帰りたい。自分が、自分の鞍が無かったのと、私の車の事があったので後の事を全てMさんにまかせて家へ帰った。

○月×日

今日はほんとに忙しかった。お仕事の関係を除いても、自分の用だけで夜の十一時頃までかかってしまった。

始めに私が新しく買った馬の為に、また新しく鞍を作った貰うつもりで、行きつけの馬具屋へ行った。そこで私のお尻に合った鞍を作る為に、粘土か石膏か知らないが、その上

の塊の上に腰を下ろして私の臀部の型をとった。なんでも外国では鞍を注文する時には、このようにする所が多いそう。そこで私もこの他に色々注文をつけて店を出た。

それから新しく乗馬靴をあつらえるので、代々木のI靴店へ行き、そこでも大分時間をつぶしてしまった。其処を出ると今度は、前から考えていた私の内職の事について、マネージャーと会って打合せた。私の希望は洒落たバーか喫茶店を出す事だ。店を出す以上なにか私の唯一の趣味の乗馬の事を考えて思い切り上品で貴族的雰囲気のある店を出したいのだけれど。尤も銀座には「拍車」と言う名のバーが「乗馬のお帰りにはどうぞ」とある雑誌に広告を出していたのを思い出した。私も、はやくそんな店を持ちたい。そうしたらどんな名前をつけようかしら。

家の馬場の周りにめぐらした高い塀も、もう八分通り出来た。この塀が出来れば誰からものぞかれる心配もないから、乗馬の時どんな恰好や服装をしても大丈夫、心ゆくまで馬に乗ることが出来るわ。

これから馬に乗ろうと思ったが余り遅いので止めた。

(続く)

告白小説或る倒錯生活(一)	西村憲一
女性切腹についての雑感	三条波留子
川柳雑記	清水卓史
告白「エネマ・マニア」	榎村良夫
創作「汚辱地帯」	松井籟子
自分をハタカにする(六)	東福次郎
私は女性の自刃を見た	
読者通信	
〇十一月号(復刊第五十号)	
〔定価二百円〕	
口絵	
傑作集「地下の調室」	四馬孝画
特写緊縛フオート	絹川文代
「たそがれのプレイ」	
「白い紐と緑のドレス」	
縛り絵落花一輪	滝れい子画
戯画 少ハ王国誕生	南村俊平画
緊縛画 船室の珍客	四馬孝画
話の屑籠	辻村隆画
足フエチと責め	山川正人
揮刑事シリーズ「反応試験」	榎村奏
幕末奇譚「艶色赫夜姫」	海野栗朗
アクロバットの魅力	堀美佐男
創作 王宮の浣腸室(三)	柴崎黎子
切腹研究 旧い日本の面影	中康弘通
創作「昼の倉」	三条卓史
マソヒズム百景	馬場好男
特高拷問史	庄田美起天
第三次元小説「影の国」(一)	雪俊遥
麻生保氏の生ビと意見	麻生保
告白小説 或る倒錯生活(二)	西村憲一
真昼の告白	泉辰之助
「乗馬ズボン」秀緒の日記	藤山秀緒
告白 マゾの散歩から	中瀬一夫
告白 被縛の一夜	中沢一郎
「私の風俗画」	遠藤春一
或るフエチストの素描(I)	早野勇作
話の屑籠補遺	辻村隆
愛好者の記録	とやま
浣腸の記事によせて	岡崎春江

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正	夢三夜「吊るし女」……………牧高志	ベビードールの恐怖……………沢木雪二	考察「腹を切る」こと……………折伏下男	写真のアイデアについて……………大熊寿夫	女はそれでも我慢が出来る……………鴨瀧三郎	乳房に火をつけるな・第八回	「十字架の囚」……………藤木仙治	沼正三だより……………沼正三	読者通信……………															
<p>〇臨時増刊（復刊第五十一号）</p> <p>SADO特・第三集</p> <p>〔定価三百円〕</p> <p>〇十二月号（復刊第五十二号）</p> <p>〔定価二百円〕</p>																								
口絵	傑作集「懲罰室」……………四馬孝画	緊縛集二題……………滝れい子画	「夕されの下田」……………	「供先を乗り切った紅毛婦人」……………文代	特写フォト集……………	「明眸皓齒」「真紅の腰巻」……………	責絵「悪魔の器具流腸器」……………四馬孝画	お仕置をめぐり一考察……………近藤一孝	三夜「一軒家」……………牧高志	創作「無頼の海」……………榎村勇作	或るフェチストの素描（2）……………早野礼	サド創作「別れても」……………蒼野	マゾ小説黄色オラミ誕生（三）……………真木不二夫	手帳雑報欄……………沼正三	愛好者の記録……………とやま	ベルリン最後の日……………藤山秀緒	創作「おぼろ月」……………三条卓史	短評「九月、十月号のいろいろ」……………近藤憲一	告白「小説或る倒錯生活（三）」……………西村憲一	創作「黒井チエの青春（二）」……………近藤	話の肩籠（緊縛モデルの素顔）……………辻村隆一	マゾヒズム百景……………馬場好男	乳房に火をつけるな・第九回	「最後の激突」……………藤木仙治

現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正	告白「流腸器とともに（前）」……………栗瀬長	創作「王宮の流腸室（四）」……………柴崎保子	麻生保氏の生活と意見……………兵頭庫一	女言葉礼讃……………折伏下男	考察「腹を切る」こと（二）……………兵頭庫一	レボ「三流演劇の生態」……………鬼山絢郎	サド小説「乙女檻」……………桂牧次郎	読者通信……………
昭和三十五年								
○新年号（復刊第五十三号）								
〔定価二百円〕								
口絵	傑作集「私刑室」……………四馬孝画	撮影会風景ボーズ集……………館典子	映画に現れた緊縛シーン……………田辺氏提供	責絵「操り人形」……………滝れい子画	異説平手造酒「孤剣」……………榎村勇作	謎の緊縛フォト（四）……………久留木榮	流腸器とともに（後篇）……………栗瀬長	最近の映画、縛りシーンから……………榎村勇作
観察「縛りの類型」……………牧高志	特高拷問史……………庄田美起	創作「こけし妻」……………三条卓史	秀緒の日記（続）……………藤山秀緒	冷血記者のメモ「轢死屍体」……………南方佳男	考察「腹を切る」こと（三）……………折伏下男	第三次元小説「影の国」……………雪俊彦	ミス奴隷宣言……………鷹三	現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正
ブラボーTADO特第三集……………難波武雄	話の肩籠……………辻村隆一	レボ「夫婦善哉」……………S村	告白「振袖と後手への偏執」……………田村好	見聞記「地獄の釜」……………正木清久	サド創作「三十郎の恋」……………藤山秀緒	レボ「お仕置を求める乙女」……………藤山秀緒	愛好者の記録……………とやま	沼正三だより……………沼正三

映画 秋の縛られ女優達……………大河原珠樹	懸賞入選「呪法切支丹吟味」……………小河内 瀑	マゾヒズム百景……………馬場 好男	撮影会兼読者座談会……………	読者通信……………
○臨時増刊（復刊第五十四号）				
悦特三集 “嵐を慕う蝶”				
〔定価三百円〕				
○二月号（復刊第五十五号）				
〔定価二百円〕				
口絵				
緊縛画 縛り初め……………滝れい子画	フォト 「逆瀬川上流」……………絹川 文代	南村俊平妖美画集……………南村俊平画	▽鬼畜人誅滅……………	▽勇敢なる少女国水兵……………
▽戦没者に捧げる花……………	傑作画集「吊り以前」……………四馬 孝画	懸賞入選作「雌雄」……………千草 忠雄	灸点哀歌賦……………泉 辰之助	マゾ小説黄色オラミ誕生(四)真木不二夫
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正	マゾヒズム百景……………馬場 好男	創作「女友達」……………三条 卓史	創作「麻薬と輝」……………榎村 奏	サド特第三集について……………近藤 憲一
太平洋にかけける橋……………藤山 秀緒	連載或る倒錯生活(四)……………西村 憲一	猿轡放談(その二)……………浮家 鷹三	愛好者の記録……………とやま	「拷問に耐える」……………小森小太郎
特高拷問史……………庄田美起夫	サド小説「女人旅情」……………桂 牧次郎			

流腸現考……栗瀬長	創作「N街の朱い室」……仏光力四郎	第三次元サド小説「影の国」……雪俊彦	九十九本目の生娘について……近藤	〇三月号（復刊第五十六号）	〔定価二百円〕	口絵	傑作画集「木馬責め」……四馬孝画	緊縛写真「いましめ」……愛川悦子	「コレセット」EXOTIQUEより……	緊縛画「時の雲助」……滝れい子画	孝画「人類、日本種、雌」……南村俊平画	阿修羅姫君……小田桐爽	夜は知つてゐる……千草忠雄	考察「腹を切る」こと（四）……折伏下男	麻生保の生活と意見（13）……榎村勇作	禪生事シリーズ「雨男」……栗瀬長	流腸現考……榎村勇作	連載「或る倒錯生活」……西村憲一	白い花（白く蝉続篇）……三条卓史	現代マゾヒズム芸術時評……原忠正	割腹したフアッションモデル……法谷	独りボツチのマゾ？……近藤	女飛行士断腸譜……藤山秀緒	女体緊縛に関する一論……南方佳男	縛られた女優の変遷……田村清彦	「優雅」こそ女の魅力……真木不二夫	黄色オラミ誕生（五）……雪俊彦	第三次元小説「影の国」……とやま	愛好者の記録……浮家鷹三	猿轡放談（その二）……	読者通信……	臨時増刊（復刊第五十七号）	SADO特第四集	「美しき惨虐物語」	〔定価三百五十円〕
-----------	-------------------	--------------------	------------------	---------------	---------	----	------------------	------------------	---------------------	------------------	---------------------	-------------	---------------	---------------------	---------------------	------------------	------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	---------------	---------------	------------------	-----------------	-------------------	-----------------	------------------	--------------	-------------	--------	---------------	----------	-----------	-----------



素晴しい三月号を本日入手致しました。近頃では貴誌にも多くの読腸に關係した記事ものり大いに嬉しく思います。又、それは読者の中に読腸マニアが多いという証拠とも思いますので、写真、口絵等を主とした読腸特集号を出してはいかがでしょうか。そして中には四馬先生の素晴しい口絵を沢山入れたらよいと思います。そして読者通信にもあった上原由紀子さんなどをモデルにして沢山の読腸責めの口絵や写真を作って誌上を飾ったら、きっと素晴しい特集号が出来ると思います。

(目黒 M A 生)

モデル嬢をつかつての色々な緊

縛写真は非常に参考になり、大変のしく毎号拝見いたしておりますが、美しいモデル嬢を作ったのさまざまな大胆なポーズは貴誌十番と云いますので、このあたりで、出来ることなら特集号としてモデル嬢をつかつて、色々な緊縛の図解のかいせつをしていただけないでしょうか。写真と一緒に図解の名称もつけてほしい。テレビにも、近頃ちよいちよい、女性の緊縛の場面があるんですが、なにしろ、瞬間のうちにすんでしまいわかりにくいのが残念です。映画と違って、くりかえして見ることできません。誌上でなんとか発表してほしい。最近、映画界もテレビの攻勢でたじたじのようです。(大阪 八尾の一愛読者)

私は女性の「腕フェチシスト」です。本誌は大分以前より愛読しています。腕フェチについて殆んど見当りません。白い練絹のような肌をしてムツチリと小太り気味の腕をしておられる女性の方。私は貴女のしなやかなこの腕を両手でもって思いきり強く握ってみたいのです。あるいは肩先から二の腕、前腕を伝って可愛い手の先まで、時の経つのも忘れて、さすったり、もんだりして愛撫してあげたいのです。貴女さえ、その気になるのなら、餅のようになくよかな二の腕を紐でも縛って縛ってもみたいですよ。腕の内側の柔い皮膚のところにキスマークをいくつつけましょうか。私は医師です。注射針をプスリプスリと貴女の二の腕の奥深く刺すことぐらいお手のもです。私の願望に理解のある女性の方がおられましたら姿を現して下さい。ゆっくりとお話し合いたいと思います。都内で会合の場所、目印し、日時などを御示し下さい。私は日曜なら大抵、暇ですから。

(東京 杉並生)

私は二十八才のマゾ的女性で

ざいます。そもそも私がマゾ的性格を現わしたのは、前夫との結婚でございます。結婚後二カ月ぐらいいから、夫は私を全くの奴隷として扱うようになりました。私は当初は夫がそうした異常な性格の持主とも知りませんでしたので、大へん夫を憎みつづけた。それが三カ月たち半年たつ中に、私自身も責められることによって味う喜びを知るようになったのでございます。でも昨年の十二月、夫が交通事故で亡くなり私は只今両親の家に帰っております。夫と一緒に暮らしていましたが、一人ぼっちの今の私、ああ私は考えただけでも焦そうに心がうず巻きます。いっそのこと家を出て、その女給にでもなってしまう。そんな考えを抱く今の私ですけれども、いくじなしの私は、そう思いついたこともできません。ただ今の私の最上の楽しみと申しますのは夫が生前の頃、二人で貪り読んだ古い貴誌をくりかえし読むことだけです。今後貴誌を購読したいと思うのですが、父の家に寄寓しているものから(父は商店を営んでおります)お送りいただくことも出来ず、一人悩んでいる次第でございます。お願いです、何かよ

い方法はないものでしょうか。又同好の男性の方とお手紙交換致したく切に望んでおります。それからどなた様か「ムチに打たれた女」等の責め写真などおゆすりいただけたら幸いと存じます。かしこ。なお、お便りの際に必ず古家啓治（前夫の名、まだ他界して間もないので今だに夫が死んだとも知らず案内所や取引上のことなどで来ますので）あてとし、差出人のお名前は封筒裏面には書かず、便箋上に書いて下さい。

（神奈川 古家悠子）

八編集部より、御注文は局留としてお申込下さればよいと思ひます。尚、住所氏名は明記してありましたが、誌上公開並に手紙の転送は中止しておりますから、交歓は誌上に於てのみ御願ひ致します。

○ 二月号誌上で久しぶりに春日ルミ女王様のお便りを拝見し、御健在との事、自分のこと様にうれしく思ひました。なぜなら僕にマゾヒストとしての性格を最初にあたえて下さったのは、ほかならぬ誌上の春日ルミ嬢の写真であり投書であつたのですから。今後もぜひ誌上で我々あわれな男性のために御活躍下さい。（東京マゾ学生）

○ 愛読者の皆さん、ごきげんよう。

奇巧を知って一年になります。始めてお便りをさせて頂いた、皆さんのお仲間入りをさせて頂いた、さうと思ひます。私は二十三才になるサド・マゾ両方を具えた男性で、と申しますのはプラス、マイナス、ゼロという、少々いかれたなまぐら者で（もともと本人にいわすれば、そんなことはないんです。口うるさい家の仕事をきらっただけです。）家中のやっかい者で、只今失業中の青年です。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。趣味はカメラ、読書、体重は四九キロ、軽いでしょう。背は一六四センチ、玉にキズは正直すぎる事です。「一に金に二に金に三に金のこの世なり、金のなる木（女）ないかいな。棚からボタ餅落ちてこい。」ドスン、ああいたいベッドから落ちて夢さめた。失礼

（東京 田中二七夫）

○ 二月号の読者通信にて、いづれも東京在住の上原由紀子さん及び九仁子さんのお二人が永いこと小生がさがしとめていた女性浣腸マニアであることを知りました。幸い小生も東京に住んで居ります

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札（9×13）印画紙焼付

凌辱

略号（れん）

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号（よく）

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号（あめ）

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号（まき）

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号（きよう）

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号（ふさこ）

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号（くもん）

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号（もん）

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号（せつ）

3枚1組 二五〇円

行燈（アンドン）

愛川悦子 略号（あん）

3枚1組 二五〇円

いたぶり

略号（いた）

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶闇の縛しめ

田中芳代 略号（ねや）

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号（ふと）

3枚1組 二五〇円

ので、この機会にぜひとも文通致したいと思ひ、読者通信を通じてお呼びかけ致す次第です。小生はまだ二十台の青年ですが、十五、六才の頃より、若い女性の流暢マニアを何んとかして、永いお友達として得たいものと念じておりました。文通だけでけっこうです。奇く、ぜひ一度お便り下さい。読者通信の係の方にも、ぜひお取次下さい。様心から御願ひ申し上げます。(東京 吉沢弘)

○ 東京、新井百合子様、マニアとしての苦心談や楽しんでおいでの模様が、わが事のようにうれしく読みました。心理的な、又肉体的な雰囲気をもっと詳しく知らせて頂けませんか。そういう生活の順序を、どの様にして創造されたのでしょうか。是非教えて下さいませんか。その女性振りを教えてください。(鈴木貞)

○ 御誌の御隆盛お喜び申し上げます。私が初めて奇クのあるを知り

ましたのはつい最近です。ぶらりと書店を覗き不図手にしてバラメクリした頁の中にチラリと我が眼にうつった二三の挿絵はグンと心に響いて続いて眼に止った題名の禪の文字は胸を躍動させました。早速求めたこの時の二冊の奇クの御蔭で私は回春の喜びを味えるようになりました。西風の強き為か人もまばらな午後公園の青空の下に真白き彫像の立つ枯芝生に寝そべって、今は妻子も心にはなく四十八才、十四貫五百、五尺三寸五分の孤独な人間として、心は夢幻の境地を彷徨しました。昨年四月号の「禪殺人事件」及び本年二月号の「麻薬と禪」の記事です。榎村先生の文、青木先生の挿画は繰り返しては読み、繰り返しては眺めて、酔いしれる我が心を抑えるを得ず、覚え、そつと我が禪を固く締めつつ、瞑想に耽るひととき。果ては、我が六尺禪一本の肉体を宙吊りに、或は磔にまかせたく、又逞ましき男性に、がんじがらめに緊縛されて打擲に身をゆだねたい衝動にかられます。十六才の年より六尺禪を愛好せし私にとって御誌は全く素晴らしいと深く感銘を刻む次第で御座います。尚、今後どしどし禪ものの掲載を

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)
3枚1組 二五〇円

振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)
3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)
3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)
5枚1組 四〇〇円

○ お願い致します次第です。又、清水のふんどし男様の記事を拝見、更に意を強うする次第です。今後どうぞ、よろしく。(静岡 緊禪生)

○ 四日市、江木清様、誌上でのお便りありがとうございました。おたずねの旧刊「無惨絵マニア」の河内氏は残念ながら私ではありません。又私はその画も拝見していません。私のは、どんなものか知りませんが、私と同じアイデアの画だという事で非常に面白いと思いま

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)
3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)
5枚1組 四〇〇円

賭 儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)
3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13㎝)です。

お申込は 天星社代理部へ

す。若し掲載の号が判明したらお知らせ下さい。東京にはかなり旧号を販売している所があります。ら、さがしてみたいと思います。短い口髯のある美男の将校が敵手に陥ってむごたらしい拷問をうけるといふ構想は、永い間、私の描きつづけてきた幻想で、私はこのテーマで幾篇小説を書いたか分りません。その一部が「猩紅匪」です。御目に當って嬉しく思います。私は男責が好きですが、どうも現代の青年などがでてるのは好まず遅ましい中尉、大尉、少佐位の軍

人で、しかも短い口髯とみごとな胸毛をもった男性というのが必須の条件です。「立石さま縁起」は時代物で無実で惨刑にされる若い武士の話ですが、「童貞中尉」は美髯の青年将校が出ます。然し私はやはり「猩紅匪」のようなオースドックスな男責小説を雄大なスケールの下に書いてみたいと思っています。只今アイデアだけあるものに「黒龍館」というものがあり、中国の秘密結社に捕えられた日本軍人の物語を書きたいと思っています。又誌上でなりとお便りをいただければ喜びこれにすぎたものはありません。(菅良太)

○ 上原由紀子様、K誌を愛読して四年程になりますが、「浣腸」というものに非常に興味を持っています。私にとって、三月号に寄せられた貴文の一文は、何よりも嬉しく感じておられます。実の処、貴女の三月号に寄せられた文を見て、私はハッとしました。と申しますのは貴女のおっしゃって居る事、それは私自身がいつも心の中に考え、そして想像して居る事がそっくりそのまま書かれていたからです。浣腸グループ、それは是非実現させたいものです。そして其の後に

記されて居る浣腸責のアイデア等是非実現させてみたいですね。私も二三度K誌に投稿した事もあり又発表して載いた事が有ります。又現在浣腸責の作品を書きかけておられます。いろいろな経験や見た事、自分のしてきた事を思い浮かべ乍ら楽しんでおられます。どちらかと申しますと、私は他人を傷つけるようなサドを好みません。浣腸時の縛りなども手足を動かさない様に固定する意味と羞恥をわき起す為に等で好みます。私の浣腸責のアイデアを申しますと、貴女のおっしゃる小石の代りにゴムにします。そして手足も固定して十五号ぐらいのカテーテル、そしてゴム管、胃洗滌がはじまります。苦しうに悶えるのを横目に何度もくりかえします。しかし、ゴムは出てきません。仕方なく浣腸に移ります。いえ、その前に貴女のアイデア、ヒマシ油を無理に飲ませましょう。(一合もは後が大変です。十CC乃至二十CCぐらいにしておきましょう)それからグリセリン浣腸です。直腸内にあるものを先に排出させてしまい、次に高圧浣腸です。何度目かの排出時にやっとゴムが出てきました。ヒマシ油の為の洗腸、そして大量

美貌汚辱

▲鼻責めを中心としたV

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円 略号(はせ)

モデル 絹川 文代

特高拷問

▲破られたズロースからV

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円 略号(とく)

モデル 絹川 文代

の水分を腸から吸収している為導尿しておきます。これは消毒を完全にしなければなりません。ざっと、こんなアイデアになります。その他、いろいろアイデアも有りますが、限りがないのでこの辺で置きます。只、浣腸愛好者としてまだ、貴女と話してみたい事も沢山あり又貴女の望まれるプレイも出来すなれば是非私にさせて戴き度いと望んでおります。浣腸グループも私等の呼びかけで是非実現しようではありませんか。是非お便りお待ちしております。(大阪 大橋清)

○ 私は昨年夏ごろより偶然のことから貴誌を入手いたしました。それから大いに共鳴を感じるところがあり以来貴誌の熱心な愛読者として、ひそやかなる支持を致しておるものであります。最近の特集号も累

次発行され、私の如き新しい読者としては、悦虐小説と緊縛写真特集の第一、第二、第三集を手にし、全くこれあるかなの感を深くし、嘗ての以前発行されし旧刊時代を偲び、当時、なぜ、早く貴誌を発見出来なかつたかと口惜しくさえ思っている次第です。引続きて、ドシドシ、このような特集号を発行して下さいようお願い致します。三月号の読者通信で近藤一氏が、悦特第三集「嵐を慕う蝶」について詳細なる批評をいたしておられますが、私なんか頭の中では考えついていながら中々筆に書けず、あらわすことが出来ない点を麗筆をもって、流暢に書き記しておられることは、まことに羨ましくさえ思います。近藤氏の批評を拝見の上更に特集号を読みかえしてみますと尚一層の興味を抱きましたことを報告しておきます。

(滋賀 大津真一)

初めてお便り致します。私が本誌を知ったのは古本屋で、ふと手にした時からです。しかし、その時すでに休刊になっていたことを知り、がっかり致しました。しかし、それ以後は、あらゆる古本屋を飛び廻り、よれよれになったK誌を求め続けました。そして次第に増していくK誌を積み重ねていく喜びは、たとえようもありませんでした。そのようにして半年は

またたく間に過ぎ去り、第二の喜びに、ぶつかったのは復刊の白い表紙を見出した時であります。以後、欠かさず揃えていますが、つくづく旧号より多くなりました。私は現在も、手持に欠けている旧号を探しに古本屋を歩いています。が、現在の相場は三百五十円という処です。しかも、それは、よれよれのもので、いかにK誌の価値があるかを改めて思い知らされています。それからK誌は通信販売

を主としていたとの事ですが、私は、いつも新しいものを古本屋に買っています。それは沢山、積み重ねてあるもので、これもK誌の販売機構の一つと考えて居ります。大変感謝しています。しかし限定版に限り、通信販売一辺倒なのは、少し、がっかり致しております。欲しいのは山々ですが、私の家の事情から郵送によって送って頂くのが困難だからです。それと分譲写真も喉から手が出るほど欲

しいものの一つです。しかし、これも困難です。しかし、私は失望しておりません。何故なら、近い将来、気がねしないで買う事が出来る境遇になると思いますが、現在の生活に張り合いがあるからです。さて現在のK誌についての感想を述べさせて頂きますと、最近感じますことは、とみにグラビア頁に於て、きれいなって来た事です。これは絹川文代さんがモデルの関係からか、私は余り好感を

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(6×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

Y 7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y 6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y 5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y 4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y 3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y 2	乱れ黒髪裸像	(大塚啓子)
Y 1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
五十組	五十枚	二〇〇〇円
四十組	四十枚	一七五〇円
三十組	三十枚	一四〇〇円
二十組	二十枚	一〇〇〇円
十組	十枚	五五〇円
五組	五枚	三〇〇円
一組	一枚	八〇円

Y 8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y 9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y 10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y 11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y 12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y 13	蒲団貫通裸またぎ	(大塚啓子)
Y 14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y 15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y 16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y 17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y 18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y 19	全裸全身軀自慢	(愛川悦子)
Y 20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y 21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y 22	遅ましきヒップ	(愛川悦子)

Y 23	大の字晒し	(絹川文代)
Y 24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y 25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y 26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y 27	もつこれで許して	(益田房子)
Y 28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y 29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y 30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y 31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y 32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y 33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y 34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y 35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y 36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y 37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y 38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y 39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y 40	強烈第手首縄締	(田原美佐子)
Y 41	ハタ力縛り人形	(絹川文代)

Y 42	濃艶ハタ力縛り	(絹川文代)
Y 43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y 44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y 45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y 46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y 47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y 48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y 49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y 50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y 51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y 52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y 53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y 54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y 55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y 56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y 57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y 58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y 59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y 60	エビ責めの表情	(絹川文代)

持てません。もっと、くずれた美を探索して頂きたいものです。少くとも臨時増刊に載っている程度のもので、随時掲載して頂きたい。私の好きなモデルは田中芳代さんです。特にまくれ上ったシュミーズの中から少し、ずれたストッキングが太股に、からみついている構図には、たまらない魅力を感じます。それに背中から腰にかけての、あのナイーヴな幼いものの残っている線を見る時、私は断然、御機嫌になります。それから私の好むポーズですが、全裸よりも上半身だけ着衣して剥き出しになった下半身に魅力を感じます。私が現在、最高に望んでいるのは、モデルを田中芳代さんにして、セーラー服の上着だけを着けて後手に縛られているポーズです。これに似たポーズが最近、絹川さんをモデルにして発表されていますが、あれは腰の部分までセーターが覆っているもので残念に思いました。近頃は他の雑誌に於て、時々K誌の領域を犯すような傑作を見るにつけ、K誌よ、もっと奮起せよと叫びたくなります。それから小説の方ですが、切腹と男のマゾには全然、興味はありません。私の興味を中心は浣腸とオシメ、それ

にサド物です。特にその女性が女学生であることが最上です。以上とりとめもないことの羅列に終りましたが一読者として意見を述べさせて頂きました。では、K誌の一層の御発展をお祈りします。(石川生)

○ 小生は約一年程前からの愛読者で、毎月の読書欄を楽しみにして拝見しております。本年二月号の東京の九仁子さん、並びに皆さんに御便りさせて頂きます。九仁子さんの文章は、特に変哲もない中に、小生には何かひしひしと身に迫って感ずるものがあり、同好の士として一度、御便りでも頂けたらと思つて駄文を記しました。暗い欲望といわれ、容易に満されないう悩み、そして又、他人に語ることも出来ない悲しみは、この道の誰しもが抱くものではないでしょうか。決して人後に落ちることのない教養と理性を持ちながら、これとは全く無関係に自己の肉体の何処かに潜むこの不思議な正体を取り出し、そして抹殺しようとする身、どれほど戦ったことでしょうか。しかし、あらゆる試みも徒勞に終つて、今は只、自然のままに生れながら備わったものと認めて

麗しき縛しめの乙女たち

大手札型印紙画焼付
各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女 略号(けい)

△モデル 絹川文代△

カーテンの翳 略号(けろ)

△モデル 絹川文代△

艶姿色模様 略号(けは)

△モデル 絹川文代△

浴場の欲情 略号(けに)

△モデル 大塚啓子△

いけにえ人形 略号(けほ)

△モデル 絹川文代△

のぞき見極楽 略号(けへ)

△モデル 絹川文代△

開股悦虐境 略号(けと)

△モデル 大塚啓子△

ダンロの開股 略号(けち)

△モデル 田原美佐子△

開股絶命 略号(けり)

△モデル 愛川悦子△

悲鳴開股 略号(けぬ)

△モデル 絹川文代△

生きて行く以外に方法はないと考えています。人一倍、プライドの高い私には、本誌を通じる以外に外界にその一片をあらわすことは出来ず、ごく通常の生活を続けておきます。時々、本誌を読んだり又、こうして今自分で書いたりしている、何んとかなく気が晴れる様な思いがします。このようなことは、自分のこの傾向を更に助長するのではないかという心配は、私の経験の限りではありません。かえって激しい抑圧は、その本性をどう変化することも出来ず、苦しみを増すばかりのような気がするのです。さて小生の自己紹介が遅れましたが、実は小生はS傾向を幾分、含んだM傾向の者です。人間は誰しも多少のM・S両方を持つているとのことですが、私の場合はその他に本体は明確なMでその影といえますか裏といえますか、或は又、心理学にいう補償作用と申しますか、ともかくMという本体を離れて存在し得ないSに伴つておられます。ただ、若し量的にいうならばSは非常に弱いものですが、ともかく現実の問題として私が常々女性から加えられたいと願っているもの(私は実際のプ

レイ等の経験はありません。)を逆に女性に加えたいという願いも時々私の心をよぎります。こんな私です。から勿論、正直にいつてMの女性よりSの女性に廻り会いたいと思っています。しかし今はそれをさしおいて同じMだからこそ、

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みい)
敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 岩井 知子
略号(みは)
稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みほ)
縄と縛の祭壇に上ったいけにえは観念の眼を閉じていた……。

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みと)
黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

貴女の胸中が身に泌みて感ぜられたのか、ともかく一度、御便りしたいという衝動にかられたのかも知れません。私のこの傾向を御承知の上で、もし御便りを頂ければ幸いです。尚、小生はM・Sともに強い肉体的苦痛は好まず心理的

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 田原美佐子
略号(みろ)
初々しい裸身が縄で自由を奪われて描く美しい女体構図。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みい)
艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みへ)
白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……。

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みち)
身動きも出来ない後手しぼりと剝がれたズロースとは……。

なものを好みます。読者の方で関心を寄せられた方も同様にお便り下さい。
(東京 斎藤)

○

島直樹様。始めて誌上をお借りしてお便りいたします。昨年十一月号にて同好者との文通を希望しておられるのを拝見してペンを取りました次第です。島様は本誌の愛読者として随分、古い方と存じます。旧刊号では私は二度ばかり恥しき記事を發表したことのある赤井茂です。キット、ああ、あ奴かと想い出していただけの事かと存じます。私も島様同様、強い興味を抱いております。一、二度、読者通信にて發表もしましたが、島様が「浣腸レポート」を發表されました読者通信に「オシメ浣腸」に対する文通希望を發表してあります。ぜひ、お便り下さい。島様、御希望の一〇〇〇浣腸器にきつと御期待に添えるものと思っております。私は島様ほどのコレクションはないかも知れませんがフオート、絵画、その他、雑誌の切り抜きも多少、持っております。心の行くまで意見の交換、コレクションの公開等を致したいと存じます。柴崎様。私は貴女等の記事をいつも楽しく拝見しています。

旧刊の「露出願望の少女」が一番印象に残っております。復刊後は「病に臥しつづ」最近では「王宮の浣腸室」等は楽しく拝見いたしました。月岡映子様、機会がありましたら、どん／＼御發表下さい。又、お便り下さい。(赤井茂)

○

宮崎の矢島様、仰言る通り本誌にはサド特集を希望する人が圧倒的に多い様です。貴方の提唱する女装特集号、私も刊行を願っているのですが一寸、無理でしょうね。特にグラビヤなどは採算の面で不可能と考えます。但し口絵と普通頁にのせる写真で満足される程度なら、いつかは希望がかなえられると思えますが。ところで女装者の心理につき、私は以前は自己愛に終始していましたが、最近では考え方が変わってきました。勿論、筋骨たくましい男同士では、みにくいとは思いますが、男性でも本来、女性的体格の人もおり、又、或る程度は本人の努力によって外観を変え得る可能性もありますので、当事者間が愛情のきずなで固くむすばれていれば、それでもいいのではないかと思える様になりました。その辺の詳しいことは、いずれ又、手記として發表する時

もあると思いますが、誌上にてお便り下されば、いろいろ意見も交換したいと考えております。

(森本信一)

○ 二月号のグラビヤ・フォトの絹川嬢は悦庵第三集の「ニンフ就縛」と同じ頃のものと思われますが、後手、高手小手の首縄は、しっぴりかかっていて猿轡もよいものです。四馬氏の「吊り以前」の女体は正に美麗。襟足の佳さ、厳しい縄目に歪んだ腕の線、清潔で豊かなボリウム、実に好感を持てる作品です。十七頁のカットは杉原氏でしょうか。アイデアといい、流れるような線といい、二人の女性の表情の妙といい、相変らず見事なものです。千草忠雄、桂牧次郎、仏光刀四郎氏の作品は、柔らかな情感が漂って本誌に格好の読物と思われまます。連載の西村憲一雪俊遙氏の作品も本誌以外に見られない明るいムードがあります。常連といえる泉辰之助、三条卓史、藤山秀緒、浮家鷹三氏の作品は、私のサディズムを快く満してくれまますし、真木不二夫、とやまかずひこ氏の作品にも共感を覚える処が少くありません。私の文章が十

四ページに亘って載せられたことは恐縮の至りですが、S特第三集の感想は、本誌の提灯持ちではなく、正に実感を綴ったものですし一方の映画の感想は私が書きたかったもののなので、いずれも他の方々と重複した内容でありながら、貴重な誌面を頂いた点は御寛恕願いたく、読者各位の御了解を得たいと存じます。ここ暫くの間は、私の書いた原稿が、ずっと採用して頂け、それだけに本誌の愛着も一入、増しています。一昨年あたり、私を「活躍」という言葉で見下さった方もありましたね。本誌の読者としては、かなり古い一人だと自任している私ですが、読者通信から離れ「近藤一」の名で記事が載ったのは復刊後のことでしたから、寄稿の仲間としては、まだ「新参です」し、努力も足りないと思ひます。今後、なお一層、力を注いで、よりよい本誌の発展が見られますよう祈念したいものです。現在は「蠢く蒼い群」の第三部(完結)を纏めている処ですが、それが済み次第、私の告白を記してみたいと思ひます。私の生き方を記して、それによって温い友情を結ぶことが出来たら、本誌は私の人生の最高の友といえるでしょう。編集部各位には、どう

か健康に充分の注意を払われますよう、そして本年も次々と楽しい企画を実現して下さいますよう、よろしくお願い致します。本誌の進展を愉しみ期待しながら……。

(近藤一)

○ 瀬戸裕様はじめ、揮マニアの皆様が、この欄で自分達の悩みを打ち明けられているのには全く同感です。本誌をおいて男性緊縛の写真を望むものはないにも拘らず、一こうに実現されない。せめて揮一本の男性の写真だけでも載せて頂きたいものです。青葉慎一さんは、その後、如何されたのでしょうか。かつての「子供山笠」や「体操教師」での緊縛の魅力的な描写は忘れられません。菅良太氏は映画に御関心を御持ちのようですが、映画の中の男性美は、またとない素晴らしい興奮を与えてくれます。特に若い男優が六尺揮一本になったシーンは数えるだけしかないだけに余計、心に残ります。石浜朗は失望でしたが久保明、三上真一郎の晒の六尺姿はよかった。最近では時代劇などに大部屋連中の揮姿が出て眼を楽しませてくれますが、私が学生の頃エキストラで出た思い出は終生、忘れることが

出来ません。火祭のシーンで、タスマツを片手に各々が揮一本で坂を駆けのぼるのです。二百名ほどのバイト学生が、ロケ・バスで滋賀県の山中まで行き、昼からテストの連続です。狭いバスの中で衣類を脱ぎ、めいめいに手渡された晒の六尺を締める。行李一ぱいにつめられたフンドシ。文字通り他人の締めたフンドシを締める何ともいえぬ感じが湧いてくるのを憶えました。そしてテスト。その間に一人の赤揮を締めた青年が駆け上ってくる。それが今売り出しの著名俳優と知った時、スクリーンでは柔さ男に見える彼のたくましい体に目を見はりました。背広を着てポーズをとった彼ではなく、裸体の、しかもフンドシ一本の姿を真近かに見たという感激で一杯でした。夜の九時頃、やっと本番を終って主役の彼が引上げるまでヘトヘトの強行軍でしたが、彼の揮姿を見たことと、公然と、しかも同輩達と一緒にフンドシ一本の裸体で半日を過ごした楽しさのため、その夜は眠れないほどだったことを今でも思い出します。最近のロケは、どうでしょう。再び体験する機会はありませんが、皆さんからの話もお聞きしたいと

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円

復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	△売切▽
復刊第23号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第24号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年8月号)	△売切▽
復刊第30号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第31号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第35号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第36号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第38号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第39号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年7月号)	定価二百円

復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第43号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第45号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第46号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第51号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第52号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第54号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第55号	(昭和35年6月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年7月号)	定価二百円
復刊第57号	(昭和35年8月号)	定価二百円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第に厳重包装の上急送申し上げます。御送金はなるべく現金書留か振替を御利用下さるようお願いいたします。

思います。追記。これは編集部の皆さんへのお願いですが、お正月以来、寒中水泳が各地で行われ、また郷土の行事として裸祭が年々賑かに行われるようになって来ましたが、この絶好のチャンスに我々禪愛好者を慰める意味で、各地の禪一本の青年達の勇壮な祭をルポルターージュとして発表して頂きたいものです。勿論、写真入りで特に二月上旬に行われる西大寺の

裸祭は、ぜひお願い致します。(愛禪生)

一昨年頃、東京日本橋の三越本店六階の赤チャン用品売場で「特製(大人用)おしめカパーございませう」として出ていましたので、確かめましたら、ベツチン・ビニール張りの青とピンクのおしめカパーで、サイズはL型、M型、S型、三種ありました。問い合わせ

たところ、注文によっては、いろいろの材料を使って希望のサイズで作るといっていました。しかし最近は見かけなくなったのが残念です。なお最近まで「主婦の友」に赤チャン用と並んで児童用、大人用おしめカパーの広告が出ていたのに、お気づきの方もあるかと思いますが、「夜の鶴おしめカパー」で、製造元は大和高田市曙町、日華社工業所としてありました。

特集号三集のおしめ責めは期待外れ。おしめカパー着用で縛りの絵や写真が全然ないのは残念です。事実と体験に創作をかえ、小品を作りましたが、口絵や挿絵には是非、北原純子様の麗筆をわずらわしたく存じます。(H生)

皆様、お元気でいらっしやいますか。私達グループを代表してはじめてお便り致します。私達三人

は、いずれも同じ年頃のB・Gですが、女性の切腹について大変、興味を持っています。切腹場面のある映画などは三人一緒に見にいって、色々と研究しています。最近の本誌には、切腹の記事が少いように思います。どうしてでしょう。か、残念ですわ。それにしても昨年の十月号は私達にとって、涙の出るほど感激されました。皆川波苗子様のこと、又、「私は女性の切腹を見た」等々、未だに読みかえしてあります。私達も皆川様に負けないようにと思っています。が、とても、あれだけのことは出来ません。どちらかといえば私達は切腹のムードに浸ることに重きをおいています。例えば切腹の座をつくるのに、白木綿を敷いたり仏壇の前で切腹したりするのです。又、衣裳の方にも気を配っています。白絹で死装束を作ったり、刀もメンバーの一人が立派なものを持っているのです。昔から伝って

いるもので、刃止めはしてありますが、少し力を入めれば切腹の実感を出すことが出来るのです。なんと申しましても、左の脇腹に手を当てて刀を突き立てる瞬間のあの気持ちは、表現することの出来ないものがあります。編集部の皆様、どうか私達をお願いです。グラビアに女性の切腹をぜひお願いします。(幸子)

二月号読者通信欄で藤岡氏、成舞氏、矢島氏と三名もの女装愛好者の投稿がありましたので心強い思いがしました。ぜひ女装特集号を出して下さるよう、お願いいたします。希望者が少いようですが女装した男性を縛ったり吊るしたり磔にしたりする画を掲載すればサドの人にもマゾの人にも向くでしょう。たとえば三月号の「或る倒錯生活」の挿画のようにです。しかし、あのりえは余り女性化していて男性の女装という感じは薄

新作『血紅使用切腹フォト』分譲
モデル 絹川文代嬢 (大中判印画紙焼付)
第一集 五枚一組 八百円
略号(によ1)
第二集 五枚一組 八百円
略号(によ2)

れてしまっていました。女装愛好者は概してM傾向で内気な人が多いので余り発表しない故、表面的には少く見えるのではないでしょう。か。昔の町娘のように緋縮緬の腰巻、同じく肌襦袢、白足袋、友禅長襦袢、伊達巻、紫矢絁の二尺近い長袖の着物、伊達ヅ、名古屋帯、又は丸帯、帯ヅ、帯揚げ、羽織と、自分の体にあつた衣類を揃えて着たならば、どんなに愉快かと思えます。女装愛好の皆様の御便りをお待ちしております。

(静岡 M生)

私は二十二才になる男性マゾヒズムに執着を感じている者です。貴誌におけるマゾも一時に比較すると大分、下火の様ですが、何んとか今一度、マゾの開花を希望して、ここに悪筆ながら続けて投書させて頂く次第です。男性マゾと性間のマゾの二種類あるわけでは

が、最近では、どうやら男性同志のプレイが盛んなよう。我々女性を相手とする、いわゆる正統派マゾヒストは少々淋しさを禁じ得ない処です。処で女性相手の男性マゾ文学(?)が、直ぐに壁に突き当たってしまうのは何故だろうか。考えて見ると、大略して次の二つがかげられると思います。即ち第一は、元来、男性マゾは夢想と現実とが余りに離反しているという事実です。つまり男性がある状態を望んでも、女性はその望みと一致した行動を必ずしもとるとは限らない、否、殆んど両者の一致というものはあり得ないという事がい得ると思えます。これは過去における貴誌での皆川のぶ様の男性マゾヒストに対する痛烈な叱責や、沼氏を中心とするマゾの昇華の主張等々から容易にいえることでしょう。それでは、こうした両者間の離反は何処にその因があるのでしょうか。男性マゾにおいて

○浣腸フォト

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

は飽くまで女性がアクティヴであり、男性がパッシヴである事は、いうまでもありませんが、過去の貴誌に掲載された両方の比率では男性マゾヒスト側の文が圧倒的に多く、又、その内容的発展においてもマゾ男性文学に比較してサド女性文学が非常に未熟である様な状態です。これでは純粋なマゾ文学(否、サド女性文学という名称の方が遙かに当を得ています)の発展は望めないでしょう。眼を転じて男性サド及び女性マゾ文学において、両者、相一致して、共にその内容的充実を目指して進展しているように見えます。男性マゾ、女性サド文学には、それが欠けていますから、当然、両者の行動一致には到着しないわけです。少くとも、女性サドに対する男性マゾの現解に欠けているわけで、アクティヴを理解せずにパッシヴだけを押し進めようとしていることとあります。ここにこそ、男性マゾの夢想と現実の離反があると思えます。マゾ文学未熟因の第二は、女性サディストが余りにも少ないという事です。これは誌上においてこそですが、その相対量又は絶対量としても少なすぎる現状です。又、女性サドとしても、

男性サディストと較べて見て真のサド女性が果して何人いるかという疑問が湧く可能性もあります。(大変、失礼ないい方ですが)まあ、それは別として、少なくともマゾ男性の望みをわずかでも満たしてくれるサドではない女性——例えばフランスの一部の娼婦の如き——が全く存在しないことも、マゾ男性の一人よがり助長する因ともなっているわけです。いずれにしても男性サド派に比較して女性サド派の場合は、余りにもその不均衡が目立ち、それが拡大作用して現在の衰退を招いていることと考えます。個々に見れば、貴誌復刊号になってからの「家畜化マゾ」の一次的流行も、わずかに「黄色オラミ」に、その余息を保っているにすぎない状態です。男性マゾ中で比率的に大部分を占めるフェチストやコプロ趣味の傾向、更に最も根本的な鞭打傾向等々、殆んど影をひそめています。又、今の状態で一時的にそれらが再抬頭しても、とても永続きしないでしょう。現在の日本経済の如き、サド女性、マゾ男性間の量的、質的ゆがみを是正して、男性マゾ(女性サド)文学の前述の均衡的正常性を回復することこそ、マゾ男性と

サド女性の間の「再建論争」の徹底が必要であり、それを側面からバック・アップする私達、同好者の積極的行動が最も望まれる処です。ここで重要なのは貴誌編集部諸兄の理解ある御支援であり、これこそ、ひいては貴誌発展の一つのキーポイントといわねばなりません。以上、愚見を並べたてましたが、結局、マゾヒスト諸兄の積極的活動を望む以外、何物もありません。卒先して誌上をお借りして自作文や意見を発表したり、サド女性諸姉に肉体的、精神的訓育をすることが現在もとても重要な

ことです。私も及ばずながら、どしどし自発的に行動していくことにするつもりです。以上について御忠告等、誌上で頂ければ光栄に存じます。(京都 大倉安夫)

○ 奇ク三月号並に悦特NO3本日入手いたしました。三月号の特選緊縛写真「私は誰でしょう」は絹川文代さんの部分の大笑だとすぐわかりました。初めてこんなに大きく鮮明に写された緊縛写真を載せていただいて編集部の皆様に深く感謝いたします。僕は今活躍されている緊縛モデルの中で絹川文

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号1) 四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号2) 四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号3) 四枚一組 三〇〇円

☆全裸縛り(略号4) 五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号5) 五枚一組 三五〇円

☆股間しばり(略号6) 四枚一組 三〇〇円

代さんが大好きです。均整のとれた肢体、緊縛された顔の表情、丸々とした乳房、脚線美と数限りない部分の美しさが集まり、たった一目見ただけで惚れこんでしまいました。悦特NO3の中でも絹川さんの緊縛写真が大部分を占めていて、とても楽しく拝見させていだきました。中でも「柱掛人形」の長襦袢姿は、貴女の全身からお艶気を発散し僕をにらんでいるように感じました。そして写真が全裸と違い大変好きです。お腰だけの縛り写真は以前にはあったそうですが、僕は一度も見ることがありませんから、ぜひお腰だけの緊縛写真を撮って下さい。分譲写真の中には、股間縛りがあります。が、いつも正面から撮ったのがなく残念です。全裸のためかもしれませんがクロスタイだけつけてもよいですから正面のをお願いいたします。(前を布でおおってもよいのです) 絹川さんの吊り責写真はS特NO3で拝見いたしました。全身が入っていないくへソの辺までしか入っていません。吊りひももかつしやで引っぱっている様子もなく、たぶん絹川さんは足を下につけておられると思います。そのため、苦しさが余り出ていない

と思います。分譲写真の「手吊りの乱舞」も同じことがいえそうです。これからは下半身も入れてほんとうに吊し下げたのをお願いいたします。絹川さんにはお気の毒ですが、ムチ打ち、吊し責、お灸責といった変わったものも発表して下さい。そして絹川さんの組写真も是非さまざまな悦虐のポーズでとって下さい。絹川文代さん一人だけの緊縛写真集を作して下さい。絹川さんの手記を本誌に連載して下さい。どうぞ絹川さんをいためてつけて下さい。文代さん我慢してね。僕は貴女が好きで好きでたまらない位好きでたまいません。貴女は貴重な存在です。身体には特に気をつけて下さい。一目でも貴女にお逢いして責めてみたいと思っております。(長野 小林一文)

川、館両嬢の如き美貌を描え縦横に縄を駆使しての活躍は真に敬服の至りです。モデル嬢も縄の使い方とも旧号当時より格段の進歩洗練さがみられるのは多くの方も同感の事と存じます。又美少女マニアの私にとって最近美少女責めをあつかったのが多く嬉しいことです。「影の国」の美少女折檻など近來の傑作です。(本文と挿絵が少々くい違っているのは残念ですが) 私はグラマーが立派な肉体を誇って威風堂々と裸で縛られているのより、可憐な少女タイプ

の娘が清楚な又は可愛い服の胸もとや腕やすそから真白い肌をのぞかせて、太い縄できりきりとしめつけられている痛々しい姿が大好きです。この意味で館嬢のものはいいですね。又、最近一寸ないようですが映画の緊縛場面や時には他の雑誌の挿絵などいい絵があつたら(めったにいい絵はありませんが)まとめたのせたり外国の写真や、責め絵物語の紹介、場合によっては仲介などもして戴きたいと切望いたします。

(名古屋 M・M生)

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。